㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第173集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第26集

白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ

―甘楽パーキングエリア地内遺跡の調査―

弥生・古墳時代本文編

1994

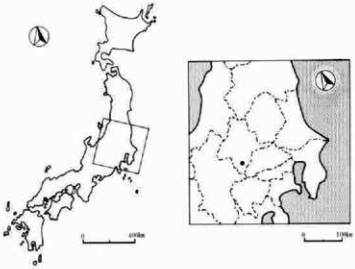
群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第173集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第26集

白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ

―甘楽パーキングエリア地内遺跡の調査―

弥生・古墳時代本文編



1 9 9 4

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

鏑川流域を中心とした群馬県の地形（南から）
（板塚聡氏原画）

遺跡を南から望む

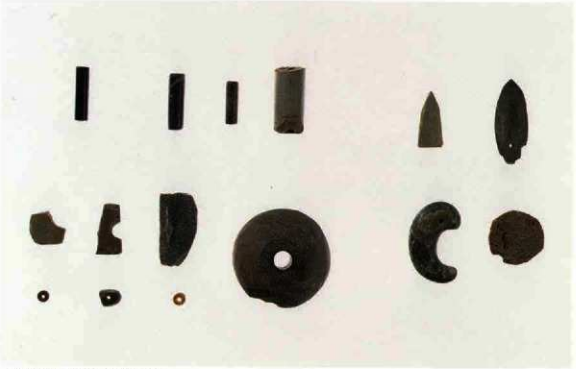
遺跡地の現況と周辺の地形（北から）

白倉C区35号住居から出土した磨製石鏃

白倉C区35号住居から出土した砥石

出土小型仿製鏡

古墳前期出土砥石（左から天引31住・88住・31住）



古墳前期・中期住居出土石製品

序

上信越自動車道（事業名関越道上越線）は群馬、長野両県の期待のなかで平成5年3月開通致しました。これにより首都圏と長野県の時間的距離は短くなり、その経済的効果は計り知れないものがあります。そして、この高速道路建設に伴う埋蔵文化財の調査をとおしまして、県民の期待に答えられました事は当事業団といたしましても多くの喜びとするところでございます。

原西遺跡（事業名）は甘楽パーキングエリアに在り、面積は広く、各時代にわたり多くの遺構が出現しました。発掘調査は平成元年度から平成3年度半ばに及び、先の2年間は調査班2班を投入して事業を進めました。そのため、整理事業も平成4年度よりのべ約10年という長い期間が設定されました。

今回の報告では弥生・古墳時代の遺構・遺物が対象となっております。原西遺跡は鏑川に向かって緩やかに傾斜する台地上にあり、この時代の典型的な立地をなしています。また、遺構量、遺物量ともに豊富であることからこの地域の指標となり得る貴重な遺跡であるといえましょう。

本報告書が県民各位・研究者・各教育機関等で広く活用され、この地域の歴史を解明していく一助となることを期待しております。

また、発掘調査・整理事業を行うにあたり、日本道路公団・群馬県教育委員会・甘楽町教育委員会をはじめ多くの方々からいただきました御指導・御援助に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例　　言

1　本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「白倉下原・天引向原遺跡」（事業名称原西Ⅰ、原西Ⅱ、原西）の発掘調査報告書である。

本書は白倉下原・天引向原遺跡の弥生・古墳時代編であり、本文編、実測図・写真図版編、遺物観察表編の３分冊となっている。

2　白倉下原地区は群馬県甘楽郡甘楽町大字白倉字下原地内、天引向原地区は同大字天引字向原地内に所在し、遺跡名は大字名と小字名を採用している。

3　本遺跡の発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。

4　実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、関越自動車道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。

5　調査期間及び担当者

(1)　発掘調査

調査期間　平成元年４月１日～平成３年８月20日

調査担当者　右島和夫（平成元・２年度）、藤巻幸男（同元年度）、飯田陽一（同２・３年度）、内木真琴（同元年度、現群馬県高崎北高校）、小島達夫（同元・２年度、現渋川中学校）、小林裕二（同２年度）、木村　收（同２年度）、亀山幸弘（同３年度、現伊勢崎北小学校）、櫻井美枝（同３年度）、関口博幸（同元年度）、飯塚初子（同元・２年度、現群馬県教育委員会学校保健課）

嘱託員　外山政子（同元・２・３年度、現高崎市観音塚考古資料館）

(2)　整理調査

整理期間　平成４年４月１日～平成６年３月31日

整理担当者　右島和夫

(3)　事　務

常務理事　邊見長雄（平成元～４年度）、中村英一（同５年度）

事務局長　松本浩一（同元～３年度）、近藤　功（同４・５年度）

管理部長　田口紀雄（同元・２年度）、佐藤　勉（同３～５年度）

調査研究部長　神保侑史（同元～５年度）

関越自動車道上越線調査事務所所長　高橋一夫（平成元・２年）
阿部千明（同３年４月～11月　故人）
松本浩一（同３年12月～平成４年３月）
吉田　肇（同４・５年度）

総括次長　片桐光一（平成元年度）、大澤友治（同２・３年度）

次　　長　徳江　紀（同元・２年度）

庶務調査課長　依田治雄（同４・５年度）

課　　長　鬼形芳夫（同元・２年度）、依田治雄（同３年度）

庶　務　課　係長代理　宮川初太郎（同元・2年度）、主任　国定　均（同元年度）、主任　笠原秀樹（同2・3年度）、主任　吉田有光（同4・5年度）、臨時職員　山崎郁夫、神戸市四郎、町田康子、本城美樹、田中智恵美、松井留男、秋山友衛、後閑令子、吉田登志子、高田千恵、高橋あゆみ

6　報告書作成関係者

編　　集　右島和夫

本文執筆　依田治雄（Ⅰ－1）、木村　收（Ⅱ－4(1)(2)(5)）、櫻井美枝（Ⅳ－2(2)打製石器）、右島和夫（上記以外）

遺構写真　発掘担当者

遺物観察　右島和夫、外山政子、桜井美枝

保存処理　関　邦一（当事業団技師）

整理補助　石井　緑・岩佐彗美枝・見野恵美子・清野幸子（平成4・5年度）、山田清美・新井千恵子（同5年度）、藤野ヒロ子・大塚久美子・岩崎泰乃（同4年度）

7　委託関係

遺構図全体測量　㈱三陽測量(一部)、㈱シン技術コンサル

全体図素図　㈱シン技術コンサル

実測用土器写真と石器実測の一部　㈱シン技術コンサル

航空写真　㈱青高館、㈱シン技術コンサル、たつみ写真スタジオ

遺物写真　たつみ写真スタジオ

トレース　㈱測研

8　石材鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会）にお願いした。

9　出土した遺物や図面に関しては、群馬県埋蔵文化財調査センターに一括して保管してある。

10　出土遺物の整理に際しては、尾島小学校教頭　柿沼恵介氏、群馬町教育委員会　若狭　徹氏から多くの御指導、ご教示を頂いた。

11　現地での調査、その後の報告書作成に際しては、前述の方に加えて下記の諸機関、諸氏から御指導、御協力を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。（敬称略、順不同）

甘楽町教育委員会、甘楽町農業協同組合、甘楽町白倉・天引地区の地権者の方々

鹿田雅昭、佐藤明人、山内紀嗣、土生田純之、茂木由行、田口一郎、五十嵐　信、小安和順

12　発掘調査従事者

飯塚弘美、牛込かね代、浦辺重代、小柏きみ子、小山田光代、加藤あい子、加辺幸子、黒沢とき、斎藤吉江、鈴木みや、関口治郎、関口とみ子、久保みち子、高木とり、谷川あさ子、長岡裕治、布瀬川はつ子、布瀬川まき子、堀口文内、松井昭子、宮前美恵子、森田たか子、山崎章子、山崎和子、山崎丈輝、山田けさ、横山フサ、太田順子、小沢清次、小野秀雄、金田エミ子、金田和子、金田子之吉、久保初江、桜井康弘、神保貫治、関口嘉一、関口エイ、高木甚三郎、布瀬川千代松、堀越みな子、松井みよ子、向井まき江、山田長治、吉井秀雄、堀口巌、秋山いね子、高田ウタ子、鈴木いせ、山田文子、吉田さく、吉田徳重、吉田をとの、落合和子、山崎甲子郎、設楽とめ、大河原初枝、吉田ナツ、黒沢清子、森平幸子、長岡三郎、設楽うち志、安藤ハツエ、、高橋弘、設楽まつ江、田中洋子、鈴木日出子、小川美佐子、己妻智子、高田文子、小沢剛、浅川啓子、井上慎也（以上、原西Ⅰ遺跡班）

岸今朝義、寺尾久吉、福田一男、折茂七郎、神保利政、仲沢一郎、三木伴次郎、吉田一二三、神保光明、塚越　進、黒沢章一郎、古館　明、田中和満、木村利雄、古館繁男、堀越件吾、山崎　明、古口三郎、山崎常夫、浦辺保司、神保君江、千代延八重子、黒沢千代子、春山米子、加部まき江、真加部鈴枝、酒井とし子、福田とみ、黒沢フジミ、堀越美恵子、神保和子、峰岸百合子、関口いちゑ、加藤秀子、箭原慶子、白井さ津き、加部恵美子、堀越智子、田中みつ江、須田シゲ子、滝上光代、春山ふさ江、安藤きく、小林美枝子、小林きん、斎藤淑江、浦辺ふさの、神保京子、堀越よし、金田あい子、新井すみ子、清水直美、林　かつ、栃田久枝、折茂すい、関口伸江、寺尾フジ江、田村ハツ子、芝塚なみ、西みよ子、高橋時枝、富田房三郎（以上、原西Ⅱ遺跡班）

凡　　例

1．本報告書中に掲載した地図は、国土地理院１：200000地勢図、１：50000地形図、甘楽町都市計画図である。

2．遺構番号は遺構の種類ごとに時代を問わないで、「白倉Ａ区」、「白倉Ｂ区」、「白倉Ｃ区」、「天引地区」を単位として通し番号としている。

また遺物番号は、遺構ごとに種類を問わないで通し番号としており、実測図・写真図版・遺物観察表に連動している。

3．各遺構の平面計測値は、遺構の上端を計測している。

4．本書中の方位記号の方向は、座標北（G．N.）を指す（国家座標Ⅳ系）。

目　　次

I　調査の経過

1　調査に至る経過 …… 3
2　調査の方法と経過 …… 4
(1)　調査の方法 …… 4
(2)　発掘調査の経過 …… 5
(3)　整理及び報告書の作成 …… 8

II　立地環境と遺跡の概観

1　地理的環境 …… 9
2　歴史的環境 …… 12
3　基本層序 …… 19
4　白倉下原・天引向原遺跡の概観 …… 20
(1)　旧石器時代 …… 20
(2)　縄文時代 …… 21
(3)　古墳時代後期 …… 22
(4)　奈良・平安時代 …… 23
(5)　中近世以降 …… 24

III　遺　　跡

1　はじめに …… 25
2　弥生時代の遺跡 …… 28
(1)　竪穴住居跡 …… 28
(2)　方形周溝墓 …… 79
(3)　土　　壙 …… 81
3　古墳時代の遺跡 …… 87
(1)　概　　要 …… 87
(2)　竪穴住居跡 …… 87
(3)　方形周溝墓 …… 117
(4)　土　　壙 …… 117

IV　遺　　物

1　はじめに …… 120
2　弥生時代の遺物 …… 120

(1) 土　　器 ……120
(2) 打製石器 ……126
(3) 磨製石鏃及びその製作に伴う遺物 ……132
(4) そ の 他 ……137
3 古墳時代の遺物 ……138
(1) 土　　器 ……138
(2) 石　　器 ……138
(3) 石 製 品 ……140
(4) 小型仮製鏡 ……141
おわりに ……142

本文編挿図・表目次

挿図

第1図 白倉下原・天引向原遺跡位置図 …… 1
第2図 調査区位置関係図 …… 4
第3図 鮎川流域の地質図 ……10
第4図 白倉下原・天引向原遺跡とその周辺 ……11
第5図 北山茶臼山西古墳・方格規矩鏡 ……14
第6図 白倉下原・天引向原遺跡と周辺遺跡 ……15
第7図 基本層序 ……19
第8図 白倉下原・天引向原遺跡弥生後期の諸段階 ……26
第9図 白倉下原・天引向原遺跡古墳時代の諸段階 ……27
第10図 遺跡全体図 ……29・30
第11図 弥生住居平面規模グラフ ……31
第12図 白倉地区弥生住居主軸方位 ……31
第13図 天引地区弥生住居主軸方位 ……31
第14図 主要弥生住居平面図 ……32
第15図 天引地区弥生住居全体図 ……33
第16図 白倉地区弥生住居方形周溝墓全体図 ……34・35
第17図 白倉B区9号住居跡と出土遺物 ……40
第18図 白倉B区13号住居跡出土土玉 ……42
第19図 白倉C区7号住居跡出土ガラス玉 ……44
第20図 弥生土壙分布図 ……81
第21図 白倉B区弥生土壙全体図 ……82
第22図 白倉C区弥生土壙全体図 ……82
第23図 天引弥生土壙全体図 ……83
第24図 古墳住居平面規模グラフ ……88
第25図 主要古墳住居平面 ……88
第26図 古墳住居主軸方位 ……88
第27図 白倉地区古墳住居全体図 ……89
第28図 天引地区古墳住居方形周溝墓全体図 ……90
第29図 白倉B区14号住居出土壺 ……92
第30図 古墳土壙分布図 ……118
第31図 白倉下原・天引向原遺跡弥生後期土器の変遷 ……122
第32図 石鏃類型 ……126
第33図 石鏃類型組成 ……126
第34図 石鏃石材組成 ……126
第35図 打製石斧類型 ……127
第36図 打製石斧類型組成 ……127
第37図 打製石斧石材組成 ……127
第38図 スクレイパー類型 ……128
第39図 スクレイパー類型組成 ……128
第40図 スクレイパー石材組成 ……128
第41図 勝坂終末期住居出土打製石斧類型組成 ……129
第42図 勝坂終末期住居出土打製石斧石材組成 ……129
第43図 磨製石鏃の製作工程とその資料 ……136
第44図 白倉下原・天引向原遺跡出土古墳前・中期土器の変遷 ……139
第45図 神保下隠遺跡1号住居出土小型仮製鏡 ……141

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表 ……16
第2表 弥生土壙一覧表 ……85
第3表 天引28号住居跡出土こも編み石一覧表 ……102
第4表 古墳土壙一覧表 ……119
第5表 第3段階住居跡出土の壺の組成 ……125
第6表 石鏃・打製石斧の平均値 ……130
第7表 磨製石鏃及びその製作に伴う遺物の住居別出土点数 ……133

実測図・写真図版編目次

実測図版

図 1　白倉A区46号住居跡
図 2　白倉A区52号住居跡
図 3　白倉B区 5 号住居跡
図 4　白倉B区 5 号住居跡
図 5　白倉B区 5 号住居跡掘り方
図 6　白倉B区 7 号住居跡
図 7　白倉B区13号住居跡
図 8　白倉B区13号住居跡掘り方
図 9　白倉C区 1 号住居跡
図 10　白倉C区 7 号住居跡
図 11　白倉C区 8 号住居跡・白倉C区30号住居跡
図 12　白倉C区 9 号住居跡
図 13　白倉C区14号住居跡
図 14　白倉C区32号住居跡
図 15　白倉C区34号住居跡
図 16　白倉C区39号住居跡
図 17　白倉C区35号住居跡
図 18　白倉C区35号住居跡
図 19　白倉C区35号住居跡出土遺物分布図
図 20　白倉C区47号住居跡
図 21　白倉C区53号住居跡
図 22　白倉C区55号住居跡
図 23　白倉C区72号住居跡・白倉C区90号住居跡
図 24　白倉C区91号住居跡
図 25　天引 4 号住居跡
図 26　天引 4 号住居跡・天引 2 号住居跡
図 27　天引 5 号住居跡
図 28　天引12号住居跡
図 29　天引19号住居跡
図 30　天引22号住居跡
図 31　天引42号住居跡
図 32　天引42号住居跡
図 33　天引42号住居跡掘り方
図 34　天引58号住居跡
図 35　天引53号住居跡
図 36　天引53号住居跡
図 37　天引53号住居跡掘り方・天引43号住居跡
図 38　天引43号住居跡
図 39　天引55号住居跡
図 40　天引55号住居跡
図 41　天引56号住居跡
図 42　天引56号住居跡
図 43　天引62号住居跡
図 44　天引62号住居跡・天引65号住居跡炉
図 45　天引65号住居跡
図 46　天引65号住居跡
図 47　天引60号住居跡
図 48　天引74号住居跡
図 49　天引84号住居跡
図 50　天引84号住居跡
図 51　天引84号住居跡掘り方
図 52　天引85号住居跡
図 53　天引91号住居跡
図 54　天引105号住居跡
図 55　天引100号住居跡
図 56　天引100号住居跡
図 57　天引108号住居跡
図 58　天引109号住居跡
図 59　天引110号住居跡
図 60　天引110号住居跡
図 61　天引110号住居跡掘り方
図 62　天引116号住居跡
図 63　天引112号住居跡
図 64　天引112号住居跡
図 65　天引119号住居跡
図 66　天引121号住居跡
図 67　天引132号住居跡
図 68　天引132号住居跡・天引97号住居跡
図 69　天引135号住居跡
図 70　天引136号住居跡
図 71　天引146号住居跡
図 72　天引137号住居跡・天引152号住居跡
図 73　天引151号住居跡
図 74　天引151号住居跡掘り方
図 75　天引153号住居跡
図 76　白倉C区 2 号方形周溝墓
図 77　白倉C区 1 号方形周溝墓
図 78　白倉C区 1 号方形周溝墓
図 79　白倉B区16・132・152・263号土壙
図 80　白倉B区56・83・133号土壙
図 81　白倉B区140・179・231号土壙
図 82　白倉B区97・162・163・183号土壙
図 83　白倉C区 2 ・ 3 号土壙
図 84　白倉C区 1 ・30・32号土壙
図 85　白倉C区 5 ・16・29号土壙
図 86　白倉C区11・31・253号土壙
図 87　白倉C区15・72・105・124号土壙
図 88　白倉C区209・222・255号土壙
図 89　天引69・113号土壙
図 90　天引59・66号土壙
図 91　天引46・65・109号土壙
図 92　天引11号住居跡
図 93　白倉B区14号住居跡
図 94　白倉B区14号住居跡
図 95　天引 1 号住居跡
図 96　天引 1 号住居跡掘り方
図 97　天引10号住居跡
図 98　天引10号住居跡滑石分布図
図 99　天引13号住居跡
図100　天引13号住居跡掘り方
図101　天引35号住居跡・天引 6 号住居跡
図102　天引24号住居跡
図103　天引18号住居跡
図104　天引18号住居跡掘り方
図105　天引20号住居跡
図106　天引20号住居跡・天引30号住居跡

図107　天引23号住居跡
図108　天引23号住居跡掘り方・天引51号住居跡
図109　天引25号住居跡
図110　天引25号住居跡掘り方・天引34号住居跡
図111　天引28号住居跡
図112　天引69号住居跡
図113　天引77号住居跡
図114　天引77号住居跡掘り方・天引31号住居跡
図115　天引90号住居跡
図116　天引90号住居跡掘り方
図117　天引88号住居跡
図118　天引96号住居跡
図119　天引106号住居跡
図120　天引106号住居跡・天引122号住居跡
図121　天引114号住居跡
図122　天引114号住居跡掘り方
図123　天引94号住居跡・天引107号住居跡
図124　天引117号住居跡・天引131号住居跡
図125　天引142号住居跡
図126　天引143号住居跡
図127　天引１号方形周溝墓
図128　白倉Ｂ区156・256号土壙
図129　白倉Ｂ区258・266号土壙
図130　白倉Ｂ区265・292号土壙
図131　白倉Ｂ区268・294号・天引160・171号土壙
図132　白倉Ａ区46・52号住居跡出土土器
図133　白倉Ｂ区５号住居跡出土土器
図134　白倉Ｂ区７号住居跡出土土器
図135　白倉Ｂ区７・13号住居跡出土土器
図136　白倉Ｂ区13号住居跡出土土器
図137　白倉Ｃ区１・８号住居跡出土土器
図138　白倉Ｃ区７・９号住居跡出土土器
図139　白倉Ｃ区14・32号住居跡出土土器
図140　白倉Ｃ区34号住居跡出土土器
図141　白倉Ｃ区30・35号住居跡出土土器
図142　白倉Ｃ区35・39号住居跡出土土器
図143　白倉Ｃ区39・53・91号住居跡出土土器
図144　白倉Ｃ区47・55号住居跡出土土器
図145　白倉Ｃ区72・90号住居跡出土土器
図146　天引２・４号住居跡出土土器
図147　天引４・５・12・19号住居跡出土土器
図148　天引22号住居跡出土土器
図149　天引22号住居跡出土土器
図150　天引22号住居跡出土土器
図151　天引42号住居跡出土土器
図152　天引42号住居跡出土土器
図153　天引42号住居跡出土土器
図154　天引43・55号住居跡出土土器
図155　天引55・60号住居跡出土土器
図156　天引53号住居跡出土土器
図157　天引56・58号住居跡出土土器
図158　天引62号住居跡出土土器
図159　天引62・65号住居跡出土土器
図160　天引65号住居跡出土土器
図161　天引65・85号住居跡出土土器
図162　天引84号住居跡出土土器
図163　天引84号住居跡出土土器
図164　天引74・91・105・108・109・136・152号住居跡出土土器
図165　天引100号住居跡出土土器
図166　天引110号住居跡出土土器
図167　天引112号住居跡出土土器
図168　天引112号住居跡出土土器
図169　天引116・135号住居跡出土土器
図170　天引119・121号住居跡出土土器
図171　天引132号住居跡出土土器
図172　天引151号住居跡出土土器
図173　天引146・153号住居跡出土土器
図174　天引153号住居跡出土土器
図175　白倉Ｃ区１・２号方形周溝墓出土土器
図176　白倉Ｂ区16・83・163号土壙出土土器
図177　白倉Ｂ区97・152・162・179号土壙出土土器
図178　白倉Ｂ区183号土壙・谷出土土器
図179　白倉Ｂ区231・263号・Ｃ区１・２号土壙出土土器
図180　白倉Ｃ区５号土壙出土土器
図181　白倉Ｃ区３・11・15号土壙出土土器
図182　白倉Ｃ区29号土壙出土土器
図183　白倉Ｃ区29号土壙出土土器
図184　白倉Ｃ区16・30・31・32・72号土壙出土土器
図185　白倉Ｃ区31号土壙出土土器
図186　白倉Ｃ区105・124・209・222・255号土壙出土土器
図187　白倉Ｃ区253号土壙出土土器
図188　天引46・59・66号土壙出土土器
図189　天引65・69・109号土壙出土土器
図190　白倉出土弥生土器拓本一覧
図191　白倉出土弥生土器拓本一覧
図192　天引出土弥生土器拓本一覧
図193　天引出土弥生土器拓本一覧
図194　天引出土弥生土器拓本一覧
図195　天引出土弥生土器拓本一覧
図196　白倉Ａ区52号・Ｂ区５号住居跡出土石器
図197　白倉Ｂ区５・７号住居跡出土石器
図198　白倉Ｃ区１・７号住居跡出土石器
図199　白倉Ｃ区７号住居跡出土石器
図200　白倉Ｃ区７・14号住居跡出土石器
図201　白倉Ｃ区９号住居跡出土石器
図202　白倉Ｃ区８・32号住居跡出土石器
図203　白倉Ｃ区34号住居跡出土石器
図204　白倉Ｃ区35号住居跡出土石器
図205　白倉Ｃ区35号住居跡出土石器
図206　白倉Ｃ区35号住居跡出土石器
図207　白倉Ｃ区30・39・47号住居跡出土石器
図208　白倉Ｃ区53・55・72号住居跡出土石器
図209　白倉Ｃ区90・91号住居跡出土石器
図210　天引２・４号住居跡出土石器
図211　天引19・22号住居跡出土石器
図212　天引42・43号住居跡出土石器
図213　天引53・56号住居跡出土石器
図214　天引58・60号住居跡出土石器
図215　天引62・65号住居跡出土石器
図216　天引55・74・84号住居跡出土石器
図217　天引85・91・100号住居跡出土石器
図218　天引105・110号住居跡出土石器
図219　天引112・116号住居跡出土石器
図220　天引121・151・153号住居跡出土石器
図221　白倉Ｃ区１号方形周溝墓出土石器
図222　白倉Ｃ区２号方形周溝墓・白倉土壙・天引土壙出土石器
図223　白倉Ｂ区14号住居跡出土土器
図224　天引１号住居跡出土土器

図225　天引1・6号住居跡出土土器
図226　天引10号住居跡出土土器
図227　天引10号住居跡出土土器
図228　天引10号住居跡出土土器
図229　天引13号住居跡出土土器
図230　天引11・18・23号住居跡出土土器
図231　天引20号住居跡出土土器
図232　天引24・25号住居跡出土土器
図233　天引28号住居跡出土土器
図234　天引30・31号住居跡出土土器
図235　天引35号住居跡出土土器
図236　天引35・51号住居跡出土土器
図237　天引69・77・88・90・94・96号住居跡出土土器
図238　天引106・107号住居跡出土土器
図239　天引114号住居跡出土土器
図240　天引114・117・122号住居跡出土土器
図241　天引131号住居跡出土土器
図242　天引131号住居跡出土土器
図243　天引131・143号住居跡出土土器
図244　天引142号住居跡・1号方形周溝墓出土土器
図245　白倉B区266号土壙・天引160・171号土壙出土土器
図246　天引出土古墳土器拓本一覧
図247　天引6・10・11・18号住居跡出土石器
図248　天引23・28号住居跡出土石器
図249　天引31号住居跡出土石器
図250　天引25・30・51・69・88号住居跡出土石器
図251　天引90号住居跡出土石器
図252　天引106・107・114・117号住居跡出土石器
図253　天引142号住居跡出土石器
図254　天引122・143号住居跡出土石器
図255　天引1号方形周溝墓出土石器
図256　白倉遺構外出土土器
図257　天引遺構外出土土器
図258　遺構外出土磨製石鏃
図259　遺構外出土磨製石鏃・石器
図260　遺構外出土磨製石鏃・石器

写真図版

PL 1　遺跡周辺航空写真（調査前）
PL 2　遺跡空中写真（白倉下原地区）
PL 3　遺跡空中写真（天引向原地区）
PL 4　調査後の遺跡地現況
1　白倉下原遺跡（南東から）
2　天引向原遺跡（西から）
PL 5　白倉A区弥生住居
1　52住　全景（南西より）
2　52住　土器出土状態
3　52住　炉
4　46住　全景（南から）
5　46住　炉
PL 6　白倉B区
1　全景（西から）
2　東南寄り部分調査風景（東から）
PL 7　白倉B区弥生住居
1　5住　全景（北から）
2　同　土層断面（東から）
3　同　土器(4)出土状態
PL 8　白倉B区弥生住居
1　7住　全景（南から）
2　同　遺物出土状態
3　同　遺物出土状態（南から）
4　同　柱穴2
5　同　床面から出土した土器
PL 9　白倉B区弥生住居
1　13住　全景（南から）
2　同　土層断面（南から）
3　同　土器(6)出土状態
4　同　床下土層断面
PL 10　白倉C区
1　全景空中写真（北から）
2　同（東から）
PL 11　白倉C区
1　遺構確認作業
2　確認された住居跡群
3　東寄り部分遠景（北から）
PL 12　白倉C区弥生住居
1　1住　全景（南から）
2　1住　土器(4)出土状態
3　7住　磨製石鏃片出土状態（南から）
4　7住　全景（南から）
5　8住　全景（北から）
6　8住　磨製石鏃出土状態
7　9住　遺物出土状態（東から）
8　9住　全景（南から）
PL 13　白倉C区弥生住居
1　14住　全景（東から）
2　14住　土層断面（南から）
3　14住　磨製石鏃出土状態
4　30住　全景及び遺物出土状態（南から）
5　53住　全景（東から）
PL 14　白倉C区弥生住居
1　32住　土層断面（北から）
2　同　全景（南から）
3　同　土器(1)出土状態
PL 15　白倉C区弥生住居
1　35住　全景（南から）
2　同　磨製石鏃の調査
3　同　南壁寄りの磨製石鏃の分布
4　同　磨製石鏃材の出土状態
5　同　柱穴2
PL 16　白倉C区弥生住居
1　34住　遺物出土状態（北から）
2　34住　全景（南から）
3　34住　土器(4)出土状態
4　39住　全景及び遺物出土状態（南から）
5　39住　土器(3)出土状態
6　39住　土器(1)出土状態
PL 17　白倉C区弥生住居
1　47住　全景（左半分を45住に切られている）
2　47住　土器(1)出土状態
3　55住　全景（左側を46・54住に切られている）
4　72住　全景（南から）
5　90住　全景（南から）
6　90住　砥石(6)出土状態
7　91住　全景及び磨製石鏃出土状態（南から）
8　91住　砥石(12)出土状態
PL 18　天引向原遺跡
1　遺跡遠景（南東から）
PL 19　天引向原遺跡
1　遺構確認状況
2　南寄り部分での調査
3　東寄り部分での調査
PL 20　天引弥生住居
1　2住　全景（南から）
2　同　土層断面
3　12住　全景（西から）
4　同　土器(2)出土状態
PL 21　天引弥生住居
1　4住　全景（南から）
2　同　炉
3　同　柱穴4
4　同　貯蔵穴
5　同　床下土壙
PL 22　天引弥生住居
1　5住　全景（南から）
2　5住　炉
3　19住　全景（南から）
4　19住　柱穴1
5　22住　遺物出土状態（南から）
6　22住　全景（北から）
7　22住　土層断面
8　22住　貯蔵穴
PL 23　天引弥生住居
1　42住　炭化物出土状態（南から）
2　同　全景（南から）
3　同　床下状態（南から）
PL 24　天引弥生住居
1　42住　炭化物・遺物出土状態
2　同　炉

3　同　土器(3・6)出土状態
4　同　柱穴4
5　同　ベッド状遺構
6　同　貯蔵穴
7　同　貯蔵穴土器(9)出土状態

PL25　天引弥生住居

1　43住　全景（南から。内側は57住）
2　同　貯蔵穴
3　同　柱穴2
4　同　炉

PL26　天引弥生住居

1　53住　全景（南から）
2　同　床下状態（南から）

PL27　天引弥生住居

1　53住　炉
2　同　貯蔵穴
3　同　粘土出土状態
4　同　遺物出土状態
5　同　ミニチュア土器(24)出土状態
6　同　紡錘車(10)出土状態
7　同　土製勾玉(13)出土状態
8　56住　全景（南から）

PL28　天引弥生住居

1　55住　全景及び遺物出土状態（南から）
2　同　土層断面（西から）
3　同　貯蔵穴
4　同　粘土
5　同　遺物状態
6　同　土製匙(17)出土状態

PL29　天引弥生住居

1　58住　全景（南から）
2　同　全景（南東から）
3　同　土層断面
4　同　遺物出土状態
5　同　炉
6　同　砥石（15）出土状態

PL30　天引弥生住居

1　60住　全景（南から）
2　91住　全景（南から）
3　91住　土層断面

PL31　天引弥生住居

1　62住　全景（南から）
2　同　土層断面
3　同　遺物出土状態
4　同　ベッド状遺構

PL32　天引弥生住居

1　62住　入口施設
2　62住　土器(3)出土状態
3　74住　全景（東から）
4　同　土層断面
5　同　炉
6　同　土製匙(3)出土状態
7　同　土製匙(4)出土状態

PL33　天引弥生住居

1　65住　全景（南から）
2　同　炉
3　同　粘土出土状態
4　同　土器(7)出土状態
5　同　土器(1)出土状態
6　同　ミニチュア土器(21)出土状態
7　同　ミニチュア土器(22)出土状態

PL34　天引弥生住居

1　84住　全景（南から）
2　同　土層断面
3　同　ベッド状遺構
4　同　遺物出土状態
5　同　1号炉
6　同　土器(1)出土状態

PL35　天引弥生住居

1　85住　全景（南東から）
2　同　炉
3　同　土層断面
4　同　貯蔵穴
5　同　砥石(14)出土状態
6　97住　全景（奥側を35住に切られる）

PL36　天引弥生住居

1　100住　全景（南から。白線が住居の輪郭）
2　100住　炉
3　100住　貯蔵穴土器(4)出土状態
4　100住　土器(7)出土状態
5　105住　全景（南から）
6　105住　入口施設に伴うピット
7　108住　全景（南から）
8　108住　柱穴7

PL37　天引弥生住居

1　110住　全景（南から）
2　同　土層断面
3　同　柱穴1
4　同　貯蔵穴
5　同　南西隅の粘土
6　同　ミニチュア土器(16)出土状態

PL38　天引弥生住居

1　112住　全景（南から）
2　同　土層断面
3　同　柱穴3
4　同　柱穴2
5　同　炉
6　同　土器(1)出土状態

PL39　天引弥生住居

1　109住　全景（南から）
2　109住　炉
3　116住　全景（南から）
4　116住　遺物出土状態
5　119住　全景（南から）
6　121住　全景（北から）

PL40　天引弥生住居

1　132住　全景（南から）
2　同　炉
3　同　貯蔵穴及び遺物出土状態
4　同　土器(3)出土状態
5　同　貯蔵穴

PL41　天引弥生住居

1　135住　全景（南から）
2　137住　全景（東から）

3　136住　全景（北から）
4　136住　貯蔵穴
5　146住　遺構確認状態
6　146住　全景（東から）
7　146住　炉
8　146住　貯蔵穴

PL42　天引弥生住居

1　151住　遺物出土状態（南から）
2　同　全景（南から）
3　同　床下状態（南から）
4　同　土層断面
5　同　炉

PL43　天引弥生住居

1　153住　土層断面
2　同　遺物出土状態
3　同　全景（東から）
4　同　床面状態

PL44　白倉C区方形周溝墓

1　1号方形周溝墓全景（北から）
2　同　南側部分（東から）
3　同　土層断面
4　同　土層断面

PL45　白倉C区方形周溝墓

1　1号周溝墓土器(1)出土状態
2　2号周溝墓全景（南から）
3　同　土層断面

PL46　天引方形周溝墓

1　1号方形周溝墓遺構確認状態（南から）
2　同　全景（北西から）
3　同　全景（南から）

PL47　白倉B区弥生土壙

1　16土　全景・遺物出土状態
2　140土　全景
3　16土　土層断面
4　140土　土層断面
5　83土　遺物出土状態
6　152土　全景・遺物出土状態
7　83土　全景
8　162土　全景

PL48　白倉B区弥生土壙

1　179土　全景
2　同　遺物出土状態
3　231土　全景及び遺物出土状態

PL49　白倉B区弥生土壙

1　263土　全景
2　263土　土層断面
3　56土　全景
4　97土　土層断面
5　133土　全景
6　132土　全景
7　133土　土層断面

PL50　白倉C区弥生土壙

1　1土　全景
2　2土（奥寄り）・3土全景
3　5土　遺物出土状態
4　2土　土層断面
5　5土　全景
6　3土　土層断面
7　5土　土層断面
8　11土　全景

PL51　白倉C区弥生土壙

1　15土　全景及び遺物出土状態
2　15土　土層断面
3　16土　遺物出土状態
4　16土　全景

PL52　白倉C区弥生土壙

1　29土　遺物出土状態
2　31土　土層断面
3　29土　遺物出土状態
4　31土　全景
5　29土　土層断面
6　72土　全景
7　29土　土層断面
8　72土　土層断面

PL53　白倉C区弥生土壙

1　32土　全景
2　124土　全景
3　222土　全景
4　253土　全景
5　222土　土層断面
6　253土　土層断面
7　105土　土層断面
8　255土　全景

PL54　天引弥生土壙

1　59土　全景
2　同　遺物出土状態
3　同　遺物出土状態

PL55　天引弥生土壙

1　65土　全景
2　66土　全景
3　65土　土層断面
4　66土　土層断面
5　113土　全景
6　113土　土層断面

PL56　天引弥生土壙

1　46土　遺物出土状態
2　同　全景
3　同　遺物出土状態

PL57　白倉B区古墳住居

1　14住　全景（東から）
2　同　道路状遺構との重複関係（南から）
3　同　土層断面（南から）
4　同　遺物出土状態
5　同　遺物出土状態

PL58　天引古墳住居

1　1住　全景（北から）
2　同　遺物出土状態
3　同　柱穴
4　6住　全景（東から）
5　同　土層断面
6　同　砥石（11）出土状態

PL59　天引古墳住居

1　10住　全景（南から）
2　同　全景（北から）

3 同　遺物出土状態
4 同　滑石出土状態
5 同　貯蔵穴遺物出土状態

PL60 天引古墳住居

1 11住　土層断面（南から）
2 同　炭化物出土状態（南から）
3 同　甕(1)出土状態
4 同　全景（北から）

PL61 天引古墳住居

1 13住　全景（北から）
2 同　炭化物出土状態
3 同　貯蔵穴
4 同　床下構造
5 同　土器出土状態

PL62 天引古墳住居

1 18住　全景（北から）
2 18住　貯蔵穴
3 18住　床下構造
4 20住　全景（北から）
5 20住　ガラス小玉出土状態
6 20住　鏡出土状態

PL63 天引古墳住居

1 23住　全景（南から）
2 23住　遺物出土状態
3 24住　全景（北から）
4 23住　管玉出土状態
5 24住　土層断面
6 24住　土器(1)出土状態

PL64 天引古墳住居

1 25住　全景（北から）
2 25住　貯蔵穴
3 25住　土器(1)出土状態
4 28住　全景（北西から）
5 28住　棒状石出土状態
6 28住　炭化材出土状態

PL65 天引古墳住居

1 30住　全景（南から）
2 30住　柱穴1
3 31住　炉
4 31住　遺物出土状態
5 31住　全景（東から）

PL66 天引古墳住居

1 34住　全景（西から）
2 35住　全景（南から）
3 35住　貯蔵穴
4 35住　高坏(9)出土状態
5 51住　全景（北から）

PL67 天引古墳住居

1 69住　全景（南から）
2 69住　貯蔵穴
3 77・93・94住　全景（南から）
4 77住　柱穴3
5 77住　器台(1)出土状態

PL68 天引古墳住居

1 88住　全景（北から）
2 88住　炉
3 90住　全景（南から）
4 同　床下構造（東から）
5 同　土層断面

PL69 天引古墳住居

1 106住　炭化物出土状態（南から）
2 同　全景（南から）
3 同　炭化物出土状態
4 同　土器(4・5)出土状態
5 同　貯蔵穴

PL70 天引古墳住居

1 107住　全景（西から）
2 114住　全景（北から）
3 114住　貯蔵穴
4 114住　炭化材出土状態
5 114住　炭化材出土状態
6 114住　炭化材出土状態

PL71 天引古墳住居

1 117住　全景（南から）
2 同　土器(1)、台石出土状態
3 同　貯蔵穴
4 122住　全景（北から）
5 同　炭化物出土状態
6 同　貯蔵穴

PL72 天引古墳住居

1 131住　遺物出土状態（南から）
2 同　全景（南から）
3 同　土器出土状態

PL73 天引古墳住居

1 142住　全景（南東から）
2 同　土層断面
3 同　全景（南西から）
4 同　炉
5 同　貯蔵穴
6 同　遺物出土状態
7 同　土製勾玉出土状態

PL74 天引古墳住居

1 143住　全景（北東から）
2 同　貯蔵穴
3 同　石製紡錘車出土状態

PL75 白倉B区古墳土壙

1 156土　全景（北から）
2 156土　全景
3 265土　全景
4 266土　全景
5 266土　土器(1)出土状態

PL76 天引古墳土壙

1 160土　全景
2 同　土器(1)出土状態
3 171土　全景
4 同　土器出土状態
5 同　石器出土状態

PL77 白倉A・B区弥生住居出土土器

1 A46・52住出土土器
2 B5住出土土器

PL78 白倉B区弥生住居出土土器

1 5・7住出土土器
2 7住出土土器

PL79 白倉B区弥生住居出土土器

1　7住出土土器
2　13住出土土器

PL80　白倉B・C区弥生住居出土土器

1　B13住出土土器
2　C1住出土土器

PL81　白倉C区弥生住居出土土器

1　7・8・9住出土土器
2　1・7・8・9住出土土器

PL82　白倉C区弥生住居出土土器

1　14・30・32住出土土器
2　34住出土土器

PL83　白倉C区弥生住居出土土器

1　14・30・32・34住出土土器
2　35・39住出土土器

PL84　白倉C区弥生住居出土土器

1　35住出土土器
2　39住出土土器

PL85　白倉C区弥生住居、方形周溝墓出土土器

1　47・53・55・72・90住、2号方形周溝墓出土土器

PL86　白倉C区弥生住居、方形周溝墓出土土器

1　1・2号方形周溝墓出土土器
2　47・53・55・72・90・91住、1号方形周溝墓出土土器

PL87　天引弥生住居出土土器

1　4・12・19・22住出土土器

PL88　天引弥生住居出土土器

1　22住出土土器

PL89　天引弥生住居出土土器

1　2・4・5・22住出土土器
2　42住出土土器

PL90　天引弥生住居出土土器

1　42住出土土器

PL91　天引弥生住居出土土器

1　43・55住出土土器

PL92　天引弥生住居出土土器

1　53住出土土器
2　42・53・55住出土土器

PL93　天引弥生住居出土土器

1　56・58住出土土器
2　56・58住出土土器

PL94　天引弥生住居出土土器

1　60・62・74住出土土器

PL95　天引弥生住居出土土器

1　65住出土土器

PL96　天引弥生住居出土土器

1　84住出土土器

PL97　天引弥生住居出土土器

1　84住出土土器
2　60・62・65・84住出土土器

PL98　天引弥生住居出土土器

1　85・100・105住出土土器

PL99　天引弥生住居出土土器

1　108・110住出土土器
2　85・91・100・109・110住出土土器

PL100　天引弥生住居出土土器

1　112住出土土器

PL101　天引弥生住居出土土器

1　116・119・121住出土土器

PL102　天引弥生住居出土土器

1　112・116・119・121住出土土器
2　132住出土土器

PL103　天引弥生住居出土土器

1　135・146・151住出土土器

PL104　天引弥生住居出土土器

1　153住出土土器
2　132・135・151・153住出土土器

PL105　白倉A・B区弥生住居出土石器

1　A52・B5住出土石器
2　B5・7住出土石器

PL106　白倉C区弥生住居出土石器

1　1・7住出土石器
2　7住出土石器

PL107　白倉C区弥生住居出土石器

1　8・9住出土石器
2　14・30・32住出土石器

PL108　白倉C区弥生住居出土石器

1　34住出土石器
2　35住出土石器

PL109　白倉C区弥生住居出土石器

1　35住出土石器
2　35・39住出土石器

PL110　白倉C区弥生住居出土石器

1　47・53・55・72住出土石器
2　90・91住出土石器

PL111　白倉C区弥生住居出土石器

1　1・8住、2号方形周溝墓出土磨製石鏃
2　7住出土磨製石鏃

PL112　白倉C区弥生住居出土石器

1　7住出土磨製石鏃
2　9・53住出土磨製石鏃

PL113　白倉C区弥生住居出土石器

1　14・1号方形周溝墓出土磨製石鏃
2　32・34住出土磨製石鏃

PL114　白倉C区弥生住居出土石器

1　35住出土磨製石鏃
2　35住出土磨製石鏃

PL115　白倉C区弥生住居出土石器

1　35住出土磨製石鏃
2　35住出土磨製石鏃

PL116　白倉C区弥生住居出土石器

1　39住出土磨製石鏃
2　47・55・72住出土磨製石鏃

PL117　白倉C区出土石器

1　90・91住出土磨製石鏃
2　1号方形周溝墓出土石器

PL118　白倉遺構外出土磨製石鏃

1　B・C区遺構外出土磨製石鏃
2　C区遺構外出土磨製石鏃

PL119　天引弥生住居出土石器

1　2・4・19・22住出土石器
2　22住出土石器

PL120　天引弥生住居出土石器

1　42・43住出土石器

2　53・55・56住出土石器

PL121　天引弥生住居出土石器

1　58・60住出土石器

2　62・65住出土石器

PL122　天引弥生住居出土石器

1　74・84・85住出土石器

2　91・100・105住出土石器

PL123　天引弥生住居出土石器

1　110・112住出土石器

2　116・121・151・153住出土石器

PL124　白倉B区弥生土壙出土土器

1　16・83・97・152土出土土器

2　162・163・231・263土出土土器

PL125　白倉B・C区弥生土壙出土土器

1　B152・179土出土土器

2　C1・2・5・15・31・222・253土出土土器

PL126　白倉C区弥生土壙出土土器

1　29土出土土器

PL127　白倉C区弥生土壙出土土器

1　1・2・3土出土土器

2　5・11土出土土器

PL128　白倉C区弥生土壙出土土器

1　15・16・30土出土土器

2　29土出土土器

PL129　白倉C区弥生土壙出土土器

1　31・32・105・124・222土出土土器

2　209・253・255土出土土器

PL130　天引弥生土壙出土土器

1　46・59・65・66土出土土器

2　46・65・66・69土出土土器

PL131　白倉・天引追加弥生土器

PL132　遺構外出土弥生土器

1　白倉B・C区遺構外出土土器

2　天引遺構外出土土器

PL133　白倉B区古墳住居出土土器

1　14住出土土器

PL134　天引古墳住居出土土器

1　1住出土土器

PL135　天引古墳住居出土土器

1　1住出土土器

2　6住出土土器

3　10住出土土器

PL136　天引古墳住居出土土器

1　10住出土土器

PL137　天引古墳住居出土土器

1　10住出土土器

2　11住出土土器

PL138　天引古墳住居出土土器

1　13住出土土器

2　18・20住出土土器

PL139　天引古墳住居出土土器

1　23・24・25・31住出土土器

PL140　天引古墳住居出土土器

1　30住出土土器

2　28住出土土器

PL141　天引古墳住居出土土器

1　35住出土土器

PL142　天引古墳住居出土土器

1　51・69・77・88・90・94・96・107住出土土器

PL143　天引古墳住居出土土器

1　106住出土土器

2　114住出土土器

PL144　天引古墳住居出土土器

1　131住出土土器

PL145　天引古墳住居出土土器

1　131住出土土器

PL146　天引古墳住居出土土器

1　117・142・143住出土土器

PL147　天引古墳方形周溝墓、白倉・天引古墳土壙出土土器

1　1号方形周溝墓、白倉B266・天引160・171土出土土器

PL148　天引古墳住居出土金属製品

1　20住出土鏡

2　131住出土鉄製鏃

PL149　天引古墳住居出土石器

1　10住出土滑石

2　6・11・18・23・25・28住出土石器

PL150　天引古墳住居出土石器

1　28・30・31住出土石器

2　31・51・69・88住出土石器

PL151　天引古墳住居出土石器

1　90住出土石器

2　69・106・107・114・117・122・142住出土石器・石製品

PL152　天引古墳住居出土滑石製品

1　142住出土滑石製品

2　143住出土滑石製品

PL153　天引古墳住居、方形周溝墓土壙出土石器

1　117・142住出土石器

2　1号方形周溝墓、171土出土石器

PL154　弥生土器接写

PL155　弥生・古墳土器接写

遺物観察表編目次

1．弥生住居出土遺物

土器

白倉A区46号住居跡出土土器……1
白倉A区52号住居跡出土土器……1
白倉B区5号住居跡出土土器……1
白倉B区7号住居跡出土土器……2
白倉B区13号住居跡出土土器……3
白倉C区1号住居跡出土土器……5
白倉C区7号住居跡出土土器……5
白倉C区8号住居跡出土土器……6
白倉C区9号住居跡出土土器……6
白倉C区14号住居跡出土土器……7
白倉C区30号住居跡出土土器……7
白倉C区32号住居跡出土土器……8
白倉C区34号住居跡出土土器……8
白倉C区35号住居跡出土土器……9
白倉C区39号住居跡出土土器……10
白倉C区47号住居跡出土土器……10
白倉C区53号住居跡出土土器……11
白倉C区55号住居跡出土土器……11
白倉C区72号住居跡出土土器……11
白倉C区90号住居跡出土土器……12
白倉C区91号住居跡出土土器……12
天引2号住居跡出土土器……12
天引4号住居跡出土土器……13
天引5号住居跡出土土器……13
天引12号住居跡出土土器……13
天引19号住居跡出土土器……14
天引22号住居跡出土土器……14
天引42号住居跡出土土器……15
天引43号住居跡出土土器……17
天引53号住居跡出土土器……17
天引55号住居跡出土土器……19
天引56号住居跡出土土器……20
天引58号住居跡出土土器……21
天引60号住居跡出土土器……21
天引62号住居跡出土土器……21
天引65号住居跡出土土器……23
天引74号住居跡出土土器……24
天引84号住居跡出土土器……25
天引85号住居跡出土土器……26
天引91号住居跡出土土器……27
天引100号住居跡出土土器……27
天引105号住居跡出土土器……28
天引108号住居跡出土土器……28
天引109号住居跡出土土器……28
天引110号住居跡出土土器……28
天引112号住居跡出土土器……30
天引116号住居跡出土土器……31
天引119号住居跡出土土器……32
天引121号住居跡出土土器……32
天引132号住居跡出土土器……33
天引135号住居跡出土土器……33
天引136号住居跡出土土器……34
天引146号住居跡出土土器……34
天引151号住居跡出土土器……34
天引152号住居跡出土土器……35
天引153号住居跡出土土器……35

石器

白倉A区52号住居跡出土石器……36
白倉B区5号住居跡出土石器……36
白倉B区7号住居跡出土石器……37
白倉C区1号住居跡出土石器……37
白倉C区7号住居跡出土石器……38
白倉C区8号住居跡出土石器……39
白倉C区9号住居跡出土石器……40
白倉C区14号住居跡出土石器……40
白倉C区30号住居跡出土石器……41
白倉C区32号住居跡出土石器……41
白倉C区34号住居跡出土石器……42
白倉C区35号住居跡出土石器……43
白倉C区39号住居跡出土石器……45
白倉C区47号住居跡出土石器……46
白倉C区53号住居跡出土石器……46
白倉C区55号住居跡出土石器……46
白倉C区72号住居跡出土石器……46
白倉C区90号住居跡出土石器……47
白倉C区91号住居跡出土石器……47
天引2号住居跡出土石器……48
天引4号住居跡出土石器……48
天引19号住居跡出土石器……48
天引22号住居跡出土石器……48
天引42号住居跡出土石器……49
天引43号住居跡出土石器……50
天引53号住居跡出土石器……50
天引55号住居跡出土石器……50
天引56号住居跡出土石器……50
天引58号住居跡出土石器……51
天引60号住居跡出土石器……51
天引62号住居跡出土石器……51
天引65号住居跡出土石器……52
天引74号住居跡出土石器……52
天引84号住居跡出土石器……52
天引85号住居跡出土石器……53
天引91号住居跡出土石器……53
天引100号住居跡出土石器……53
天引105号住居跡出土石器……54
天引110号住居跡出土石器……54
天引112号住居跡出土石器……54
天引121号住居跡出土石器……55
天引116号住居跡出土石器……55
天引151号住居跡出土石器……55
天引153号住居跡出土石器……56

2．弥生方形周溝墓出土遺物

土器

白倉C区1号方形周溝墓出土土器……56

白倉C区2号方形周溝墓出土土器……56

石器

白倉C区1号方形周溝墓出土石器……57
白倉C区2号方形周溝墓出土石器……57

3．弥生土墳出土遺物

土器

白倉B区16号土墳出土土器……58
白倉B区83号土墳出土土器……59
白倉B区97号土墳出土土器……59
白倉B区152号土墳出土土器……59
白倉B区162号土墳出土土器……60
白倉B区163号土墳出土土器……60
白倉B区179号土墳出土土器……61
白倉B区183号土墳出土土器……61
白倉B区231号土墳出土土器……62
白倉B区263号土墳出土土器……62
白倉B区谷出土土器……63
白倉C区1号土墳出土土器……63
白倉C区2号土墳出土土器……63
白倉C区3号土墳出土土器……64
白倉C区5号土墳出土土器……65
白倉C区11号土墳出土土器……66
白倉C区15号土墳出土土器……66
白倉C区16号土墳出土土器……67
白倉C区29号土墳出土土器……68
白倉C区30号土墳出土土器……70
白倉C区31号土墳出土土器……70
白倉C区32号土墳出土土器……71
白倉C区72号土墳出土土器……71
白倉C区105号土墳出土土器……71
白倉C区124号土墳出土土器……72
白倉C区209号土墳出土土器……72
白倉C区222号土墳出土土器……72
白倉C区253号土墳出土土器……73
白倉C区255号土墳出土土器……74
天引46号土墳出土土器……74
天引59号土墳出土土器……74
天引65号土墳出土土器……75
天引66号土墳出土土器75
天引69号土墳出土土器……76
天引109号土墳出土土器……76

石器

白倉土墳出土石器……76

4．古墳住居出土遺物

土器

白倉B区14号住居跡出土土器……77
天引1号住居跡出土土器……78
天引6号住居跡出土土器……79
天引10号住居跡出土土器……80
天引11号住居跡出土土器……82
天引13号住居跡出土土器……83
天引18号住居跡出土土器……84
天引20号住居跡出土土器……84
天引23号住居跡出土土器……85
天引24号住居跡出土土器……85
天引25号住居跡出土土器……86
天引28号住居跡出土土器……87
天引30号住居跡出土土器……88
天引31号住居跡出土土器……89
天引35号住居跡出土土器……90
天引51号住居跡出土土器……91
天引69号住居跡出土土器……91
天引77号住居跡出土土器……91
天引88号住居跡出土土器……92
天引90号住居跡出土土器……92
天引94号住居跡出土土器……93
天引96号住居跡出土土器……93
天引106号住居跡出土土器……93
天引107号住居跡出土土器……94
天引114号住居跡出土土器……95
天引117号住居跡出土土器……96
天引122号住居跡出土土器……97
天引131号住居跡出土土器……97
天引142号住居跡出土土器……99
天引143号住居跡出土土器……100

石器

天引6号住居跡出土石器……100
天引10号住居跡出土石器……101
天引11号住居跡出土石器……101
天引18号住居跡出土石器……101
天引23号住居跡出土石器……101
天引25号住居跡出土石器……101
天引28号住居跡出土石器……102
天引30号住居跡出土石器……102
天引31号住居跡出土石器……102
天引51号住居跡出土石器……102
天引69号住居跡出土石器……103
天引88号住居跡出土石器……103
天引90号住居跡出土石器……103
天引106号住居跡出土石器……103
天引107号住居跡出土石器……104
天引114号住居跡出土石器……104
天引117号住居跡出土石器……104
天引122号住居跡出土石器……104
天引142号住居跡出土石器……105
天引143号住居跡出土石器……106

5．古墳方形周溝墓出土遺物

土器

天引1号方形周溝墓出土土器……106

石器

天引1号方形周溝墓出土石器……107

6．古墳土墳出土遺物

白倉B区266号土墳出土土器……107

天引160号土壙出土土器……107
天引171号土壙出土土器・石器……107

7．遺構外出土遺物

土器
白倉遺構外出土土器 ……108
天引遺構外出土土器 ……110

石器
遺構外出土石器 ……112

抄　　録

1　遺跡の概要

白倉下原・天引向原遺跡は、群馬県甘楽郡甘楽町大字白倉・天引に所在する。発掘調査は、1989年4月1日から開始され、1991年8月20日をもって終了した。遺跡は県西部地域を東流する鏑川によって形成された河岸段丘面に立地する。この地域は、群馬県下でも各時代の重層する遺跡が密集する地帯の一つとしてよく知られている。

今回の発掘調査においては、旧石器、縄文、弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安、中近世以降に属する諸遺構が発見されている。本書では、このうち弥生時代から古墳時代前・中期にかかわる諸遺構とそこから出土した遺物について報告した。

2　遺構数量(弥生～古墳中期)

竪穴式住居跡90軒　方形周溝墓3基　土壌48基

	弥生中期	弥生後期	古墳前期	古墳中期	備　　考
竪穴住居跡		57	23	8	
方形周溝墓		2	1		
土　　壌	30	3	8	1	左記以外に可能性あるもの6基

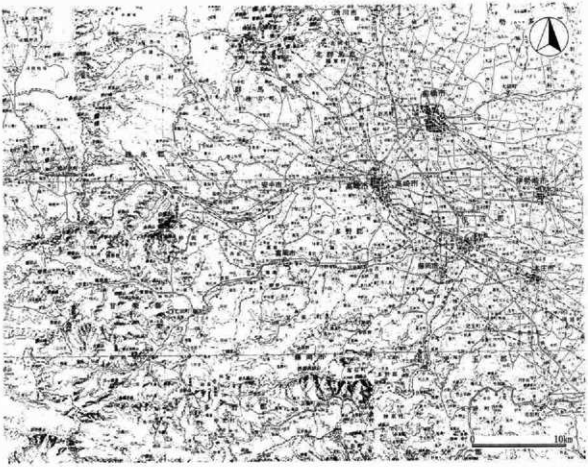
遺物は、それぞれの時期の遺構から多数の土器、石器、石製品等が出土している。特に注目されるものとしては弥生後期の住居跡から出土した磨製石鏃の製作に関わる遺物類、古墳前期の住居跡から出土した小型仿製鏡1点、古墳中期の住居跡から出土した滑石製品の製作に関わる遺物類等が挙げられる。

3　まとめ

本調査の成果で研究上特に注目される主なものを列記すれば以下のとおりである。

- これまで発見例の少なかった弥生中期の袋状土構が複数の群として確認された。
- 鏑川流域では数少ない弥生後期から古墳中期にかけて連続する集落跡が確認された。
- 弥生後期の磨製石鏃の工房跡と考えられる大規模な竪穴住居群が確認された。
- 弥生後期から古墳前期にかけての石器の存在形態を検討する良好な資料が得られた。

白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ



第１図　白倉下原・天引向原遺跡位置図

Ⅰ　調査の経過

1　調査に至る経過

関越自動車道上越線（上信越自動車道）は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団によって建設される。起点を東京都練馬として新潟県上越市まで総延長280km（内練馬～藤岡間は関越自動車道新潟線と併用）である。平成５年３月27日開通した藤岡インター～佐久インター間は約69kmで、群馬県藤岡市（5.6km）、吉井町（6.3km）、甘楽町（4.3km）、富岡市（11.6km）、妙義町（2.5km）、松井田町（19.5km）、下仁田町（5.3km）、長野県佐久市（11.9km）の各市町を通過する。

群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施行命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町（東部）・松井田町（東部）、同57年松井田町（西部）・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。関越自動車道上越線全体にかかる埋蔵文化財の取り扱い及び調査経過は次のとおりである。

昭和49年度　藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさけ、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度　県教委文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年３月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として群馬県（企画部交通対策課）より報告された。

昭和59年度　建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度　県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地・淡い分布地・試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査必要面積を約100万m²と想定し、55遺跡を認定した。（後の試掘により52遺跡に変更）そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

① 発掘調査終了年度を昭和65年度末（平成２年度末）とする。

② 群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。

③ 事業団の出張所（上越線調査事務所）を開設し、整理作業も併せ行う。

④ 機関別対応面積は次のとおりとする。

埋文事業団　約76万m²　富岡市以東を受け持つ。面積は変動の可能性あり。

調 査 会　約22万m²　妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団及び、各遺跡調査会等に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度　４月、埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、４班15人体制で発足。調査を開始する。以後、６班22人体制（昭62）、９班36人体制（昭63）、12班45人体制（平元）、12班45人体制（平２）。平成２年度までに一部を残し発掘調査は終了した。

整理事業は昭和63年度より併行して実施していたが、平成３年度からは本部においても整理事業が始まり、現在２か所11班体制で実施している。調査事務所は今年度で事業を終了し、以後本部のみで実施され、平成８年度全事業終了予定である。

2　調査の方法と経過

(1)　調査の方法

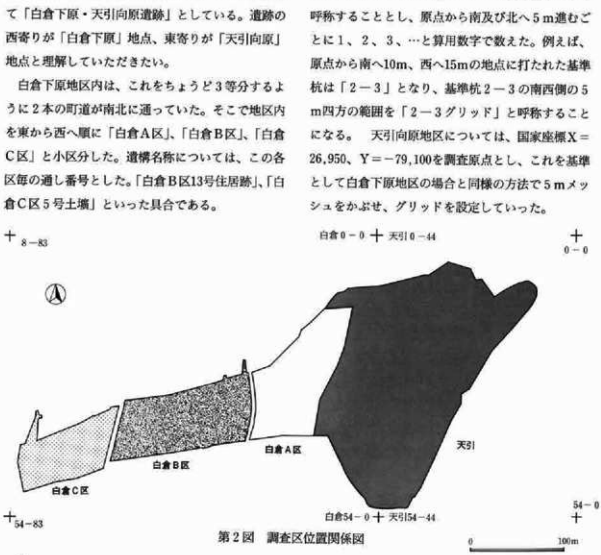
調査対象地は、東西に長い西側部分（道路の本線部分にあたる）と四方に広大な東側部分（高速道路の「甘楽パーキング」予定地にあたっていた）からなる。前者は甘楽町大字白倉字下原の地に相当していることから「白倉下原遺跡」とし、後者は甘楽町大字天引字向原の地に相当していることから「天引向原遺跡」として調査を進めた。両者の間には小支谷が介在しており、構成される遺構内容にも微妙な差があった。しかし、密接な有機的関係があることは明らかであり、同一の遺跡地内における２つの地点とする方が妥当である。遺跡名については、繁雑なきらいもあるが、別々の遺跡でないことを強調して「白倉下原・天引向原遺跡」としている。遺跡の西寄りが「白倉下原」地点、東寄りが「天引向原」地点と理解していただきたい。

白倉下原地区内は、これをちょうど３等分するように２本の町道が南北に通っていた。そこで地区内を東から西へ順に「白倉Ａ区」、「白倉Ｂ区」、「白倉Ｃ区」と小区分した。遺構名称については、この各区毎の通し番号とした。「白倉Ｂ区13号住居跡」、「白倉Ｃ区５号土壙」といった具合である。

一方、「天引地区」は、地区内に明確に細分できるような区分点がなかったことから、対象地は広かったが全体を一括して扱った。遺構名称もこの地区内で通し番号とした。「天引20号住居跡」、「天引160号土壙」といった具合である。

調査された遺構の測量、遺物の取り上げには、国家座標軸に基づいて基準杭を打ち、また三角点からの水準点移動により記録化をはかった。

調査対象地がほぼ東西に長くのびるものであったことから、調査の基準線は、国家座標軸と平行する東西・南北線を使用した。そして、白倉下原地区の北東端に位置する国家座標Ｘ＝26,950、Ｙ＝－79,320を白倉下原地区の調査原点とし、これを基準として５ｍ四方のメッシュをかぶせてグリッドを設定した。グリッドは北東コーナーの杭を基準にして呼称することとし、原点から南及び北へ５ｍ進むごとに１、２、３、…と算用数字で数えた。例えば、原点から南へ10m、西へ15mの地点に打たれた基準杭は「２－３」となり、基準杭２－３の南西側の５ｍ四方の範囲を「２－３グリッド」と呼称することになる。　天引向原地区については、国家座標Ｘ＝26,950、Ｙ＝－79,100を調査原点とし、これを基準として白倉下原地区の場合と同様の方法で５ｍメッシュをかぶせ、グリッドを設定していった。



第２図　調査区位置関係図

(2)　発掘調査の経過

本遺跡は調査対象予定地が65000㎡あまりに及ぶ広大なものであり、しかも全体に各時期の遺構が濃密に分布することが予測された。そこで平成元・2年度の2ヶ年を費やし、2つの調査班（事業名称を取って原西Ⅰ班・原西Ⅱ班とした）で現地調査に望むこととした。

実際に調査を進めてみると、予想通り各時代の諸遺構が数多く発見されたのに加えて、多量の石器を伴う旧石器時代の遺構の発見が成果としてあった。また、年次の途中で工事工程との関係から緊急に他遺跡への調査の応援も何度かあった。これらのことから、調査期間を第2年次終了後、1班分のみ残して平成3年度も調査を継続して実施し、最終的には平成3年8月31日に終了した。

以下、本報告書で取り扱った弥生時代、古墳時代前・中期の諸遺構を中心にして、各年度毎の調査の経過を簡単に跡付けてみたい。

平成元年度の発掘調査　当該年度の調査は、白倉地区から開始した。原西Ⅰ班が白倉A区を、原西Ⅱ班が白倉B・C区を担当した。

本格的な調査に入るための諸作業は4月1日から開始したが、体制が整い、実際に取り掛かったのは5月に入ってからである。

調査は、白倉A区と白倉C区で併行して進められた。A区では、主として古墳時代後期の住居跡が寸分の隙間もないほどに数多く発見され、これに調査の大半を費やした。本報告に関連する遺構としては弥生後期の2軒の住居が確認されたのみであった。ところで、A区を担当していたⅠ班は、この地点の縄文以降の諸遺構の調査のメドがついた9月をもって一時本遺跡での調査を休止した。10月から翌年2月まで、当時急を要していた中高瀬観音山遺跡の調査に出向くこととなったためである。

一方、Ⅱ班によって進められていた調査では、A区と同様古墳時代後期の住居跡が数多く確認されたが、それとともに縄文前期～後期、弥生中期～後期の諸遺構も数多く確認された。遺構面の状況からす

白倉B区住居群調査風景

天引地区住居群調査風景

白倉C区35号住居（磨製石鏃）調査風景

ると、現在の耕作土を除去した状態で弥生時代以降の各遺構が確認できるので、まず平安・古墳後期・弥生後期の住居跡を順を追って調査していった。住居跡の大半を占める古墳後期のものは、遺存状態がよく出土遺物も豊富であった。これに対して、弥生後期の住居跡の遺存状態はあまりよくなかった。それでも、磨製石鏃に関わる細かい遺物が多量に出土し、調査に時間を要した。これらを9月いっぱいで終了させ、引き続き弥生中期の土壙群、縄文期の諸遺構の調査を進めた。

12月に入ると調査地点をB区へと移動させていった。B区の調査は、工事工程との関係から、調査区の北側1/3を先行させた。この範囲で確認された遺は比較的少なかったが、その中に遺存状態のよい3軒の弥生後期の住居跡と1軒の古墳中期の住居跡が含まれていた。

平成2年度の発掘調査　当該年度は、上越線全域における調査の最終年度にあたっていたため、まさしく分・秒きざみのめまぐるしい調査工程の中で1年間が進んだ。基本的には、原西Ⅰ・Ⅱ班が合体して白倉B区から天引地区へと調査を進めていった。その間、一時的に矢田遺跡班、多比良遺跡班が調査に加わり、さらに2月からは調査の全工程を終了した内匠遺跡班、井出遺跡班が合流した。

白倉B区の調査は、前年度の後半に引き続いて調査区の南側2/3が対象となった。この範囲で確認された遺構の主体をなすのは、古墳後期から平安期にかけての住居跡と縄文前期から後期にかけての住居跡・土壙であった。弥生後期の住居跡はまったく認められなかったが、弥生中期の土壙は、C区の場合と同様に群をなしており注目された。

これらの調査を9月中に終了させると、引き続いて、白倉A・B区の旧石器の調査を行った。ここでは、大きく2ケ所から多量の石器類の集中地点が確認された。

11月いっぱいで白倉地区の調査が完了したのをうけて、調査の主力を徐々に天引地区へと移動させていった。それ以前に実施していた遺構の分布状況の

白倉B区住居群調査風景

天引地区住居群調査風景

天引地区住居群調査風景

確認作業により、調査区の南寄りに極度の密集部分が広がっていることが明らかになっていた。そこで遺構の分布の希薄な北半分をまず終了させ、終わり次第、南側へと及ぼしていくことにした。

調査を進めてみると北半分には、点々と弥生後期・古墳前期の住居が確認されたのに加えて、平安期の小規模寺院跡のかすかな痕跡が発見されたのが目立った程度であったので、開始後の早い時点で主力を南へと移動させていった。

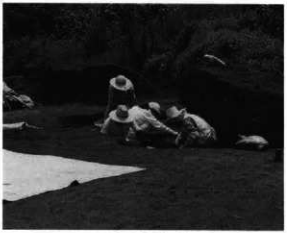
南寄りの部分では、弥生後期から古墳中期にかけての住居跡が、折り重なるように確認され、遺構の範囲確定や遺物の帰属決定に手間取った。2月以降、調査地には、担当者と作業員の人波と足の踏み場もないほどの住居跡でごった返し、本来の原西Ⅰ・Ⅱの担当者は、その交通整理と調査の記録化に走りまわった。調査は、この南側部分の住居群の半分ほどが終了した時点で、3月末を迎えたため、残りは次年度に行うこととした。

なお、一部を残して上越線に関わる全調査が終了しつつあるのをうけて、12月15・16日の2日間、各遺跡の調査成果を一同に会した即報展を本遺跡を会場にして実施し、多くの見学者が訪れた。

平成3年度の調査　天引地区の南寄りで調査未了となった部分のため1班が残ってこれに当たった。本報告に関わるものとしては、南端寄りに分布していた住居群の調査であった。また、調査を始めつつ中途になってしまった遺構も数多く存在していた。これらの調査は、6月いっぱいでほぼ終了した。

残りの2ケ月の期間は、東側の斜面部に密集していた古墳後期の大型土壙(粘土採掘坑と推定された)の調査と最終的なチェックの作業にあてた。調査は8月20日をもって全て終了した。

これまで見てきたように、本遺跡の調査は、調査地全域に旧石器時代から近世までの夥しい数の遺構が存在する中で、多くの担当者・作業員がたずさわった。そのための調査の混乱を防ぐため期間中連絡・討議を重ねたが、それでも今になって見ると調査の詰めの甘さのみが痛感される。



天引地区住居調査風景

天引地区調査風景

天引地区粘土採掘坑

(3)　整理及び報告書の作成

本遺跡の報告書作成は、当初遺跡内の弥生時代に関わる諸遺構を対象として１ケ年を費やして計画していた。実際に整理を進めて見ると該当資料が予想以上に多かったため、１ケ年で終了させるにはかなり困難が予想されてきた。そこで、平成５年度以降に予定していた古墳前・中期の該当遺構もあわせて一冊とし、平成５年度末に「弥生・古墳時代編」として刊行することに計画変更をした。

平成４年度の整理　主として弥生時代に関わる資料の整理を行った。

遺物資料の中心をなすのは、住居跡から出土した土器類である。これらの土器は、器面に櫛描文と縄文を駆使したものが大半を占めており、実測図の作成に多くの時間を要した。大半の土器については、調査補助員が実測し、担当が修正を施すという流れで図化を進めたが、繁雑なものについては、(株)シン技術コンサルによる写真実測を導入し、担当が修正を行った。遺物資料としては、土器類に加えて多量の磨製石鏃の製作に伴う遺物、打製石器、砥石等の石器類があり注目された。弥生後期における石器類の存在形態は重要課題の１つと考え、土器と同様に資料化の課程で注意を払った。

本文原稿を除いて、年度内に実測図・写真図版、及び遺物観察表の報告書用原稿を完成させた。

平成５年度の整理　当遺跡の古墳時代前期から中期に関わる諸遺構の調査資料の整理を行った。

遺物資料の中心をなしたのは土器類であった。その接合、実測図の作成を９月までに終了し、その後トレース、遺物写真撮影を行った。土器類とともに出土した小型仿製鏡、石製品、滑石製品は本遺跡を特徴づけるものとして注目された。

なお、遺憾なことであるが、古墳前期の複数の住居跡から出土した管玉に現在行方不明のものがあり、資料を提示できなかった。見つかり次第、追って報告することを約束しておきたい。

すべての原稿が用意できた２月上旬には、印刷のための入札を行い、３月下旬に刊行となった。

上越線調査事務所（吉井町）での整理

II　立地環境と遺跡の概観

1　地理的環境

群馬県は関東地方の北西の内陸部に位置しており、周囲を栃木、埼玉、福島、新潟、長野県と接している。福島、新潟と接する県北部及び長野と接する県西部は山地部分であり、栃木、埼玉と接する県中央部から県東部にかけては関東平野の西部にあたる平野部となっている。

これら山地部分には、深く険しい山々が幾重にも連なっており、利根川とその支流の中小河川を通じて豊富な水を平野部へと供給しており、現在でも「東京都の水ガメ」としてよく知られ、水不足の時期を迎えると俄かに注目を浴びる地域である。

このことはまた、山地から平野部に出る地域に水量に恵まれた肥沃で豊かな沖積地を提供することになり、弥生時代以降、広大な農耕適地の出現を約束したのであった。

白倉下原・天引向原遺跡は、群馬県の南西部、甘楽郡甘楽町白倉、同天引に所在している。この地は、その北方を西から東へと流れている鏑川によってその右岸（南岸）に形成された上位と下位の２つの河岸段丘面のうち、高位の上位段丘面に展開している。鏑川は群馬・長野県境にある八風山麓に源を発し、途中下仁田町本宿付近で、同じく県境の荒船山麓に源を発する市野萱川と合流した後、富岡市、甘楽町、吉井町、藤岡市の群馬県南西部地域を東流し、その後、高崎市阿久津付近で利根川の一支流である烏川へと合流している。

鏑川右岸一帯には、上位段丘面と下位段丘面の２段の河岸段丘面が形成されているが、特に富岡市東部から藤岡市西部にかけての中下流域では、上位段丘面の発達が著しい。これに対して、左岸（北岸）では、上位・下位とも河岸段丘の発達はほとんど認められない。これは、右岸の地盤隆起によって、鏑川の流路が次第に南から北へと移動したことによると考えられている。すなわち、最初南側の上位段丘面を形成し、その後下位段丘面を形成させながら、流路を次第に北へと移動させていったわけである。

上位段丘面には、北西約40km浅間山を給源とする浅間室田軽石層（As-MP）などの軽石層と風化ローム層とが互層となって、約２ｍの厚さで堆積している。さらに、ローム層の下層には風化した暗褐色粘土層があり、この上部に姶良 Tn 火山灰（AT）が１～２cmの厚さで認められる。このことから、遅くとも約22000年前には上位段丘面の形成が終了していたことは明らかである。さらに、本遺跡のAT層下から多量の石器群が発見されていることから、この22000年前をさらに遡ることが確実である。

これに対して、下位段丘面においては、ローム層の堆積はほとんど認められていない。上位段丘面にローム層が堆積していた時期に下位段丘面を鏑川が流れていたことが推測されよう。

既述の通り、本遺跡が位置するのは上位段丘面であり、南側へは丘陵地帯がしばらく続いた後、稲含山等に代表される標高1200～1500mの山地が鏑川に沿うように東西に連なっている。一方、北側へは、ゆるやかな傾斜で段丘面が続き、その先は急崖をなして下位段丘面となっている。この山地に源を発する雄川、白倉川、天引川等々の中小河川が鏑川に注ぎ込むように北流しており、東西に連なる上位段丘面を南北に平行して開析している。さらにこれら中小河川に注ぎ込む支谷が樹枝状に発達しており、東西に幾筋もの山あり谷ありの変化な地形を形づくっている。

本遺跡は、大きくは東側を天引川、西側を白倉川によって開析されることによってできた台地上に立地している。白倉下原地区と天引向原地区との間には小支谷が介在している。また、天引向原地区の東側は北流する三途川という小河川があり、その東側にある天引狐崎遺跡と境している。

(文献「牛伏砂岩使用古墳の研究（2）『研究紀要8』1991より)

第3図　鏑川流域の地質図

第4図　白倉下原・天引向原遺跡とその周辺

2　歴史的環境

本報告書で取り扱う中心的な調査資料は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落跡に関わるものである。これに、弥生時代中期の土壙群と弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓が加わる。本節では、鏑川流域を主たる対象にして、そこでの弥生時代から古墳時代にかけての展開過程を主要遺跡を通して概観してみたい。

地理的環境の項でも述べたように、富岡市から藤岡市にかけての鏑川中下流域は、その右岸（南岸）に沿って形成された２段の段丘面が発達しているのに対し、左岸には顕著な段丘面は認められない。現在の生活域が主としてこの右岸に沿って形成されているのと同様に、原始・古代に関わる遺跡も、２段の段丘面に沿って帯状に濃密な分布を示している。

今回報告する遺跡調査の契機となった関越自動車道上信越線は、藤岡市西部で鮎川を渡ると、同市白石から上位段丘面に上がり、西に向けて吉井町、甘楽町、富岡市と鏑川の上位段丘面を通過しているわけである。このことは、鏑川流域にあっては最も遺跡分布の濃密な地帯を通過することになったわけである。建設工事に先立って、昭和61年以降、ほとんど切れ目がなかったといってもよいほどに、各地で発掘調査が行われていった。

これまで、鏑川流域において集落遺跡の考古学的発掘調査が行われた早い段階の代表例として昭和33・34年の吉井町入野遺跡、昭和36年の甘楽町笹遺跡等が挙げられるが、本格的には、昭和50年代にはいり、富岡市、甘楽町、吉井町等の市町村教育委員会により、土地改良事業や道路建設事業に伴って各地で大規模調査が行われるようになるまで皆無に等しいものであった。これら市町村における調査の場合、土地改良事業に伴う事例が大半を占めていることから、調査範囲が農業用道路や水路部分に限られ、線的な調査という制約の中で実施されてきた。

その意味では、今回広域にわたって幅70m以上の調査区が設定され、各地で大小の集落遺跡が面的に調査されたことの意義は大きい。今後の整理・報告書作成の基礎的作業が積み上げられるなかで、鏑川流域における地域展開の具体像の把握が約束されるであろう。

弥生時代の鏑川流域　現在までのところ知られている弥生時代で最も早い段階のものは、前期にまでさかのぼる土壙が富岡市内匠日影周地遺跡で発見された。事例こそ少ないが、この段階までさかのぼる遺跡が確実に存在していることが明らかになった。これに続く中期前半段階の遺跡の存在は、甘楽町白倉遺跡の筒形土器の存在により明らかであったが、今回の上信越線の一連の調査で各地で発見されるに至っている。当白倉下原・天引向原遺跡の土壙群も当該時期に属するものであるが、この他、吉井町の神保下條遺跡・同神保植松遺跡・同神保富士塚遺跡の土壙群や富岡市内匠上之宿遺跡・同下高瀬上之原遺跡の採集資料や内匠日影周地遺跡の土壙資料等、枚挙にいとまがない。今後、流域周辺での調査の展開により一段と事例を増やすことは間違いない。弥生文化の浸透・定着がはかられていった時期として理解できよう。

これまで見てきた遺跡は、いずれも土壙のみの発見であり、竪穴住居から構成される集落跡は確認されていない。確認された土壙の多くが、貯蔵穴の可能性が強いことから、その付近に生活空間があったことは間違いない。実際に集落跡の確認された代表的なものとしては、中期後半の富岡市小塚遺跡や最近富岡市教育委員会によって調査された中高瀬観音山遺跡が知られている。しかし、流域に沿って各地で広範に調査が実施されているにもかかわらず、当該時期に属する遺跡例は極めてわずかである。このことは、これに続く中期末葉の集落跡例についても同様であり、富岡市南蛇井増光寺遺跡・同宇田阿曽岡遺跡等わずかである。

弥生時代後期に入ると遺跡数が急激に増加する。鏑川中下流域では、上位段丘面に沿ってほとんど切れ目ないと言ってもよいほどに多くの集落遺跡が出現する。今回の上越線に関わる調査遺跡においても

各地で当該期の集落跡が確認されている。主要なものを挙げれば、吉井町長根安坪遺跡、甘楽町天引狐崎遺跡、同じく当白倉下原・天引向原遺跡、同松葉慈学寺遺跡、富岡市内匠上之宿遺跡、同内匠日影周地遺跡、同中高瀬観音山遺跡、同中高瀬庚申山遺跡、同南蛇井増光寺遺跡、同中沢平賀界戸遺跡等である。今回、吉井町での発見例が少ないのは、この付近では路線が上位段丘面の奥寄り（南寄り）の地点を通過しているためであり、吉井町教育委員会が上位段丘面の北寄りで実施した黒熊遺跡、川内遺跡等の調査で当該期の集落跡が確認されている。

この他、沿線の市町村教育委員会による発掘調査や分布調査によりこれらを大きく上回る遺跡の存在が知られている。

遺跡数が多くなることとともに、集落規模が大きくなっている点も注意される点である。黒熊遺跡や中高瀬観音山遺跡、南蛇井増光寺遺跡が代表的なものであり、当白倉下原・天引向原遺跡もこれらに匹敵するものである。恐らく、鏑川流域に適当な間隔をおいてこのような拠点的集落が存在していたものと思われる。水稲農耕に基礎をおいて地域開発が大きく進められていったことを物語っている。

当地の弥生後期の土器は、波状文、簾状文等の櫛描文を駆使した地域色の強いもので、群馬県地域の中・西部で広く認められるものである。また、隣接する長野県地域で認められる箱清水式土器と極めて密接な関係を有していることが指摘されている。とりわけこの地域に最も近い当地域の場合、より密接な関係が随所に認められる。

弥生後期の終末段階になると、流域に存在するいずれの遺跡においても、従来の樽式土器のベースの上に県中・東部地域に中心を持つ赤井戸式土器が混在する。この土器は、口縁部の輪積み痕を器面にそのまま残すことと、縄文施文を特徴とするもので、埼玉県地域の吉ケ谷式土器と極めて密接な関係を有している。従来の地域圏の枠組を大きく変える新たな動きが注意されるところである。

ところで、集落遺跡数の増加、遺跡規模の拡大が

南蛇井増光寺遺跡

内匠日影周地遺跡

中高瀬観音山遺跡

顕著になるのはこの時期であり、当白倉下原・天引向原遺跡、中高瀬観音山遺跡、南蛇井増光寺遺跡のような大規模集落に加えて、各地に新たに小規模集落が成立している。まさに激動の時代というのにふさわしい時期であった。

古墳時代の鏑川流域　前述した当地域の弥生後期終末期の諸特徴は、西日本において3世紀後半以降、前方後円墳が築造されるようになった古墳時代前期の段階に併行する時期の地域的特徴であったことが明らかにされつつある。それゆえ、現段階では樽式土器と赤井戸式土器が共伴する時期を弥生後期末葉から古墳時代前期初頭にかけての時間として把えておく必要があろう。後者の時期は、時代区分からすれば古墳時代に入っているが、弥生文化の伝統を保持し、古墳文化がいまだ、もたらされなかった時期と言えよう。

鏑川流域で最も古くさかのぼる古墳は、鏑川右岸の丘陵端にある富岡市北山茶臼山古墳である。この古墳時代前期の中規模円墳は、明治年間に偶然に粘土槨と推定される主体部内から副葬品が発見され著名になったものである。現存する遺物としては、舶載の三角縁神人竜虎画像鏡、碧玉製石釧がある。墳丘測量図によると、円丘部分から北側へのびる張り出し部分が認められ、小型前方後円墳とも解し得る。一方、茶臼山古墳の西側に隣接する北山茶臼山西古墳は全長28mの前方後方墳で、木棺直葬の土壙から、仿製方格規矩鏡・獣形鏡、鉄製矛・斧・刀子・鉋等が出土している。

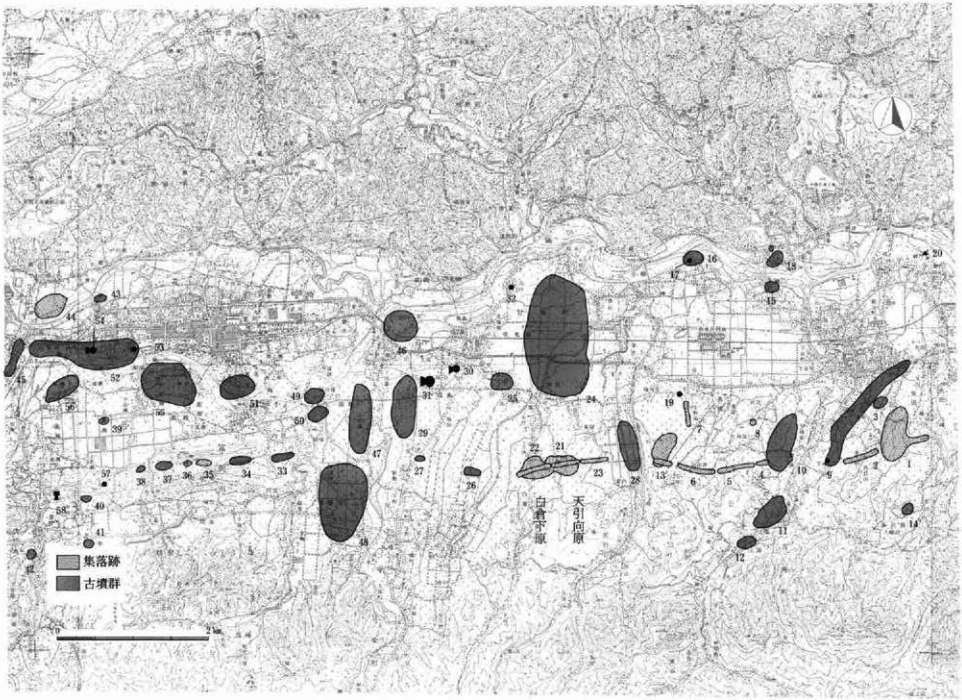
これらの古墳は、前期後半の近接した時期に茶臼山西古墳→茶臼山古墳の順に築造されたと考えられている。

これより下流の吉井町長根の恩行寺裏山古墳は上位段丘縁辺部に位置する中規模円墳であるが、さきの2古墳に近接した時期に築造されたことを示す土器片が墳丘上から採集されている。

これまで知られている鏑川流域の前期古墳は、いずれも比較的小規模であることと、前方後円墳のそれに準ずる充実した副葬品を有していたことが注意される。

次にこの時期の集落遺跡について見てみると、当白倉下原・天引向原遺跡や神保下條遺跡に見られるように前代の樽式・赤井戸式の要素を残すことなくS字口縁台付甕に代表される東海系の土器と高坏・小型器台・小型丸底坩等に代表される畿内系土器の融合した石田川式土器が流入してくる点が主流となっているのが特徴的である。この変化の傾向は、前期の大型前方後円墳が築造された前橋南部から高崎市東部にかけての地域や太田市周辺地域の傾向に符合するものである。鏑川流域が、これらの地域の強い影響下にあったことが窺われるところであり、比較的充実した内容の前期古墳の成立もこのことを裏付けている。

第5図　北山茶臼山西古墳・方格規矩鏡（田口政美編　1988『大島上城遺跡　北山茶臼山西古墳』より）



第6図　白倉下原・天引向原遺跡と周辺遺跡

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
1	矢田遺跡	多野郡吉井町矢田	縄文の住居跡・埋設土器、古墳前期の住居跡、古墳後期～奈良・平安時代の住居跡、中世の居館跡など。平安時代の住居跡より「八田郷」なる線刻文字のある須恵車が出土。古代矢田郷か？関越道地内遺跡	昭和61年調査
2	多胡蛇黒遺跡	多野郡吉井町多胡	先土器の尖頭器、古墳時代後期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡。関越道地内遺跡	平成元年から調査
3	川内遺跡	多野郡吉井町川内	縄文時代中期の土壙、弥生～平安時代の住居跡、弥生時代の方形周溝墓、中世の井戸など	
4	神保植松遺跡	多野郡吉井町神保	縄文の住居跡・土壙・埋設土器、弥生の住居跡・土壙、古墳の住居跡・土壙・方形周溝墓・古墳、奈良・平安時代の住居跡、中世城郭（植松城）の主郭、16世紀の堀穴状遺構など。	昭和63年から調査。関越道地内遺跡
5	神保富士塚遺跡	多野郡吉井町神保	先土器の石器・剥片・小礫、縄文の住居跡・土壙、弥生の土壙。	昭和62年から調査
6	長根羽田倉遺跡	多野郡吉井町長根	縄文陥穴、弥生土壙、古墳前期～平安時代までの住居跡、古墳後期の祭祀遺構、平安の水田跡、道路状遺構、江戸天明３年以前の畠跡等。関越道地内遺跡	昭和61年調査
7	西場脇・長根宿遺跡	多野郡吉井町長根	古墳時代前期の住居跡、奈良時代の遺物集中地、平安時代の住居跡	
8	折茂東遺跡	多野郡吉井町長根	弥生後期の住居跡・方形周溝墓、古墳前・中・後期と平安の住居跡	
9	多胡古墳群	多野郡吉井町多胡神保	古墳後期を中心とした群集墳。上毛古墳総覧では91基をあげているが、数はさらにふえるであろう。横穴式古墳である	下條１～３号古墳
10	神保古墳群	多野郡吉井町神保	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では63基をあげている。周辺では大規模な古墳群の一つである。横穴式古墳である	
11	塩１古墳群	多野郡吉井町塩	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
12	塩Ⅱ古墳群	多野郡吉井町塩	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では12基をあげている。	
13	安坪古墳群	多野郡吉井町長根	古墳時代後期の群集墳。古墳総覧では44基をあげているが、長根安坪遺跡で13基の削平された古墳を確認しており、数はさらに多かったと考えられる。全て横穴式古墳と思われる。	平成元年、南寄りの一部を発掘調査。関越道地内遺跡
14	山ノ神古墳群	多野郡吉井町多比良	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では７基をあげている。	
15	本郷古墳群	多野郡吉井町本郷	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基をあげている。	
16	片山古墳群	多野郡吉井町片山	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では７基をあげている。	
17	片山１号古墳	多野郡吉井町片山	中期初頭の小型前方後円墳、鈍土器から豊富な副葬品が出土。	平成３年調査
18	岩崎古墳群	多野郡吉井町岩崎	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では６基をあげている。	
19	慈行寺古墳	多野郡吉井町長根	径40mの大型円墳。墳丘より古式土師器が採集される。	
20	多胡碑	多野郡吉井町池	和銅４年（711）の多胡郡設置の記念碑。日本三碑の一つ。	
21	天引向原遺跡	甘楽郡甘楽町天引	今回の調査遺跡。旧石器～平安の複合集落跡。関越道地内遺跡	平成２・３年調査
22	白倉下原遺跡	甘楽郡甘楽町白倉	今回の調査遺跡。縄文後期の柄鏡形住居・敷石住居跡・土壙、弥生の住居跡（磨製石鏃の工房跡）、古墳初頭方形周溝墓、古墳時代後期住居跡～平安時代の住居跡など。関越道地内遺跡	平成元・２年調査
23	天引狐崎遺跡	甘楽郡甘楽町天引	マウンドなしの古墳・弥生住居跡等。関越道地内遺跡	平成２年遺跡
24	甘楽条里遺跡	甘楽郡甘楽町新屋	古墳前期・平安（Ｂ軽石直下）・江戸（Ａ軽石直下）の水田跡。古墳後期の滑石製模造品工房跡。	
25	笹遺跡	甘楽郡甘楽町小川	鏑川右岸台地上に位置する。弥生時代後期～古墳時代の集落遺跡。滑石製模造品が多数出土している。	昭和36年調査
26	松葉・慈学寺遺跡	甘楽郡甘楽町上野	堤川と白倉川に挟まれた丘陵状（小幡丘陵）に所在。谷を挟んで東側が天神Ⅱ遺跡、西側が西原遺跡。縄文陥穴状土壙３基、弥生終末～古墳前期集落跡10軒、古墳後期～奈良住居跡60軒、平安住居跡１軒が検出されている。	平成元・２年調査

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
27	西原遺跡	甘楽郡甘楽町上野	楚川の右岸台地上、甘楽町役場の南方約200mに位置する。古墳時代初頭の住居跡６、和泉期末葉の住居跡１、奈良・平安の住居跡23、時期不明の土壙55基、掘立柱建物跡２棟、溝３条、中世に伴う堀１条が検出されている。	平成元・２年調査
28	口明塚１・２号古墳	甘楽郡甘楽町天引	天引川左岸に沿っては、この他に３基の古墳の存在が伝えられているが、現在は削平され、畑地化している。	
29	二日市古墳群	甘楽郡甘楽町福島	鏑川の下位段丘面上の縁辺部に位置しており、現在、20基程の円墳が残る。５世紀後半頃からの築造が考えられる。	
30	天王塚古墳	甘楽郡甘楽町福島	笹森稲荷古墳の北東400mに位置している。後円部が大きく、前方部が未発達な古い形で、竪穴系の主体部と思われる。前期末ないし中期初頭に位置づけられる。	
31	笹森稲荷古墳	甘楽郡甘楽町福島	鏑川の南のゆるい段丘上にある。甘楽地方最大の前方後円墳で全長100m、周濠をもつ。石室は両袖型横穴式石室をもつ。６世紀後半の築造。（稲荷神社が墳丘上に祀られている。）	
32	大山鬼塚古墳	甘楽郡甘楽町天引	鏑川の右岸に位置する丹間、凝灰岩製の舟形石棺を伴うものであった。戦前に掘り出され、石製模造品、馬具を伴うものであった。５世紀後半と推定される。	現在は石棺のみが個人家庭にのこり、遺物は東博蔵。
33	内匠上之宿遺跡	富岡市内匠	鏑川右岸の上位段丘面。通称「離れ山丘陵」の東端に位置する。標高213～221m。竪穴住居跡22軒（縄文後期４、弥生後期４、古墳後期14）、中世城郭（内匠城外郭２・１）、その他。	「年報」７　1988年 群馬県埋蔵文化財調査事業団　昭和62年度調査
34	内匠日影周地・内匠日向周地遺跡	富岡市内匠	縄文・弥生・古墳時代等の竪穴住居跡31軒、古墳２基、水田３面（平安・中世・近世）等を検出。Ｂ下水田下の旧河床面より古代呪符木簡出土。昭和63～平成元年度調査	「年報」９・10　1990・1991年　群馬県埋蔵文化財調査事業団
35	下高瀬上之原遺跡	富岡市下高瀬	縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡。本報告との関係で注目されるのは、５世紀後半の小規模群集墳と６世紀の２基の埴輪窯跡の存在である。岡越道地内遺跡。	平成元年から調査
36	寺山遺跡	富岡市岡本字寺山	小網回の舌状台地に縄文前期の小集落が展開。住居跡の９軒、土壙41基、集石遺構５基等を検出。その他に住居跡３軒（弥生１、奈良・平安２）。	「年報」９　1990年 群馬県埋蔵文化財調査事業団　平成元年度調査
37	中高瀬観音山遺跡	富岡市中高瀬字観音山	比高差60mの丘陵上に展開する弥生後期の大集落である。竪穴住居跡103軒、土壙13基、掘立柱建物跡10棟検出。その他の時代は住居跡15軒（縄文３、古墳９、奈良３）が検出されている。	上記と同じ
38	中高瀬庚申山遺跡	富岡市中高瀬	中高瀬観音山遺跡の南西に位置。住居跡16軒（縄文３、弥生後期７、古墳～平安６）を検出。	上記と同じ
39	中高瀬遺跡	富岡市中高瀬	鏑川右岸の下位段丘面。弥生土器片散布。石鏃出土。1997年富岡市教育委員会調査	「富岡市史　自然編　原始・古代・中世編」1987年富岡市
40	中村遺跡	富岡市南後箇中村	浅香入川上流域左岸に立地。弥生後期の壺が採集されている。	上記と同じ
41	菅原遺跡	富岡市南後箇字菅原	縄文時代前期・後期の土器片散布。古墳時代初頭石田川式の台付甕出土。	上記と同じ
42	西平原遺跡	富岡市野上	野上川と若染川の合流点、北東に突き出た丘陵の先端。弥生後期初頭の壺・甕、墨立埴物館蔵	上記と同じ
43	観音前遺跡	富岡市七日市観音前	七日市駅北側に位置。縄文時代中期後半の土器が散布。昭和63・平成元年度の調査で弥生・古墳～平安時代の住居跡、土壙、溝等を検出。	「富岡市史　自然編　原始・古代・中世編」 1987年富岡市
44	小塚遺跡	富岡市黒川字小塚	高田川の左岸下位段丘上に立地する集落遺跡。縄文前期の住居跡２軒、土壙12基、溝３条。平安～中世の遺構も検出されている。昭和59年度調査	井上大輔「小塚・六反田・久保田遺跡」1987年富岡市教育委員会
45	本宿・郷土遺跡	富岡市一之宮	国道254号一之宮バイパス周辺。古墳時代の豪族居館跡、竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡２棟、祠跡３条の他、縄文・弥生の住居跡、中世建物等を検出。昭和53・54年度調査	井上大輔「本宿・郷土遺跡」1981年富岡市教育委員会
46	塚原古墳群	富岡市田篠	鏑川の下位段丘に位置する。20基程の円墳から成る。７世紀代の築造が考えられる。	昭和44・51・59年に一部調査

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
47	田篠古墳群	富岡市田篠	古墳後期の群集墳。現在30数基存在している。富岡市教委が5基調査し、関越道地内で3基調査した。	昭和57・61年調査
48	善慶寺古墳群	甘楽郡甘楽町善慶寺	古墳後期の群集墳。かつては50基以上が存在していたが、構造改善事業により破壊。現在は約20基残っている。	横穴式石室の開口しているものが多い。
49	布和田古墳群	富岡市田篠	原田篠古墳群と隣接しているが、約5mの段丘崖で画された一段下位の段丘上にあり、10基程の存在が認められるが、石寄場で、古墳といえないものもある。	
50	原田篠古墳群	富岡市田篠	原田篠遺跡の西に隣接しており、7基確認できる。6世紀代からの築造	
51	芝宮古墳群	富岡市富岡	鏑川流域中最大の古墳群、100基以上の円墳から成る。すべて横穴式石室をもつ。6世紀～7世紀代の築造と考えられる。	平成2年調査
52	七日市古墳群	富岡市七日市	富岡段丘面上で鏑川の縁辺部に位置している。26基が確認されている。御三社古墳のみ前方後円墳で他は円墳である。いずれも横穴式石室をもつ。6世紀から7世紀にかけての築造が考えられる。	
53	富岡5号古墳	富岡市七日市	七日市古墳群に属する。径30mの2段築成の円墳で、両袖型石室を主体部とする。埴輪列が確認されたが、基壇上を石室右側に人物埴輪が列をなしていた。6世紀後半と推定される。	昭和43年調査。消滅
54	御三社古墳	富岡市七日市	七日市古墳群唯一の前方後円墳。凝灰質砂岩を使用した両袖型石室を主体部とする。組合式石棺が玄室内にあった。金銅製三輪玉が出土している。6世紀中頃と推定される。	昭和29年調査。消滅
55	桐淵古墳群	富岡市高瀬	鏑川右岸に位置し、横穴式石室を主体部とする6世紀から7世紀にかけての中規模群集墳。石室の使用石材は鏑川の川床の凝灰質砂岩である。『古墳綜覧』には21基が挙がる。	昭和45・46年調査
56	横瀬古墳群	富岡市横瀬	鏑川北岸の高瀬段丘面の北西部に占地。27基が分布している。横穴式石室をもつ。7世紀代の築造が考えられる。	
57	北山茶臼山古墳	富岡市南後箇	鏑川の上位段丘の高さ約70mの丘陵が東西に連なっている。この丘陵の最高所の頂上に位置している。径40mの円墳と推定される。調査報告の記述から粘土槨が推定される。神人竜虎画像鏡（宮内庁所蔵）が出土。4世紀後半の築造と考えられる。	明治27年、主体部から遺物が偶然掘り出される。
58	北山茶臼山西古墳	富岡市南後箇	茶臼山古墳と同じ丘陵上の西約500mの山頂上に位置する。墳丘20mの小形円墳とされていたが、昭和61年の調査で前方後方墳と確認された。仿製獣形鏡が発見されていたが、今回の調査でさらに仿製の方格規矩鏡が出土した。4世紀末頃の築造と想われる。関越道地内遺跡	昭和61年調査。消滅

3 基本層序

白倉下原・天引向原遺跡は鏑川右岸の上位段丘面に立地している。上位段丘面では基本的に表土層(耕作土)、ローム層、粘土層、礫層の堆積が認められる。表土層中には、1783年(天明3年)に噴出した浅間A軽石(As-A)、1108年(天仁元年)に噴出した浅間B軽石(As-B)を含んでいる。しかし、純層での堆積は確認できなかった。

第Ⅰ層　黒褐色土層(表土層)　耕作土である。攪拌された浅間A軽石を多く含んでいる。浅間A軽石は純層では認められないが、灰撒き山直下で検出だれた畠址の畝間では純層で堆積している。浅間B軽石は台地部では認められなかったが、谷部では堆積している部分もある。また、浅間C軽石の堆積はいずれの部分でも認められなかった。

第Ⅱ層　暗褐色土層　漸移層で、白倉B区とC区の遺構確認面である。縄文時代の遺物包含層でもある。なお、第Ⅱ層は、白倉B区とC区では存在するが他の地区では、その後の土地利用によって大半が消失していた。

第Ⅲ層　明黄褐色ローム層　白倉A区及び天引地区の遺構確認面である。堅く締まるローム層で、浅間板鼻黄褐色軽石(As-YP)を多く含む。

第Ⅳ層　黄褐色ローム層　Ⅲ層に比較してやや軟質で、粘性を持つ。浅間白糸軽石(As-SP)の可能性がある白色の軽石を含む。

第Ⅴ層　黄褐色ローム層　浅間板鼻褐色軽石(As-BP)をブロック状に含む。

第Ⅵ層　明黄褐色軽石層　明黄褐色を呈する浅間板鼻軽石(As-BP)の純層で、堅く締まる。

第Ⅶ層　灰褐色軽石層　灰褐色を呈するAs—BPの純層で、堅く締まる。

第Ⅷ層　暗褐色ローム層　粘性のあるローム層で下半部ではAs-MPを少量含んでいる。

第Ⅸ層　明赤褐色軽石層　明赤褐色を呈する浅間室田軽石(As-MP)の純層である。

第Ⅹ層　灰白色軽石層　Ⅸと同じAs-MPの純層であるが、粒子は細かい。水成作用によって色調が変化し、下半部では一部粘土化している。

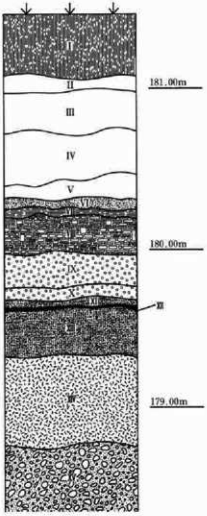
第Ⅺ層　暗褐色粘土層　堅く締まる粘土層。

第Ⅻ層　乳白色火山灰層　始良Tn火山灰(AT)の純層である。非常にきめ細かいガラス室の粒子である。

第XIII層　暗褐色粘土層　堅く締まる粘土層で、石器包含層である。平均2cm程の小礫を多く含む。

第XIV層　青灰色粘土層　きめ細かい粒子で構成される。

第XV層　礫層　礫は比較的小型のものを主体とし礫種は結晶片岩とチャートを主体とする。



第7図　基本層序

4　白倉下原・天引向原遺跡の概観

(1)　旧石器時代

旧石器時代の具体的な内容は、本報告書と同時に刊行される『白倉下原・天引向原遺跡Ⅰ』(関口1994)に拠られたい。ここでは、前述した刊行予定報告書の草稿をもとに、簡単にその内容を紹介したい。

旧石器時代の調査は、縄文時代以降の調査が終了した段階で、ローム層が確認されている部分に対して行われた。基本的には調査区ごとに2×4mの試掘坑を設定し、文化層が確認された場合には本調査を行った。結果的には、表土下約2mの部分に堆積するAT層直下から文化層が確認され、白倉A区・白倉B区・白倉C区で各1カ所・天引地区で2カ所の合計5カ所で本調査を行った。

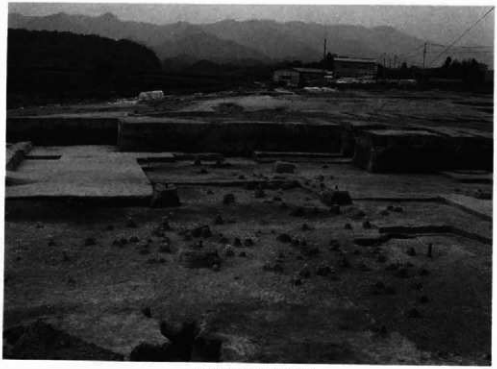
白倉A区では、舌状台地から6カ所のブロックが環状ブロック群を構成して検出されている。403点の石器類が出土し、ナイフ形石器・台形様石器・局部磨製石斧などが出土している。

白倉B区では、平坦な台地上から4カ所のブロックが環状ブロック群を構成して検出されている。120点の石器類が出土し、出土石器は白倉Aとほぼ同じ器種が出土している。

白倉C区では、谷頭部から40m程奥に入った台地上から、台形様石器などが3点出土している。

天引地区では、舌状台地の先端部（天引A区）と台地の奥部分（天引C区）を調査した。舌状台地の先端部では、13カ所のブロックが環状ブロック群を構成して検出されている。268点の石器類が出土し、ナイフ形石器・台形様石器・楔形石器などが出土している。台地の奥部分では、小規模なブロック1カ所から、台形様石器など10点が出土している。

整理作業によって、石器群の母岩と多数の接合資料が確認され、石器製作技術を考察するための基礎的なデーターと集落研究を行う上での基礎的なデーターを呈示することができた。



白倉A区旧石器遺物出土状態

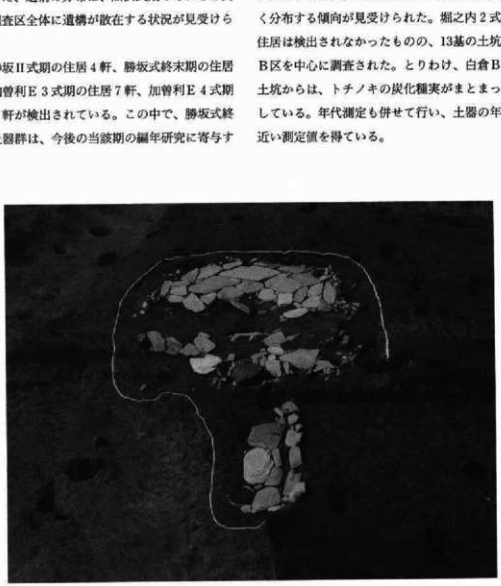
(2)　縄文時代

前期中葉黒浜式期から後期前半堀之内２式期までの遺構と遺物が主体を占めている。検出された遺構の内訳は、住居址43軒、竪穴状遺構１基、埋甕12基、土坑290基である。以下に、時期ごとの様相について概述していきたい。

前期　黒浜式期の住居３軒と諸磯式期の住居５軒が検出されている。黒浜式期では、有尾式系土器も多く出土しており、白倉Ｃ区を中心に70基近くの土坑が検出されている。諸磯式期は、ほとんどが諸磯ｂ（新）式期に帰属し、前後の時期の遺物は極めて少ない。また、遺構の分布は、黒浜式期のそれとは異なり、調査区全体に遺構が散在する状況が見受けられる。

中期　勝坂Ⅱ式期の住居４軒、勝坂式終末期の住居14軒、加曽利Ｅ３式期の住居７軒、加曽利Ｅ４式期の住居２軒が検出されている。この中で、勝坂式終末期の土器群は、今後の当該期の編年研究に寄与するであろう良好な資料である。勝坂式期の遺構は、白倉Ａ区と天引Ｃ区に別れて検出されているが、加曽利Ｅ式期の遺構は、白倉Ｂ区を中心に検出される傾向をもつ。加曽利Ｅ４式期の住居中、１軒は柄鏡形状を呈するものと思われる。

後期　称名寺式期の住居４軒と堀之内１式期の住居４軒が検出されている。遺構の残存状態が悪いものもあるが、敷石住居及びその系譜をひくものが多いのが特色であろう。傾向として、称名寺式期の敷石住居は、全面に配石が施されるのに対して、堀之内式期に入ると、柄部を中心とした部分的な配石に変わるようである。この時期は、白倉Ｂ区に遺構が多く分布する傾向が見受けられた。堀之内２式期は、住居は検出されなかったものの、13基の土坑が白倉Ｂ区を中心に調査された。とりわけ、白倉Ｂ区６号土坑からは、トチノキの炭化種実がまとまって出土している。年代測定も併せて行い、土器の年代観に近い測定値を得ている。



白倉Ｂ区26号住居（敷石住居）跡

(3)　古墳時代後期

関東地方でいわゆる「鬼高式」と呼称している土師器を出土する竪穴式住居跡が、全部で162軒確認されており、当遺跡の中で中心的な位置を占める遺構である。

古墳後期としているが、具体的には6世紀から7世紀にかけての時期である。また5世紀後半の時期極めて少ない点が特徴的である。これ以前の段階の住居が5世紀前半を前後した時期にあたる中期前半に属していることから、集落変遷過程の中で5世紀後半に空白が存在していることになる。

次に住居の分布傾向を見てみると、その大半にあたる153軒の住居が白倉下原地区の2ケ所に集中しているのが明確に読み取れる。その1ケ所は、B区とC区の境に介在している浅い谷地形に面するC区の東寄り部分である。もう1ケ所は、B区からA区にかけての地点であり、やはりその東側に白倉地区と天引地区を境する谷地形が隣接している。このように白倉地区ではほぼ全域にわたって当該期の住居が確認されたのに対して、天引地区では、広大な範囲にわずかに9軒という希薄な分布状態であった。ほとんど居住空間として機能していなかったことがわかる。

これらの住居の中で、白倉B区とC区の境目付近に分布する住居に焼失住居の割合が異常なほどに高い点が注意された。

ところで、住居の希薄であった天引地区の調査区南寄りの東斜面から、直径が4m前後で深さが2m前後の大型の円形土壙が66基密集して確認され注目された。これらはいずれもローム層下の灰白色粘土層に達するものであり、この粘土の採掘を目的として掘られたものであったことが推定された。出土した土器類から白倉地区の住居群と併行する時期のものであったことがわかる。両者の間に直接的な関係があったことが推測される。

白倉B区古墳時代後期住居跡

(4)　奈良・平安時代

この時期の属するものとしては、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸路、道路状遺構、水田・畠の存在が推定される部分、及び小規模寺院跡がある。

これらのうち中心的な位置を占めているのは竪穴住居跡であり、全部で147軒が数え上げられている。ただし、当該時期の諸遺構は、古墳時代後期のそれとともに、平成6年度以降に整理・報告書刊行の予定となっているので、詳しくは、『白倉下原・天引向原遺跡Ⅳ・Ⅴ』の完成を待ちたい。

住居全体のうち7割以上が平安期に属し、残りが奈良期である。これらを今後、小規模区分に振り分けた場合、各時期ごとの極端な増減はないものと思われる。ただし、古墳後期までの比較的濃密な集落構成にくらべると集落が小規模化していっている可能性が高い。一方、住居跡の分布傾向を見ると、古墳時代後期の分布域に重複している部分に加えて、これまで分布の希薄であった白倉B区の西半分や天引地区、まったく認められなかった白倉C区の西側斜面部等に集落域を拡大している点が注意される。

掘立柱建物は9棟分が白倉B・C区で確認されているが、2～3棟をを単位にして適当な距離をおいてブロックで認められる。

白倉B区の調査区を東西方向に3等分するように2ケ所で南北走向の平安期の溝状遺構が確認された。このうち、東側のものは構造から道路跡として間違いない。

最後に天引地区の北東端で発見された小規模寺院跡について触れておきたい。これは、南北約10m、東西約40mの区域を削って平坦面をつくり、そこに長辺約10m、短辺約5mの雨落溝をめぐらせている建物跡の存在が推定された。後世の削平が著しく、柱穴、礎石等はすべて失っていた。この周囲からは、上野国分寺系の瓦が出土している。この建物跡の南側に隣接する平安期の竪穴住居跡からは、同種の瓦とともに「福天寺」と墨書された須恵器が出土し、寺院跡との関係を推定させた。

天引地区平安時代寺院跡の削平面と溝

(5)　中近世以降

中世に関連する遺構としては、道状遺構がある。道状遺構は３条検出されているが、いずれも両脇に溝が付随していた。道状遺構のうち、２条は白倉Ｂ区内で検出されている。この場合、道幅は約５～６ｍで調査区を南北に分断するように全長約70ｍ部分が検出されている。また残る１条は白倉Ａ区の南東から白倉Ｂ区の北東部にかけて検出されており、調査区を東西に横切るようにして検出されている。道幅は約５～６ｍで、前述した道状遺構に近似しており、全長約110ｍ部分が検出されている。道状遺構は互いに交わってはいないが、発掘調査区外に延長した場合ほぼ直行することになる。今後の整理作業の中で出土遺物の年代と地籍図などとを対照することによって、これらの有機的な関連や存続期間などの興味深い問題が検討されるであろう。他に、中世に関連する遺構としては、白倉Ｃ区から火葬に用いられたと思われる土坑から少量の骨片が出土し、白倉Ｂ区からは常滑製の陶器を伴った方形の土坑が検出されている。生産址としては、白倉Ａ区と天引Ｃ区の間の谷津及び天引Ｃ区の中央に入る谷津から浅間Ｂ軽石によって部分的に覆われた畠が検出されている。

近世に関する遺構は農業生産に拘わるものが多かった。天引地区では台地の斜面部において３ケ所から浅間Ａ軽石の灰掻き山が検出された。さらに、その下からそれぞれ畠が検出されている。他の部分では、明瞭な近世の畠の痕跡は検出されていないが、灰掻き山の存在から少なくとも天引地区の台地上においては、浅間Ａ軽石降下時にはかなりの範囲で畠作が行われていたものと思われる。また、天引地区北側の谷津では、浅間Ａ軽石で覆われた水田を調査した。また、白倉Ａ区と天引地区で各１基、農業生産に関連すると思われる桶埋設土坑（木質は残存していなかった）が検出されている。他に、近世に関する遺構としては、墓壙が複数検出されている。その中の１基は、頭部に擂鉢を被せた状態で検出された。

近代以降は、台地上については大部分が畠地として利用されたようである。今回の調査においても、時期を特定できなかった表土と同じ土壌の耕作溝を多数検出している。また、イモ穴と称される「イモ穴状土坑」もおそらくは近代以降の土地利用痕跡であろう。また、白倉Ｂ区を中心にして、きわめて新しい一辺２ｍ程度の方形土坑が多数検出されたが、これは「昭和20年代にリンゴの苗木を植えるために掘った穴である。」と、かつての土地所有者から話を聞くことができた。

天引地区浅間Ａ軽石の灰掻き山と直下の畠跡

Ⅲ　遺　　跡

1　はじめに

本書で主として報告する調査遺構は、弥生時代から古墳時代にかけてのものである。さらに、古墳時代のものについては、その前半期のものに限っている。当時代の後半期以降のものも調査地内で数多く発見されているが、その報告は次年度以降(『白倉下原・天引向原遺跡Ⅳ』、『同Ⅴ』) を期している。

(1)　時代区分について

本書の構成からもわかるように、調査で発見された当該時期の遺構は、大きく「弥生時代」、「古墳時代」に区分して、次節以降で報告している。

まず弥生時代の遺構として最初に登場するのは中期前半に属する土壙群であり、その前後に継続性をもたないので当面区分上の問題はない。

次に登場するのは、弥生時代後期から古墳時代前・中期にかけての集落跡である。その展開過程を細かく見てみると、弥生時代後期から古墳時代前・中期にかけて、時期的にほぼ連続するかたちで形成されているのがわかる。そこで問題になったのは、弥生時代と古墳時代の時代の分節点が実際の遺構のどこに置けるのかという点であった。

この問題は、当地域における当該時期の土器の編年的研究、さらには現在活発に進行している当該時期の西日本を中心とした他地域の土器の編年的研究との整合性の問題等、多くの検討課題を残しており、必ずしも共通の理解に到達していないことは周知のところである。

本報告書の場合、明解で適確な時代区分の基準にもとづいて各遺構を分類しているとは必ずしも言い切れない点をあらかじめ断っておきたい。

とりあえずどのような基準にもとづいて遺構を区分整理し記述を進めたのかと言えば、当地域の弥生時代後期後半の型式である櫛描文系の「樽式土器」に属するもの、及びその系譜に属すると思われる土器を出土する諸遺構を弥生時代のものとして扱っている。これに呼応するように竪穴住居跡の構造（平面形状、炉の構造及び位置、貯蔵穴・ベッド状遺構・入口構造等の諸施設）や石器の存在形態等も、これ以降の時期に属するものとの間に明確な区分点を見いだすことができることから、大きな画期点として認めることができる。おそらくこの段階の中途で、近畿地方を中心とした他地域では最初の前方後円墳の築造が開始される古墳時代へと推移している可能性もあると思われる。正しい時代区分の観点から言えば、当地域についても、近畿地方の区分にスライドさせてこの中途の時点から古墳時代と呼称すべきであろう。しかし、現段階では、その時点を明確化できないので、便宜的に前述の時代区分に基づいて「弥生時代」として記述を進めることにしたい。

そこで、本報告書における弥生時代から古墳時代にかけての時代区分で、「弥生時代」としたものは、強いて言うならば「弥生文化の継続していた時期」として理解してもらいたい。

一方、「古墳時代」として取り扱っているものは、出土土器のうちに「樽式土器」からの系譜がほとんど認められなくなり、替わって東海地方の系譜に連なるいわゆるＳ字口縁台付甕等に代表される古式土師器の出現期以降が主として該当している。

(2)　時期区分について

弥生時代　本書の中で弥生時代として扱った諸遺構のうち、集落跡に関わる後期の時期について検討してみたい。

本遺跡における弥生後期の住居群は、出土する土器の特徴から大きくは３段階に区分することが可能である。各段階の特徴を示せば以下の通りである。

後期第１段階は、白倉Ｃ区に所在する30号住居以外の弥生期の住居群が該当する。いわゆる樽式土器の初期段階の特徴を有しており、若狭徹の分類によ

る樽1式、佐藤明人の分類による後期第1期にほぼ並行するものである。後述するように白倉C区のこの段階に該当するすべての住居から磨製石鏃の製作に関わる遺物が出土しており、また住居間に重複関係がまったく認められないことから、住居相互の時期的接近を窺わせる。なお、この段階の住居跡は白倉C区以外ではまったく認められていない。

後期第2段階は白倉B区の東寄りと天引地区で確認されている。若狭の樽2式、佐藤の後期第2期にほぼ並行するものである。このうち、天引地区の住居には後期第1段階に直接継続する古い様相を示すものが認められる。ただし、磨製石鏃の製作に関わる遺物類はいっさい認められていない。

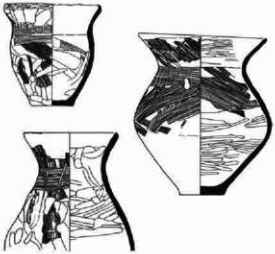
後期第3段階は天引地区でのみ確認されている。若狭の分類の樽3式、佐藤の後期第3期にほぼ並行する。天引地区では、認められた第2段階の集落形成に直接継続している。

ところで、この段階の土器の様相には前段階までには認められない新しい流れがある。すなわち、樽式土器の主たる特徴である櫛描文系の土器群の中に、縄文施文に主たる特色のある縄文施文系の土器群（いわゆる赤城南麓の「赤井戸式土器」あるいは北武蔵の「吉ケ谷式土器」）が共伴してくる点である。

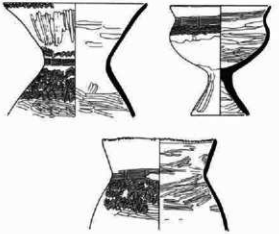
鏑川流域以外で従来確認されている樽式土器と縄文施文系の土器との共伴関係は、古墳時代に樽式土器の系譜を残したいわゆる「樽4式」あるいは「樽式系土器」との間に見られるのが一般的であった。これらにはまた、古式土師器との共伴関係も確認されている。ところが、本白倉下原・天引向原遺跡で縄文施文系の土器が共伴している樽式土器を見る限り、大勢は「樽3式」の型式的特徴を明確に残しており、「樽4式」まで下る可能性のあるものは少ない。また、これに古式土師器の共伴する例はまったく認められていない。

なお、この第3段階に属するものの中で、縄文施文系の土器群を共伴せず、主として樽式系の土器（「樽3式」）のみから構成される住居例は、天引43・110・132号住居とわずかである。これを、縄文施文

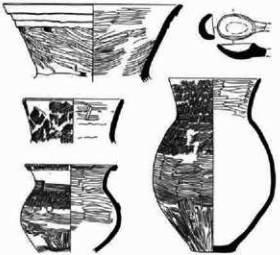
後期第1段階



後期第2段階



後期第3段階



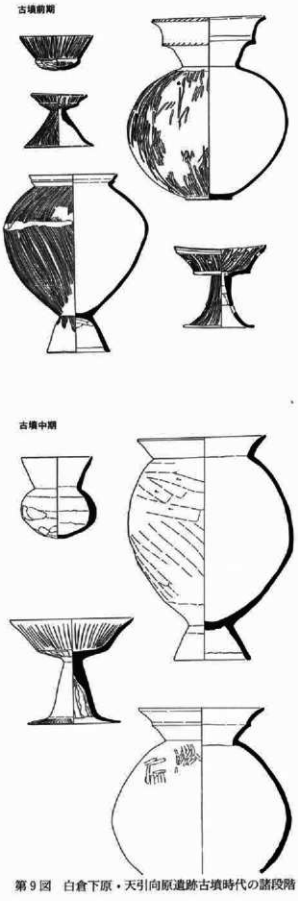
第8図　白倉下原・天引向原遺跡弥生後期の諸段階

系の土器と共伴するようになる以前の段階と位置付けることができるかどうかも検討しなければならないであろう。と同時に「樽3式」の早い時点から確実に、しかも密度の濃い共伴関係にあったことは、少なくとも言い得るであろう。

なお、白倉C区で確認された2基の方形周溝墓は、第3段階に属するとしたが、1号周溝墓の壺形土器は、樽3式の時期とするよりは、当遺跡において弥生時代と古墳時代をつなぐ橋渡しをはたす時期的位置づけのほうがより当を得ていると思われる。

古墳時代　これに関わる集落は、前期及び中期前半の住居跡がある。この後、古墳時代後期以降の住居跡も存在するが、後期後半に属する6世紀前半以降のものであり、中期前半までで一旦途絶える点が注意される。本書で取り扱うのは、前者のみである。前期に属する遺構は、おもに天引地区で確認された住居群と方形周溝墓1基である。また、白倉B区で発見された長方形土壙群（156・256・258・265・266・292・294号）もこの時期に属することが推測される。出土する土器はいわゆるS字口縁台付甕に代表される一群の土器で、その新相（いわゆる「石田川式土器」にあたる）に属するものである。明瞭な樽式土器の系譜に属するものをいっさい含まない。そのため、前期の集落形成のピークと弥生後期第3段階との間には、若干の空白期間を想定する必要があるかもしれない。しいて見るならば、白倉C区の弥生後期第3段階の1号周溝墓や天引6号住居は、この空白時期におさまるものと考えられるが、これのみでは前代からの連続的な集落形成ととらえるのは困難に思われる。

中期に属する遺構はやはり天引地区で確認された住居群が中心的なものである。出土する土器は、単口縁の台付甕が特徴的で、これに客体的に刷毛目を残さないS字口縁台付甕が認められる。時期的には前期のものに直接継続する中期前半に属するものである。これらのうち、3軒の住居（天引10・142・143号）から、石製模造品の初現的なものが認められ、時期推定の手掛かりを与えている。



第9図　白倉下原・天引向原遺跡古墳時代の諸段階

2　弥生時代の遺跡

(1) 竪穴住居跡

弥生時代に属する竪穴住居跡は全部で59軒確認された。各地区ごとのうちわけは、白倉A区の2軒、同B区の4軒、同C区の16軒に対して、天引地区は37軒と圧倒的に多い。これらは、すべて弥生時代後期（「時代区分」のところで述べた但し書きが付く）に属しており、櫛式土器およびその系譜に連なる土器を伴っている。前述した本遺跡の時期区分をもとにして、住居の分布傾向を見ると、広い地域の中にまんべんなく集落が継続的に形成されていくのではなく、各時期ごとに占地箇所を変えている点が特徴的である。すなわち、第1段階は白倉C区、第2段階は白倉B区および天引地区、第3段階は天引地区に分布の顕著な集中傾向が認められる。

このうち、白倉C区で確認された第1段階の住居15軒では、いずれからも磨製石鏃の製作に関わる遺物類が出土している。これらすべての住居がまったくの同時期に存在したとは言い難いが、極めて接近した時期の所産であることは間違いない。おそらく磨製石鏃の製作を専門的に行っていた集落であったと思われる。

白倉B区の東寄りにある第2段階の4軒の住居（5・7・9・13号住居）も、適当な間隔をおいて一箇所に集中しており、集落の1単位を反映している可能性が強い。

一方、天引地区での第2段階以降の展開過程を見てみると、集落の中心は常にその南寄りの地域で進んでいることがわかる。古墳時代前期以降の集落域が北寄りにあるのと対照的であり、興味深い点である。

次に、個々の住居跡を対象にして、各段階ごとの構造的特徴について検討しておきたい。

平面形態・規模　第1段階に属する白倉C区の一群は、基本的に長軸長が短軸長にわずかにまさる方形に近い長方形プランを呈する。また住居隅部は丸みを帯びて、直角をなさないのが一般的である。平面規模は35号住居の長軸長8.1mを最大として、14号住居の同6.5mを第2とし、その他は5.0mから3.8mの間に適当に分散している。

第2段階では、隅丸の傾向は明瞭に残しつつも、長方形化が明確に進む。平面規模は白倉B区5号住居の長軸長10.24mが突出し、天引100号住居の8.33m、白倉B区13号住居の8.10mがこれに続く。さらに最小の4.29mまで段階を追っている。

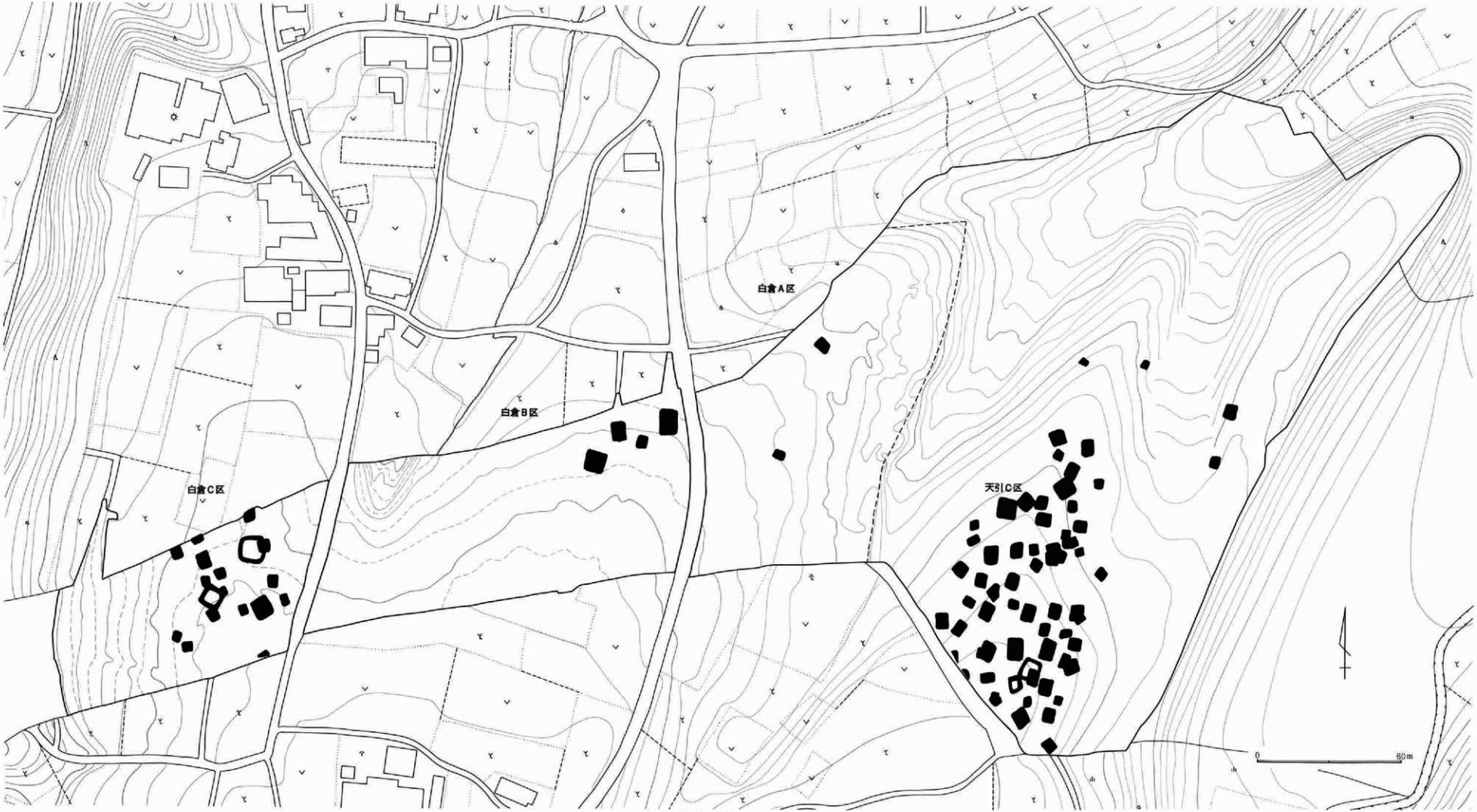
第3段階では隅部に丸みのあるものがわずかとなり、大勢は直角をなすようになるのが最大の変化である。また長大化の傾向もさらに進む。天引65号住居の長軸長9.12mが最も大きく、天引55号住居の8.17mがこれに続く。残りのうち大半の住居は6m前後から7m前後の規模のあいだにおさまり、それより以下のものはわずかである。

方向　住居の長軸の方向（炉は必ずこの軸線上に位置する）を主軸方向とするならば、大半の住居はこれを南北方向に取っている。これを子細に見るならば、白倉C区の住居群の主軸は全体に北から西に20°前後振れるのに対し、白倉B区のそれは真北方向を中心に若干東西に振れ、天引地区のそれは真北から東へ30°ほどまでの間に集中している。このことは、住居の主軸方向の相違が時期区分と相関するというよりは、占地する地域（地形的条件）と相関していることが推測される。

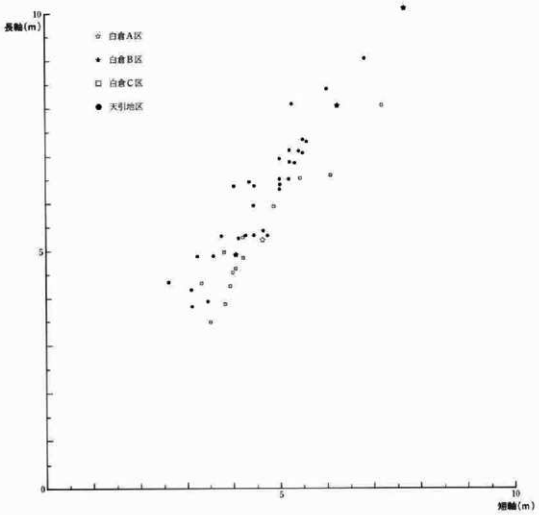
なお、白倉C区で1軒、天引地区で2軒、東西方向に主軸を取るものが存在している。いずれも大型の中核的な住居あるいはその次にランクされるような規模のものではない点が、少数派の方向になったことに関係しているように思われる。

埋没土　住居廃絶後の竪穴内への土の埋没状況は、基本的には長期間にわたる周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

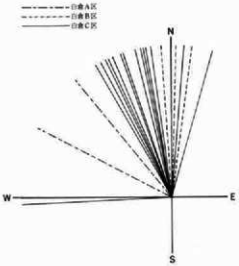
その中で、天引地区のものに、廃絶後に放置していた屋根がくずれて、その上にのせられていたローム質の黄褐色土（土屋根）が崩落したことを推測させる状態が、7例認められており注目された。これらは、土層状態に、そのことが顕著に表れていたた



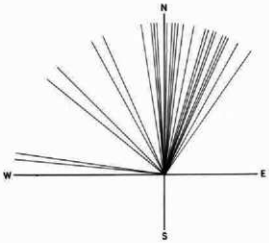
第10図　遺跡全体図



第11図　弥生住居平面規模グラフ



第12図　白倉地区弥生住居主軸方位



第13図　天引地区弥生住居主軸方位

めに理解できたものであるが、さらに厳密で丹念な土層観察がこれ以外の住居についても実施されていれば、痕跡を残していたものはより多く確認できたかもしれない。

なお、明らかに火災に遭ったことが認められたものは、天引12・42・58・65号住居であった。

床面　基本的には竪穴を掘削後に底面となる自然堆積層の地山面（黄褐色ローム層）をそのまま使用しており、特に土を入れ替えて床面を造作しているものは少ない。土を入れ替えているのは、ほぼ全体に及ぶ白倉B区5・13号、C区30号と部分的な天引42・43・110・136号であった。入れ替えるのが時期的な傾向ともいえないので、各住居の特殊事情でこのような造作がなされたものと推測される。

柱穴　基本的には主柱穴4本から構成されている。

この原則からはずれるものは、8軒であり、柱穴を伴わないもの5軒（白倉C区30・34、天引2・22・58号）、柱穴が2個のもの1軒（天引146号）、側柱穴のみのもの2軒（天引108・153号）である。柱穴を伴わないものは、1例が長軸長4.73mで、他は4m以下と最も小型の部類に属するものである。また、それ以外の変則的なものも比較的小型の部類に属している点が共通している。

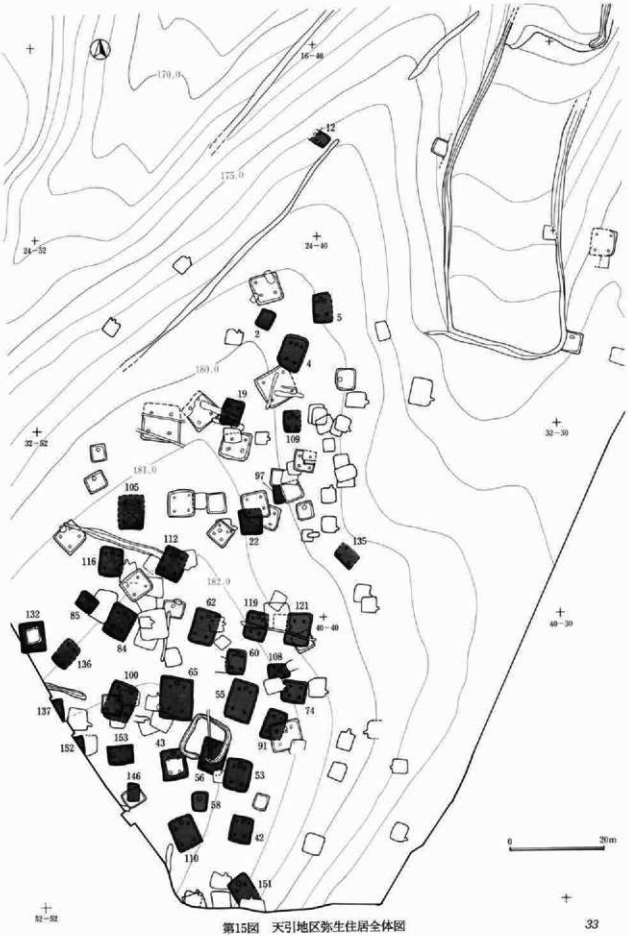
これらのうち、白倉C区30号と天引108号住居には、炉・貯蔵穴等の他の住居には必ず伴っている生活施設が認められない。住居以外の用途の建物であった可能性もあろう。

他遺跡における当該時期の住居で大型の長方形プランを有するものには、6本柱穴の事例がよく見られるが、本遺跡の場合、6本柱穴であっても不思議でない規模の白倉B区5号、天引55・65号住居のような大型住居でも4本柱穴であるのは注意される点である。明らかに本遺跡地周辺には6本柱穴の伝統・技術が存在しなかったことを示していると言えよう。

また、大型のものを中心に主柱穴以外の補助柱穴が壁際を中心に認められている。

柱穴でもう一つ注意される点は、柱痕の形状から

第14図　主要弥生住居平面図



第15図　天引地区弥生住居全体図

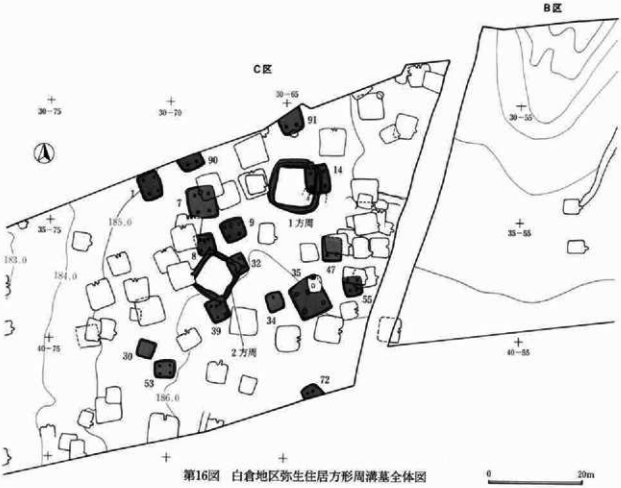
柱材として板材を使用していることが推定されるものがかなりの数にのぼっている点である。柱穴が確認された47軒のうち25軒で板柱の存在が推定できた。それらは、第１段階から第３段階まで平均的に認められるので、後期を通じて一般的なものであったことがわかる。その場合、４本全部を板柱としているものが９例で、丸柱と併用しているもの11例である。必ずしも構造的な要請から、丸柱ではなく板柱の使用が特に決定されたのではなさそうである。

入口施設　主軸を南北方向に取る通例の住居では、その主軸線上で、南壁から１m前後内側に寄った位置に、出入口の柳子状の施設に伴うものと思われるピットが必ずといってもよいほどに確認されている。この位置は、炉の置かれる主軸線上の北寄りの位置とちょうど相対する位置にも当たっている。

このピットは残りのよいものについてみると、外側に向けて斜めに穿たれている場合が多い。

ところで、この種のピットには二つのタイプが認められる。一つは、主軸線を挟んで１m前後の間隔をおいて東西に並ぶ２個一対のものである（Aタイプ）。もう一つは、主軸線上に１個のみが掘られるタイプ（Bタイプ）である。第1段階の住居は、すべてAタイプであり、第２段階は、Aタイプが５、Bタイプが５である。さらに第３段階ではAタイプが４、Bタイプが11となっている。AタイプからBタイプへの推移の過程を明確に読み取ることができよう。

炉　住居の大半には炉が付設されていた。床面をそのまま利用した地床炉であり、熱を受けて直径0.5ないし１mの円ないし長円形の範囲が橙色に焼けている。この炉床面は、第１段階のものでは明瞭な椀底形のくぼみがあるが、新しくなるにつれて周囲の床面と同じ平坦なものであった。第２段階から第３段階に属する住居が集中する天引地区の住居で、掲載されている炉の断面図だけをみると、明瞭な窪み



第16図　白倉地区弥生住居方形周溝墓全体図

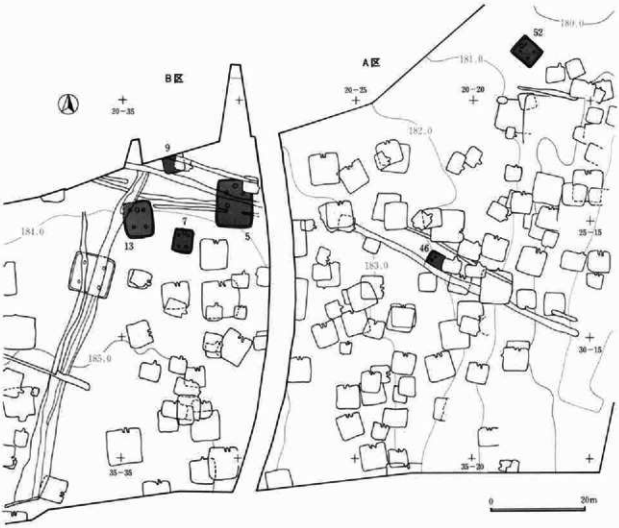
が存在していたようにとれるが、これは被熱により床面下に及んだ土の変色の範囲を示しているのであり、炉床面が窪んでいたことを示すものではない。

炉床面の端には長さ30ないし40cm前後の長さで、直径10cm前後の棒状の炉石が1石、必ず据えられている。その据えられる位置は、住居の中心側であり、住居の軸線とは直交する向きである。

通常、炉が設置されるのは1カ所のみであり、住居の主軸線上で北側に寄った位置である。炉の位置取りをさらに子細に見ていくと、大きくは3つのタイプに分けられる。第1は、住居の北側で東西に並ぶ2本の主柱穴を結んだ線より内側（南側）に位置するものである（aタイプ）。第2は、同じく主柱穴を結んだ線上に位置するもの（bタイプ）、そして第3は、同じく主柱穴を結んだ線の外側（北側）に位置するものである（cタイプ）。aタイプは6例確認されており、すべて第1段階に属する住居である。bタイプは5例で、1例が第1段階、3例が第2段階、1例が第3段階に属する住居である。これに対して、cタイプは20例で、そのうち第2段階に属する住居から3例、第3段階に属する住居から17例が挙げられている。

従来から樽式土器の住居について言われてきた、炉の位置の移動の時期的推移に、本遺跡の場合もほぼ呼応することがあとづけられた。

第2・第3段階に属する住居で比較的大型のものでは、北側に設置された主要炉に加えて、もう1カ所（天引65号住居のみはもう2カ所）設置されているものがある。12軒の住居で認められた。その位置は、南北方向に並ぶ2つの主柱穴の間で、南寄りの



柱穴に偏している。その場合、東側の柱穴間にあるものが5例、西側の柱穴間にあるものが6例とほぼ拮抗している。3ヵ所に設置されていたものは、東側の柱穴間と南西の柱穴の西側に近接した位置の2ヵ所であった。住居内の複数の炉を相互に比較してみると、通常認められる第一の炉の方が、第2・3の炉より構造的にしっかりしている。前者を主要炉、後者を副次的な炉と考えて間違いないであろう。その場合、副次的な炉の方の用途は、主として住居の暖房用と考えられる。その存在が大型の住居に限定される点、冬期のみの使用であるあるための炉床面の焼け具合の弱さがそのことを物語っている。

貯蔵穴　主軸を南北方向に取る通常の住居の場合、炉と反対の南壁際で入口施設の脇に円形の土壙が必ず認められる。覆土として黒色土あるいは黒褐色土が埋まっている場合が大半であり、生活時には穴があいていたことがわかる。そこで貯蔵用の施設としたわけである。後述するように第3段階に属する住居ではほぼ同じ位置から構造的によりしっかりしており、木蓋の存在を窺わせるような構造のものが認められるので、貯蔵用のものとする想定の妥当性を一段と補強してくれる。

この施設の位置取りには、大きく2つのタイプが認められる。一つは、入口施設の東脇（主軸が東西方向の場合は、北脇）に設置されるもので、30軒が数えられる（Ⅰタイプ）。もう一つは、入口施設の西脇に設置されるもので11軒が数えられた（Ⅱタイプ）。これを時期との相関で見てみると、Ⅰタイプは第1段階から第3段階までわたるのに対し、Ⅱタイプは1例が第1段階に属するほかは、すべて第3段階である。なお第3段階に属するものでⅠタイプに属する例は、4軒でありⅡタイプのほうが大きく勝っている。ⅠタイプからⅡタイプへの時期的推移が想定される。

もう一点、貯蔵穴の構造的特徴で注目されるのは、土壙の周囲に堤状の高まりがめぐらされるものの存在である。幅は10cm以上を有するが、高さは5cm前後と、わずかなものである。おそらくその内側に接して木製の蓋をかぶせるための構造と思われる。このような構造の認められたものは、11例であり、そのうち9例は第3段階に属する住居である。残りの2例は第2段階に属する。このあとに続く古墳前期の住居の貯蔵穴にもこの構造が認められることから、後期第3段階に一般化したものと想定できよう。

ベッド状遺構　住居の隅部に床面より5ないし10cm高い正方形ないし長方形の面の広がりがあるものが認められる。いわゆる「ベッド状遺構」と呼称されているものである。その面は、床面部分のつき固められたような状態とくらべると、あまりしまりはないので、床面と同じような使われ方をしていないことは明らかである。ものを置くための特別の空間、あるいはまさしくベッド的な使われ方をしたのであろうか。本遺跡での調査例に関する限り、この上に置かれていたような状態で出土した土器は認められなかった。ただし、本来的な位置を保っていた土器そのものが少ないので、その用途を考える積極的な材料にはならないであろう。

その位置取りを見てみると、南東隅のものが4例、南西隅のもの（主軸が東西の場合に限り、南東隅のものを含む）が2例、南東・南西の2ヵ所にあるもの1例、南西・北西の2ヵ所にあるものが1例である。基本的には、南壁の隅部で、貯蔵穴のある側と反対の側に設置されていることがわかる。

この施設の認められた住居は全部で7軒である。それらの住居はすべて第3段階に属するものである。この時期に限られた特徴として理解することができよう。

灰白色粘土　そのほか注目されたものとして、第3段階に属する天引43・53・55・110号の4軒の住居から南壁の西側に設置された貯蔵穴の堤の西部分という、まったく同一の場所から灰白色粘土の固まりが置かれたような状態で確認され注目された。粘土を置くことによってなんらかの機能が果たされたとは考えられないので、使用予定の粘土を仮置きし、必要な量が適宜持っていかれたのではないかと推測した。類例の増加をまちたい。

白倉A区46号住居跡

図1・132　PL5・77　観察表1頁

位置　27−21　A区の中心、西から東へ傾斜する斜面上にある。周囲には同時期の住居がまったく認められない。

形状　後世の削平が著しく、遺存状況が悪いため不明な点が多い。残存部分と炉の位置から、方形に近いプランで、主軸は東西方向から若干北に振れるものであったと推測される。

方位　W27°N

周壁・周溝　周壁は北及び西壁の半分ほどがかろうじて残っていたのみである。

周溝は確認されなかった。

埋没土　壁際の下部にわずかに黄褐色土が認められるのを除くと、すべて腐蝕質の黒褐色土であり、自然堆積を示している。

床面　現地表面から住居床面まで浅いため、床面も旧状を保っている部分が少ない。基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま床面としている。

柱穴　明瞭な主柱穴は、北西側の1ケ所のみである。掘り方は、直径24cmの円形で、深さ32cmを測る。他は相当する部分が後出する別の遺構と重複していたため、確認できなかった。

炉跡　1ケ所で確認された。その位置は、住居西壁寄りであり、西側の主柱穴を結んだラインから約30cm外側に出ている。地床炉であり、東側の縁には長さ20cmの棒状の結晶片岩が、長軸を南北にして据えられている。炉床面は東西に長い45×30cmの長円形で、わずかに窪んでいる。

遺物出土状態　覆土中から土器の小破片がわずかに採集されたのみである。

その他の遺構との重複関係　住居北東側を奈良期の11号住居により、南側を近世の道路状遺構に伴う1号溝により切られていた。

時期　弥生後期第3段階

白倉A区52号住居跡

図2・132・196　PL5・77・105　観察表1・36頁

位置　18−18　A区の北寄りに単独で存在している。西から東へと緩やかに下がる斜面上にあたる。

形状　長軸を北西から東南に取り、長軸長5.26m、短軸長4.62mの規模を有している。方形に近い長方形プランである。後世の削平が深く及んでおり、遺存状況はよくない。

面積　22.36m²　　**方位**　N40°W

周壁・周溝　周壁は東隅周辺を除く部分で残っていたが、壁高の最も高い部分（西側）でも20cmほどである。

周溝は、南西壁で部分的に認められる。

埋没土　黒褐色土、灰褐色土を主体とする自然堆積土である。ただし、近年の畑地耕作による攪乱土がいたる所に及んでいる。

床面　黄褐色ロームの地山面である。後世の耕作も多少原因していると思われるが、面は平らでなく、また踏み固めも顕著でない。

柱穴　主柱穴は4本であり、住居の対角線上に位置している。柱穴相互の距離は、柱穴1〜2で2.10m、柱穴1〜3で1.52mである。掘り方の形状は、直径20〜30cmの円形で、深さは柱穴2の42cmが最大で、その他は18〜26cmである。

入口施設　南東壁の中心から60cm内側には、入口施設に伴うものと思われる径18cm、深さ17cmの円形ピットがある。ピットは住居の外側に向けて斜めに穿たれている。同種のものは2個1組の事例が大半であるので、丹念にもう1つを探索したが、確認されなかった。

炉跡　北西壁寄りから確認されている。長軸方向の中心線上で、北西側の主柱穴を結んだ線より壁側に50cm出た位置にある。炉床は、主軸方向に長い長円形を呈しており、73×54cmの規模で、若干窪んでいる。その南東側の縁には長さ28.5cmの棒状の結晶片岩が据えられている。

貯蔵穴　住居南東壁の中心より80cm北東へ寄った壁際に位置している。44×37cmの不整円形で、深さ

55cmを測る。

ベッド状遺構　住居の南隅の床面は、そこ以外の床面より約10cm高い段状に造られている。1.9×1.7mの方形に近いプランであり、面は平坦である。ちょうど柱穴4と南隅で交わる両壁によって区画されている。

遺物の出土状態　住居の遺存状態は悪かったが、住居に直接伴うと思われる土器が、東隅寄りからまとまって出土している。いずれも床面直上からの出土であり、高坏、甕が主なものである。ところで、土器が床面からまとまって出土したこの地点は、住居の中では、遺構の残りが最もよくなかった部分である。遺物がほとんど認められないその他の部分はむしろ遺構の遺存状態はよかったのであるから、この出土傾向は、住居内における最終時の遺物のあり方をある程度反映しているものと思われる。

その他の遺構との重複関係　住居北隅寄りは、後出する近世の土壙墓で切られていた。

時期　弥生後期第3段階

白倉B区5号住居跡

図3・4・5・133・196・197　PL7・77・105　観察表1・36頁

位置　24−30　B区の北東端、7号住居に隣接する。

形状　長軸を南北方向とし、長軸長10.20m短軸長7.74mの隅丸長方形である。北及び南壁は、弧状に外側へかすかに張り出している。

面積　70.89㎡（復元推定）　　**方位**　N2°E

周壁・周溝　周壁は南寄りが残りがよく、壁高30cmを測るのに対して、北寄りは削平が深く及び、高さ8cmを残すのみである。明瞭な周溝は認められない。

埋没土　四方からの自然埋没で、黒褐色土を主体としている。上面からは、凹地への投棄と思われる古墳時代後期の土器がまとまって出土している。

床面及び床下構造　黄褐色土ローム面で、全体によく踏み固められている。住居の南壁から西壁に沿っての床面下には、幅約40cmの溝がめぐっており、土を入れ替えて床を造っている状態が確認された。

柱穴　主柱穴は4本で、深さは36〜40cmである。柱痕の形状が明瞭な柱穴2・4では、平面形状が20×10cmの東西方向に横長の隅丸長方形である。柱材が板状を呈していたことを推測される。柱痕の形状が明瞭でない柱穴1・3の場合も、掘り方の形状が横長気味であるから、同様の柱材であった可能性がある。柱穴間の距離は、長軸方向の柱穴1〜2で3.01m、短軸方向の柱穴1〜3で2.54mである。

一方、主柱穴以外にも数多くのピットが住居内全体で確認されている。住居が大型であることから、これらのうちには補助柱穴として使用されたものもあると思われるが、規則的な配置を示すものは認められない。ただし、長辺の周壁に沿って認められる径15cm前後、深さ10〜20cmのピットは比較的規則的な位置関係を示しており、側柱に伴うものであると推測される。

入口施設　住居南壁の中心から約30cm内側に入口施設に伴うものと思われる2つのピットがある。ピット間の距離は64cmである。各ピットとも住居の長軸方向に長い長円形を呈しており、また外側に向けて斜めに穿たれている。

炉跡　2ケ所で発見された。1号炉は、住居の主軸線上で、柱穴1と柱穴3で結ばれた線より北へ約40cmに位置する地床炉である。炉の南端には東西方向に長さ36cmの棒状の結晶片岩が据えられており、その北側約20cmまでの範囲が焼土化している。

2号炉は、柱穴4の北側約50cmに位置する地床炉である。炉の主軸は、住居の軸線とは相関関係にはなく、北西から東南に方向を取っている。その東南端に長さ30cmの棒状の結晶片岩が据えられており、北西側30cmが焼けている。

貯蔵穴　南壁の中心から93cm東に寄った壁際に位置している。ちょうど入口施設の東脇にあたる。上端で幅36cm、下端で幅20cmの南北方向にやや長い不整形な長円形を呈している。深さは、住居床面から24cmを測り、底面は平坦ではない。

遺物出土状態　遺構の残存状態が、比較的良好な

部類に属しているにもかかわらず、住居に直接伴う遺物はわずかであった。注目されるものとしては、2号炉の東南側から出土した壺(4)と、住居東南隅寄りから出土した甕(5)がある。その他はいずれも破片であり、住居南半から出土するものが主体をなしている。遺物の出土状態から考えて、本住居は、老朽化、移動等の理由に伴い廃棄されたものと推測される。

その他の遺構との重複関係　平安期の4号住居により住居北東隅を切られ、また近世の道路遺構に伴う1・2号溝が北半部を東西に横断している。

時期　弥生後期第2段階

白倉B区7号住居跡

図6・134・135・197　PL.8・78・79・105　観察表2・37頁

位置　26—32　B区の東端の平坦面に位置しており、ほぼ同時期の13号住居と5号住居の中間に近接している。

形状　長軸を南北に取る長方形プランである。長軸長4.92m、短軸長4.14mで、遺構確認面からの深さは50cm前後である。褐色土面からの掘り込みであり、最も遺存状態がよい部類に属する。

面積　17.50m²　　**方位**　N8°E

周壁・周溝　周壁は全体によく残っていた。

周溝は確認されなかった。

埋没土　腐蝕質の黒色土、黒褐色土と暗褐色土を主体としており、四方から流れ込んでいる。自然堆積の埋没状態を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面であり、よく踏み固められ、平坦である。

柱穴　主柱穴は4本である。柱穴間の距離は、柱穴1～2が2.40mであるのに対し、柱穴3～4は2.14mと短い。やや台形状を呈する住居の平面形状にあわせた配置と思われる。これらに近接して柱穴と思われるものが認められる。主柱穴として図示したものは、床面よりの深さが50～70cmであるのに対し、それ以外のものはいずれも20cm以下である。建て替えに伴う柱穴の移動も考えられなくはないが、補助柱穴と考えた方がよいように思われる。

掘り方と柱痕の形状から柱材に柱穴4に板材、その他に丸太材が使用されていたことが推定される。なお、北壁際の中心に位置するピットは、床面からの深さ70cmで、位置的にも柱穴として機能していたことが推測される。

入口施設　南壁の中心から約40cm内側に、入口施設に伴うと思われる一対の円形ピットがある。ピット間の距離は70cmであり、外側に向けて斜めに穿たれている。上端での長径25cm、深さ約45cmを測る。

炉跡　北壁寄りから地床炉が1基確認されている。中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線よりわずかに外側に位置している。炉床は径約30cmの円形を呈しており、よく焼けている。その南端には、長さ26cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。

貯蔵穴　南壁際の入口施設の東脇に位置している。上端で35×34cmの不整円形で、深さ45cmを測る。

遺物の出土状態　床面直上から比較的まとまった量の遺物が出土している。土器で注意されるのは、床面直上出土の破片以外のものが、炉と柱穴3の周辺に集中している点である。これらの土器(1・3・4)は、全周するものの、胴下部を欠損している。住居廃絶直前の時点で土器としての一義的な利用形態ではなかったため、置き去られたのであろうか。完形品は1点も出土していない。

一方、床面直上から出土し、台石として使用されていたと思われる3点の自然石も、移動先で代用品はすぐ調達できることから置き去られたのであろう。

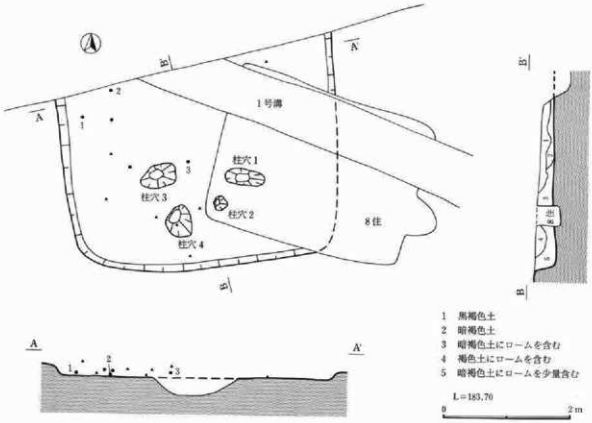
時期　弥生後期第2段階

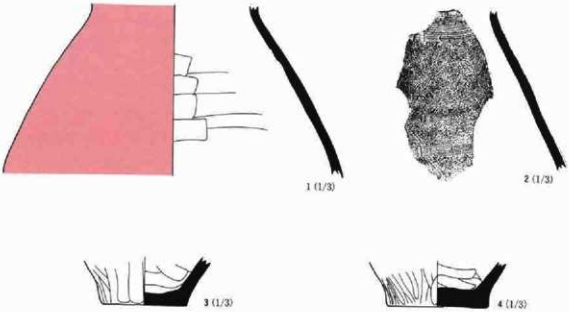
白倉B区9号住居跡

第17図（本文編）　PL.なし　観察表なし

本文編執筆時に本住居の遺漏が確認されたので、実測図・写真図版編及び遺物観察表編に掲載すべき内容も含め一括して本文編に登載することにした。

位置　22—32　B区の北東端の平坦面に位置している。





第17図　白倉B区9号住居跡と出土遺物

形状　長軸を南北に取る隅丸長方形プランが推定される。短軸長4.64mを測る。住居の北半分は調査対象地外となっているため未調査である。

方位　N 9°W

周壁・周溝　東及び西壁の残存は悪く南壁は30cm近く残っていた。周溝は確認されなかった。

埋没土　壁際を中心にローム質の土壌が認められる。

床面　黄褐色ロームの地山面である。

柱穴　南側の主柱穴２本が確認された。柱穴間の距離は、75cmを測る。なお、柱穴１は８号住居の掘り方調査時に検出されている。

入口施設　南壁の中心から約80cm内側に、入口施設に伴うと思われる一対の円形ピットがある。ピット間の距離は45cmである。なお、柱穴２は８号住居の掘り方調査時に検出されている。

遺物の出土状態　出土した土器類は少なく、図示できたものも４点である。

１は壺の胴部破片で外面には赤色塗彩、内面にはヘラナデが施されている。焼成は良好で、胎土には砂礫が含まれている。

２は壺の胴部破片である。頸部及び胴部上位に簾状文が施された後に、その間に波状文が充塡されている。胴部上位の簾状文の下は、ハケ調整の後に赤色塗彩が施される。内面はヘラナデである。焼成は良好で、胎土には砂礫が含まれている。

３は壺の底部で、外面にはヘラ磨き、内面にはヘラナデが施される。色調は明褐色で、底径は6.7cm、焼成は良好で、胎土には砂礫が含まれている。

４は壺の底部約1/2で、覆土一括として取り上げた破片である。外面にヘラ磨き、内面にはヘラナデが施される。色調はにぶい赤褐色で、底径は7.8cm、焼成は良好で、胎土には砂礫が含まれている。

その他の遺構との重複関係　平安時代の８号住居及び中近世の１号溝と重複する。

時期　弥生後期第２段階

白倉Ｂ区13号住居跡

図７・８・135・136　第18図（本文編）

PL９・79・80　腹際表３頁

位置　25―34　Ｂ区の東端の平坦面に位置する。東側に７・５号住居が近接している。

形状　長軸を南北に取る隅丸長方形を呈する。長軸長8.06m、短軸長6.24mを測る。

面積　42.92m²（復元推定）　**方位**　N 4°W

周壁・周溝　周壁は北西側が平安期の道路状遺構により欠損している以外はよく残っている。後世の削平により残存する壁高は南側の62cmから北側の17cmへと減少している。

周溝は確認されていない。

埋没土　黒褐色土、暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面及び床下構造　よく踏み固められており、調査時の床面の認定は容易であった。全体的に床土を入れ替えて床面を造っている。特に、壁際から約50cm内側は、幅１m前後の帯状に一段掘り下げており、特別の意図をもって床面が造成されていることがわかる。

柱穴　確認された主柱穴は４本である。住居の対角線上に規則正しく配置されており、南北方向の柱穴間の距離が、東西方向より長い。柱穴１～２間で3.56m、柱穴１～３間で2.65mを測る。確認された柱痕の形状から、柱穴１・３が板材を、柱穴２・４が丸太材を柱材としていたことが推測される。

入口施設　南壁のほぼ中央で、壁から60cm内側に入口施設に伴うと思われる一対のピットがある。ピットは東西に60cmの距離をおいて並列しており、いずれも南に向けて斜めに穿たれている。

炉跡　北壁寄りから１基確認されている。長軸方向の中軸線上で、柱穴１・３を結んだ線上にちょうど位置している。南北方向に長い長円形の浅い掘り方を設け、その中央に長さ55cmの棒状の結晶片岩を据えている。

貯蔵穴　南壁の入口施設の東脇にある。上端で径

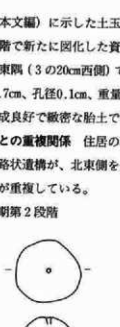
50cmの円形を呈しており、深さ58cmを測る。

遺物の出土状態　出土遺物は、土器破片を中心としており、量的にも少ない。唯一完形品であった脚台形土器(7)は、覆土中からの出土で、住居に直接伴う可能性は少ない。その他の比較的残りのよい資料のいずれも欠損品である。ここで使用されていた土器等は、住居の廃棄に伴い持ち運ばれたものと思われる。床面から1点、炭化材が出土しているが、それ以外に全く認められないこと、灰・焼土等も確認されないことから、焼失家屋の痕跡を示すものではない。

なお第18図（本文編）に示した土玉（№24）は、本文執筆時の段階で新たに図化した資料である。出土位置は住居南東隅（3の20cm西側）で床直である。高さ2.1cm、径1.7cm、孔径0.1cm、重量5.33g、色調は明黄褐色、焼成良好で緻密な胎土である。

その他の遺構との重複関係　住居の北西側を後出する平安期の道路状遺構が、北東側を先行する縄文後期の敷石住居が重複している。

時期　弥生後期第2段階



第18図　白倉B区13号住居跡出土土玉

白倉C区1号住居跡

図9・137・198　PL12・80・81・106・111　観察表5・37頁

位置　34−71　C区の北端中央に位置している。ここより西で地形は西下がりの顕著な傾斜面となっている。同時期の住居の中では、最も西に偏している。

形状　長軸を南北方向とする隅丸長方形プランで、南側がややすぼまっている。各辺は外側に若干張り出し気味である。長軸長5.92m、短軸長4.82mを測る。深さは約10cmで、遺存状態の悪さを示している。

面積　25.01㎡　　**方位**　N19°W

周壁・周溝　壁高は全体に確認されたが、削平のため約10cmの高さを残すのみである。

周溝は確認されていない。

埋没土　遺存状況が悪いため不明確であるが、黒褐色土、暗褐色土、褐色土を主体とする自然埋没が推定される。

床面　黄褐色ロームの地山面で、よく踏み固められており、比較的平らである。

柱穴　主柱穴は4本である。長軸方向の柱穴間の距離が、柱穴1～2で3.30m、短軸方向のそれが、柱穴1～3で1.09mを測る。短軸方向の柱間が通例のものと比較して狭い点が注意される。

入口施設　南壁から約80cm内側で、中心軸から少し西に偏して、入口施設に伴うと思われる一対の東西に並列する円形ピットがある。両ピットの間は70cmで、南に向けて斜めに50～60cmの深さまで掘り下げられている。

炉跡　北側から地床炉が1基確認されている。北側の主柱穴を結んだ線より50cm内側に位置している。炉床面は南北に長い長円形であり、90×40cmの規模である。炉石は確認されなかった。

貯蔵穴　南壁の中心から東へ70cmの位置の壁際にある。径40～50cmの不整円形であり、深さは20cmを測る。

遺物の出土状態　住居に直接伴うと思われる土器で、完形に近く復せたものはない。いずれも1/2以下の欠損品である。住居の廃棄に伴い運び去られたものと思われる。

磨製石鏃の未製品が3点出土しているが、製作に伴うチップ、コア、砥石等の出土は認められなかったことから、本住居で製作されていた可能性は薄い。

その他の遺構との重複関係　後出する219号土壙と近年の畑の耕作溝によって切られている。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区7号住居跡

図10・138・198・199・200　第19図（本文編）

PL12・81・106・111・112　観察表5・38頁

位置　34―69　C区の北端寄りの中央に位置している。1号住居の東側に隣接し、平坦面上である。周辺には1号に加えて8・9・90号住居が隣接している。

形状　南北方向を長軸とする長方形プランであるが、短軸との差は50cmほどであり、正方形プランに近い。長軸長6.68m、短軸長6.14mを測る。

面積　36.84m²（復元推定）　**方位**　N10°W

周壁・周溝　周壁の残りがよかったのは南東側で、壁高30cm前後である。それ以外は、北側に行くにつれて浅くなり、北壁では10cm未満である。また、後出する2軒の古墳住居と近年の耕作溝により南西、北東の両コーナー周辺を失っている。

周溝は確認されなかった。

埋没土　わずかに残っていた埋没土は、褐色土、暗褐色土を主体としており、自然の埋没状態を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面であり、よく踏み固められていた。そのため、調査時の床面の検出は容易に進めることができた。面は比較的平らであるが、南西隅寄りが他の部分より5cmほど高い。

柱穴　主柱穴は4本からなる。柱穴間の距離は、東西方向の柱穴1～3が2.3m、柱穴2～4が2.4mと近い距離であるのに対し、南北方向の柱穴1～2が3.25m、柱穴3～4が3.8mと差がやや大きい。柱痕から推定される柱材は、いずれも東西方向に長く据えられた板材である。幅20～25cm、厚さ8cm前後のものと思われる。

入口施設　住居の南壁寄りには入口施設に伴うと思われるピットがある。南壁から110cm内側の位置であり、南に向けて斜めに掘られている。確認されたのは1個であるが、位置的関係から西側に並列してもう1個あったものと思われる。その位置は、畑の耕作溝の部分にあたっていることから、消滅してしまったのであろう。

炉跡　北壁寄りから1基確認されている。南北方向の中軸線上で、北側の2本の主柱穴を結んだ線上に位置している。地床炉であり、東側半分を4号住居により切られてしまっている。炉床は径45cmの円形を呈しており、やや窪んでいる。その西端に長軸を南北にして棒状の結晶片岩の炉石が出土しているが、本来の設置場所ではない。

貯蔵穴　南壁の中心から50cm東に偏した壁際に位置している。ちょうど入口施設の東端に接するような位置にあたっている。径約45cmの不整円形であり、深さは約25cmである。

遺物の出土状態　土器類は極めてわずかである。しかも破片が多く、完形に近く復せるものはない。住居の廃棄に伴って、使用中の土器類は移動先へ運び出されたものと思われる。

本住居で注目されたのは、床面直上からまとまった量の磨製石鏃製作に関わる遺物が出土したことである。多数の失敗品、未成品に加えて、素材片やチップが出土している。また製作に使用されたと思われる各種砥石も確認されている。住居内で製作作業が進められていたことを示す。これらの出土位置には、2つの集中箇所がある。1つは柱穴3の周辺であり、もう1つは南壁手前の東寄りである。特に後者が密度が高いことと、チップの分布が目立つことから、この地点での製作が推測される。

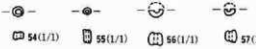
また、磨製石鏃チップ類の採集を目的として、住居覆土の土壌を洗浄したところ、ガラス小玉が7点検出され4点を図化した（第19図16～19）。図化できなかった3点はいずれも微細な破片である。

54は完形で、径0.27cm、孔径0.12cm、厚さ0.32cm、重量0.02g である。55は完形で、径3.00cm、孔径0.14cm、厚さ0.16cm、重量0.02g である。56は1/2を欠損し、径0.38cm、厚さ0.33cm、重量0.03g である。57は1/2を欠損し、径0.28cm、厚さ0.29cm、重量0.02g である。

その他の遺構との重複関係　住居の北東隅と南西隅に後出する古墳時代後期の4・6号住居が重複し、また住居を斜めに横切るように近年の畑の耕作溝が

縦断している。

時期　弥生後期第１段階



第19図　白倉Ｃ区７号住居跡出土ガラス玉

白倉Ｃ区８号住居跡

図11・137・202　PL12・81・107・111　観察表６・39頁

位置　36－68　Ｃ区の東西、南北の中央寄りの平坦面に位置している。７号住居の南側になる。

形状　長軸を南北とする隅丸長方形プランを呈する。ただし、長軸長4.5m、短軸長4.1mと接近しており、正方形プランに近い。各辺は、弧状にわずかに張り出し気味である。

面積　16.42m²（復元推定）　**方位**　N11°W

周壁・周溝　周壁は最もよく残っていた北東側でも高さ８cmであり、南西側は壁高３cm未満である。かろうじて住居の輪郭が残ったという程度に削平が及んでいた。

周溝は確認されなかった。

床面　黄褐色ロームの地山面であり、よく踏み固められていた。面は比較的平らであるが、南壁寄りが５cm前後高い。

柱穴　主柱穴は４本である。ほぼ住居の対角線上に位置しており、柱穴間の距離は、柱穴１～２で2.07m、柱穴１～３で1.65mを測る。掘り方及び柱痕の形状からすると丸太材が柱に使用されていたことが推測される。

入口施設　南壁の中心から85cm内側に東西に50cmの間隔をおいて並列する一対の円形ピットがある。ピットの上端での径は25cmで、南に向けて斜めに深さ約65cmまで掘られている。

炉跡　北壁寄りから地床炉が１基確認されている。軸方向の中軸線上で、北側の２つの主柱穴を結んだ線より20cm内側にある。炉床は径50～60cmの南北に長い長円形で、その南端に長さ26cmの棒状の結晶片岩が長軸を東西にして据えられている。

貯蔵穴　他の住居例と同様に、南壁に接して、入口施設の東側に設置されていたものが、周溝墓の掘削により消滅したものと思われる。

遺物の出土状態　土器破片が、極めてわずか出土しているのみである。たとえ10cm足らずと言えども、周壁が残存していたのであるから、もともと少なかったものと思われる。

磨製石鏃の完形品と未成品各１点が出土しているが、量的に少なすぎることと、チップ類が認められないことから、住居内で製作されていた可能性は少ない。

その他の遺構との重複関係　住居南側で後出する２号方形周溝墓と、北西側で後出する古墳時代後期の３・６号住居と重複している。

時期　弥生後期第１段階

白倉Ｃ区９号住居跡

図12・138・201　PL12・81・107・112　観察表６・40頁

位置　35－67　Ｃ区の東西の中央よりやや東寄り、南北の中央よりやや北寄りの平坦面に位置している。Ｃ区の弥生住居群の中では中心に近い。

形状　長軸をほぼ南北とする隅丸長方形プラン。長軸長5.07m、短軸長4.78mであるから、正方形に近い。各辺はその中心で最も外側へ張り出すゆるやかな弧状を呈している。

面積　20.21m²　**方位**　N20°W

周壁・周溝　後世の削平が深く及んでいるため、周壁は10～15cmを残すに過ぎない。

周溝は確認されていない。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲から流れ込んだ自然埋没の状態を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面であり、西壁寄りを除くと全体に比較的よく踏み固められている。面は比較的平らである。

柱穴　主柱穴は４本である。柱穴間の距離は、2.0～2.2mと比較的均一である。住居の輪郭に対し

ては、柱穴の配置が若干西側に偏している。掘り方及び柱痕から丸太材の柱であったことが推測される。

入口施設　南壁の中心から約60cm内側に入口施設に伴う一対のピットがある。東西方向に50cmの距離をあけて並列しており、南に向けて斜めに50、70cmの深さまで掘られている。

炉跡　住居南側から地床炉が1基確認されている。その位置は、長軸の中心軸上で、北側の主柱穴を結んだ線上にあたっている。炉床は径52cmの円形を呈しており、周囲の床面から約8cm明瞭に窪んでいる。その南端には、長さ30cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。

貯蔵穴　南壁の中心から東へ約60cmの壁際に位置している。入口施設の東脇にあたる。上端で径45cmの不整円形で、深さ23cmを測る。

遺物の出土状態　土器類は破片が中心で、壺の胴下部を甕に転用した(1)でも底部を欠く1/2の破損品である。住居の廃棄に伴い主要土器は運び去られたことが推測される。

一方、磨製石鏃の製作に関わる遺物の出土が注目される。大半が床面直上からの出土であり、種類としては、完成品、失敗品、未成品、素材片があり、砥石も豊富である。ただし、調査上の不備のため、チップ数に注意が及ばなかった点が悔やまれる。遺物の分布傾向からすると、南壁寄りと北壁寄りに集中する傾向が読み取れる。住居内のこの2ケ所での製作が想定されよう。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区14号住居跡

図13・139・200　PL13・82・83・107・113　観察表7・40頁

位置　33―64　C区の北東寄りの平坦面に位置する。C区の弥生住居群の中では東端に位置するもので、これより東は徐々に傾斜面となっているため、住居が存在しない。

形状　長軸を南北方向とする隅丸長方形プランを呈する。各辺ともやや弧状気味である。長軸長6.5m（復元推定）、短軸長5.45mを測る。

面積　30.71m²（復元推定）　**方位**　N8°W

周壁・周溝　後世の削平が深く及んでいるため、壁高は10cm以下である。また、後出する各種遺構によって切られているため、周壁の1/3ほどを失ってる。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、自然埋没が推定される。

床面　黄褐色ロームの地山面であり、比較的よく踏み固められているため、床面の検出を容易に進めることができた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。ほぼ住居のプランに沿うように配置されているが、東側の柱穴のほうが若干壁に寄っている。柱穴間の距離は、柱穴1～2で3.25m、柱穴1～3で2.85mを測る。掘り方及び柱痕の形状から、柱穴2・3・4は丸太材を、柱穴1は板材を柱材としていたことが推測される。

入口施設・貯蔵穴　その位置と推定される南壁寄りを失っているため確認されていない。なお、遺存している住居内の他の箇所には認められないことから、推定した部分に設置されていたとして間違いないであろう。

炉跡　住居の長軸の中軸線上で北側の主柱穴を結んだ線の内側から地床炉が確認されている。東側2/3ほどを1号周溝墓によって切られているが、その際炉石も失ったものと思われる。

遺物の出土状態　出土した土器類はわずかであり、しかもいずれも破片であった。主要なものは廃棄時点に運び去られたものと思われる。

一方、まとまった量の磨製石鏃の製作に関わる遺物が床面直上から出土しており注目される。種類としては、完成品、失敗品、未成品、素材片があり、砥石もある。調査上の不備でチップ類の確認が十分でなかったが、住居内で製作されていた可能性は高い。出土位置の分布からは、住居の東壁寄り、とりわけ南東コーナー寄りに集中する傾向が読み取れる。この地点で製作されていた可能性が強い。

その他の遺構との重複関係　後出する1号方形周

溝墓の溝が住居を縦断するように重複しており、また南側を後出する平安期の8・9号土壙、1号井戸に切られている。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区30号住居跡

図11・141・207　PL13・82・83・107　観察表7・41頁

位置　40―71　C区の東西、南北の中央寄りに位置している。付近は東から西へとゆるやかに下がる傾斜面上であり、西側は傾斜の角度を増していく。C区で確認された弥生住居の中では、最西端に位置するものである。

形状　主軸をほぼ南北方向に取る正方形プランを呈している。C区で確認された弥生住居の大半の主軸線が南北方向から西へ振れているのに対し、本住居は東に振れている点で対照的である。東西、南北の軸線とも長さ約3.5mとやや小規模である。

面積　10.75㎡　　**方位**　N16°E

周壁・周溝　周壁は全体に残っており、壁高15～20cmを測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒褐色土を主体としており、自然の埋没状態を示している。

床面　全体に土を入れ替えて床を造っているが、踏み固められた状態は認められない。面はほぼ平らであるが、東から西へ行くにつれて徐々に低くなっている。東西の両端で約10cmの差がある。

柱穴　確認されなかった。

炉跡・貯蔵穴　確認されなかった。

遺物の出土状態　床面直上から赤色塗彩された完形の坏(1)が出土している。遺物量が極めて少なく、前記のものを除くと全て破片である。

住居に伴う施設として一般的な炉、貯蔵穴等を伴わない点、床面が明瞭でない点等をふまえると本遺構が通常の住居遺構でなかったことも十分考えられる。

時期　弥生後期第3段階

白倉C区32号住居跡

図14・139・202　PL14・82・83・107・113　観察表8・41頁

位置　37―67　C区の南北の中心で、東西の中心から東に20mほど寄っている。C区の弥生住居群のほぼ中心で、平坦面上に位置している。

形状　長軸を南北方向とする隅丸長方形プランである。長軸長4.24m、短軸長3.90mを測り、正方形に近いプランである。

面積　14.76㎡（復元推定）　　**方位**　N23°W

周壁・周溝　壁高約25cmを測り、周辺の同時期の住居とくらべると遺存状態はよい。2号方形周溝墓の溝によって消滅した部分を除けば、全体によく残っている。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然な埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められている。面は比較的平らであるが、南から北に向けて徐々に下がっている。両端で5cmほどの差がある。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.02m、柱穴1～3で1.54mを測る。掘り方の形状からすると、いずれの柱穴も柱材に板材が使用されていた可能性が強い。

入口施設　南壁の中心から約80cm内側に入口施設に伴うと思われる東西に並列する一対のピットがある。南に向けて斜めに深さ40、54cmに掘られており、両者の間は70cmあけられている。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線から40cm内側に位置している。径35cmの炉床を持つ地床炉で、南側1/3を周溝墓により失っている。その際、南端に据えられていた炉石も失ってしまったものと思われる。

貯蔵穴　南壁の中心から約50cm東に寄った壁際に設置されている。入口施設の東脇にあたる。上端での径63cmの不整円形を呈しており、深さ26cmを測る。これと同大の土壙が入口施設の直下にあたる壁際にあるが、類例に乏しいことから、機能的に同一のも

のと断定することはできないであろう。

遺物の出土状態　遺物の出土点数は、比較的多かったが、土器類は大半が小破片である。もっとも残存状態のよい（1）も1/3ほどを欠損している。

一方、本住居の場合も磨製石鏃の製作に関わる遺物が比較的多く出土しており注目された。種類としては、失敗品、未成品、チップに加えて砥石がある。出土位置の傾向としては、南壁寄りに集中する傾向が認められるが、顕著なものではない。大半が床面直上からの出土であり、住居内で製作していたことは間違いないであろう。

その他の遺構との重複関係　住居の西寄りを縦断するように後出する2号方形周溝墓が重複している。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区34号住居跡

図15・140・203 PL16・82・83・108・113　観察表8・42頁

位置　38―65　C区の南東寄りの平坦面に位置する。

形状　南北方向に長軸をとる隅丸長方形プランで、南西隅にゆがみがある。長軸長3.83m、短軸長3.71mを測り、正方形に近い。

面積　12.47m²（復元推定）　**方位**　N14°W

周壁・周溝　住居の南・西壁が比較的よく残っており、壁高30cm。これに対し北東側は10cm前後である。

周溝は確認されなかった。

埋没土　腐蝕質の黒褐色土と暗褐色土を主体としており、四方からの流れ込みによる埋没を明瞭に理解できる。

床面　黄褐色ロームの地山を床面としており、よく踏み固められている。面は比較的平らである。

柱穴・入口施設　確認されなかった。

炉跡　北壁の中心から80cm内側に位置している。炉床は径30cmの円形で、鍋底状に窪んでいる。その南端には、長さ28cmの棒状の結晶片岩が長軸を東西にして据えられている。

貯蔵穴　南壁の西端の壁際に位置している。上端で径60cmの半円形で、深さ10cmを測る。他の住居例と比較して位置が変則的なことと、深さも浅いことから、別の機能の可能性もある。

遺物の出土状態　比較的豊富な遺物が出土している。土器類は完形に復せるものはないが、大きい破片が目立つ。特に（1）は床面直上の出土で胴下部を欠損するだけなので転用品として使用されていたことも十分考えられる。完形品は、住居廃棄に伴って運び出されたものと思われる。

一方、磨製石鏃の製作に関わる遺物類が比較的多く床面直上から出土しており注目された。種類としては、失敗品、未成品、チップや砥石がある。その出土地点は、住居の南寄りの中心に集中する傾向がある。この付近で製作されていたとして間違いないであろう。

その他の遺構との重複関係　住居の北東隅を近年の畑の耕作溝により切られている。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区35号住居跡

図17・18・19・141・142・204・205・206

PL15・83・84・108・109・114・115　観察表9・43頁

位置　38―64　C区の東南の平坦面に位置する。C区の弥生住居群の中では東端を占めている。

形状　南北方向に長軸を取る不整長方形プラン。不整形を来しているのは、西壁長6.7m、東壁長8.2mと両辺で1.5mの差があり、台形に近いプランとなっているためである。長軸長8.1m、短軸長7.2mを測り、正方形に近い。C区の弥生住居の中では最も規模が大きい。

面積　53.19m²（復元推定）　**方位**　N30°W

周壁・周溝　周壁の遺存状況は南西から北東に向けて徐々に悪くなる。南西側で壁高20cmを測るのに対し、北東側では5cm内外である。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土、褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面で、全体によく踏み固められている。面は南から北に向けて徐々に下がっている。両端で10cm前後の差がある。

柱穴　主柱穴は4本である。柱穴間の距離は、柱穴1～2で3.9m、柱穴1～3で4.3mと、住居の規模とは逆に東西方向の方が長くなっている点が注意される。主柱穴の掘り方は、柱穴2・4が上端で1.2×1.0mと東西方向に長い長円形であり、柱穴3は、上端で0.9×0.7mのやはり東西に長い長円形である。大型の住居であったため、強固な支持構造にしたことが窺える。掘り方及び柱痕の形状から、使用された柱材は、東西方向に長い板材であったことが推測される。

一方、各主柱穴に対応するように内側に近接して上端で径約40cm、深さ60cmのピットが認められる。位置・規模が規則的であり、補助柱穴として間違いないであろう。

入口施設　南壁の中心から70cm内側には、東西に90cmの間隔をおいて入口施設に伴うと思われる一対の円形ピットが穿たれている。南に向けて斜めに掘られており、出入用の梯子が付設されていたものと推測される。

炉跡　住居内から2基の地床炉が確認されている。1号炉は、南北方向の中軸線上で、北側の柱穴を結んだ線の内側50cmに位置している。炉床は63×43cmの南北に長い長円形で、中央が明瞭に窪んでいる。その南端には長さ28cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。

2号炉は住居の南西側で柱穴4の北側に近接している。炉床が径44cmの円形で、中央寄りがかすかに窪んでいる。規模、位置から考えて、副次的なものであったことが推測される。

貯蔵穴　南壁の中心から約70cm東に寄った壁際に位置している。入口施設のちょうど東脇にあたる。上端で径約50cmの円形で、深さ約15cmを測る。

遺物の出土状態　住居に直接伴うことが推定される土器類は極めてわずかである。しかもすべて破片であり、完形に復せるものは出土していない。住居の廃棄に伴い運び出されたものと思われる。

磨製石鏃の出土状態　本住居からは大量の磨製石鏃の製作に関わる遺物が出土している。住居の床面上に足の踏み場もないほどに出土しているが、時間のかかるのを覚悟の上で、1点1点の出土位置の記録をとりながら取り上げた。

出土した遺物の種類と数量を示せば、以下の通りである。完成品2、失敗品7、未成品10、素材片3、剥片47、チップ1046点で、砥石が13点を数える。おそらく、この数から漏れているチップも相当数にのぼる可能性がある。それらの分布傾向を調べてみると、住居の南壁と南側の主柱穴に挟まれた部分に圧倒的に集中しているのを明瞭に読み取ることができる。さらに細かく見るならば、柱穴2周辺及び柱穴4と南壁の間の2ケ所に特に濃密な分布が認められる。この付近で実際の製作が行われた可能性が強いと言えよう。

その他の遺構との重複関係　住居の北東側で後出する36号住居と重複している。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区39号住居跡

図16・142・143・207　PL16・83・84・109・116

観察表10・45頁

位置　39－68　C区の東西、南北の中央からやや東に寄った平坦面上に位置している。

形状　南北方向に長軸を取る長方形プランであるが、南壁より北壁の方が約70cm長いことから台形プランと言った方がより正確である。長軸長4.8m、短軸長4.2mを測る。

面積　18.51㎡（復元推定）　**方位**　N26°W

周壁・周溝　近年の畑耕作に伴う溝が数多く掘られているため周壁も途切れ途切れになってしまっている。南壁は高さ28cmまで、北壁は高さ12cmまで残っていた。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲よりの流入による自然埋没が推定される。

床面　黄褐色ロームの地山面を使用しており、非常に堅く踏み固められている。面は全体に平坦である。

柱穴　主柱穴は4本確認された。柱穴間の距離は柱穴1～2が2.6m、柱穴1～3が1.7mを測る。他の住居例とくらべると、南北方向のそれが東西方向に比べて長めに取られている点が注意される。掘り方の形状から、柱材には柱穴1で板材が、柱穴3・4に丸太材が使用されていたことが推測される。

入口施設　調査時点では確認されなかった。しかし、他の住居では、斜めに掘り込まれた円形ピットの確認が普遍的に近い状況なので、探索が不十分であったことも十分考えられる。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の25cm内側から地床炉が確認されている。炉床の2/3ほどが耕作溝のため消滅しているが、その中心は周囲の床面より5cm前後明瞭に窪んでいることがわかる。炉石も後世の破壊により消失したものと思われる。

貯蔵穴　南壁の中央から約50cm東側の壁際に位置する。上端で径50cmの円形で、深さは25cmを測る。

遺物の出土状態　確認されている土器の大半が床面より高い覆土中からの出土であり、破片である。その中で、壺の口縁(1)と完形の甕(3)は床面直上ないしこれに近い出土状態を示している。ただし、(3)は、柱穴2が埋まった時点でこの上に位置したことになるから、直接伴わない可能性もある。

本住居の場合も、磨製石鏃の製作に関わる遺物類が床面直上からまとまって出土しており注目された。種類としては、完成品1、失敗品5、未成品4、素材片1、剥片6、チップ46点である。その分布傾向からすると、住居の南東隅にあたる柱穴2の周辺に集中しており、また、これほどではないが、柱穴3の周辺にも集中している。前者の付近では実際に製作されていた可能性が十分あり、後者も少し可能性がある。

その他の遺構との重複関係　近年の耕作溝によってズタズタに切られていることは既述の通りである。また、住居北西側では後出する2号方形周溝墓と重複している。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区47号住居跡

図20・144・207　PL17・85・86・110・116

観察表10・46頁

位置　36―63　C区の東端の平坦面上に位置している。ここより東は東下がり傾斜面となり、浅い谷地形へと連なっている。

形状　南北方向に長軸を取り、長方形プランが推定される。長軸長5.25m、短軸長4.2mの規模に復元された。

面積　20.36m²（復元推定）　**方位**　N5°E

周壁・周溝　周壁は45号住居に切られているため、1/2強が遺存していた。壁高は20cm前後であり比較的残りはよい。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面を使用しており、比較的よく踏み固められている。

柱穴　主柱穴は4本であったとして間違いないが、実際に確認されたのは南側の2本である。柱穴間の距離は1.74mを測る。掘り方の形状は東西に長い長円形を呈し、特に柱穴2に顕著である。柱穴2の柱材が板材を使用していた可能性が高い。

入口施設　南壁の中央から約75cm内側に、入口施設に伴うと思われる一対のピットが確認された。東西に55cmの距離をおいて並列しており、南に向けて斜めに深さ45cmまで掘られていた。

貯蔵穴　南壁の中央から80cm東に寄った壁際に位置している。上端で径60cm、深さ25cmの東西に長い長円形の土壙である。入口施設のちょうど東脇にあたる。

遺物の出土状態　出土した土器類は極めてわずかである。しかも、破片が多く完形に復せるものは存在しない。その中で、住居南西から出土した壺(1)は

嗣下部を欠くものの全周しており、床面直上に下部を下にして据えられたような状態で出土している。磨製石鏃の失敗品、チップが各1点出土しているが、住居内での製作の推定にはほど遠い。

その他の遺構との重複関係　後出する平安期の45号住居により、本住居の2/3近くを失っている。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区53号住居

図21・143・208　PL13・85・86・110・112　観察表11・46頁

位置　41―70　C区の東西の中心で、南北の中心からやや南に寄っている。C区の弥生住居群の西端を占めている。

形状　東西方向に長軸を取る隅丸長方形プラン。長軸長4.33m、短軸長3.32mを測る。各辺には若干ゆがみが見られる。本例のように東西方向に長軸方向を取るものは、本遺跡の場合、他に例を見ない。

面積　15.40㎡（復元推定）　　**方位**　W3°S

周壁・周溝　後世の削平が著しく、周壁はほぼ全周するものの、壁高5㎝前後とわずかである。

周溝は確認されていない。

床面　黄褐色ロームの地山をそのまま使用している。面は東から西に向けて徐々に低くなる傾向がある。両端で10cm前後の差がある。

柱穴　主柱穴は4本確認されている。住居の対角線上にほぼ規則正しく配置されている。柱穴間の距離は、柱穴1～2で1.5m、柱穴1～3で2.20mを測る。掘り方の形状から、柱材には丸太材が使用されていたことが推定される。

炉跡　長軸方向で中軸線上で、西側の主柱穴を結んだ線から約10cm内側に位置している。炉床は径56㎝の円形で、中央が明瞭に窪む鍋底形を呈している。その東端寄りには、長さ約30cmの棒状を呈する川原石が、長軸を南北にして据えられている。

貯蔵穴　東壁の中心から約50cm北に寄った壁際に、上端で径約50cmの不整円形の土壙がある。深さは約45cmを測る。

入口施設　調査時には確認されなかった。しかし、この時期の住居で確認されないものの方が極めてわずかであることを考えると、探索が不十分であったことも考えなければならない。

遺物の出土状態　床面からわずかの高さしか遺存していないこともあって、出土した土器類は破片が数える程である。もちろん、遺物の少ない他の住居例と同様、住居廃棄に伴う運び出しも考慮する必要がある。

一方、床面直上からは、磨製石鏃の製作に関わる遺物類がまとまって出土している。種類及び数量を示せば、完成品1（穿孔がないので製作途中の可能性もある）、未成品2、チップ80、砥石1である。その分布を見ると、住居東半部で主柱穴の周辺に集中する傾向が明瞭に認められる。この付近で製作が行われていたことがわかる。

これらの他、柱穴1の東側で水色のガラス小玉が出土しており注目された。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区55号住居跡

図22・144・208　PL17・85・86・110・116　観察表11・46頁

位置　38―62　C区の最東端に位置している。この地区で発見された弥生住居の中でも同様である。

形状　住居の北半分を失っているため断定はできないが、主柱穴の位置関係を参考にすると、南北方向に長軸を取る長方形プランが推定される。長軸長4.5m、短軸長4mの規模が推定される。

面積　15.68㎡（復元推定）　　**方位**　N12°W

周壁・周溝　確認された南半分については遺存状態がよく、壁高42㎝を測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土、黒褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然埋没の過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用している。あまり平坦ではない。

柱穴　主柱穴は4本である。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.02m、柱穴1～3で1.74mを測り、規

則的な配置が窺われる。深さは80cm前後と深い。

炉跡　後出する46・54号住居に切られているため残りはよくないが、焼土のひろがりと位置関係から炉の痕跡が推定された。その位置は、長軸方向の中心線上で、北側の主柱穴を結んだ線より20cm内側である。

貯蔵穴　南壁の中心から80cm東へ寄った壁際に位置している。上端で径42cmの円形で、深さは23cmを測る。

遺物の出土状態　床面の遺存部分が少ないこともあるが、出土土器の量は少なかった。そのような中で住居南東隅の床面から出土した壺(1)は、底部を欠くものの他は全周している。その他はいずれも破片であった。

一方、本住居からも磨製石鏃の製作に関わる遺物類が床面からまとまって出土しており注目された。種類と数量を示せば以下の通りである。未成品4、剝片5、チップ51、砥石1。出土位置の分布傾向をみると、住居の南壁寄り、とりわけその東寄りに集中しているのがわかる。この付近で製作されていたことが推定される。

その他の遺構との重複関係　後出する46・54号住居によって住居の北半分を切られている。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区72号住居跡

図23・145・208　PL17・85・86・110・116　観察表11・46頁

位置　42—64　C区の南東端の平坦面上に位置する。

形状　長軸を南北方向とする隅丸長方形プランが推定される。住居の南半分は調査対象地外となっているため未調査。

方位　N28°W

周壁・周溝　周壁の遺存状態はよく、高さ44cmまで残っていた。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒褐色土を主体とし、周囲からの流れ込みによる自然埋没の過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面を使用しており、面は平坦である。

柱穴　住居北寄りの2本の主柱穴が確認された。柱穴間の距離は1.4mを測る。掘り方の形状から柱材は丸太材であったことが推定される。

炉跡　調査範囲内では確認されなかった。同時期の他の住居例のを踏まえるならば、検出された範囲内で確認されるはずである。53号住居のような変則的な主軸方向の取り方と炉の位置も考慮する必要があるかもしれない。

遺物の出土状態　住居の遺存状態がよいにもかかわらず、出土した遺物はわずかである。土器類はすべて破片であり、完形品は、一部を欠損するものも含めて、まったく認められなかった。

磨製石鏃の製作に関わる遺物類も少量出土しているが、実際に住居内で製作していたかどうか微妙な量である。種類と量を示せば以下の通りである。失敗品2、未成品2、剝片1、チップ6、砥石2。他の住居の場合、出土位置が住居の南側に集中する傾向があるので、本住居の場合も未調査部分で出土する可能性を十分残している。

時期　弥生後期第1段階

白倉C区90号住居跡

図23・145・209　PL17・85・86・110・117　観察表12・47頁

位置　33—69　C区の北端で東西の中央に位置する。

形状　長軸を南北方向に取る隅丸長方形が推測される。住居の北半分が調査予定地外となっているため未調査。

方位　N25°W

周壁・周溝　住居の遺存状況が極めて悪く、かろうじて周壁が残っていた南東側でも、壁高5cmほどである。

周溝は確認されなかった。

床面　黄褐色ロームの地山面を使用している。

柱穴　南側の主柱穴2本が確認された。柱穴間の距離は1.48mを測る。

入口施設・貯蔵穴　他の住居例を考慮すれば、南壁寄りにあるはずであるが、確認されなかった。床面が全体に近年の耕作により破壊されていたこともあるが、調査時の探索が十分でなかった可能性もある。

遺物の出土状態　出土した遺物は極めてわずかであった。土器類はすべて破片である。

磨製石鏃の製作に関わる遺物も少量認められた。剝片２、チップ１、砥石２である。

その他の遺構との重複関係　先行する弥生中期の円形土壙、近年の畑耕作に伴う溝と重複している。

時期　弥生後期第１段階

白倉Ｃ区91号住居跡

図24・143・209　PL17・86・110・117　観察表12・47頁

位置　31―65　Ｃ区の北東端の平坦面に位置している。この地点より東に向けては徐々に下がって行き、Ｂ区との境で確認された谷地形へと連なっている。

形状　長軸を南北方向に取る隅丸長方形プランが推定される。短軸長4.9mを測る。住居の北半分は調査対象地外となっているため未調査。

方位　Ｎ8°W

周壁・周溝　南壁は削平が深く及び壁高10cm未満であったが、東西両壁は北寄りで30cm近く残っていた。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒色土及び黒褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面を使用し、よく踏み固められている。住居の南壁から西壁に沿っては幅約1.2mの帯状に床面が５～10cm高く造られていた。

柱穴　南側の主柱穴２本が確認された。柱穴間の距離は2.5mを測る。掘り方の形状から、柱材には丸太材が使用されていたことが推定される。

入口施設　南壁の中心から約70cm内側に60cmの間隔をおいて東西に並列する一対の円形ピットがあり、入口施設に伴うものと推定された。上端で径20cm、深さ50cmを測り、南に向けて斜めに掘られていた。

貯蔵穴　南壁の中心から約60cm東に寄った壁際に位置している。上端で55×45cm、深さ26cmの不整円形の土壙である。入口施設のちょうど東脇の位置にあたる。

遺物の出土状態　出土した土器類は極めてわずかの小破片であった。住居の破壊の度合にくらべれば、少なすぎる点が注意される。住居の廃棄に伴い別の場所へ運び出されたものと思われる。

一方、磨製石鏃の製作に関わる遺物がまとまって出土しており注目された。種類と数量を示せば以下の通りである。失敗品４、未成品４、剝片12、チップ98、砥石２。住居全体の半分ほどの調査範囲であるから、出土量は多い部類に属する。その出土位置を見てみると、南北方向の中心寄りで、南壁寄りに集中する傾向がある。覆土中からの出土も多いが、それ以上に床面直上からの出土が多かったので、住居内で製作していたことは明らかであろう。

その他の遺構との重複関係　南壁の中心寄りで後出する209号土壙と重複する。

時期　弥生後期第１段階

天引2号住居跡

図26・146・210　PL20・89・119　観察表12・48頁

位置　27—42　南北方向の尾根の中央で、南から北へ緩やかに下がる斜面上に位置する。本調査地の弥生住居群の中では北寄りに属する。

形状　長軸を南北方向とする長方形プラン。長軸長3.77m、短軸長3.13mを測る。

面積　10.80㎡　　**方位**　N23°E

周壁・周溝　後世の削平が深く及んでいるため周壁の残りはよくない。壁高は南壁で20cm、北へ行くにつれて残りが悪く、北半分は完全に消滅している。周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体とし、自然埋没が推測される。

床面　黄褐色ロームの地山面を使用している。

柱穴・入口施設・炉跡　確認されなかった。

貯蔵穴　南壁の中心から50cm東に寄った壁際に、上端で50×66cm、深さ70cmの不整円形の土壙が認められた。

遺物の出土状態　出土した遺物は極めてわずかであった。土器類はすべて破片であり、床面直上からのものはない。石器には打製石斧(3)があるが、これを直接住居に伴うものとは言えない。

時期　弥生後期第2段階

天引4号住居跡

図25・26・146・147・210　PL21・87・89・119　観察表13・48頁

位置　29—41　2号住居の南東側に隣接する。尾根の中央からは東に少しはずれ、西から東へ下がる斜面上となっている。

形状　長軸を南北方向とする隅丸長方形プラン。西壁より東壁の方が約1m長いから厳密に言えば台形を呈している。各辺とも外側に向けて弧状にわずかに張り出している。長軸長7.13m、短軸長5.46mを測り、同時期の住居の中では比較的大型の部類に属する。

面積　32.92㎡　　**方位**　N23°E

周壁・周溝　周壁は全体に確認された。そのうち西側の遺存状態がよく、東に行くにつれて後世の削平のため悪くなる。壁高は西側で30～40cmを測り、東側は10cm以下である。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面を使用しており、極めてよく踏み固められている。面は全体に平坦である。

柱穴　主柱穴が4本確認された。住居の平面形状に沿うように配されているため、位置関係が整然としていない。柱穴間の距離は、柱穴1～2で3.54m、柱穴1～3で2.24mを測る。柱穴の掘り方は、住居が大型であることもあって径が大きく、深い。その傾向は南側の主柱穴に顕著である。掘り方・柱痕の形状から、柱穴4の柱材には板材が使用されていたことが推定され、柱穴1・2は丸太材が推定される。

入口施設　南壁の中央から約20cm東に寄って、60cm内側に東西に並列する一対のピットがある。ピット間の距離は68cmを測る。上端で24×12cmの長円形で深さ25～30cmで南に向けて斜めに掘られている。

炉跡　地床炉が2基確認されている。1号炉は長軸の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線から15cm北側に位置している。炉床は75×50cmの南北に長い長円形で、その中心からやや南に寄った位置に長さ35cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。炉の南側の床面には径1mほどの範囲に炭化物・灰が認められる。

2号炉は、柱穴4の北側にある。60×40cmほどの範囲の床面がよく焼けている。炉石は認められない。炉床面の西側には、範囲は狭いが、1号炉の場合と同じように炭化物の広がりが認められる。

貯蔵穴　南壁の南東コーナー寄りに位置している。上端で径45cmの円形で、深さ43cmを測る。整った形状で、床面もほぼ平らである。この土壙の周囲には、高さ5cm、据部で幅30cmの土堤状の高まりがめぐらされている。

遺物の出土状態　出土した遺物はわずかで、土器

は、破片が主体である。壺(4)は、柱穴1の北側の床面上から出土した大型品で唯一全周するが、上半部を欠いている。

時期　弥生後期第2段階

天引5号住居跡

図27・147　PL22・89　観察表13頁

位置　27—40　4号住居の北側に隣接し、尾根の中心からは、東にずれている。付近は南西から北東に下がる傾斜面で、傾斜角がきつくなり始める間際の位置である。

形状　長軸を南北方向とする隅丸長方形プラン。長軸長6.45m、短軸長4.3m（推定）を測り、長細いプランが特徴的である。各辺は、極めてわずかであるが弧状を描いている。

面積　25.91m²（復元推定）　**方位**　N 1°E

周壁・周溝　後世の削平のため北側から東側にかけての周壁を失っている。最も残りのよい南東側で壁高20cmを測る。

周溝は確認されなかった。

床面　黄褐色ロームの地山面を使用し、比較的よく踏み固められている。実測図を見ると、西から東にかけて面が下がっていることになるが、地形の傾斜に沿って後世の削平が及んだためのものである。

柱穴　主柱穴が4本確認された。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.90m、柱穴1～3で1.62mを測り、東西方向の幅の狭さが注意される。掘り方の形状は、柱穴3を除くといずれも東西方向に長い長円形を呈している。柱痕の形状も同様であり、柱材に板材が使用されていたことを推測させる。

入口施設　南壁の中心から約1m内側に、上端で70×50cm、深さ38cmの東西に長い長円形の土壙が認められる。東西の両端に柱を設置して埋め戻せば、構造的には通例の一対の小ピットの形式と同じものと考えられよう。

炉跡　2基の地床炉が確認された。1号炉は、長軸の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側40cmに位置している。炉床は平坦で、径約50cmの円形を呈している。その南端に長さ30cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。

2号炉は西側の主柱穴を結んだ線上で、柱穴4の北側に位置している。径46cmの範囲の床面が焼けており、特に窪みは認められない。

貯蔵穴　南壁の中心から約70cm東に寄った壁際に位置している。上端で60×70cmの長円形で、深さ約30cmを測る。土壙内の南寄りには一段深く掘り下げた2個の小ピットが認められるが、時期的関係を確認できていない。また、土壙周囲には、その外側の住居床面とは区別できる幅30cm前後の帯状の区画が認められるが、前記の4号住居例のように土堤状の高まりにはなっていない。

遺物の出土状態　出土遺物は皆無に近い。住居の廃棄に際して、主要遺物が選び出されたことが推測される。

時期　弥生後期第2～3段階

天引12号住居跡

図28・147　PL20・87　観察表13頁

位置　20—40　南北尾根の先端寄りに、住居の集中部分から離れて単独で位置している。南東から北西にかなりの角度をもって下がる斜面上にあり、立地条件は悪い。

形状　長軸を北西から南東に取り、周辺の同時期の住居との違いが目立つ。長軸長約3.7m（主柱穴との位置から推定）、短軸長2.6mを測り、最も小規模の部類に属する。

面積　10.57m²（復元推定）　**方位**　N35°E

周壁・周溝　南東壁は40cm近くの壁高を測るが、北西側に行くにつれて削平が深まり、北西壁は完全に失っている。

周溝は確認されなかった。

埋没土　火災住居のため、他の住居と異なる埋没状況が観察された。壁寄りの床面上には、厚さ10cm以上の焼土が炭化材を覆うようにして認められた。火災中に焼土化したものであることは明らかである。屋根にのせられていた土が火災とともに崩落し

熱を受けたと考えるのが自然であろう。焼土より上の埋没土はにぶい黄褐色土を主体としており、主として南東側からの流れ込みによる埋没過程を示している。　床面　黄褐色ロームの地山面を使用している。

柱穴　やや明瞭さに欠けるが、東側を除く3本の主柱穴が確認された。柱穴の掘り方は南東側のものが深くしっかりしているのに対し、北西側のものは貧弱である。

炉跡　長軸方向の中軸線からやや北東側にずれ、北西側の主柱穴を結んだ線の外側80cmに位置している。近年の削平が床面下にまで達しているため、焼土化した炉床の位置のみが確認された。

貯蔵穴　住居の南コーナーに接して、上端で30×45cm、深さ32cmの不整長円形の土壙が認められる。

遺物の出土状態　火災のため住居内は焼土、灰、炭化物が床面上に目立った。しかし、住居に直接伴う遺物はわずかであった。北西半分が消滅していることも原因しているが、それを考慮しても本来的に少なかったことが推測される。完形品はわずか1点(2)で、貯蔵穴の脇から出土している。床面直上であり、原位置を保っているものと思われる。

時期　弥生後期第3段階

天引19号住居跡

図29・147・211　PL22・87・119　観察表14・48頁

位置　31－44　調査地中央の南北の尾根の南寄りの東西の中心に位置する。

形状　長軸を南北方向とするやや隅丸の長方形プラン。長軸長5.34m、短軸長4.26mを測る。

面積　20.84m²（復元推定）　**方位**　N16°E

周壁・周溝　近年の耕作による深い溝が3条東西に入っているため、住居の南寄りの周壁を大きく失っているが、他は全体に比較的よく残っており、壁高25cmほどを測る。

周溝は確認されなかった。

なお、周壁に沿って北側では径約10cmほどの小ピットが適当な間隔をおいて認められた。

埋没土　黒褐色土及び暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面　断面図（A-A'、D-D'）では、床面が客土により貼り床に造られていることを示したが、長期間の使用による堆積あるいはよごれを誤認していることも考えられる。面はよく踏み固められており、平坦である。

柱穴　主柱穴は4本と推定されるが、南東の1本は耕作溝との重複のため消失している。3本は住居の対角線上にあり、規則的な配置が窺われる。柱穴間の距離は、柱穴1～2で1.92m、柱穴2～3で2.52mを測る。いずれの柱穴の掘り方もしっかりしており、深さ60cm以上である。その形状から、柱材には丸太材が使用されていたことが推定される。

入口施設　南壁の中心から50～60cm内側に、東西に30cmの距離をおいて並列する一対のピットがある。調査記録の不備から西側のピットの形状は明らかでないが、位置関係から入口施設に伴うものとしてよいであろう。

ところで、このピットの北側に接するように高さ5～10cmの帯状の高まりが認められた。類似の構造を他に見ないので、いかなる機能かを推定することがむずかしい。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側60cmにある。炉床は55cmの円形で、その南端に長さ34cmの棒状の炉石が長軸を東西にして据えられていた。炉の周囲には2.5×2mの範囲にわたって炭化物、灰の広がりが認められた。

遺物の出土状態　一部を除けば、住居の遺存状況は比較的よかったにもかかわらず、遺物は極めて少なかった。出土したいくつかのものはすべて破片、あるいは部分品である。住居の廃棄に伴い移動先へ運び出されたものと推測される。

時期　弥生後期第2～3段階？

天引22号住居跡

図30・148・149・150・211　PL22・87・88・89・119　観察表14・48頁

位置　36—43　住居密集地の北寄りで、南西から北東へゆるやかに下がる斜面上に位置している。

形状　長軸を南北方向にとるやや隅丸の長方形プランで、形が整っている。長軸長5.35m、短軸長4.73mを測り、比較的正方形に近い点が注意される。

面積　22.27m²（復元推定）　**方位**　N 4°W

周壁・周溝　重複する23号住居により南壁の大半を失っている以外はよく残っていた。西壁で高さ46cmを測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　基本的には暗褐色土を主体とし、周囲からの流れ込みによる埋没過程を示していたが、住居南西部に不自然な状況が認められた。そこは、埋没後に掘り返されたような状況を示していた。この部分に、住居の火災に起因するものではない焼土、炭化物がまとまって確認されている。

床面　黄褐色ロームの地山面を使用しており、よく踏み固められている。

柱穴　柱穴は確認されなかった。

入口施設　当遺跡で一般的な入口施設は確認されなかった。ただし、南壁の中心に接して認められる上端で100×80cm、深さ35cmの床下土壙が、あるいは入口施設に伴うものである可能性もある。

貯蔵穴　南壁の中心から約70cm東に寄った壁際に上端で60×45cm、深さ40cmの長円形土壙が認められる。

遺物の出土状態　大量の土器が出土している。その多くは、住居廃棄後に投棄された、覆土中からの出土品であり、全て破損品あるいは破片であった。住居に直接伴うものの中には、完形に復せるものは認められなかった。唯一これに近い大型壺(16)が中央寄りから出土している。石器類も多く出土しているが、やはり廃絶後に投棄されたものが大半である。

その他の遺構との重複関係　後出する23・30号住居と北～北東寄りで重複している。

時期　弥生後期第２段階

天引42号住居跡

図31・32・33・151・152・153・212　PL23・24・89・90・92・120

観察表15・49頁

位置　49—44　調査地の最南端に位置している。住居の付近は平坦面であるが、これより東へ行くとまもなく東へ急激に下がる傾斜面となっている。

形状　長軸を南北方向に取るやや隅丸の長方形プラン。長軸長5.43m、短軸長4.63mを測る。北西隅に若干ゆがみがあるが、全体的には整った形状である。

面積　22.76m²　**方位**　N15°E

周壁・周溝　周壁は全体によく残っており、最もよい西側では、壁高40cmを測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土、暗茶褐色土を主体とし、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。また、焼失家屋であったため、床面直上の覆土中には、多量の炭化物・焼土が含まれていた。

床面及び床下構造　主要部分は黄褐色ロームの地山面を使用しているが、西を除く壁に沿っては、幅70～80cm、深さ15cm前後の帯状に掘り下げて土を入れ替えて貼り床構造にしていた。面は全体に踏み固められており、平坦である。ただし、北西と南西の隅部２ケ所には、床面より５～10cm高くしたベッド状遺構が確認された。

柱穴　４本の主柱穴が確認された。柱穴間の距離は柱穴１～２で2.40m、柱穴３～４で2.82m、柱穴１～３で1.95m、柱穴２～４で1.65mを測り、やや規則性に欠ける。柱穴はいずれも70cm以上の深さを有し、しっかりしている。掘り方及び柱痕の形状を見ると、柱穴１・２・４が柱材に板材を使用していたことが推定される。その据え方は、いずれも東西方向を長く取るものであった。一方、柱穴３は前３者ほど明瞭でないが、南北方向に長い据え方をした板材の使用が推定される。

入口施設　南壁のほぼ中心から95cm内側に入口施設に伴うと思われる円形ピットが１個確認された。上端で30×40cmの長軸方向に長い長円形で、深さ46

cmを測り、外側に向けて斜めに掘られていた。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線から40cm外側に位置している。炉床は径35cmの円形で、その南端に長さ32cmの棒状の結晶片岩が長軸を東西にして据えられていた。なお、炉石の背後にあたる部分も南へ20cmほどまで床面が焼けていた。炉石の位置を北側へ移動していることが推測された。

一方、柱穴4の北西側の床面にも焼けた面が認められる。副次的な炉がよく確認される位置なので、これもその可能性が強い。ただし、本住居の場合、火災にあっているので、その際強い熱を受けた部分とも考えられる。炉石は確認されていない。

貯蔵穴　推定されるものが2ケ所ある。いずれも南壁の壁際である。1つは入口施設の東脇にあり、上端で62×46cmの長円形で、深さ57cmを測る。底面に至るまでに極端にすぼまることや、住居内側に向けて斜めに掘り込まれていることを踏まえると、別の用途、機能を考える必要もありそうである。あるいは、2つの貯蔵穴を用途に応じて使い分けていることも考えられる。中途から実用品の可能性が少ない小型甕の完形品が出土している。

この土壙の東85cmにあるものの方が、形状から見てよりふさわしい。上端で52×48cmの東西に長い長円形で、2段に掘り込まれている。深さは24cmを測る。

ベッド状遺構　住居の北西隅と南西隅の2ケ所に認められる。北西隅のものは、柱穴3を基点とし、これと北・西壁を結んだ部分を5～10cm高い平坦面に造っている。面は比較的よく踏み固められている。平面規模は、南北1.5m、東西0.95mを測る。南西隅のものは、柱穴4を基点とし、西・南壁と結んだ部分を5～10cm高い平坦面に造っており、北西隅のものと同一の構造である。平面規模は、東西1.6m、南1.23mを測る。

なお、北東隅にも若干の高まりが認められたが、前2者ほど明瞭なものではない。あるいは、当初存在したものが取り除かれた痕跡を示すものかもしれない。

炭化物の出土状態　住居内の床面上には、火災に起因する炭化物が多く認められた。しかし、上屋の構造を推定させるほどの遺存状態ではなかった。出土したのは、主として主柱穴に囲まれた部分からであり、幅10cm以下のものが中心である。炭化材の走向を見てみると、長軸方向の中心線寄りには、これと平行する方向のものが目立ち、この位置から離れると、これに直交する方向の炭化材が目につく。

遺物の出土状態　土器を中心に多量の遺物が出土している。しかし、住居に直接伴うものとなると少なく、完形品は前述した貯蔵穴からの小型甕(9)1点である。床面上から出土した5・6も欠損しており本来的な実用には耐えない。少なくとも、住居内で使用されていた主要土器は、火災中あるいは火災以前に持ち出されたと考えられよう。

これに対して、住居廃絶後、一定の時間を経て投棄されたものが認められる。1・2・4・7・8・14・15等が主なものである。これらは、その出土状態から、住居の南側から投げ込まれたものであることがわかる。これ以外の破片、石器類にも同様のものが多量に認められる。

時期　弥生後期第3段階

天引43号住居跡

図37・154・212　PL25・91・120　観察表17・50頁

位置　46—46　調査地の南端寄りの平坦面の中心に位置している。

形状　長軸を南北方向に取るやや隅丸の長方形プランで、形が整っている。長軸長6.50m、短軸長5.23mを測り、比較的大型の部類に属している。

面積　31.12m²（復元推定）　**方位**　N 9°W

周壁・周溝　周壁は住居の北東隅を重複により失っているのを除けば全体に確認された。壁高は西側の25cmを最大に、東に行くにつれて低くなり、東壁中心では5cmとわずかである。

周溝は確認されなかった。

埋没土　わずかな情報にすぎないが、暗褐色土、

褐色土が主体であり、自然の埋没が推定される。

床面及び床下構造　住居内部に後出する57号住居全体が重複しているため、床面の確認部分はわずかである。基本的には、黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しているが、東壁に沿っては帯状に土を入れ替えている部分が認められた。

柱穴　主柱穴４本が確認された。住居の対角線上に規則的に配置されている。柱穴間の距離は、柱穴１～２で2.96m、柱穴１～３で2.40mを測る。掘り方及び柱痕の形状からすると、丸太材が柱材として使用されていたことが推定される。

入口施設　南壁の中心から93cm内側に入口施設に伴うと思われる１個のピットがある。上端で径41cm、深さ20cmを測り、外側に向けて斜めに掘られている。

貯蔵穴　南壁の中央から西へ1.2m寄った壁際で確認された。上端で67×52cmの東西に長い長円形で、深さ約40cmの形の整ったもので、底面はほぼ平らである。上端の縁部に沿っては、25～30cmで高さ10cmの上堤状の高まりが南壁に取り付くように馬蹄形状にめぐらされている。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側70cmの位置にある。炉床は68×49cmの南北方向に長い長円形で、浅い皿状に窪んでいる。その南端には、長さ29cmの棒状を呈する結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。

粘土塊の出土　貯蔵穴を取り巻く堤の西側の床面上から粘土塊が確認されている。やや青味をおびた白色粘土で、何らかの材料として使用されるものが、ここに仮置きされていた状態を示している。

遺物の出土状態　出土した遺物はきわめてわずかである。しかも、床面上から出土したものはすべて破片である。(4)の高坏は、柱穴４の掘り方内からの出土であり、柱設置時のものか、柱痕部分への流れ込みかは不明である。

その他の遺構との重複関係　後出する57号住居と中央部分で、１号方形周溝墓と北東隅で重複している。

時期　弥生後期第３段階

天引53号住居跡

図35・36・37・156・213　PL26・27・92・120・131　観察表17・50頁

位置　47—44　調査地の南端寄り、42号住居の北側に隣接する。付近は平坦面の東縁部にあたっており、住居の位置より東へ行くにつれ急激に角度をましている。

形状　長軸を南北方向とする整った形の長方形プラン。西壁より東壁の方が30cmほど長いので、厳密には台形である。長軸長6.75m、短軸長5.33mを測る。

面積　32.03㎡　　**方位**　N11°E

周壁・周溝　周壁は全体によく遺存しており、削平が最も深く及んでいる東側でも壁高20cmを測り、残りのよい西側では40cmを測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗茶褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面及び床下構造　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められている。ただし、東壁に沿っては幅約60cm、深さ13cmの溝状に掘り下げて土を入れ替えて床面を造っている。同様に南西隅寄りの床面も2.2×1.9mの範囲を約30cm掘り下げて土を入れ替えている。面は比較的平坦である。

柱穴　主柱穴は４本で、ほぼ住居の対角線上に整然と配置されている。柱穴間の距離は、柱穴１～２で3.17m、柱穴１～３で1.92mを測る。掘り方は上端で50～60cmの正円形で、深さ70cm前後を有する。柱痕の形状もあわせると、柱材には丸太材が使用されていたことが推測される。柱穴３の中途から柱の根固めに使用されたと思われる円礫２個（そのうち１点は27の台石）が確認されている。

入口施設　南壁の中央から内側に60cmの床面上に、上端で径40cm、深さ16cmのピットが外側に向けて斜めに掘られている。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側80cmに位置している。炉床は径55cmほどの正円形に近いもので、浅い鍋底状に10cmほど窪

んでいる。その南端寄りに、長さ40cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。

なお、炉に接した北側の床面は、かき出された炭化物及び灰が一面に認められた。

これとは別に、柱穴２の北東側に焼土化した床面が認められ、その東側には約1×0.8mの範囲に炭化物の広がりが認められる。複次的な炉として使用されていた可能性が強い。

貯蔵穴　南壁の中心から1.30m西に寄った壁際に上端で70×60cmの半円形で、深さ20cmの土壙がある。形は比較的整っており、南壁を若干えぐるように掘られている。この土壙を取り囲むように、幅20cm前後、高さ10cmほどの堤が取り付けられている。ただし、この高まりは、南壁に近づくにつれて低くなり、床面と同一面になっている。

粘土塊の出土　住居内の２ケ所の床面上に粘土塊が認められた。１つは、貯蔵穴をめぐる堤の西側部分で、70×70cmの範囲に最大厚12cmの断面山形を呈する。もう１つは、柱穴２の西側で、３つに分散していた。そのうち柱穴寄りのものが大きい塊で、40×45cmの範囲で、厚さ５cmを測る。これらはそれぞれの部分で直接機能していたものとは考えられず、何らかの素材となる青灰色粘土が仮置きされていた状態を推測させる。

遺物の出土状態　２つの特徴的な遺物のあり方が注目された。１つは、出土する土器の量が少なく、しかも破片が主体であり、完形に復せるものが１点もないことである。使用されていた主要な土器は、住居の廃絶に伴い別の場所に持ち出されたのであろう。

もう１つの特徴は、ミニチュア土器(9･24)、土製匙(22)、土製紡錘車(10)、土製勾玉(11･12･13･23)等の日常品でない特殊な遺物が目立つ点である。これらのうち、９・10・11・13は明らかに床面直上であり、住居に直接伴っていた可能性が強い。

その他の遺構との重複関係　西壁で後出する52号住居と、北側で先行する縄文中期の127号住居と重複している。

時期　弥生後期第３段階

天引55号住居跡

図39･40･154･155･216　PL28・55・91・92・120　観察表19・50頁

位置　43―43　調査地南の平坦面の東寄りにあり、東側は徐々に角度を増す斜面へと続いている。53号住居の北側に隣接している。

形状　長軸を南北方向にとる長方形プランで形が整っている。長軸長8.17m、短軸長5.23mの規模で、最も縦長で大型の部類に属している。

面積　43.03m²　　**方位**　N25°E

周壁・周溝　周壁は全体によく残っており、壁高は西側で40cm前後、東側で25cm前後を測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒褐色土と暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面及び床下構造　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められている。柱穴１と柱穴２を結んだ線に沿っては、幅60cm、深さ約10cmの溝が穿たれ、土が入れ替えられていた。南東隅で確認されたベッド状遺構部分を除けば、面は比較的平らである。

柱穴　４本の主柱穴が確認された。平面プランに合うように住居の対角線状に規則的に配置されている。柱穴間の距離は、柱穴１～２で4.15m、柱穴１～３で2.48mを測る。深さはいずれも50～60cmを有している。掘り方の形状を踏まえると、柱材には丸太材が使用されていたことが推測される。

入口施設　南壁の中央から約75cm内側に一対の円形ピットが穿たれている。ピットは上端で径40cm、深さ27cmを測り、東西に44cmの間隔をおいている。

炉跡　２ケ所で確認された。１つは、長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線から70cm外側に位置している。炉床は径64cmの不整円形で、わずかに窪んでいる。その南端には、長さ49cmの結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。炉の北側の周囲の床面には、かき出された炭化物が一面に認め

られる。

もう1つは、柱穴2の北側1.7mに位置している。長さ32cmの結晶片岩の炉石が、長軸を南北にして据えられているが、炉床は明瞭でない。

貯蔵穴　南壁の中心から約1.6m西へ寄った壁際に位置している。上端で径56cm、深さ50cmを測り、整った形でしっかりしている。土壌の南端はわずかに住居の南壁をえぐるように掘られている。土壌の周囲には、縁部に沿って幅25cmで高さ5cmの堤状の高まりが住居南壁に取り付くように馬締形にめぐる。

ベッド状遺構　住居の南東隅には、2.0×1.4mの東西に長い長方形で、高さ15cm前後の段がある。上面は平坦であり、床面ほどではないが固くしまっている。断ち割り調査により盛土により造成されたものであることがわかった。

粘土塊の出土　貯蔵穴をめぐる堤の西側部分に接して、青灰色粘土の塊が確認された。径50cmほどの範囲で、厚さ11cmを測る。前述した天引22・43・53号住居の出土位置と同一の位置であり、その用途を考える上で参考になるかもしれない。

遺物の出土状態　出土した遺物の大半は、覆土中からのもので、住居に直接伴うものではない。しかも出土位置が南壁寄りに集中していることから、住居廃絶後ほどなくして投棄されたものと思われる。1号炉の端から出土した片口(18)は、位置的には住居に伴う可能性が強いが、破損品である。これ以外には、住居に直接伴うと思われる土器類はまったく認められない。

北壁に接するように炉の北側から出土した台石は、床面に据えられたような状態であった。

時期　弥生後期第3段階

天引56号住居跡

図41・42・157・213　PL27・93・120　観察表20・50頁

位置　46—45　調査地南の平坦面の東寄りに位置している。53号住居の西側であり、住居どうしがぶつかりそうなくらい接近している。

形状　長軸を南北方向にとる長方形プランで、東壁にゆがみがあるため形は整っていない。長軸長7.21m、短軸長5.60mを測る。

面積　37.10㎡（復元推定）　　**方位**　N17°E

周壁・周溝　その他の遺構との重複部分があるため、周壁の遺存部分は4/5あまりである。壁高の残り具合は悪く、最もよい西壁でも16cm前後、東壁では10cm以下である。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗茶褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、比較的よく踏み固められている。面は比較的平坦である。

柱穴　主柱穴が4本確認された。住居のゆがみに応ずるように柱穴の位置にも若干のズレがみられる。西側の柱穴より東側の柱穴のほうが壁に寄っているてん、南東の柱穴が南に寄っているてんがズレの主な原因である。柱穴間の距離は柱穴1～2で3.90m、柱穴1～3で3.34mを測る。柱穴2が土壌との重複のため不明確であるのを除くと、他の3つの柱穴の掘り方は、東西方向に長い形状を示しており、柱材として板材が使用されていた可能性が強い。

炉跡　長軸方向の中軸線上で北側の主柱穴を結んだ線の外側80cmに位置している。炉床は73×54cmの南北に長い長円形で、中心寄りで8cmほど窪み、よく焼けている。炉石は確認されなかった。廃絶時に持ち去られたのであろうか。炉の周囲の床面は2.0×1.5mほどの範囲に炭化物が散乱していた。

これとは別に柱穴4の北側0.9mの床面が赤く焼けていた。この位置に副次的に炉を設置している事例が多いので、同様のものと考えられる。

貯蔵穴　南壁の中心から東へ1.3m寄った壁際に設けられている。上端で径42cmの不整円形で、深さ40cmを測り、底面はほぼ平らである。

遺物の出土状態　出土した遺物はきわめてわずかであり、しかも大半が破片で、完形に復せるものは1点もない。

その他の遺構との重複関係　後出する1号方形周溝墓、52号住居、25号土壙と重複し、さらに近年の耕作に伴う溝が南北に縦断している。

時期　弥生後期第2段階

天引58号住居跡

図34・157・214　PL29・93・121　観察表21・51頁

位置　48—45　調査地の最も南寄りの平坦面上に位置する。

形状　長軸を南北方向にとる隅丸長方形プランで、各辺は外側に向けてゆるやかな弧状に張り出している。長軸長4.19m、短軸長3.17mを測る。

面積　10.84m²　　**方位**　N7°E

周壁・周溝　周壁は全体に遺存していた。平坦面といっても西から東にゆるやかに下がっているため、東寄りの方が旧地表の削平が深く及んでいた。壁高は西側で35cm、東側で20cmを残していた。

周溝は確認されなかった。

埋没土　覆土の上層は褐色土を主体としており自然な埋没過程を示しているが、下層はやや不自然な埋没状態である。それは、床面に散乱する焼土、炭化物の存在からもわかるように、本住居が火災住居の可能性が強いことと関係しているかもしれない。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、比較的よく踏み固められている。面は北から南に向けて徐々に低くなっており、両端で10cm近い差がある。

床面直上には焼土ブロック、焼土粒、炭化物粒が目立ち、既述のように火災住居と思われる。

柱穴　確認されなかった。

入口施設　南壁の中心から54cm内側の床面上に1個のピットがある。上端で径30cmの円形で、深さ約50cmを測り、外側に向けて斜めに掘られている。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北壁から1.1m内側にある。炉床は50×40cmの南北方向に長い長円形で、5cmあまり窪んでいる。その南端には、長さ42cmの結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。

貯蔵穴　南壁の中心から東へ58cm寄った壁際に位置している。上端で63×50cmの東西方向に長い不整な長円形で深さ35cmを測る。

遺物の出土状態　焼失住居にもかかわらず、住居内の床面上から出土した遺物はきわめて少なかった。土器としては、2・9があるがいずれも小破片である。その他はすべて覆土中からの出土である。その他、覆土中からは石斧の破損品(12・13)、砥石類、自然礫等の出土が目立った。土器とともに廃絶後の竪穴内に投棄されたものと思われる。

その他の遺構との重複関係　先行する縄文期の土壙と重複していた。

時期　弥生後期第2段階

天引60号住居跡

図47・155・214　PL30・94・97・121　観察表21・51頁

位置　42—44　調査地南端の平坦面の北東寄りに位置している。住居の北東側は、南西から北東へと傾斜している。

形状　長軸を南北方向にとる隅丸長方形プラン。各辺は若干外側へふくらむ弧状を呈する。形は整っている方であるが、南西側の輪郭に少しゆがみが見られる。長軸長5.26m、短軸長4.13mを測る。

面積　18.47m²（復元推定）　　**方位**　N15°E

周壁・周堀　平坦面の先端に位置するため、後世の削平が深く及んでいる。壁高は、南西側で15cm、北東側で6cmを測る。

周堀は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体とし、自然の埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用している。比較的よく踏み固められている。面は南から北に向けて徐々に低くなっており、両端で10cm近い差がある。

柱穴　主柱穴が4本確認された。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.80m、柱穴1～3で1.52mを測る。柱穴全体が若干東に寄っている。掘り方及び柱痕の形状から、柱穴3・4は柱材として板材が使用されていたことが明らかであるのに対し、柱穴1・2は

丸太材の可能性が強い。

入口施設　南壁のほぼ中心から41cm内側の床面上に上端で径31cm、深さ15cmのピットが掘られている。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側25cmに位置する。炉床は径47cmの円形で、4cmほど窪んでいる。炉石は確認されなかった。後世の削平に伴い失ったものと思われる。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置している。上端で28×32cmの不整円形で、深さ30cmを有している。

床下土壙　南側の主柱穴を結んだ線のほぼ中央の床面下で確認された上壇は、径55cmの円形で深さ約40cmを有していた。覆土の上層は埋め戻しにより、住居床面をつくっている。土壙が住居築成時に穿たれたものであることを推測させる。

遺物の出土状態　出土した遺物は極めてわずかである。しかも、床面直上からの出土は、3・5の2点である。図示したものはすべて破片であり、廃絶時に使用されていた遺物は、選び出されたことを推測させる。

その他の遺構との重複関係　後出する36・37号土壙と南西側で重複している。

時期　弥生後期第2段階

天引62号住居跡

図43・44・158・159・215　PL31・32・94・97・121　観察表21・51頁

位置　40－45　調査地南の平坦面の北寄りに位置し、住居の北東側は傾斜面となっている。

形状　長軸を南北方向に取る長方形プラン。長軸長7.1m、短軸長5.2mで、形は比較的よく整っている。ただし、南辺は西から東へ行くにつれて若干北へ振れているため、西辺より東辺のほうが短くなっている。

面積　33.64m²（復元推定）　**方位**　N19°E

周壁・周溝　周壁は北東側を重複により欠いている。壁高は、西側で50cm前後、東側で30cm前後を測り、最も遺存状態のよい部類に属している。

周溝は確認されなかった。

埋没土　住居の壁寄りに暗褐色土の自然埋没が少し進んだ後に、黄褐色土、あるいは黄褐色土と暗褐色土・黒褐色土のブロック状の混土層が厚く流れ込むように埋没している点が注目された。急激な埋没過程であったことと、それが自然埋没の結果ではないことを示している。なお、床面に近い部分で認められる黄褐色土（5層）は、均質な土質構成であり、住居内の周縁部に厚く認められる。最近の住居跡調査で指摘されるようになった土屋根の可能性も検討する必要があろう。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。南東隅のベッド状遺構の部分を除けば、面は全体に比較的平坦である。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。住居の対角線上に正しく位置しており、柱穴間の距離は、柱穴1～2で3.77m、柱穴1～3で2.38mを測る。柱穴1の確認は、重複により床面下まで削平された後であるため、形状等不分明な点が多い。これを除いた3つの柱穴は、いずれも柱材として板材が使用されていたことを明確に知ることができた。いずれの柱穴も東西方向に長軸を取って掘られている。

入口施設　南壁の中心から60cm内側の床面上に東西に60cmの間隔をあけて一対のピットが認められる。ピットの位置は南壁と平行するように配置されているため、住居の東西方向の中心軸とは平行にならない。ピットは、上端で30×10～20cmの南北方向に長い長円形で、深さ10cm前後である。

炉跡　南北方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の北側65cmに位置している。炉床は85×69cmの南北方向に長い長円形で、中心寄りで10cmほど窪んでいる。炉石は確認されなかった。炉の北側の床面には炭化物が認められた。これとは別に、柱穴2の北1.1mの位置に、もう1つの炉が認められる。炉床は40×57cmの東西方向に長い長円形で中心寄りが約5cm窪んでいる。炉石は認められなかった。

貯蔵穴　南壁の中心から約80cm西に寄った壁際に位置している。上端で径50cmの円形に近いもので、深さ50cmを測る。形が整っており、しっかりしている。土壙のまわりには、北側から西側にかけて幅約

40cm高さ10cmの土堤状の高まりがめぐっている。これが東側に延びないのは、入口施設部分と重なってしまうためと思われる。

ベッド状遺構　住居の南東隅に位置している。1.94×1.32mの東西方向に長い長方形で、その北西隅は丸みをおびている。高さは約15cmで、黄褐色ロームの盛土により築成されており、上面は平坦でよく踏み固められている。

遺物の出土状態　完形に復せるような土器は、北東隅の覆土中から出土したミニチュア土器(12)を除けば皆無であった。ただし、部分的に全周するような大振りの破片が目立った。

その他の遺構との重複関係　南東側で後出する87号住居と重複していた。

時期　弥生後期第3段階

天引65号住居跡

図44・45・46・159・160・161・215　PL33・95・97・121

観察表23・52頁

位置　43—46　調査地南寄りの平坦面の中央部に位置している。

形状　長軸を南北方向にとる長方形プランで、若干平行四辺形気味である。長軸長9.12m、短軸長6.80mで、向かい合う2辺の長さはほぼ等しく平行である。隅部は丸みをまったく持たない。本遺跡の同時期の住居では、最も大型の部類に属する。

面積　61.42m²（復元推定）　**方位**　N 4°E

周壁・周溝　住居の南西側に重複により欠ける部分があるが、他はよく残っている。壁高は、全体に30cm前後を有している。

周溝は、重複のため確認できなかった南西部分を除けば、幅約14cm、深さ10～15cmのものが確認された。

埋没土　暗褐色土及び暗茶褐色土を主体としており、全体的に炭化物の混入が目立った。この炭化物は、本住居が焼失住居であることに起因するものと思われる。床面から炭化材と思われるものが複数箇所認められた。周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程が推測される。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められている。住居の北東隅周辺が5～10cm高いのを除けば、他は比較的平坦である。ただし、北東隅も明瞭な段をなしているわけではない。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。住居の対角線上にほぼ規則的に配置されている。柱穴間の距離は柱穴1～2で4.90m、柱穴1～3で2.86mを測る。掘り方及び柱痕の形状からすると、柱穴1・2は柱材として板材が使用されていたことが推定され、柱穴3もその可能性が強い。これに対して柱穴4は丸太材であった可能性が強い。

一方、東西の両壁のほぼ中心に沿って各1個ずつのピットが確認されている。上端で径30cm前後、深さ10～15cmを測る。側柱穴が推定される。

入口施設　南壁のほぼ中心から55cm内側の床面上に上端で35×40cmの円形で、深さ20cmのピットが1つ認められた。しかし、壁との距離が近すぎることと、深さが十分でないことから、別な機能に属する可能性もある。むしろ、南壁からの距離が1.95mと離れているが、東西に75cmの距離をあけて認められる一対のピットの方が、入口施設に伴うものとしてふさわしい。深さも西側が20cm、東側が40cmを測り、十分である。

炉跡　地床炉が3ケ所に設けられていた。1号炉は長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線から74cm北側に位置している。炉床は径約60cmの円形で、窪みはほとんど認められない。その南縁部には、長さ36.5cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。炉の北側に接する床面には、炭化物、灰がわずかに散乱していた。

2号炉は、柱穴2の北側1.1mに位置している。炉床は径52cmの不整円形で、中央で5cmほど窪んでいる。その西縁部には、長さ34cmの棒状の結晶片岩が、長軸を南北にして据えられている。炉の東側に接する50×30cmの範囲の床面には、炭化物・灰が認められた。

3号炉は、住居の南西隅にある。炉床は径70cmの円形で、中央で10cmほど窪んでいる。その東縁部には、長さ45.5cmの棒状の結晶片岩が長軸を南北にして据えられている。炉の東側の床面には、30×50cmほどの範囲に炭化物・灰の散乱が認められた。

貯蔵穴　南壁の中心から70cm西へ寄った壁際に位置している。上端で径50cmほどの不整円形で、深さは50cmを測る。周囲の床面上には幅20～30cmで、高さ3cmほどの土堤状の高まりが馬蹄形状にめぐり、南壁に取り付いている。

粘土塊の出土　西壁の中心から90cm南に寄った壁際には、30×60cmの範囲に灰白色粘土が床面上で認められた。他の住居で認められているものほど純度の高いものではなく、暗黄褐色土と混在した状態であった。

遺物の出土状態　床面上から比較的まとまった量の土器が出土している。しかし、完形に復せるものはきわめて少ない。北壁際の床面から出土した甕(7)は、ミニチュア土器(22)とともに数少ない完形品である。また、北東隅寄りの床面から出土した大型壺の口縁(1)は、潰れた状態で出土している。火災後に、主要な土器は片付けられている可能性がある。

その他の遺構との重複関係　住居の南西側で後出する奈良・平安期の66・67号住居と重複している。

時期　弥生後期第3段階

天引74号住居跡

図48・164・216　PL32・94・122　観察表24・52頁

位置　43—41　調査地南の平坦面の東隅、すでに東へむけて傾斜が始まる斜面との境目に位置している。これより東側には同時期の住居は認められない。

形状　長軸を東西方向に取る長方形プラン。長軸長5.24m、短軸長4.47mを測り、南西隅がやや外側へふくらみ気味である。他の同時期の住居が長軸を南北方向に取るのが一般的であるのに対して東西方向に取っている理由は、住居の分布域の東端に位置していることと、東側で傾斜がきつくなっていることに求められよう。

面積　20.22m²（復元推定）　**方位**　W8°N

周壁・周溝　周壁は全体によく残っていた。壁高は西側で50cm前後、東側で25cm前後を測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。また、壁寄りの埋没土には炭化物の混入が目立った。廃絶後の竪穴をゴミ等の廃棄場所として利用していたことを示していると言えよう。一方、住居中心寄りの床面直上には褐色土に黄褐色土のブロック状のものの混在が目立つ土層（7層）が中心に向かって厚さ約10cmの山形をなすように広く認められた。堆積状態と土質から見て自然埋没土ではないので、人為的な埋め戻しあるいは土風根の崩落したもの等の原因が考えられよう。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。面は全体に平坦である。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。住居の対角線上に正しく位置しており、しっかりした掘り方を有している。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.25m、柱穴1～3で1.73mを測る。掘り方は上端で径約50cmの円形で、深さは70～80cmと深い。柱痕の形状からすると、柱材に丸太材が使用されていたことが推定される。

入口施設　確認されなかったが、住居の東側で傾斜がきつくなることと他の住居における位置を踏まえると、南側にあった可能性が強いと言えよう。

炉跡　長軸方向の中軸線上で西側の主柱穴を結んだ線の西側70cmに位置していた。炉床は径46cmの円形を呈しており、中央寄りがわずかに窪んでいる。その東端には、長さ36.5cmの棒状の結晶片岩が、長軸を南北にして据えられていた。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置している。上端で1辺43cmの隅丸方形で、深さ26cmを有している。比較的整った形状である。土壙の周囲には幅35cm前後で高さ5cmの土堤状の高まりがめぐらされていた。

遺物の出土状態　覆土中からきわめて少量出土し

た。土器片のみであり、住居に直接伴うものは皆無に近かった。石器類も大半が覆土中からの出土である。住居廃絶時に使用されていた土器等がすべて戸外に持ち出されたことを明瞭に知ることができた。

その他の遺構との重複関係　西側で後出する平安期の72号住居と重複している。

時期　弥生後期第３段階？

天引84号住居跡

図49・50・51・162・163・216　PL34・96・97・122　観察表25・52頁

位置　40―48　調査地南寄りの平坦面の東側に位置している。

形状　長軸を南北方向に取る長方形プランで、形がよく整っている。長軸長6.86m、短軸長5.28mを測る。

面積　32.18m²　**方位**　N29°E

周壁・周溝　周壁は全体によく残っており、南側で壁高約40cm、西側で20cmを測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　基本的には、上層から暗褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土の順に堆積しており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　大半は黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められた。面は一様ではなく、中央寄りが周縁部より５cm前後高くなっていた。

柱穴　主柱穴は４本である。住居の対角線上の対称的な位置に正しく配されていた。柱穴間の距離は、柱穴１～２で3.12m、柱穴１～３で2.04mを有している。掘り方はいずれも東西方向に長い長円形で、柱痕の位置は住居の中心寄りに偏していた。いずれの柱穴も柱材として板材が使用されていることが推定された。これとは別に、東壁と西壁に沿って、主柱穴の位置に対応するように４本の柱穴が認められている。深さ60～90cmを測り、非常にしっかりしたものである。掘り方及び柱痕の形状から、柱材に丸太材が使用されていたことが推定される。

入口施設　南壁の中心から内側へ90cmの床面上に上端で径40cm、深さ40cmのピットが１つある。住居の外側に向けて斜めに掘られている。

炉跡　２ケ所に設置されていた。１号炉は長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の北側45cmに位置する。炉床は50cmの円形で、中央寄りがわずかに窪み、よく焼けていた。その南端には、長さ48cmの棒状の結晶片岩が長軸を東西にして据えられている。炉に接する北側の床面には、1.5×1.5mほどの範囲に炭化物・灰の散乱が認められた。

２号炉は、住居の東寄りで柱穴２の北１mに位置している。炉床は50×65cmの東西に長い長円形で、面はあまり明瞭に焼けていなかった。その西端には、長さ34.5cmの棒状の結晶片岩が、長軸を南北にして据えられていた。

貯蔵穴　南壁の中央から90cm西に寄った壁際に位置している。上端で64×35cmの東西に長い長円形（南側は住居南壁と一体のため直線をなす）で、深さ約60cmを測る。形も整っており、しっかりしたものである。この土壙のまわりには、幅30cm、高さ５cmほどの土堤状の高まりがめぐっている。

ベッド状遺構　住居の南東隅に築かれている。2.1×1.3mの東西に長い長方形で、盛土により高さ５～８cmにつくられている。上面は大略平坦であり、よく踏み固められていた。

粘土塊の出土　住居の南西隅、柱穴４の南西１mほどの床面から２ケ所に分かれて粘土塊が出土している。両方とも30×20cmほどの範囲で厚さ８cm、15cmを有していた。

遺物の出土状態　住居内からまとまった量の土器が出土しており、同時期のものとしては最も多い部類に属している。このうちほぼ完形に復せたものは8・13・15で、13が床面直上で、他は覆土中からである。他の土器も完形ではないが、部分的な欠損のみのものが目立った。このうち、1・8・10の３点は、柱穴３の掘り方内の中位にまとめて置いたような状態で出土している。

時期　弥生後期第３段階

天引85号住居跡

図52・161・217　PL35・98・99・122　観察表26・53頁

位置　39—50　調査地南の平坦面の西寄りに位置している。住居の西側（正確には北西側であるが、便宜上北東側を東、南西側を西として記述を進める）は徐々に下がっている。同時期の住居の分布の中では最も西に位置している。

形状　長軸を東西方向に取る若干隅丸の長方形プラン。各辺ともきわめてわずかではあるが、外側へ張り出し気味である。長軸長3.93m、短軸長3.48mを測る。

面積　11.24m²　　**方位**　N51°W

周壁・周溝　周壁は全体によく残っており、壁高は25～40cmを有していた。

周溝は確認されなかった。

埋没土　住居内の周縁部寄りを中心に最初に埋まった土は、明茶褐色土を中心とした比較的均質な土であり、周囲からの流れ込みによる自然の埋没を示している。ところが、これより上層の部分は、黄褐色ロームブロック、褐色土ブロック等の混入が目立つ乱れた土質内容であり、人為的な埋め戻し等の作用が働いていることを窺わせた。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。面は比較的平らであるが、東半分の方が5cm前後高くなっている。

柱穴　主柱穴が4本確認された。住居の対角線上から南北方向で若干外側に偏して配されている。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.04m、柱穴1～3で2.33mを測る。掘り方の形状を見ると柱穴2・3は明らかに南北方向に長い長円形で、柱穴1・4も円形というよりも長円形である。前者が柱材として板材を使用していた可能性は強く、後者もその可能性を残している。なお、北壁の中央に接する位置には、上端で径25cm、深さ30cmの円形ピットがある。補助柱穴の1つと考えられる。

入口施設　東壁の中央から80cm北側の床面上には、上端で40×20cmの南北に長い長円形で深さ50cmのピットがある。住居の外側に向けて斜めに穿たれている。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、西側の主柱穴を結んだ線から25cm外側に位置している。炉床は径50cmの円形で中心寄りがわずかに窪んでいる。面の焼け方は弱い。その東端には、長さ31.5cmの棒状の結晶片岩が長軸を南北方向にして据えられていた。

貯蔵穴　東壁の中心から60cm北に寄った壁際に位置している。上端で径50cmの半円形で、直線部分は住居の東壁と一致している。深さ22cmを測り、整った形をしている。土壙の周囲には高さ3cm前後の土堤状の高まりがめぐらされている。この高まりは、入口施設のピットの周りにまで及んでいる。

遺物の出土状態　住居内からは比較的多くの土器が出土している。唯一完形の台付甕(4)は南壁の東寄りの床面から出土している。この西側の床面上から出土した赤色塗彩の小型鉢(6)は破損品である。出土遺物の多くは東壁寄りの覆土中からの出土であり、廃絶後の窪穴内に投棄されたものと思われる。

その他の遺構との重複関係　東側で縄文期の101号住居と重複していた。

時期　弥生後期第2～3段階

天引91号住居跡

図53・164・217　PL30・99・122　観察表27・53頁

位置　44—42　調査地南の平坦面の東端に位置している。住居の東側は西から東に向けて傾斜が著しくなっている。これより東側には同時期の住居は存在していない。

形状　主軸を南北方向とし、隅部が若干丸みをおびる長方形プラン。正しい長方形ではなく、西壁の方が東壁より70cmほど（推定）長い。長軸長6.35m、短軸長4.48mを測る。

面積　24.39m²（復元推定）　　**方位**　N19°E

周壁・周溝　周壁は、後出する90号住居に切られているため2/5ほどを失っていた。壁高は南西側で3cm、北東側で14cmを測り、東へ行くに連れて後世の削平が深く及んでいることがわかる。

周溝は確認されなかった。

埋没土　褐色土と明褐色土を主体としており、主として西及び南西側からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められている。全体的には比較的平らであるが、北東隅付近が5～10cm低くなっている。

柱穴　主柱穴が4本確認された。住居の輪郭のゆがみに呼応しているため、対称的な位置には配置されない。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.42m、柱穴1～3で2.08mを測る。柱穴の掘り方は、西側の2本の方が、東側よりしっかりしている。掘り方及び柱痕の形状からは、柱穴4は明らかに板材が柱材として使用されていたことが推定され、柱穴2・3もその可能性がある。

炉跡　確認されなかった。ただし、北側にあたる柱穴1・2に囲まれた部分の床面に、灰・炭化物が広く散乱していたことから、この付近に存在したとして間違いない。床面が最近の掘り込みにより破壊されている柱穴1～2を結んだ線の北側部分を除けば、床面に炉の直接的な痕跡を示す部分が認められないので、この破壊部分に存在していた可能性が強い。

貯蔵穴　確認されなかった。少なくとも、南壁の中心から西側に配置されていないことは明らかである。

遺物の出土状態　出土した遺物は極めて少ない。完形に復せるものはまったくなく、いずれも小破片である。明らかに住居廃絶時に戸外に持ち出されたものと推定される。

その他の遺構との重複関係　後出する古墳時代前期の90号住居と東南側で重複している。

時期　弥生後期第2～3段階？

天引97号住居跡

図68　PL35

位置　35—42　調査地の中心寄りを南北にのびる尾根上の高まりの付け根部分の東側に位置している。付近は西から東へと下がる斜面上にあたている。　**形状**　住居の痕跡をかろうじて確認したに過ぎないため不明である。

埋没土・床面　後世の削平が床面下まで及んでいるため不明である。

遺物の出土状態　まったく確認されなかった。

その他の遺構との重複関係　北側及び東側を後出する古墳時代前期の34号住居と中期の35号住居に切られている。住居跡を弥生期のものと推定した根拠である。

時期　弥生後期

天引100号住居跡

図55・56・165・217　PL36・98・99・122　観察表27・53頁

位置　43—48　調査地南の平坦面の中心寄りに位置している。

形状　主軸を南北方向にとる若干隅丸気味の長方形プラン。重複のため遺存部分が少なく、不明確な部分が多い。長軸長8.33m、短軸長6.08mと推定される。

面積　43.73m²（復元推定）　**方位**　N25°E

周壁・周溝　後出する諸遺構と重複しているため、周壁が確認されたのは全体の°ほどである。壁高は、南西隅寄りが最もよく40cm、北東隅寄りは15cmほどである。

周溝は確認されなかった。

埋没土　観察できる部分が少なかったため、不明確である。住居の北寄りでは、暗茶褐色土にロームブロックを多く含むものを主体としていることから、自然の埋没過程を示す積極的な状況は認められない。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。面は比較的平らである。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。柱穴の確認面が、柱穴3を除くとすべて、後出する住居の床面下であったため、痕跡に過ぎないものである。位置関係からすると柱穴4の位置がやや不自然であり、あ

るいは主柱穴ではないかもしれない。あとの3個は比較的規則的な位置関係を示していることから、柱穴としてよいであろう。

入口施設　南壁の中心から西へ50cm、北へ65cmの床面に、間を65cmあけて一対のピットが認められる。ピットの形状が、西側は南北に長い長円形で、東側が東西に長い長円形であることから、対をなさず、1つだけが入口施設に伴う可能性もある。

炉跡　確認されなかった。68号住居によって切られている部分がその位置に該当するものと思われる。

貯蔵穴　南壁の中心から約1m東に寄った壁際に位置している。上端で86×53cmの東西に長い隅丸長方形で、深さは80cmを測る。整った形状で、しっかり掘られている。

遺物の出土状態　遺存度の高い土器が、比較的まとまって出土している。ただし、完形に復せるものは1点もない。脚端部を欠くだけの小型台付甕(7)は北壁際の床面上からの出土であり、脚部を欠く赤色塗彩の台付甕(4)は、8とともに貯蔵穴内から出土している。底部を欠く大型甕(1)は、2・5とともに西壁際の覆土中からの出土である。

その他の遺構との重複関係　後出する古墳前期の69号住居、奈良・平安期の68・70号住居と重複している。

時期　弥生後期第2段階

天引105号住居跡

図54・164・218　PL36・98・122　観察表28・54頁

位置　35—48　調査地南寄りの平坦面の北西部に位置している。住居の北西側は徐々に下がっており、同時期の住居は認められない。

形状　後世の削平が深く及んでいるため、住居の南端寄りにかろうじて旧状が残っていた。確認された主柱穴の位置関係を参考にすると、長軸を南北方向にとり、長軸長7.37m、短軸長5.48mの比較的大型の長方形プランであったことが推定される。

面積　37.35m²（復元推定）　**方位**　N 4°W

周壁・周溝　南壁と東壁の南寄り半分がかろうじて残っていた。壁高は南東隅の5cmが最大で、他は痕跡程度である。

周溝は確認されなかった。

床面　南寄り1/3が面を残していた。他の部分も含めて、基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。

柱穴　4本の主柱穴が確認される。柱穴間の距離は、柱穴1～2で4.52m、柱穴1～3で2.86mを測る。掘り方の形状からすると、柱材に板材が使用されていることが明確なものは認められなかった。

入口施設　南壁の中央から70cm内側の床面にピットが1つ認められた。掘り方を示すと思われる部分が、上端で70×75cmと大きい点が注意された。柱痕部分は、南へ向けて35cmの深さまで達していた。

炉跡　削平が床面下まで及んでいるため原形をとどめるものはなかったが、焼土の広がりから2ケ所に設けられていたことが推定された。1つは、長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側25cmにあり、もう1つは、住居南西の柱穴4の北側80cmに認められた。

貯蔵穴　南壁の中心から東へ1.1m寄った壁際に位置する。上端で径65cmの円形で、深さ40cmの形の整ったものである。

遺物の出土状態　後世の破壊が激しかったこともあって、出土した遺物は数えるほどである。完形に復せた土器はなく、いずれも破片であった。

時期　弥生後期第3段階？

天引108号住居跡

図57・164　PL36・99　観察表29頁

位置　42—42　調査地南寄りの平坦面の東端に位置する。住居の東側は急激に下がっていく。

形状　長軸を東西とする長円形プラン。長軸長4.83m、短軸長3.23mを測る。形状が不定形であり、確認されている他の住居に類例がないので、通常の竪穴住居とは性格を異にしている可能性もある。

面積　13.58m²　**方位**　E 3°N

周壁・周溝　かろうじて確認された周壁はあまり明瞭でない。壁高は5cm前後を測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　褐色土と暗黄褐色土を主体としており、深くて明瞭な竪穴住居内への埋没土としては、ふさわしくない。短期間の埋没過程が推測される。

床面　黄褐色ロームの地山面で、踏み固められた状況は認められない。

柱穴　壁際に沿ってほぼ対称的な位置に確認された8個のピットを一応柱穴として扱ったが、大きさ・形状が区々であり、深さも10～20cmと一様でない。柱を立てたピットとしては深さが十分でない。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、東西の中心から若干東に寄った位置に炭化物と焼土がかすかに認められた。図示したほど範囲は明瞭ではなく、炉跡であったとするには決定的な根拠に欠ける。

遺物の出土状態　土器小破片が2点出土している。

その他の遺構との重複関係　後出する弥生後期の46号土壙と西側で、平安期の72号住居と南端で重複している。

時期　不明

天引109号住居跡

図58・164　PL39・99　観察表28頁

位置　32―41　調査地中央の南北尾根の東端にある。付近は西から東への斜面となっており、これより東に同時期の住居は認められない。

形状　長軸を南北方向に取るやや隅丸の長方形プラン。後世の削平により東半分を失っている。長軸長4.86m、短軸長3.66m（推定）を測る。

面積　16.19m²（復元推定）　**方位**　N 3°W

周壁・周溝　周壁は西半分でかろうじて残存していた。壁高は西側で15cmを測る。

埋没土　床面近くのわずかな厚さしか残っていなかったため、埋没状態を具体的に知るのはむずかしい。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。床面が検出できたのは西側半分ほどであるが、その部分に関する限り、全体に平坦な面をなしていた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。周壁の確認されている部分と柱穴との対応関係で見ても、配置関係にやや規則性を欠いている。柱穴間の距離を比較してみても、柱穴1～2が2.06m、柱穴3～4が2.26mと差がある。柱穴1～3は1.70mで、柱穴2～4もこれに近い。掘り方の形状から柱材に丸太材が使用されていたことが推定される。

入口施設　南壁中央付近の床面が後出する土壙により掘り込まれているため確認できなかった。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線から64cm外側に位置する。炉床は径45cmの円形で、中央寄りがわずかに窪んでいる。面は橙色に鮮やかに焼けている。その南端には、長さ27.5cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられていた。炉の北側には、狭い範囲であるが、炭化物の広がりが認められた。

貯蔵穴　南壁の中心から75cm東に寄った壁際に位置する。上端で68×58cmの東西に長い長円形で、深さは50cm（推定）を有している。形が整い、しっかりしたものである。付近の削平が床面下まで及んでいることと、前述した後出の土壙の範囲内にあるため、周囲に土現状の高まりがめぐっていたかどうかは不明である。

遺物の出土状態　出土した土器はわずかの小破片のみで、皆無に近い。後世の削平が深く及んでいたことも考慮しなければならないが、本来的にも少なかった可能性が強い。

時期　弥生後期第3段階？

天引110号住居跡

図59・60・61・166・218　PL37・99・123　観察表28・54頁

位置　49―46　調査地南寄りの平坦面の最南端に位置している。平坦面上では東寄りの位置である。

形状　長軸を南北方向に取る長方形プラン。形が非常によく整っている。長軸長7.1m、短軸長5.5m

の規模を有している。

面積　35.10㎡　　**方位**　N24°W

周壁・周溝　周壁は全体に確認されており、壁高も全体に50cm前後を測る。最も遺存状態のよい部類に属している。

周溝は確認されなかった。

埋没土　やや特異な埋没状態を示していた。上層部にあたる1・2層は、褐色土を主体とする自然堆積土で周囲からの流れ込みによる埋没を示している。同様に最下層にあたる6・7・8層の褐色土、黄褐色土も均質な内容で自然堆積としてよい。これに対して、間に挟まれた3・4・5層は、ブロック状の黄褐色土と暗褐色土の混土層で、自然堆積層とは考えられないものである。これらのことから、住居廃絶後に住居の壁寄りを中心に、ある程度自然埋没が進行した時点で、人為的な埋め戻しあるいは、屋根や周囲にあった客土の埋没があり、その後に再度周囲からの流れ込みによる自然埋没が進行したものと思われる。

床面及び床下構造　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。ただし、東壁に沿っての床面は幅約60cm、深さ約15cmの溝状に掘り窪められ、土を入れ替えている部分が認められた。床面は比較的平坦であるが、東側より西側の方が5cmほど高くなっている。さらに、西側の中では、北西隅と南西隅が5cmほど高い。ただし、この2ケ所が明瞭なベッド状遺構をなしているわけではない。

柱穴　主柱穴が4本確認されている。若干のずれはあるが、住居の対角線上の対称の位置にほぼ正しく配されていた。柱穴間の距離は、柱穴1～2で3.14m、柱穴1～3で2.12mを測る。本住居については、床面を深く断ち割って掘り方の状況を観察したのであるが、いずれも70～80cmと深く掘っていることが明らかになった。掘り方及び柱痕の形状から、柱穴1・2・3は柱材として板材が使用されていたことが推定された。これらとは別に、補助的な柱穴と思われる多くの小型ピットが確認されている。このうち、東西両壁に沿って、各辺3個、合わせて6個のピットがほぼ対称的な位置に設けられている。上端で径20cm前後の円形で、深さは柱穴5・6・7・9が30～45cm、柱穴8・10が20cm前後を有している。

一方、長軸方向で主柱穴を結んだ線の中間に各1個の小型ピットが認められる。西側のものが径14cm、深さ23cm、東側のものが径20cm、深さ6cmを測る。

入口施設　南壁の中心から30cm西で70cm北の床面に上端で径35cm、深さ40cmのピットが掘られている。床面の断ち割り調査により、外側に向けて60°の角度で掘られている状況を明瞭に観察することができた。

炉跡　2ケ所に設置されていた。1号炉は長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側90cmに位置している。炉床は60×75cmの南北に長い長円形で、中心寄りがわずかに窪み、焼けていた。その南端には、長さ33cmの棒状の結晶片岩が長軸を東西にして据えられていた。

2号炉は南北の中心から50cmほど南に寄り、東壁から1.1m内側に位置している。炉床は55×40cmの東西に長い長円形で中央寄りで5cmほど窪んでいる。断面観察によると西寄りに炉石の抜き取り痕と思われる窪みが認められるので、当初は炉石が据えられていたことが推測される。

貯蔵穴　住居の南西隅から東へ1.1m寄った壁際に位置している。上端で54×60cmの卵形で、下部では四角形が明瞭に識別できる。深さは50cmを有し、形の整ったしっかりしたものである。土壙の周囲には、30～40cmで高さ4cm前後の土堤状の高まりがめぐらされている。

粘土塊の出土　貯蔵穴の西側に接して50×60cmほどの範囲で、厚さ最大で8cmの粘土塊が認められた。

遺物の出土状態　比較的まとまった量の土器類が出土しているが、大半が破片でしかも覆土中からの出土である。床面上から出土したものとしては、2・3・4・7・8が挙げられる。このうち(8)は、粘土塊の下部から伏せた状態で出土しており、甕の口縁(3)は、床面上に倒立して置かれたごとき状態で出土

しており注目された。ただし、完形に復せるものは1点も出土していない。唯一、完形のミニチュア土器(16)が、南西隅の床面直下から出土しており、あるいは意図的に埋置した可能性を示していた。

時期　弥生後期第3段階

天引112号住居跡

図63・64・167・168・219　PL38・100・102・123　観察表30・54頁

位置　38—46　調査地南の平坦面から北へのびる尾根との接合部に位置している。

形状　長軸を南北方向に取る長方形プラン。比較的形が整っている。長軸長6.51m、短軸長5.08mを測る。

面積　29.72㎡　**方位**　N24°E

周壁・周溝　北東側を111号住居との重複のため失っている以外は全体によく遺存していた。壁高は、最も高い南西側で60cm、最も低い北側で10cmを測る。周溝は確認されなかった。

埋没土　前掲の110号住居で確認されたのとよく似た埋没状態を示していた。すなわち、まず住居の周縁部寄りに暗褐色土（6・5層）が自然堆積する。この後に、壁際から中心へ向けてロームブロックを主体とし、褐色土ブロックを含む明茶褐色土（4層）が堆積する。この層が自然堆積によるものではないことは明らかである。この後に暗褐色土（2層）を主体とした自然堆積土が来ている。4層については、110号住居で推定したのと同じ成因が考えられよう。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。面は比較的平坦につくられているが、南から北に向けて徐々に下がる傾向が認められる。両端では10cmほどの高低差がある。北西側の床面には、点々と焼けた状態が認められた。地床炉の痕跡でないことは、位置関係から明らかである。遺物が比較的まとまっていることから、火災住居の可能性も考えられるが、炭化材がまったく認められていない点で断定はむずかしい。

柱穴　主柱穴が4本確認された。ほぼ正しく住居の対角線上の対称の位置に配されている。柱穴間の距離は柱穴1～2で2.78m、柱穴1～3で1.98mを測る。深さは、最も深い柱穴4で94cm、最も浅い柱穴3で83cmを測り、いずれもしっかり掘られており、十分である。掘り方及び柱痕の形状から、柱穴4の柱材に板材が使用されていたことは明らかであり、柱穴2もその可能性が強い。柱穴1・3は丸太材であった可能性が強い。これとは別に壁際から円形の小ピットが確認されている。そのうち、柱穴5～8と表記したものは、形状がしっかりしており、深さも60～70cmを有していることから、側柱穴として機能していたことが推定される。

入口施設　南壁の中心から80cm内側の床面に、上端で50×30cm、深さ46cmのピットが、外側に向けて斜めに70°の角度で掘られている。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側85cmに位置する。炉床は55×62cmの南北に長い長円形で、中心寄りが5cmほど窪んでいる。その北縁から出土した長さ34.5cmの棒状の結晶片岩は、炉の南端に据えられていたものが動いたものと推測される。

貯蔵穴　南壁の中心から東へ75cm寄った壁際に位置している。上端で径約50cmの不整円形で、下部では形の整った隅丸方形に近い。深さは約50cmを測る。周囲には土堤状の高まりがめぐらされていたことをかろうじて知ることができる。

遺物の出土状態　比較的まとまった量の土器類が出土している。そのうち大型壺の上半分(1)は、住居中央寄りの床面から倒立した状態で出土している。その北西側の床面からは、脚台部を欠く台付甕(7)が出土している。同じく、床面から出土した坏部を欠く高坏(11・12)も脚部が完存するものである。とは言うものの、完形に復せるものは1点も出土していない。廃絶時に、主要な土器は戸外に持ち出されたものと推測される。

その他の遺構との重複関係　後出する平安期の111号住居が北東側で重複していた。

時期　弥生後期第3段階

天引116号住居跡

図62・169・219　PL39・101・102・123　観察表31・55頁

位置　37—49　調査地南寄りの平坦面の北端に位置している。住居の北西側では傾斜が徐々にきつくなっており、同時期の住居は認められない。

形状　長軸を南北方向に取る隅丸長方形プラン。各辺とも外側に向けてゆるやかな弧状に張り出している。長軸長6.39m、短軸長4.95mを測る。

面積　27.34m²（復元推定）　**方位**　N16°E

周壁・周溝　東壁の南半分を除いて全体に検出できた。壁高は最も残りのよい南側で24cm、最も悪い北側で10cmを測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　前掲の112号住居で確認されたのに類似した埋没状況が認められた。すなわち、まず住居内周縁部に褐色土、暗褐色土、黒褐色土（7・6・4・3層）の順に自然埋没が進む。次に黄褐色ロームの比較的均質な土（2層）が堆積する。さらに、中心寄りに残った窪みの部分に暗茶褐色土の自然埋没が進行する。2層の黄褐色ロームが周囲からの流れ込みによる自然埋没でないことは明らかであろう。土屋根の崩落したものを成因としているのではないだろうか。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。面は平坦であるが、南から北にかけて徐々に低くなっている。南北の両端寄りでは約10cmの高低差がある。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。その位置関係を見ると、対称的な位置にはあるが、住居の対角線上から東西方向で外側にずれている。掘り方及び柱痕の形状から、柱穴1・3・4の柱材には板材が使用されていたことが推測される。

入口施設　南壁の中心から内側に80cm寄った位置に上端で径25cm、深さ15cmのピットが1つ認められた。ピットと南壁とに挟まれた部分の床面が、他の部分より面の固さが弱いので、他の事例に較べると深さがやや見劣りするが、入口施設に伴うピットと認めてよいであろう。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側60cmに位置する。炉床は径50cmの円形で、中心寄りが5cmほど窪んでいたが、明瞭な焼けは認められなかった。その南端には長さ27cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられていた。一方、炉の南側には、炉床部分より、よく焼けている面が認められた。炉の位置をここから北側へ移動した可能性も考えられる。なお、炉の周囲の床面には、炭化物・灰の散乱が認められた。

貯蔵穴　南壁の中心から1.2m東に寄った壁際に位置する。上端で径70cmの不整円形で、深さ50cmを測る。

遺物の出土状態　比較的まとまった量の遺物が出土しているが、土器は破片が主体で、完形に復せるものは1点も存在しない。それらの出土位置を見てみると、住居の東半分に集中する傾向がある。これに出土レベルを加味すると、住居廃絶後に東側の住居外から投げ込まれたことを明確に読み取ることができる。同時期の住居が東側に限られることからも首肯されるところである。

その他の住居との重複関係　後出する奈良期の11号住居と南東側で重複している。

時期　弥生後期第2段階

天引119号住居跡

図65・170　PL39・101・102　観察表32頁

位置　40—43　調査地南の平坦面の北東隅に位置する。これより北東に向けては傾斜面となっている。

形状　主軸を南北方向に取る長方形プラン。重複により北東部分を欠いているため、不明確な点もあるが、西壁より東壁の方が長い台形プランといった方が正確である。長軸長5.97m、短軸長4.46mを測る。

面積　24.41m²（復元推定）　**方位**　N17°E

周壁・周溝　住居の北東側は、斜面上にかかっているため、残りが悪い。壁高は、最もよく残っていた南壁で30cm、最も悪い北壁で2cmである。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒褐色土、暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面及び床下構造　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま利用しており、よく踏み固められていた。住居の南東隅と南西隅に設けられていたベッド状遺構の高まりの部分を除けば、面は全体に平坦である。ただし、東壁の中央寄りに5cm前後、周囲より高い部分が認められた。南側の隅部のような定形な施設とするには、輪郭が明瞭ではない。

南壁寄りの床面は、壁に沿って1.8×0.7mの長方形の範囲を深さ10cmほど掘り下げ、土を入れ替えて床を造っていた。

柱穴　主柱穴が4本確認された。住居のゆがみに呼応するように柱穴の位置関係も規則性に欠ける。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.83m、柱穴1～3で1.98mを有している。

掘り方及び柱痕の形状から、柱穴2は柱材として板材を使用していることが推定され、その他は不明である。

入口施設　南壁の中心から50cm内側に、東西に20cmの間隔をあけて一対のピットが認められた。深さは15～20cmを測る。

炉跡　南北方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側65cmに位置している。炉床は径60cmの不整円形で、中央寄りがわずかに窪んでいる。南端には、長さ32.5cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。

貯蔵穴　南壁の中心から30cm西に寄った壁際に位置している。上端で50×35cmの東西に長い不整長円形で、深さ30cmを有する。

ベッド状遺構　住居の南東隅と南西隅の2ケ所に設けられていた。南東隅のものは、柱穴2を基点とし、1.7×0.9mの南北方向に長い長方形で、高さ10cmほどを有する。上面は比較的平坦である。南西隅のものは、柱穴4を基点とし、上面で1.2×1.25mの正方形に近い形状で、裾部は壁に近づくほど輪郭が明瞭でない。高さは10～15cmを有している。上面は、隅部寄りの方が5cm前後高い。盛土によって築成されたものである。

粘土塊の出土　南壁の西端に近い位置、ちょうどベッド状遺構の上面にのって、55×30cmの長円形で、厚さ10cmほどの粘土塊が認められた。

遺物の出土状態　出土した遺物は極めてわずかであった。住居に直接伴うと推定されるものは、下半部を欠く小型壺(1)と貯蔵穴内から出土した底部破片(9)のみで、完形に復せるものは1点も認められなかった。

覆土中から出土した土器片は、南壁寄りに集中しており、廃絶後に南側から投棄されたか、あるいは流れ込んだものである。

石器類としては、柱穴3の南西側の床面上から出土した15×25cmの台石がある。

その他の遺構との重複関係　住居の北東側を後出する124号住居が重複していた。また、住居の中心を東西に近年の耕作溝が横断していた。

時期　弥生後期第3段階

天引121号住居跡

図66・170・220　PL39・101・102・123　観察表32・55頁

位置　40—41　調査地南の平坦面の北東端から北東方向に下がる斜面部にあり、弥生住居群の中では最も東寄りに位置する。

形状　長軸を南北方向に取る長方形プラン。整った形状ではなく、ゆがみが目立つ。長軸長6.9m、短軸長5.0mを測る。

面積　33.08m²（復元推定）　**方位**　N21°E

周壁・周溝　120・122号住居との重複のため、周壁の1/3ほどを失っていた。壁高は、最も残りの良い南側で50cm、最も残りの悪い北東側で10cmである。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒褐色土、暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。面は比較的平坦で

あるが、北東隅よりは、他の部分より10cm前後高くなっていた。ただし、高まりの範囲が明確に認められるわけではない。

柱穴　北側の2本の主柱穴が認められた。柱穴間の距離は、1.60mを測る。住居の平面規模のわりには、距離が短い。掘り方は東西に長い長円形で、深さ約50cmである。柱材に板材が使用されていたことが推定される。南側の主柱穴は、床面の遺存している範囲では認められなかった。その位置が想定される部分を東西に横切るように、近年の深い耕作溝が走っているので、これにより消失した可能性が強い。

入口施設　南壁の中心から内側に40cmの位置に1個のピットがある。ピットは南北に長い長円形で、深さ20cmを測る。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線の外側60cmに位置する。炉床は70×60cmの南北に長い長円形で、中央寄りで5cmほど窪んでいる。炉の東側の床面上に長さ31cmの棒状の結晶片岩があるが、炉石に使用されていたものと思われる。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置している。上端で45×55cmの南北に長い長円形で、深さ20cmを測る。整った形で、底面は平坦である。

遺物の出土状態　深さが十分な割には、出土遺物はわずかであった。しかも破片が多く、南壁寄りに集中していた。赤色塗彩された壺(1)は、南西隅寄りの覆土中からバラバラの状態で出土している。

その他の遺構との重複関係　後出する古墳中期の122号住居と南東側で、同じく平安期の120号住居と北西側で重複していた。

時期　弥生後期第2段階

天引132号住居跡

図67・68・171　PL40・102・104　観察表33頁

位置　41−52　調査地南の平坦面の西端に位置する。これより西側は徐々に傾斜がきつくなっており、同時期の住居は認められない。

形状　長軸を南北方向に取る長方形プラン。形が整っており、隅部は直角に近い。長軸長6.32m、短軸長4.98mを測る。

面積　30.05m²　　**方位**　N 5°W

周壁・周溝　住居内にすっぽり収まるように131号住居が重複しているが、周壁の途切れる部分はない。壁高は、残りの良い南側で20cm、残りの悪い北西側で5cmを測る。

埋没土　131号住居との重複のため、観察できるのは壁寄りの部分に限定され、しかもわずかな厚さである。その限りでは、黄褐色土を主体としており、流れ込みによる自然の埋没過程は想定しにくい。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。面の特に固い部分の広がりを精査したところ、壁際と主柱穴に囲まれた中心部及び南東隅のベッド状遺構を除いた部分が相対的に固かった。面はベッド状遺構の部分を除くと比較的平坦であった。

柱穴　主柱穴が4本確認された。住居の対角線上に整然と配置されており、柱穴1〜2で2.58m、柱穴1〜3で1.84mを測る。深さはいずれも70〜80cmとしっかり掘られている。掘り方の形状からすると、柱穴1・3・4は柱材として板材が使用されていたことが推定される。

これとは別に、主柱穴の延長上の北壁際に2個の柱穴が認められる(柱穴6は西側に若干ずれる)。いずれも主柱穴の掘り方よりも径は小さく、深さは柱穴5が78cm、柱穴6が50cmを測る。

入口施設　南壁の中心から55cm内側に1つのピットが認められる。外側に向けて斜めに深さ60cmまで掘られている。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線から外側へ86cmに位置している。炉床は径50cmの不整円形で、中央はわずかに窪んでいる。南端には長さ34.5cmの棒状の結晶片岩が長軸を東西にして据えられている。

貯蔵穴　南壁の中心から1.4m西に寄った壁際に位置している。上端で80×60cmの住居南壁を利用した半円形で、深さ50cmを測り、形はよく整っている。土壌の周囲には、幅約30cm、高さ5cmの土堤状の高

まりが馬締形にめぐり、南壁に取り付いている。

ベッド状遺構　住居の南壁隅には2.10×1.50mの東西方向に長い長方形で、高さ10～15cmのベッド状遺構がある。上面は比較的平坦である。断ち割り調査によると、部分的に黄褐色土を盛土している（第1層）ようにも見えるが、黄褐色ロームの地山面を掘り残して築成している可能性も大いにある。

遺物の出土状態　比較的まとまった量の土器が出土しているが、床面上から出土した物の大半は破片であり、完形に近い塊(4)の場合も破損している。覆土中から出土しているものは、南壁寄りにまとまっていることから、廃絶後に南側から廃棄された可能性が強い。

時期　弥生後期第3段階

天引135号住居跡

図69・169　PL41・103・104　観察表33頁

位置　37―39　調査地南の平坦面から北東にはずれた斜面上に位置している。近接しては弥生期の住居は認められず、単独で存在している。

形状　後世の削平が著しいため、住居形状を知る手掛かりに乏しい。主柱穴としてまちがいない3個のピットの位置関係からすると、長軸を北西方向から南東方向に取る長方形プランと推定される。

周壁・周溝　後世の削平が深く及び、かろうじて西壁及び北壁の一部と推定されるラインが確認されたにすぎない。

周溝は確認されなかった。

床面　西壁寄りがかろうじて残っていた。黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。

柱穴　主柱穴と思われる3個のピットが確認された。東側の柱穴は確認できなかった。柱穴3の掘り方の形状は、柱材に板材が使用されたことを推定させる。

炉跡　北西側の主柱穴を結んだ線の内側で、柱穴1に寄った位置に焼土が認められた。明瞭な炉跡の形状を残しているわけでなく、位置的にもやや疑問が残る。

遺物の出土状態　出土した遺物はきわめてわずかである。しかも完形に復せるものは認められない。1・2とも覆土中ではあるが、西壁際の床面に近い位置からの出土である。住居の時期を推定する手掛かりにはなるものと思われる。

時期　弥生後期第3段階

天引136号住居跡

図70・164　PL41　観察表34頁

位置　41―51　調査地南の平坦面の西端に位置している。西側に132号住居が近接する。

形状　削平が床面下まで及んでいるため、直接輪郭を示すものは少ない。わずかに南端寄りに現状の床面のよこたいている範囲が認められ、住居の南側の輪郭を示していた。主柱穴と思われる4本のピットが整然と並んでおり、その位置関係から、南北方向に近く長軸方向を取る長方形プランと推定された。

方位　N35°E

周壁・周溝　いずれもまったく確認されなかった。

床面及び床下構造　後世の削平が床面下まで及んでいたが、現在確認できる床下部分の状況から、基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していると推定された。また、南壁寄りを中心に部分的に土を入れ替えて床面をつくっている状況が認められた。

柱穴　主柱穴と思われるピットが4つ確認された。整然とした位置関係を示しており、柱穴間の距離は柱穴1～2で3.32m、柱穴1～3で2.30mを測る。深さは現状の床面から80～90cmとしっかり掘られている。

掘り方の形状から、柱材に丸太材が使用されていることが推定された。

入口施設　南壁の中心から内側に56cmの位置から1つのピットが確認された。上端で径40cmの円形で、深さ13cmを有していた。

炉跡　確認されなかった。後世の削平により失ったものと思われる。

貯蔵穴　南壁の中心から東へ約1m寄った壁際に

位置している。上端で60×60cmの南側が直線の不整円形で、深さ約50cmを測るしっかりしたものである。

遺物の出土状態　後世の削平が床面下まで及んでいたため、出土遺物はほとんど認められなかった。わずかに入口施設のピットの中から小破片(1)が出土している。

時期　弥生後期第3段階

天引137号住居跡

図72　PL41

位置　44—51　調査地南の平坦面の南西寄りに位置する。住居の西側部分は調査対象地外となっていたため、部分的な調査であった。

形状　住居全体からみると東側の一部の調査であったため、不明な点が多い。長軸を南北方向に取る長方形プランが推定される。現状での長軸長は約4.7mである。確認された北壁の西端は不自然なカーブを描いており、本来的な形状とするには疑問がある。

方位　N 7°E

周壁・周溝　周壁の遺存状況は良好で、壁高約40cmを有している。

周溝は確認されなかった。

埋没土　住居の壁寄りから徐々に埋没したことをよく物語る土層状態であった。また、土層状態から推定される住居の中心部分を考慮すると、南壁の位置は確認された南端からさらに1mほどの位置と思われる。少なくとも、あまり大型の住居でなかったことは明らかである。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、非常によく踏み固められていた。面は平坦である。

柱穴　主柱穴は確認されなかった。北壁と東壁に沿った位置から小ピットが確認されているが、側柱穴の可能性もある。

遺物の出土状態　時期的特徴に乏しい小破片が覆土中からわずかに出土したに過ぎない。小範囲とはいえ、遺存状態の良好な住居であることを考えると、本来的に少なかったことが推定される。

時期　弥生後期

天引146号住居跡

図71・173　PL41・103　観察表34頁

位置　47—48　調査地南の平坦面の南端の中央に位置している。

形状　長軸を南北方向に取る隅丸長方形プラン。各辺は、若干外側に張り出し気味である。長軸長4.29m、短軸長2.62mを測る。同時期の住居としては最も小規模の部類に属する。

面積　9.97m²　　**方位**　N19°E

周壁・周溝　住居の南側で、後出する142号住居と重複しているため、南側2/3ほどは、削平が深く及んでいた。周壁は全体に確認できたが、重複部分の壁高は16cmと低い。重複の及んでいない北壁は高さ32cmを測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。面は北から南にかけて、わずかではあるが低くなっている。両端で5cmの差がある。

柱穴　住居の南北方向の中心に東西に並んで2つのピットが確認された。東側のものは上端で径20cm、深さ73cmで、径80cm、深さ10cmの円形土壙内に位置している。このピットから、西へ1.03mの距離をおいている。深さは22cmを測る。このピットの東南側に隣接するピットは15cmと浅い。柱穴の可能性もあるが、東西のピットで極端に異なる点が問題である。特に西側のものが浅すぎる点で、柱穴としての機能に疑問がある。

炉跡　住居の北壁寄りに位置している。長軸方向の中軸線からは若干東にずれており、北壁からは1m内側にあたる。炉床は46×36cmの南北に長い長円形で、面の窪みはほとんど認められない。その中央には、長さ30cmの棒状の結晶片岩が、長軸を東西にして据えられている。

貯蔵穴　南壁の中心から東へ55cm寄った壁際に位置している。上端で径約50cmの不整円形で、深さ35cmを測る。床面は平らで、しっかりしている。土壙の北側には縁部を取り巻くように幅15～20cm、高さ3cm前後の土提状のかすかな高まりが認められる。

遺物の出土状態　遺物は極めて僅かである。破片が大半で、床面近くから出土した最も残りのよい壺(1)も、胴部の半分と口縁及び底部を欠いている。

その他の遺構との重複関係　後出する古墳時代中期の142号住居と南側で大きく重複している。

時期　弥生後期第2段階

天引151号住居跡

図73・74・172・220 PL42・103・104・123 観察表34・55頁

位置　51－44　調査地の最南端に位置している。付近は、平坦面から南東に向けて急激に傾斜する斜面上にあたっており、これより東側に同時期の住居は認められない。

形状　長軸を北西から南東に取る不整の長方形プラン。長辺と短辺が直角に交わらず、短軸長は4.6mで、長軸長は6m前後と推定される。同時期の住居と比較すると、やや特異な長軸方向を取っているのは、占地場所の傾斜方向に規制された結果と思われる。

方位　N29°W

周壁・周溝　南東側で後出する141号住居・75号土壙と重複しており、南東壁を失っている。他は良好に残っていた。斜面部に位置するため、東南側へ行くに連れて削平が深く及ぶ。そのため壁高も、北西壁の50cmから南東寄りの15cmへと大きく変わる。

埋没土　黒褐色土、暗褐色土を主体としており、主として斜面上部の北西側からの流れ込みによる自然の埋没過程をよく示している。

床面及び床下構造　床面は全体に平坦であり、よく踏み固められていた。床下構造を見ると、住居の中心寄りは黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しているのに対し、その周囲はさらに10cm前後掘り下げて、土を入れ替えて床面を造っていた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。柱穴間の距離は柱穴1～2で3.50m、柱穴1～3で1.62mを測る。柱穴1が北へ飛び出したように位置しているのが目につく。住居の北隅のゆがみに呼応しているのがよくわかる。それ以外の3個の柱穴は比較的整然とした配置であることから、これに呼応した各辺の走向にゆがみはなかったことが推測される。柱穴の深さは60～86cmを測る。掘り方の形状からすれば、柱材に丸太材が使用されていた可能性が強い。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北西側の主柱穴を結んだ線の外側70cmに位置している。炉床は60×45cmの長軸方向に長い長円形で、わずかに窪んでいる。その南東端には長さ28.5cmの棒状の結晶片岩が、長軸を南西から北東にして据えられている。

これとは別に柱穴1と柱穴2の間に、径40cmほどの範囲の床面が焼けているのが認められる。位置関係から副次的な炉と考えられる。

入口施設・貯蔵穴　消失している南東壁寄りを除いた部分では確認されていない。ここに設けられていたと考えて誤りないであろう。

遺物の出土状態　土器類を中心に大量の出土をみた。ただし、大半が破片で、残りのよいものも、いずれかの部分を欠損する。その分布状態を見ると、斜面の上部にあたる北西側に多く、南東へ行くに連れて少なくなるのがわかる。これを断面図に位置を落して検討してみると、明らかに北西側から投棄されたか、あるいは流れ込んだものであることがわかる。床面上から出土した数少ない遺物も、本来的に住居に伴ったものは少ないと考えてよいであろう。土器類とともに、自然礫が多く目についた。

その他の遺構との重複関係　後出する古墳時代後期の75号粘土採掘壙、奈良期の141号住居と重複。

時期　弥生後期第3段階

天引152号住居跡

図72・164 観察表35頁

位置　45－50　調査地の南西端に位置している。住居の南西側2/3以上は調査対象地外であったため

未調査である。

形状　長軸方向を南北方向に取る長方形プランと推定される。

方位　N 9°W

周壁・周溝　後出する140号住居と大きく重複しているため、北寄りを除くと削平が床面下まで及んでおり、不明確である。周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　北壁寄りの床面が確認されたが、面は比較的平坦で固くしまっていた。この部分では土を入れ替えて床を造っていた。

柱穴　調査範囲内では確認されなかった。北東隅にある円形土壙は上端で径70cm、深さ58cmを測る。位置関係から柱穴の可能性は少ない。

遺物の出土状態　土器類は極めてわずかである。覆土中から出土した小破片から、かろうじて弥生後期の住居のわずかな可能性にこぎつけた。

時期　弥生後期

天引153号住居跡

図75・173・174・220　PL43・104・123　観察表35・56頁

位置　46―49　調査地南の平坦面の中心に位置している。

形状　主軸を東西とする長方形プラン。形は整っている。長軸長5.26m、短軸長3.81mで、北辺のほうが南辺よりわずかに長い。

面積　17.93m²（復元推定）　**方位**　W 6°S

周壁・周溝　東壁の大半を重複する90号土壙によって切られている以外は全体によく残っている。

埋没土　暗褐色土、褐色土を主体とし、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用し、よく踏み固められている。面は南東隅のベッド状遺構部分の高まりを除けば全体に比較的平らである。

柱穴　通例の位置に主柱穴は認められなかった。そのかわり、南北の両壁に沿って各３個の柱穴（柱穴１～３と４～６）が対称の位置に配されていた。深さは、南側の柱穴が60～70cmと十分であるのに対し、北側は柱穴１が15cm、柱穴２が42cm、柱穴３が24cmと浅い。上屋構造を考える上で、注意をする必要がある。西壁の中心にあるピットは、深さ70cmを有し、内側に向けて若干斜めに掘られている。この他にもいくつかピットが認められたが深さが十分でないこと、位置関係に規則性が認められないことから、主要な柱穴とは考えられない。

入口施設　東壁の中心から若干北側にずれて、西へ90cmの位置に１つのピットが認められた。上端で径22cmの円形で、深さ10cmを測る。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、西壁から130cm内側に位置している。炉床は径50cmの円形で、中央寄りがわずかに窪んでいる。東端には棒状の結晶片岩が長軸を南北にして据えられているが、被熱のため半分に割れている。

貯蔵穴　遺存していた範囲内では、顕著なものは確認されなかった。90号土壙によって失われた東壁沿いに設置されていたと考えてよいであろう。

ベッド状遺構　住居の東南隅に設けられていた。176×97cmの南北に長い長方形プランで、上面は平らである。高さ約10cmを有している。

粘土塊の出土　炉の北東側に隣接する床面上から35×50cmの広がりで厚さ10cmの粘土が確認された。

遺物の出土状態　比較的まとまった量の土器類が出土したが、完形に復せるものは１点も出土していない。床面から出土したものも多かったが、いずれも破片である。

その他の遺構との重複関係　住居東側で、後出する90号土壙と重複している。

時期　弥生後期第３段階

(2)　方形周溝墓

白倉C区で2基の弥生後期第3段階の方形周溝墓が発見されている。C区の東寄りの平坦面上におおよそ南北に並んで位置していた。北側の比較的大型のものを白倉C区1号方形周溝墓、南側の小型のものを同2号方形周溝墓とした。これら2基の周溝墓を除くと、周囲にはその痕跡すら認められない。調査地内の空白部分を勘案すると、周辺にさらに存在する場合、北側にその可能性を残している。しかし、あっても2～3基程度であり、大規模な群にならないことは確実である。

これらの周溝墓のごく周辺では同時期の集落は見い出されていない。少しひろげて探した場合、天引地区に濃密な分布が認められる。現状では、この地区の集落に対応したものと推測している。

なお、天引地区で古墳時代前期の方形周溝墓1基が確認されているが、これは天引1号方形周溝墓として次節で報告する。

白倉C区1号方形周溝墓

図277・78・175・221　PL44・45・86・113・117　観察表56・57頁

位置　33－65　南北に延びる平坦面の東西のほぼ中央に位置し、各辺をほぼ東西南北にとるものである。周囲には相前後する時期の諸遺構との重複関係が認められる。その中で特に重要なのは、東側で重複する後期第1段階の14号住居を切っている点である。その他、時期的に後出する主なものとしては、古墳後期の22号住居跡、平安期の1号掘立・1号井戸等がある。

周溝は極めて明瞭に掘り込まれており、途切れることなく全周している。溝が確認された面は、ロームへの漸移層にあたる褐色土層であるから、当時の地表面よりかなり下に下がっている（この上に黒褐色土、黒色土がくると少なくとも50cm前後削られていることが推測される）。当然、溝の掘削土による盛土はまったく認められなかった。

溝の立ち上がる状態は内側（墳丘側）は垂直により近い切り立ったもの（70°前後）であるのに対し、外側はややなだらかなもの（60°前後）である。また掘り込み部分のなすラインは内側が直線をなすのに対して、外側はやや弧状を呈している。内側のラインがなす形状は、向かい合う辺どうしは平行しているのに対し、交わる辺は直角にはならず、平行四辺形に近いものである。その場合、南・北の両辺は東西方向に平行しているのに対し、東・西の両辺は北に向いて南北方向から8°東に振れている。各辺の長さを比較すると、いずれも7.80～7.90mを測る。辺により若干バラツキがあるのは、コーナー部の角が取れて隅丸を呈するためである。ちなみに中軸線上で測定すると、東西・南北とも7.90mと同一であり、菱形の平行四辺形であったことがわかる。ただし、これを意図的なプラン構成とは考え難いので、本来的には一辺7.90mの正方形プランを指向していたとして間違いないであろう。

前述したように外側の掘り込みラインが弧状を呈しているわけであるから、当然溝の幅は一定でない。しかも、形を整える意図を持って弧状にしているのではないので、弧の形状も辺により区々であり、溝幅のバラツキに拍車をかけている。東・西・北辺は中央寄りが最も広く、順に1.35、1.98、1.80mを測るが、南辺は最大幅が東寄りに偏しており、1.80mを測る。各辺ともコーナー寄りが最も狭い部分になっており、0.7～1.2mを測る。

次に深さを見てみると、各辺とも最大幅を測る部分が最も深くなっている。その深さはいずれの場合も約60cmであり、コーナー部に向けて徐々に浅くなっている。コーナー部の深さは、北東・北西・南東部が約30cmであるのに対し、南西部は20cm以下と4カ所のうちで最も浅い。本来的な溝の深さは、後世に削平されてしまった分を勘案しなければならないので、最も深い部分では、1m以上を有していた可能性が高い。

溝の形態上のこれらの事実は、周溝を掘削する際に連続して一周するように掘られたのではなく、各辺ごとを作業の単位として掘削されたことを示していると言えよう。

主体部はその痕跡すらも一切確認されていない。当時の地表面から掘り込んで築いたものならば、その底部寄りが残りそうに思われるので、その可能性は少ないと言えよう。

出土遺物は周溝内の覆土中から出土したものがすべてであり、土器・石器等である。そのうち特に注目されるのは、東側の溝で北東コーナー寄りから出土した完形の壺形土器(1)である。精良な胎土と整った形状、ヘラ磨きによる丹念な仕上げが目につくもので、明らかに周溝墓に直接伴う供献用の土器としてよいであろう。溝の底面から2cm上に横位の状態で出土しており、墳丘側から転落したものとして間違いない。このほか、№2・5の土器片および磨製石鏃、砥石は、時期的な関係から14号住居跡に関わるものがまぎれこんだものとして間違いない。№3・4の土器片は、小破片であるが、時期的には本周溝墓の時期と矛盾しない。

白倉2号方形周溝墓

図76・175・222　PL45・85・86・111　観察表56・57頁

位置　37―68　1号方形周溝墓の南西15mに位置している。主軸方向は1号とは一致せず、北に向いて南北方向から東へ29°振れている。

他の遺構との重複関係を見てみると、時期的に先行する弥生後期（後期1段階）の8・32・39号住居跡を切っており、後出する古墳後期の18号住居跡に切られている。また、近年の畑地耕作に伴う南北方向の溝が何条も入っており、遺存状態はあまりよくない。

墳丘部の盛土はまったく遺存しておらず、ローム面が露出していることから、後世の削平が1号周溝墓以上に深く及んでいることがわかる。

周溝によって形づくられる掘り込み部分のラインは、墳丘側は一部を除いて直線に近いものである。ラインの乱れている南東隅付近は近年の畑地の耕作が激しく及んでいる部分であるし、また同様に乱れている北東隅付近は確認できたのが底面に近い部分なので、これが必ずしも本来的なものとは言えない。むしろ、その他の大半の部分と同様直線をなしていたと考えるほうが自然である。一方、外側のラインは、南辺の中央寄りがやや弧状にふくらんでいるのを除けば全体に内側のラインとほぼ平行している。内側のラインによってできる墳丘部の形状は、南北方向の主軸長7.05m、東西方向の主軸長6.90mを測り、ほぼ正方形に近い。ただし、向かい合う辺相互はほぼ平行であるが、交わる辺は直角をなさないので、厳密な意味の正方形ではない。

溝の幅は、南側のふくらむ部分が上端で1.5mを測るのを除けば、全体に上端で1.1m、下端で0.45mほどである。断面は遺存状態の良好な部分では逆台形を呈しており、底面はほぼ平らである。

溝は全周しており、途中で切れるブリッジ状の施設は見当たらない。ただし、深さは一様ではなく、場所により差が大きい。最も深いのは西辺の北寄りと南辺の中央から東にかけてで、約65cmを測る。これに対して、東辺から北辺にかけては、20cm前後とかなり浅くなっている。

溝内の覆土中から出土している遺物は、土器類は№2が弥生中期に属し、№1・3・4・5が後期1段階に属するものである。一方、石器類は磨製石鏃片、及びこれと関係すると思われる牛伏砂岩製の砥石である。いずれも周溝墓に直接伴うものではなく、弥生中期の土器片以外は、重複する3軒の弥生住居に伴うものがまぎれ込んだものと思われる。

本周溝墓の時期を直接示す遺物はまったく認められていないが、周溝が全周する点、及び1号周溝墓との位置的関係から、これに近い時期の所産と推定してほぼ誤りないものと思われる。

(3)　土壙

弥生期に属する土壙が全部で39基確認された。各土壙の特徴を示せば第２表のとおりである。このうちで特に注意されるのは弥生中期に属することが明らかな30基とその可能性が強い６基の一群である。また、数は少ないが弥生後期に属する１基の長方形土壙も注目される。

これ以外のものは、弥生期の土器片が覆土中からわずかに出土しているが、この時期の遺構とする積極的な根拠に乏しい。また、形状が不定形なものも多く、人為的なものかどうかも問題である。

以下、弥生中期の明らかに人為的なものについてさらに具体的に見てみることにする。

分布傾向　中期に属する土壙が確認されたのは、白倉下原Ｂ区で９基、同Ｃ区で18基で、同Ａ区では全く確認されていない。一方、天引向原遺跡ではわずかに３基が確認されている。

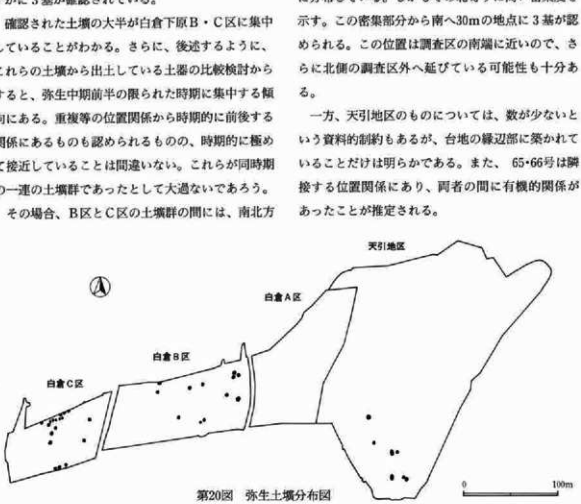
確認された土壙の大半が白倉下原Ｂ・Ｃ区に集中していることがわかる。さらに、後述するように、これらの土壙から出土している土器の比較検討からすると、弥生中期前半の限られた時期に集中する傾向にある。重複等の位置関係から時期的に前後する関係にあるものも認められるものの、時期的に極めて接近していることは間違いない。これらが同時期の一連の土壙群であったとして大過ないであろう。

その場合、Ｂ区とＣ区の土壙群の間には、南北方向の谷状地形を挟んで分布の空白地帯が存在していることから、これらを大きく２群に分けることができる（以下、地区名を取って「Ｂ群」、「Ｃ群」と呼称する）。

Ｂ群の土壙は、２ないし３基を１単位として、区域内に散在するように分布している。単位相互の間には、いずれもほぼ40mほどの距離をおいており、偶然の所産とは思えない。ゆるやかに傾斜をしていく北側にむけては、調査区を越えてまだ延びていくようであるが、南側に向けては徐々に散漫な状態になって行くようである。西側は、浅い谷状地形を介してＣ群に対峙するが、天引向原遺跡との間の深い谷に向けての傾斜面をなす東側のＡ区までは土壙の分布が及んでいない。

Ｃ群の土壙は調査区の西寄りで、西に向けての傾斜面へ移行していく縁辺部に沿って南北方向に列状に分布している。しかもその北寄りに高い密集度を示す。この密集部分から南へ30mの地点に３基が認められる。この位置は調査区の南端に近いので、さらに北側の調査区外へ延びている可能性も十分ある。

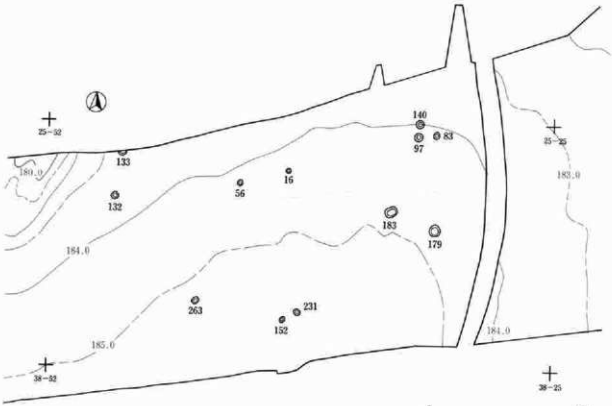
一方、天引地区のものについては、数が少ないという資料的制約もあるが、台地の縁辺部に築かれていることだけは明らかである。また、65･66号は隣接する位置関係にあり、両者の間に有機的関係があったことが推定される。



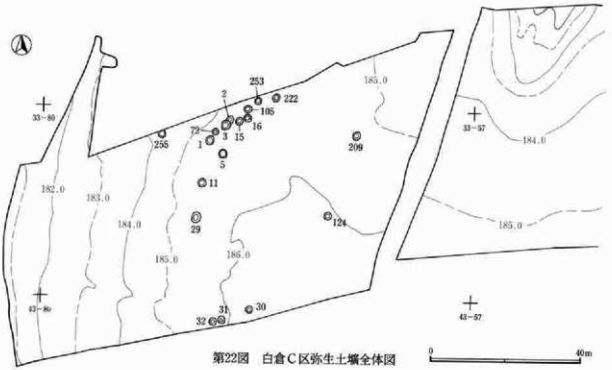
第20図　弥生土壙分布図

形態的特徴　明らかに弥生中期に属するものは、平面形状は円形を呈する。一部、形にゆがみの見られるものもあるが、正円形に近いものが圧倒的に多いと言える。

一方、断面の形状は、深さの十分な遺存状態の良好なものでは、壁面が底面から垂直に近く立ち上が



第21図　白倉B区弥生土壙全体図



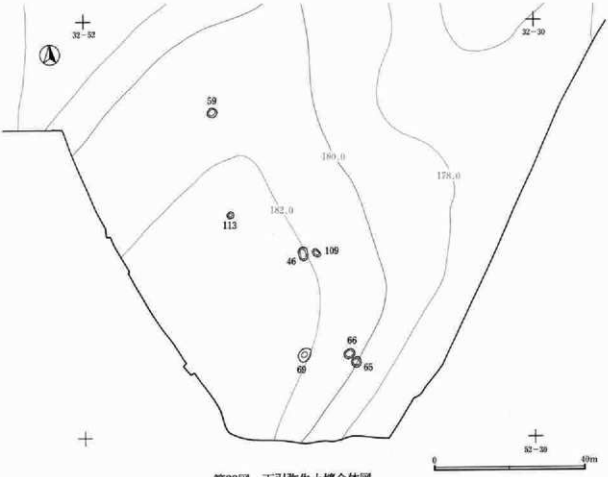
第22図　白倉C区弥生土壙全体図

るか、下半部がえぐれ込んでフラスコ状あるいは袋状を呈している。量的には後者のえぐれ込んだ形状のもののほうが多い。当初は垂直に近い壁面をなしていたものが、時間の経過とともに下半部の壁面の侵食が徐々に進み、オーバーハングした結果と推測される。これらとは別に、数は少ないが、逆台形を呈するものが若干認められる。これらは、土壙の上端の縁の部分が崩落した結果であろうか。

底面は若干緩い湾曲を示すものもあるが、概して平坦であり、面の整っていないものは少ない。

次に大きさを比較してみると、平面規模の上からはおよそ3つのグループに分けることができる。すなわち、直径1m前後、1.5m前後、2m弱である。このうち前2者に属するもの、およびその中間的な規模のものが大半である。直径1ないし1.5mの規模を標準としていたことが推測される。深さは最大で1.07m、最低で0.12mを測る。掘り込み面を検討してみると、深さ0.5m以下のものは、遺構確認面がローム面まで下がってしまっている白倉C区に集中していることから、本来的にはこれ以上の深さを有していたことは明らかである。当時の地表面に近い暗褐色土層で遺構が確認できた白倉B区の一部のものでは、いずれも深さが1mに近い。それでも、当時の地表面よりは幾分下がっているので、本来はいずれも1mを越えるものであったことが推定されよう。

埋没土　これまで述べてきた定形的な弥生中期の土壙の場合、暗褐色土・黒褐色土・黒色土を主要な覆土としていることがわかる。そのうち、埋没土の中位を黒色土・黒褐色土が占めている場合が多い点が特に注意された。各土壙の土層断面図に現れた状態をみると、いずれの場合も人為的な埋め戻しを推定させるものは見られなかった。土壙掘削後、一定の使用期間をおいて、その機能が停止した後に、自



第23図　天引弥生土壙全体図

然に埋没をしていったことを示しているものと思われる。埋没土の中位の土が黒味を帯びているのは、放置されている間に溜まった有機物が腐食化したことを物語るものであろう。

遺物の出土状態　出土した遺物としては土器と石器がある。このうち、石器類は極めてわずかであり、土器が大部分である。土器については、弥生中期のものとともに、縄文期の土器片も出土している。これらは、弥生中期のものと出土状態に差があるわけではないので、周囲の地表にあったものが混入したものとして間違いない。

出土した土器の大半が破片である。しかも小破片が圧倒的に多い。白倉C区31号土壙の筒形土器が唯一完形に近いものであるが、これとて底部を欠いているし、他の部分でも足りないところが多い。次にその出土位置を検討してみると、覆土の自然埋没の過程で混入したものが大半である。一つの土壙から比較的大量の破片が出土している白倉B区5号・C区29号土壙等は、混入というよりはむしろ廃絶した土壙に土器片が廃棄された結果を示しているものと思われる。なお、小破片が主体であり、完形に復せるものが1点も存在しないので今更言うまでもないところであるが、この時期の再葬墓によく見られるように、土壙内に意図的に配置された例は一つもなかった。

出土土器の概要　主として白倉B・C区で発見された土壙群がその占地形態・形状・覆土の状況等の比較から、ほぼ同時期において有機的関係のあるものと推測された。

それでは、個々の土壙から出土している土器資料を比較した場合はこのことが妥当性をもっているのかどうかが問題となる。結論的には遺物の比較の上からも、これらの土壙がほぼ同時期の所産としてあやまりないといえそうである。出土土器を各土壙間で比較してみると、沈線区画による磨消縄文を主体としており、若狭徹の近年の研究成果に基づけば、その3段階（Ⅱ期）にほぼ並行する一群として位置付けることができよう。すなわち、中期前半から中葉にかけて、いわゆる岩櫃山式から須和田式前半段階にかけての一群と理解できよう。

今回の上信越線の一連の調査の中で、弥生中期に属する土壙群が各地の多くの遺跡で発見されているが、時期的にはほとんど近い時期の所産であることが明らかにされつつある。

性格について　当遺跡で確認された既述の土壙群は出土土器の特徴から弥生中期前半の極めて限られた時期に集中していることが明らかになった。しかも、形状や覆土の埋没状況が非常によく似ている点も注意された。これらの土壙が同一の機能を果たす一群であったとしておそらく誤りないものと思われる。土壙が3つの群に分かれ、しかも個々の分布に一定の規則性が見いだされる点も、この可能性を指示していると言えよう。いずれの土壙も自然埋没であること、及び完形の土器が埋置された状態がまったく認められないことは、この時期によく見られる再葬墓の墓壙の可能性をほぼ否定するものとしてよいであろう。最も可能性が高いのは貯蔵穴である。袋状の形状を呈するのは、土壙がある程度長期間にわたって使用されていたことを物語るものであろう。

これらと同種の土壙は、上信越自動車道の近接する他の遺跡でも数多く発見されている。吉井町の神保下條遺跡、神保植松遺跡、神保富士塚遺跡、長根羽田倉遺跡等が主なものである。立地条件もよく似ており、これまで不明確であった当地域のこの時期の生活空間を検討していくうえで貴重な資料と言えよう。

ところで、この種の土壙の性格が貯蔵穴という、極めて生活色の強い遺構であるにもかかわらず、調査地内で同時期の竪穴式住居跡はいっさい発見されていない。貯蔵穴群と住居群の占地条件が大きく異なっていたと考えることも一案であるが、竪穴住居跡のみの発見例も今までのところほとんど見られないので、根拠としては弱い。通例の竪穴住居の構造との根本的な相異の可能性も考えなければならないであろう。

中期以外の土壙　該当するもので遺構の時期が明らかなものとしては、天引46号・109号土壙が挙げられる。

46号土壙は長軸をほぼ南北とし、長軸長2.94m（下端で2.45m）、短軸長1.94m（下端で1.17m）の規模の隅丸長方形（長円形に近い）を呈するものである。壁面の遺存がわずかであるので、覆土が自然埋没なのか人為的な埋め戻しによるものなのか不明確である。底面の中央寄りから壺形土器の下半部がその底部を下にして出土している。これから60cm南に離れて、その上半部が出土している。出土状態から、完形の壺が下半部の出土した位置にもともと据え置かれ、後にこわれて上半部が移動したものと推測される。形状・深さから貯蔵用の施設とは考え難い。規模、土器の存在から埋葬用の墓壙の可能性も考えられる。出土した土器は弥生後期の第2段階に属するものと思われる。

109号土壙は108号住居の東端に取り込まれるように重複して位置している。住居跡の遺存状態がわるいため、果たしてこれと新旧の関係にあるのかどうか問題である。土壙内から出土した土器も樽式段階のものであり、住居の時期と大きく齟齬をきたすものではない。住居に伴う貯蔵穴等の施設の可能性も十分考えられる。

第2表　弥生土壙一覧表

土壙番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ (cm)	覆土の主体	主な出土遺物 観察表頁	備考 図番号及びPL番号
白倉B区 16号	円形	方形	102×108×97	黒褐色土	中期土器片多数 58, 76頁	図79・176・222 PL47・124
白倉B区 56号	不整円形	すり鉢形	91×101×55	褐色土		人為的でない可能性あり 図80 PL49
白倉B区 83号	円形	逆台形	95×86×50	暗褐色土	中期土器片少数 59頁	図80, 176 PL47, 124
白倉B区 97号	円形	鍋底形	(57)×105×27	暗褐色土	後期土器片少数59頁	南半分欠、人為的でない可能性あり 図80, 176 PL47, 124
白倉B区 132号	円形	鍋底形	92×110×27	暗褐色土	中期土器片極少数	底面は凹凸、人為的でない可能性あり 図79 PL49
白倉B区 133号	円形	変形 フラスコ形	(97)×185×75	雑多な土	中期土器片極少数	人為的な埋め戻し、覆土にしまりがない、時期的に大きく下る可能性がある。 図80 PL49
白倉B区 140号	円形	逆台形	141×123×53	暗褐色土		図81 PL47
白倉B区 152号	円形	やや フラスコ形	101×99×51	黒褐・暗褐色	中期土器片 59頁	図79, 177 PL47, 124, 125
白倉B区 162号	円形	フラスコ形	167×一×63	黒褐・暗褐色	中期土器片やや多数 60頁	163号土壙に後出する 図82, 177 PL47, 124
白倉B区 163号	円形	すり鉢形	168×一×63	黒褐・暗褐色	中期土器片やや多数 60頁	図82, 176 PL124
白倉B区 179号	円形	フラスコ形	129×110×107	黒褐・暗褐色	中期壺口縁部 61頁	典型的なフラスコ形 図81, 177 PL48, 125
白倉B区 183号	円形	フラスコ形	190×172×100	黒褐・茶褐色	中期土器片多数、小型片口壺 61頁	底面に径50cmのピット2個、側面にも径30cmのピット、大きい破片の出土が目立つ 図82, 178 PL131
白倉B区 231号	円形	フラスコ形	137×140×72	黒褐色土	中期土器片やや多数 62頁	図81, 179 PL48, 124
白倉B区 263号	不整円形	鍋底形	135×140×27	暗褐色土	中期土器片 62頁	図79, 179 PL49, 124

土壙番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ (cm)	覆土の主体	主な出土遺物 観察表	備　考 図番号及び PL 番号
白倉C区 1号	円形	鍋底形	147×140×38	黒褐色土	中期土器片やや多数 63頁	図84, 179 PL50, 125, 127
白倉C区 2号	円形	フラスコ形	108×123×69	黒・黒褐色土	中期土器片 63頁	3号土壙に後出する 図83, 179 PL50, 125, 127
白倉C区 3号	円形	長方形	165×133×87	黒・黒褐色土	中期土器片多数 64頁	西側を住居により切られている 図83, 181 PL50, 127
白倉C区 5号	円形	やや フラスコ形	136×134×69	黒褐色土	中期土器片多数 65頁	図85, 180 PL50, 125, 127
白倉C区 11号	不整円形	逆台形	150×148×32	暗褐色土	中期土器片 66頁	図86, 181 PL50, 127
白倉C区 15号	円形	フラスコ形	115×(68)×52	暗褐色土	中期土器片多数・壺胴下半部 66頁	西側半分を欠損 図87, 181 PL51, 125, 128
白倉C区 16号	円形	やや フラスコ形	90×93×34	暗褐色土	中期土器片多数 67頁	図85, 184 PL51, 128
白倉C区 29号	円形	ややフラスコ形	162×138×50	暗褐色土	中期土器片多数 68頁	図85, 182, 183 PL52, 126, 128遺物は覆土中位からまとまって出土、大きい破片が目立つ
白倉C区 30号	円形	逆台形	145×165×46	暗褐色土	中期土器片 70頁	図84, 184 PL53, 128 底面に2つの小ピット
白倉C区 31号	円形	鍋底形	125×129×12	黒褐色土	中期土器片、完形に近い筒形土器(底部欠) 70頁	住居により上半部を欠損 図86, 184, 185 PL52, 125, 129
白倉C区 32号	円形	鍋底形	150×123×30	黒褐色土	中期土器片少数 71頁	住居により上半部を欠損 図84, 184 PL129
白倉C区 72号	円形	鍋底形	98×101×40	黒・黒褐色土	中期土器片極少数 71頁	図87, 184 PL52
白倉C区 105号	不整円形	鍋底形	121×151×44	暗褐色土	中期土器片 71頁	図87, 186 PL53, 129
白倉C区 124号	円形	鍋底形	(91)×104×42	暗褐・褐色土	中期土器片少数 72頁	北側を土壙により欠損 図87, 186 PL53, 129
白倉C区 209号	長円形	鍋底形	152×148×36	暗褐・褐色土	中期土器片少数 72頁	北側を住居により欠損 図88, 186 PL129
白倉C区 222号	円形	フラスコ形	103×70×32	黒・黒褐色土	中期土器片多数、大きい破片が目立つ 72頁	東側半分を欠損 図88, 186 PL53, 125, 129
白倉C区 253号	円形	長方形	122×123×64	黒・黒褐色土	中期土器片多数 73頁	図86, 187 PL53, 125, 129
白倉C区 255号	不整円形	逆台形	142×128×46		中期土器片やや多数 74頁	図88, 186 PL53, 129
天引 46号	隅丸長方形	鍋底形	294×194×34	茶褐・暗褐色	後期壺胴上部・胴下部、破片 74頁	長軸を南北方向にとる 図91, 188 PL56, 130
天引 59号	円形	フラスコ形	184×154×39	黒褐・黄褐色	中期甕上半部 74頁	図90, 188 PL58, 130
天引 65号	円形	長方形	169×170×75	黒・暗褐色土	中期土器片多数 75頁	図91, 189 PL55, 130
天引 66号	円形	フラスコ形	161×157×66	黒褐色土	中期土器片やや多数 75頁	図90, 188 PL55, 130
天引 69号	不整楕円形	すり鉢形	210×217×94	黒褐色土	中期土器片多数 76頁	図89, 189 PL130
天引 109号	円形	鍋底形	121×112×24	暗褐色土	後期甕・高坏脚部 76頁	図91, 189 PL131
天引 113号	円形	すり鉢形	105×102×33	黄褐色土		人為的なものでない可能性あり 図89 PL55

3　古墳時代の遺跡

(1) 概要

古墳時代前期・中期に属する遺構としては、竪穴住居跡31軒、方形周溝墓１基、土壙９基がある。

その分布は、中期の竪穴住居跡１軒と前期の土壙７基が白倉Ｂ区から発見されているのを除くと、残りの大半の諸遺構はすべて天引地区に集中している点が特徴的である。これらから半世紀以上の空白期間期間をおいて再登場する古墳時代後期の大量の竪穴住居群が圧倒的に白倉Ａ・Ｂ・Ｃ区に集中しているのとは対照的である。なお、この時期の天引地区にある竪穴住居はわずかであり、むしろおびただしい数の粘土採掘壙が掘られるような住空間以外の土地利用に重点があったと思われる。このような状況は奈良時代から平安時代にかけても続いており、やはり、白倉地区に圧倒的な数の竪穴住居が営まれている。

(2) 竪穴住居跡

当該時期の31軒の住居跡は、前期のもの23軒と中期のもの８軒に分けられる。そのうち中期の１軒（白倉Ｂ区14号住居）を除くと他はすべて天引地区で確認されている。

地形区分をやや大きくとらえるならば、前期・中期の集落が天引地区の中でも特にその南側の丘陵上に形成されているのは、弥生時代後期の集落の場合と同様である。しかし、細かく見ていくと時代・時期を追って微妙に変化していっている点が、よく読み取れる。

すなわち弥生時代後期の集落は、地区の南側の中でも、特にその南寄りに中心があり、集落域はさらに南側の今回の調査対象地外にまで広がりを見せることが十分推測される。これに対して、古墳時代前期の集落は、南側の地区の中でも特にその北寄りに分布の中心があり、南寄りは希薄になっているのがよくわかる。おそらくこの南寄りの部分が、古墳時代前期の集落全体の南端に当たっており、その南側の調査地外にはのびていかないものと思われる。そのことを物語るように、南寄りの中央に、同時期の方形周溝墓１基（１号方形周溝墓）が築造されている。集落と周溝墓が対の関係にあることは間違いないであろう。この単位集落の長にあたる人物のために１号方形周溝墓が築造された可能性が極めて強いと言えよう。若干巨視的に見るならば、集落域の南側に集団の長の墓が営まれている構図が看取できよう。このような関係が具体的にとらえられる例として、資料的に重要である。

中期の段階に入ると、集落の規模が縮小する。時期的には継続していくものではあるが、前期の集団をそのまま継承するかたちで継続していったかどうかは疑問である。７軒の住居が散在的にあり、前期のような充実ぶりは認められない。前期には小型仿製鏡とは言え、鏡を保持するような有力者（天引20号住居）が集団の長として存在していたのであるから、中期の集落とは質的に異なるものであったと思われる。

細々と営まれていた中期前半の集落も、この時期をもって跡形もなく消滅してしまう点も、前期の集落との非連続性の部分を考慮しなければならないであろう。前期の主力部分は、中期の段階にはすでに他地域に移動していた可能性も考えられよう。

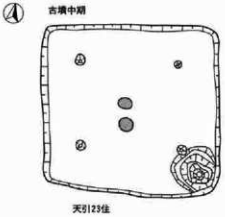
以下、集落を構成する個々の住居跡の時期的特徴について検討することとしたい。

平面形態・規模　平面形態は基本的には正方形プランを指向しているものと思われる。詳細に見ていくと、正確な正方形あるいはそれに極めて近いものは３例（10cm前後の差まで含めれば、６例）と少ない。これに該当するものは比較的小型の住居であり、中心となる住居の場合、正方形に近い長方形プランを呈している。その場合、東西方向の方がまさるもの（東西型）と南北方向の方がまさるもの（南北型）の二者がある。東西型は21軒にのぼるのに対し、南北型は５軒である。比較的大型の住居はすべてはっきりした東西型であるので、前期・中期を通じて東西に長い長方形プラン（ただし、正方形に近い）が

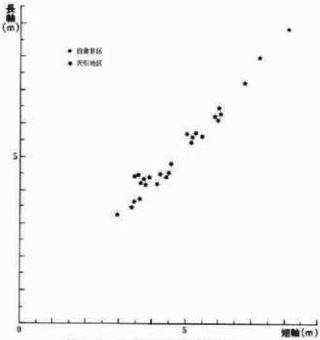
基本であったことがわかる。本遺跡における弥生時代後期の住居が南北方向に長い長方形プランを基本としていることと、住居構造上で基本的に異なっていることを示すものと言えよう。しかも、弥生後期のの中で、時期を追うに連れて長大化の方向をたどり、その第３段階にはピークに達していたわけであるから、古墳時代前期のものとの断絶性は極めて強いものと言わなければならないであろう。

次に規模について見ると、前期では、長軸長7.94ｍのもの（天引13号）を最大とし、同６ｍ大のものが３軒、５ｍ大のものが４軒、４ｍ大のものが９軒、３ｍ大のものが５軒で、最小は3.15ｍである。住居の近接状況から、前期の集落は大きくは前後２時期の住居群から構成されるものと思われるが、住居の規模別の段階的構成は、集落内の階層差をほぼ反映しているものと言えよう。なお、この時期の最小規模の住居のうちで、炉・貯蔵穴等の生活施設を伴わないもの（６？・34・51？号）については、居住用以外の用途も考慮しておく必要があろう。

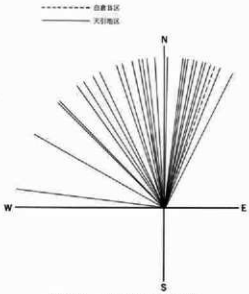
中期のものでは、最大が長軸長8.82ｍとやや突出し、次に7.2ｍのものが続き、さらに、６ｍ大１軒、５ｍ大２軒、４ｍ大２軒、３ｍ大１軒となっている。



第25図　主要古墳住居平面



第24図　古墳住居平面規模グラフ



第26図　古墳住居主軸方位

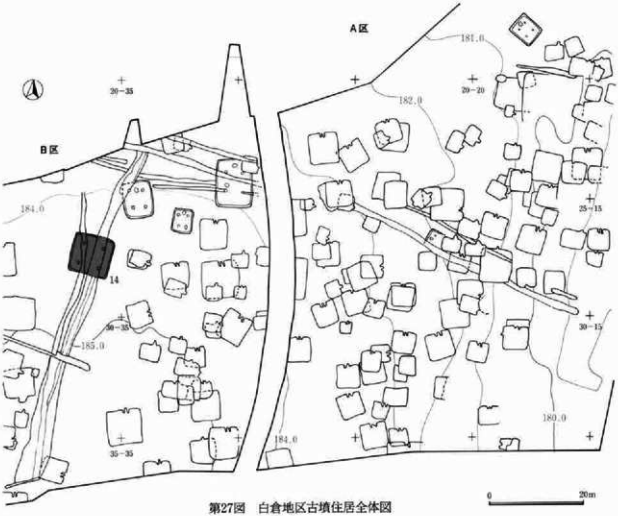
ただし、最大のものは白倉B区に位置するものであり、当然、天引地区に形成された単位集落の中に含めて考えることはできないであろう。とするならば、中期のものについては、この7軒で同時期の単位集落を構成していたと考えて大過はないであろう。

方向　後述するように、当該期の住居で炉の確認されたものの多くは、弥生後期の住居の場合と同様に南北方向の中軸線上の北寄りに位置している。また、貯蔵穴が確認されたものでは、やはり弥生後期のものと同様に住居の南東隅あるいは南西隅に設置されていた。このことは、東西方向に長軸をとってはいるものの、前代のものと同様に、基本的には主軸を南北に取るものであったと言えよう。

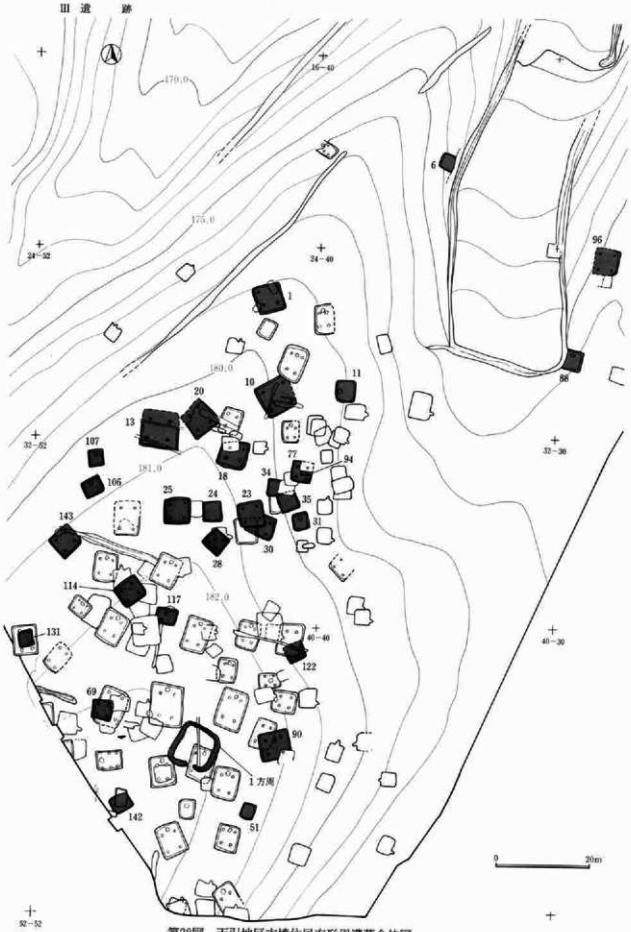
そこで、各住居の主軸方向をまとめた第26図を参考にすると、弥生後期のものにくらべて、振れ幅が大きく、まとまりがほとんど認められないことがわかる。その原因としては、集落の占地している地点の微地形を見るとわかるのであるが、この部分が丘陵の先端寄りにあり、平坦面から傾斜面への変換点に当たっているため、複雑な地形をなしているからである。そのため、各住居が築造される場所の地形にマッチさせるため、南北方向を指向しつつも様々な方向を取る結果につながったものと思われる。すでに集落の消滅していた南寄りの平坦な部分を選ばず、あえて北寄りの斜面部を選んで、整然としない住居の配置形態を取ったことについては、別の視点から検討する必要があろう。

柱穴　柱穴が確認されたものは、18軒であり、伴わないことが確認できたものは12軒である。有無の相違が住居規模の大小に呼応していることは、両者を比較すれば明らかである。

柱穴は4本の主柱穴から構成されているものがす



第27図　白倉地区古墳住居全体図



第28図　天引地区古墳住居方形周溝墓全体図

べてであり、弥生後期に見られたような変則的なものは認められない。4本の位置的関係を見てみると、弥生後期のものにくらべて、柱穴の位置が壁側に寄っていることに気付く。すなわち、主柱穴に寄って囲まれる内陣部分が広くなっていることになるわけである。

床構造　弥生後期の住居のそれとの大きな違いは、土を入れ替えて床面を造作しているものが多く認められたことであった。もちろん、竪穴の掘り方底面に当たる黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していると思われるものも多く認められている。

客土により床を造作しているものは13軒にのぼるが、その方法は区々である。その中で最も多いパターンは、4本の主柱穴に囲まれた内陣部分については地山面をそのまま床面とし、それ以外の壁に沿った部分を約10cmほど掘り下げて土を入れ替える構造である。その場合、四壁すべてに沿って掘り下げているものは、4例で、他に3辺、2辺、1辺がある。また、1例だけ、主柱穴に囲まれた内陣部分だけを掘り下げているものがある（天引91号）。

炉　前期・中期とも炉の形式は地床炉である。ただし、弥生後期の事例のようにしっかりしたものは極めて少ない。このうち、棒状の炉石が確認されたものは7例と少ない。炉石を据えるのが弥生後期ほど一般的ではなかったものと推測される。他は床面の焼土・灰の存在から特定できたものだる。もちろん当初は存在したのであろうが、調査時には確認できなかったものも多い。

入口施設　弥生後期の場合のように出入口用の梯子状施設の存在を物語るような明瞭なピットが必ず伴っていたが、古墳前期・中期のものでは、可能性のあるものはいくつか確認されているが、必ずしも規則的なありかたを示しておらず、断定はむずかしい。天引106・107・142・143号住居で貯蔵穴の脇から発見されているピットは、その可能性がある。

貯蔵穴　壁際から貯蔵穴と思われる土壙が確認されたものが22軒（前期15、中期7）ある。その位置取りを見ると、1軒を除いてすべて南壁側に設置されているという意味では、弥生後期のあり方を継承していることがわかる。南壁際のどの位置かを追跡してみると、前期のものでは東側のもの13例、西側のもの2例と前者が圧倒的である。これに対して、中期のものでは、東側3例、西側3例、北壁の東側1例となっている。なお、全体に言えることであるが、東側、西側にあるものとも、大半のものが住居の隅部に完全に寄っている点が新しい傾向として注意されよう。弥生後期の場合、南壁の中心にある入口施設のすぐ脇に設置されていたものから、時期の推移とともに徐々に隅部に寄る傾向が見られたが、古墳時代に入り一段とそれが進行し、隅部にたどりついたとも言えよう。

弥生後期第3段階になって認められるようになった貯蔵穴をめぐる遺状の構造は、古墳前期・中期の場合にも明瞭に認められる。その場合、比較的大型の住居の貯蔵穴に限って認められる。

なお、このしっかりした土壙の場合に顕著だが、方形の区画が明瞭に意識されているのが注意される。

ベッド状遺構　弥生後期第3段階にかなりの頻度で認められたベッド状遺構は、古墳時代に入りほとんど見られなくなる。わずかに天引90号住居の1例のみが確認されたが、弥生期のものと位置関係も異なることから、用途も異なる可能性がある。基本的には、弥生第3段階のものは、古墳時代に継続しないものと言えよう。

特殊な土器の出土　古墳中期に属する3軒の住居において、高坏・坩等の日常器ではない土器類がまとまって出土しており注目された。いずれの場合も、住居廃絶後のものであり、2例は廃棄されたものであるのに対し、1例は廃絶後に竪穴底面に意図的に置かれたことを推測させた。前者が祭祀に使用された土器を特にこの場所に廃棄したものと思われるのに対し、後者は祭祀空間そのものを物語っている可能性が強い。他遺跡の場合も、この中期以降にこの種の事例が多くなることから、廃絶後の住居のありかたとして注目されるところである。

白倉Ｂ区14号住居跡

図93・94・223　第29図（本文編）　PL57・133　観察表77頁

位置　27－36　白倉Ｂ区の調査区の北東寄りの平坦面上に位置している。周囲には同時期の住居はまったく認められない。北側の未調査部分には住居跡の分布は希薄である可能性が強いので、本住居が単独に近い状態であったことが推定される。

形状　主軸をほぼ南北方向に取り、南北長8.04m、東西長8.72mを測る。正方形プランに近い長方形プランである。

面積　71.61m²（復元推定）　　**方位**　N20°E

周壁・周溝　住居の中心寄りを南北に縦断する２条の平安期の道路状遺構により南北両壁に破壊が大きく及んでいるが、東西両壁は全体に遺存していた。壁高は、最も残りのよい南西寄りで40cm、最も悪い北西寄りで25cmを測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　壁寄りを中心にして床面をおおっている土は黄褐色ローム（第２層）であり、流れ込みによる自然埋没土とは考えにくい。その上層の第１層の暗褐色土が埋没土の主体をなすもので、流れ込みによる自然埋没に起因している。

床面及び床下構造　後出する道路状遺構による攪乱のため、不明瞭な部分が多かった。基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しているが、西壁に沿って帯状に土を入れ替えて造成していると推定される部分が認められる。

柱穴　４本の主柱穴が確認された。住居の対角線上に規則正しく配置されており、柱穴間の距離は、柱穴１～２で4.20m、柱穴１～３で4.46mを測る。柱穴の掘り方は径70cm前後の不整円形を呈する大型のもので、深さも１mあまりとしっかりと掘られている。

炉跡　確認されなかった。道路状遺構との重複により消失したものと思われる。

遺物の出土状態　既述のように住居の主要部分を後出する道路状遺構が占めていたため、これに伴う大量の礫および土器類が埋め尽くしていた。住居に直接関わる埋没土が遺存していたのが東西の両壁寄りであったから、当然住居に関わる遺物の出土地点もこの部分に限定されていた。

出土した遺物の大半は覆土中からのものであり、住居に直接伴うことが明らかなものは認められなかった。住居の廃絶に伴って、住居内の主要品は運び出されたことが推定される。覆土中からは大量の土器類が出土している。これらのうちで注目されたのは、住居北東隅寄りから出土した一群のものと、南西隅寄りから出土した一群である。いずれも明らかに廃絶後の竪穴内に場所を定めて外側から投棄されたものであることがわかる。前者の一群には、完形の壺(6)をはじめ大きい破片が目立つのに対し、後者は、復元にはほど遠い夥しい量の小破片が一ケ所に集中していた。

11（本文編第29図）は、本文記載中に図化した遺物である。出土位置は住居南東隅（南辺及び東辺から約50cm）の床直である。この壺は、口縁部が有段で胴部が球状を呈している。胴下部～底部を欠損するが他は残存している。口縁部はヨコナデで胴部外面はハケ整形の後ミガキが行われ、内面はヘラナデである。口径は16.9cmを測る。色調はにぶい黄色橙で、焼成良好、胎土には礫を少し含んでいる。

第29図　白倉Ｂ区14号住居出土壺

その他の遺構との重複関係　既述の通り、後出する平安期の2条の道路状遺構が中心寄りを南北に縦断している。

時期　古墳中期

天引1号住居跡

図95・96・224・225　PL58・134・135　観察表78頁

位置　26—42　調査地の中心部分を南北にのびる舌状の高まりの中心寄りに位置している。周辺には同時期の住居はまばらである。

形状　長軸を東西方向に取り、長軸長6.20m、短軸長5.87mの、正方形に近い長方形プラン。西側の両隅及び北東隅部は若干丸みをおびているのに対し、南東隅部はほぼ直角をなしている。

面積　32.77㎡　　**方位**　N17°W

周壁・周溝　尾根の頂部に位置しているため、旧表面の崩落が進んでいる。近年の耕作に伴う土壙により一部破壊されているのを除けば、周壁は全体に確認された。壁高は、最も残りのよい南壁で40cm、北壁で5cm前後と、北に行くにつれて後世の崩落・削平が深く及んでいる。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒色土、黒褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。黒味の強い土質で構成されていることは、後述する遺物の出土状態（投棄されたと思われる土器が大量に出土）とも合わせると、廃絶後の竪穴がゴミ捨場的な投棄を果したため、他の住居の埋没土にくらべて著しく黒色化が進んだものと思われる。

床面及び床下構造　床面は比較的平坦ではあるが、しっかりと踏み固められた状況は認められなかった。　住居の中心寄りは、黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しているのに対し、北・西・南の3壁に沿った床面は、幅80cm前後、深さ10cmの規模でコの字形に掘り窪め土を入れ替えて造成している。

柱穴　3つの主柱穴が確認された。もう1つは、該当する部分に近年の耕作溝がかかっているため消失してしまった。確認された柱穴は、住居の対角線上に規則的に配されており、柱穴間の距離は柱穴1～3で3.32m、柱穴2～3で3.10cmを測る。住居の平面形状に合わせて東西方向の方が南北方向より若干長く取っている。また、柱穴の位置が壁寄りになっており、柱穴に囲まれた空間が広い点が注意される。

炉跡　確認されなかった。本来的には伴っていたと思われるので、明瞭な痕跡を残していなかったと言ったほうが当を得ているかもしれない。

貯蔵穴　住居の南西隅に位置している。上端で43×40cmの不整隅丸方形で、深さ65cmを測る。土壙の周囲には高さ5cmの土堤状の高まりがめぐるが、北東側は明瞭でない。

遺物の出土状態　出土した遺物の大半は、住居の中心から南壁寄りの部分に集中していた。大量の土器類であり完形に近く復せるものの、完形品は1点も存在していない。むしろ、破片の多さが顕著である。これらの大半は、床面より5～10cm上であり、埋没土の第1層の黒色土中から出土している。住居廃絶後に南壁側から竪穴内に投棄されたものであることがわかる。本住居に近い時期の住居（10・23・35号）が、すべて南側にあることから、これらのいずれかの住居の住人による投棄が推定される。出土した土器の中心を占めるのは台付甕である。器種の中では、被熱により破損する頻度が他の器種にくらべて高い結果が量の多さにつながっているのかもしれない。

時期　古墳中期

天引6号住居跡

図101・225・247　PL58・135・149　観察表79・100頁

位置　20—34　南北にのびる舌状の高まりの東側裾寄りに位置する。そのため、住居の周囲の地形は、西から東へ向けての急傾斜面となっている。周囲には同時期の住居は認められず、条件の悪い場所に一軒単独で存在している。

形状　住居の東側部分を失っているため不明確であるが、正方形プランに近いものと推定される。炉

の位置関係からすると、主軸を東西方向にしているものと思われる。南北長3.10mを測る。

面積　7.88㎡（現状）　**方位**　W29°N

周壁・周溝　住居の東側部分は、舌状の高まりを形成した谷地形の底面に近い部分となっている。住居の東側部分はこの谷地形に切り取られるように消失している。周壁が確認されたのは、東壁を除く3壁である。壁高は、西壁の南寄りで最も高く70cmを測り、東へ行くにつれて急激に低くなっている。後世の削平により減じた部分を当然考慮しなければならないが、そのことを割引いても付近の地形が極端に変化したことも考えられないので、西寄りの方が本来的に高かったことが推測される。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒色土を主体とし、これに黒褐色土、暗褐色土、褐色土の層序が存在している。住居の西側からの流れ込みによる自然の埋没過程をよく示している。この状況も本住居がかなり傾斜のきつい斜面上に位置していたことを物語っているものと言えよう。

床面　比較的平坦な面をなしていた。面はある程度の固さは備えていたが、踏み固められた状態が明瞭に認められるほどではなかった。

柱穴　明らかに柱穴と認められるものは確認されなかった。

炉跡　東西方向の中軸線上で、西壁から1.1m内側に位置している。径約50cmの範囲の床面が焼けており、わずかに窪んでいる。炉石は認められなかった。

遺物の出土状態　床面上から比較的まとまった量の遺物が出土している。土器類に完形品は1点も存在しない。ただし、一部は欠損するものの全周するものが多い。遺物の出土地点を見てみると、住居の西壁寄りには少なく、中央から東壁寄りに集中している。住居廃絶後、西側からの土砂の流れ込みがいちはやく進み、その後に竪穴内に投棄されたことを物語っているものと思われる。

一方、西壁寄りの床面上からは、よく使い込まれた流紋岩製の砥石が出土している。また、南東寄りの床面上には、何らかの作業用に使用されたことが推測される結晶片岩の自然石が床面上から出土している。ただし、出土位置が流れ込みかあるいは投棄されたと思われる土器類の集中地点と同一の場所であるので、これも住居に直接伴うものではなかった可能性もある。

時期　古墳前期

天引10号住居跡

図97・98・226・227・228・247　PL59・135・136・137・149

観察表80・101頁

位置　30－42　調査地中央で、南寄りの平坦地から北へ向けて舌状の高まりがのびていくちょうど接続部に位置している。周囲は北東に向けてゆるやかに下がる斜面上である。

形状　主軸を南北方向に取り、東西方向に若干長い長方形プラン。長軸長7.2m（推定）、短軸長6.75mを測る。東壁を失っているため不明確であるが、主柱穴の位置関係と床面のよごれの範囲から破線で図示した位置に東壁を推定している。

面積　47.08㎡（復元推定）　**方位**　N29°W

周壁・周溝　東壁を除くとほぼ全体に確認できた。壁高は、最も残りのよい西側で30cm、東に行くにつれて徐々に浅くなり、東壁の部分では消失してしまっていた。

周溝は東側を除くと壁に沿って全体に確認されたので、本来的には全周していたものと推定される。東壁際で幅15cm、深さ約5cmの規模である。

埋没土　暗褐色土を主体としており、炭化物の混入が注意される。周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、比較的よく踏み固められていた。面は比較的平坦である。

柱穴　4つの主柱穴が確認された。住居の対角線上に規則的に配されている。いずれも住居壁から1.2m前後の位置であり、著しく壁際に寄っている。柱穴間の距離は、柱穴1～2で4.12m、柱穴1～3で

4.80mを測り、プラン形状に呼応している。柱穴の掘り方は上端で30cmあまりの円形で、深さ60～80cmである。

炉跡　南北方向の中軸線から1mほど東で、北壁から2.3m内側の位置にある。35×50cm南北方向に長い長円形を呈する範囲の床面にかすかに痕跡を残していた。

貯蔵穴　北壁の中心から1.5m東に寄った壁際に位置している。上端で1.20×1.05mの東西方向に長い隅丸方形を呈しており、そこから15cm下がった位置に段をつくり、さらに50cm以上掘り窪められて底面に達している。形のよく整ったものである。

内部から完形の高坏(12)及び破損した高坏(11・13)が出土している。

遺物の出土状態　住居内から大量の土器類が出土している。しかも、完形あるいはそれに近いものが多い点が特徴的である。これらのうち主要なものは、住居内の2ケ所に集中する状態で認められた。1つは、住居北西寄りの部分であり、もう1つは、既述の貯蔵穴内である。特に前者における土器の多さが目立つ。

さらにそれぞれについて具体的に見てみると、北西隅では、高坏(10・16・17・18・19・20・23・26・28)が最も多く、次に台付甕(5・6・7・8)がある。また、完形の坩(31・32・33)の存在も注目される。貯蔵穴とその周辺から出土したものは、すべて高坏であった。この2ケ所以外の地点から出土したものも高坏類が目立つ。以上のように、本住居から出土した大量の土器類の主体をなすのは高坏・坩といった日常雑器に属さない器種である点を注意すべきであろう。その出土位置及び出土状態を見ると、大きくは住居北壁寄りの2ケ所に集中しており、しかも覆土中から床面上まで折り重なるようなレベル関係にあることがわかる。住居の廃絶後の竪穴内に北側から投棄されたものであることが推定される。その場合、器種が日常器以外のいわば儀礼あるいは祭祀等に使用され得るものが大半を占める点、投棄された場所が限られた範囲であることから、ゴミ捨場的な空間に雑然と投棄されたのではなく、かなり意図的な行為の結果であった可能性が強い。

ところで、本住居の床面上から炭化材が、大きいものはないが散乱して認められている。恐らく火災住居であったものと推測される。

滑石片の出土　床面上から大量の滑石片が出土している点も特筆される。関係する遺物としては、滑石製臼玉の製作に伴う滑石片及び未成品である。臼玉未成品は8点であり、その他、素材片（コア）1点があり、それ以外に大量のチップ類728点が出土している。

出土した地点を見てみると、その大半が北西側の主柱穴に接した南東側の床面上からである。これに加えて南壁際の中央寄りの床面上にもある程度のまとまりが認められるが、前者にくらべれば格段に点数が少ない。住居内の北西側の空間で実際に製作されていたことは確実である。また南壁の中心寄りの空間でも一時期ではあったが製作が行われていた可能性がある。

その他の遺構との重複関係　北東隅で先行する弥生後期の4号住居と重複している。

時期　古墳中期

天引11号住居跡

図92・230・247　PL60・137・149　観察表82・101頁

位置　30－39　調査地中央にある南北方向の舌状の高まりの東側斜面に位置している。同時期の住居の集中地点からは若干北東側に離れて単独に近い状態である。

形状　本住居の場合、床面の造り替えが行われている。その結果、極めてわずかではあるが、一回り輪郭が拡張されている。

第一次の住居は、南北長3.98m、東西長3.62mの規模で、南北方向が若干長い隅丸長方形プランである。これに対して第二次（最終使用時）の住居は、南北長4.36m、東西長3.90mを測り、やはり南北方向に長い長方形プランである。

面積　15.23m²（第一次）、17.00m²（第二次）

方位　W7°N

周壁・周溝　最終使用時の住居では、周壁は全体的に確認された。壁高は、最も残りのよい西側で25cmを測り、東に行くにつれて浅くなり、東壁ではかすかである。一方、第一次の周壁の場合、西壁で壁高30cm、東壁で10cmを測る。

周溝は、第二次については西壁寄りを中心に確認されており、幅15cm、深さ15cmの規模である。これに対して、第一次のものは東側を除くほぼ全体で確認されており、幅18cm、深さ8cmの規模である。

埋没土　黒色土及び黒褐色土を主体としており、主として西側からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面及び床下構造　第一次の床面の大半は、黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。ただし、北壁から東壁、さらに南壁の中途に沿って幅80cm前後、深さ10cmの規模でコの字形に掘って土を入れ替えている。第二次の床面は、第一次の床面上に約8cmの厚さで盛土をして造り替えている。

柱穴　確認されなかった。

炉跡　東西方向の中軸線上で、西壁から約1mの位置にある。50×60cmほどの南北に長い長円形の範囲を炉床面としており、炉石は認められない。第一次の炉もまったく同じ位置の床面下から確認されている。

焼土・炭化材の出土　住居内の西側半分の床面上から炭化材と焼土が顕著に認められた。本住居が焼失住居であったことを物語っている。炭化材は小片が多く、東西方向の向きを取っているものが多かった。焼土部分は床面から高さ10cm前後の山形をなしており、主として褐色土・黄褐色土の焼土化したものである。火災中に周囲あるいは屋根から崩落した土が焼土化したものと思われる。

遺物の出土状態　出土した土器類のうち、甑(1)と台付甕(5)はまさしく住居の最終時点に床面上に存在していたことを思わせる出土状態であった。前者は炉の西側に隣接する床面上に底部を下にしており、後者はその南隣に脚台部が正立し、その周囲に甕の本体がつぶれた状態で出土している。住居に直接伴うのはこの2個体のみであり、その他の図示したものは、覆土中から出土した大型鉢(4)と小破片である。本来的に住居内で使用されていた土器類がこの2個体のみであったことも考えられなくはないが、焼失後、あるいは火災発生直後に主要な土器は持ち出された可能性がより強いのではなかろうか。

時期　古墳前期

天引13号住居跡

図99・100・229　PL61・138　観察表83頁

位置　32—46　調査地南の平坦面とその北側に取り付く南北方向の舌状の高まりのちょうど接合部に位置している。付近は北西に向けて徐々に下がる傾斜面上である。付近一帯には同時期の住居跡が密集している。

形状　住居の北半分を近年の畑地造成により失っているため不明確な点もあるが、長軸を東西方向に取り、長軸長7.94m、短軸長7.23m（復元推定）の東西にわずかに長い長方形プランを呈する。両者の間に極端な差はなく、正方形に近い点が注意される。

面積　55.32m²（復元推定）　　**方位**　N11°E

周壁・周溝　周壁が確認されたのは、住居の南半分である。破線で示した北壁の位置は、柱穴の位置関係を参考に推定した。壁高は、最も残りのよい南壁で約30cm、北に行くにつれて削平が深く及んでいる。近年の畑地造成により破壊される以前に北側はかなり削平されていたことがわかる。一方、住居の南壁寄りを東西方向に最近の耕作溝が横切っているため南壁の東寄り部分も欠落していた。

周溝は、周壁の確認された部分ではすべて明瞭に確認されているので、本来的には全周していたことが推定される。溝の規模は幅約18cm、深さ10cmあまりである。

埋没土　本住居は焼失住居であったため、床面に近い埋没土に多量の焼土、炭化物を含んでいた。埋没土の主体をなすのは暗褐色土であり、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面及び床下構造　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。ただし、主柱穴を結ぶようにコの字形（消失部分を除く）に幅20cm以上、深さ10cmあまりの溝が掘られ、土が入れ替えられていた。西壁に沿っても溝状に掘り下げて土を入れ替えている部分が認められた。

面は比較的平らであり、よく踏み固められていた。

柱穴　4本の主柱穴が認められた。住居の対角線上に規則正しく配置されており、柱穴間の距離は、柱穴1～2で3.98m、柱穴1～3で4.12mを測る。掘り方は、いずれも深さ90cm以上（柱穴1・3は推定）を測り、しっかりしている。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置している。上端で一辺約1.1mの住居壁に平行する正方形プランで、床面から約15cm下がったところで段がつけられ、さらに約40cm掘り込まれている。比較的形が整っており、底面も平らに近い。

炭化材の出土　住居の火災に伴う炭化材が南壁寄りを中心に出土している。炭化材の走向と規模からいくつかの傾向が認められた。南壁の中心寄りには、壁際から北に向かう走向のものが多く認められた。それらのうち西側のものは、幅が10cm以下であったが、東側には幅が20cm近いものが認められた。住居の南西隅のものには、住居の中心へ向かう対角線方向の走向のものが注意される。寄棟あるいは入母屋式の構造を物語るものと推定される。一方、南壁の西寄りには、壁周溝に沿うような炭化材が認められた。幅が10cm前後ある。また、これに近接する西壁の南寄りには、西壁に沿って径3cm前後の棒状のものが2～3本並んで認められている。

遺物の出土状態　土器類でほぼ原位置をとどめ、注意されたのは東壁際で出土したものである。完形の台付甕(4)は、貯蔵穴と東壁に挟まれた位置に横倒しの状態で認められた。また、これより約1m北の東壁際から、やはり完形の小型器台(6)と坩(2・3)がまとまって出土している。これらがセット関係で使用されたものであることを示している。

一方、西壁際の最南端からは、蛇紋岩製の細身の管玉が2点出土している。（これについては、整理上の不備から現在行方不明の状態のため、実測図を提示できなかった。次年度以降の報告に期したい。）

時期　古墳前期

天引18号住居跡

図103・104・236・247　PL52・138・149　観察表84・101頁

位置　33―43　調査地南側の平坦面と北側の舌状の高まりとの接合部に位置する。同時期の住居が密集する地点の一角であり、住居の東側は東に向けてゆるやかに傾斜している。

本住居の場合、当初の住居規模（第一次住居）から、東・西・南の3方向に拡張している（第二次住居）ことが確認されている。

（第二次住居）

形状　長軸を東西方向に取り、長軸長6.10m、短軸長5.94mの規模で、正方形に極めて近い長方形プランである。隅部はやや丸みをおびている。

面積　32.66㎡　**方位**　N15°E

周壁・周溝　住居の北西側を平安期の26号住居との重複により失っている以外は全体に確認された。壁高は南側で約30cmを測る。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒褐色土、暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面及び床下構造　第一次住居の床面の上で約10cmの高さまで盛土をおこなって床面を造り直していた。面は比較的平坦であった。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。そのうち柱穴3は、26号住居によって上半部を失っていた。住居の対角線上からは若干ずれているが、規則的な位置関係を示している。柱穴間の距離は、柱穴1～2で3.14m、柱穴1～3で3.18mを測る。ほぼ等間隔に配されていることがわかる。

炉跡　明瞭なものは認められなかった。

貯蔵穴　南壁の南東隅寄りの壁際に位置している。第一次住居の貯蔵穴の位置の南東側に隣接して

いる。上端では径60cmほどの不整円形を呈するが、中途から42×32cmの長方形に変わる。深さは約90cmと、だいぶ深い。

遺物の出土状態　出土した土器類は極めてわずかであった。破片が大半であり、床面上から出土したものはない。

その他の遺構との重複関係　住居の北西側で平安期の26号住居と大きく重複していた。

（第一次住居）

形状　北壁を第二次住居と共有している以外は、二次住居の拡張により、一次住居の周壁はすべて消失していた。ただし、周溝はほぼ全体に確認されたので、これを基準にして住居形状及び規模は復元できた。それによると東西長は5.49m、南北長は5.66mの規模であり、若干南北長が勝っていた。しかし、やはり正方形プランに極めて近い点をより重視するべきと思われる。

面積　28.89m²

床面及び床下構造　第二次床面から約10cm下に第一次のそれが認められた。主柱穴に囲まれた住居の中心部分は黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、四壁に沿った幅約1mの範囲は約10cmほど掘り窪められた土を入れ替えて床面を造成していた。

柱穴　3本の主柱穴が確認された。住居の拡張前の状況を物語るように3本とも拡張後の主柱穴の内側に寄った位置から認められた。柱穴3に対応する北西側の主柱穴が認められなかったが、探索の不備を反省しなければならない。柱穴間の距離は、南北で2.8m、東西で2.44mを有している。住居平面規模に応ずるように、南北方向の方がやや長い。

炉跡　東側の主柱穴を結んだ線の中心から約30cm外側の床面に径30cmの焼土の広がりが認められた。

貯蔵穴　第二次住居の貯蔵穴の北西側に隣接して確認された。上端では径50cmの不整円形で、中途から一辺30cmの方形になる。深さは約80cmである。軸線の方向こそ異なるものの、第二次のものと同形同大であったことがわかる。ただし、この貯蔵穴の場合には周囲を幅30cm前後で床面から10cmほど下がった段がめぐらされている点が注意される。この段の部分を拡張後の貯蔵穴及び柱穴2の掘り方がこわしている。

時期　古墳前期

天引20号住居跡

図105・106・231　PL62・138・148　観察表84頁

位置　31－45　前掲の13号住居と18号住居の間に挟まれるようにして位置している。特に13号住居とは接触するような位置関係であり、厳密な意味での同時存在は考えられない。

形状　住居の北西側を失っているため推定を含むが、軸線が四方から45°振れている。他の一般的な同時期の住居との比較からすれば、北に向いて南北方向から45°西に振れていることになる。

掲載図では、主柱穴の位置関係を踏まえて欠けている北西壁を破線で想定している。これによれば、北西一南東方向が6.03m、北東一南西方向が6.27mを測り、後者がわずかに勝る長方形プランである。しかし、極めて正方形に近いといったほうが当を得ていよう。図示したプラン形状に見られるゆがみは本来的なものではない可能性も強い。同時期の住居の中では、13号住居に次ぐ大型の規模である。

面積　33.69m²（復元推定）　　**方位**　N33°W

周壁・周溝　住居の北西壁を全体に近年の畑地造成により失い、また、住居内を深い耕作溝が2条斜めに縦断しているため残りの悪さを増している。壁高は、最も残りのよい南東壁で約25cmを測り、北西へ行くにつれて徐々に削平が床面近くまで及ぶ。

周溝は確認されなかった。

埋没土　近年の耕作による攪乱が及んでいたため不明な点も多い。その中で注目されたのは、床面を直接おおうロームを主体とする暗黄褐色土（第6層）の存在である。埋没土の確認された部分では、壁寄りを中心に10cm前後の厚さで認められた。比較的均一な土質であり、周囲からの流れ込みによる自然埋没は考えにくい。

床面及び床下構造　当初の状態を残している部分が少ないため、特徴の把握がむずかしかった。土を入れ替えて床面を造っているような状況も部分的には認められたが、ランダムな状態であり、意図的な造作の結果と考えられるものではなかった。基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しているものと推測された。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。相互の位置関係には若干のずれが認められる。柱穴間の距離は、柱穴1～2で3.34m、柱穴1～3で3.40mであるから、等距離に配置していることが推測される。掘り方は深さ70～80cmを測り、柱穴2・4は柱材に板材が使用されていることが推定された。

なお、南壁の中心から約80cm北東に寄り、70cm内側で認められた深さ約80cmのピットは入口施設に伴うものの可能性もある。しかし、同時期の住居で同様のピットが希なため、断定はむずかしい。

炉跡　明瞭なものは認められなかった。

ベッド状遺構　住居の東隅に1×1.5mの北東－南西方向に長い不整形な範囲が、付近の床面より5cmほど高くなっていた。弥生期の住居で認められたものほど定形的で明瞭なものではないので、同一の性格の施設と考えるには問題がある。

遺物の出土状態　本住居で特筆されるのは、小型仿製鏡の出土である。鏡は、住居の北東壁の中心から約30cm内側の床面上から出土した。鏡背面を上に向けて出土した。床面直上であることと、住居の壁際であることから、本来的にこの住居に伴っていた可能性も十分ある。ただし、土器類は、大半が破片であり完形に復せるものは1点も存在しない。

一方、柱穴4の北西側の床面上から水色のガラス小玉が1点出土している。

時期　古墳前期

天引23号住居跡

図107・108・230・248　PL63・139・149　観察表85・101頁

位置　35－43　調査地南の平坦面から北側へ舌状の高まりがのびていくちょうど付け根の部分に位置し、南西から北東に向けての斜面上である。

形状　長軸を東西方向とし、長軸長5.66m、短軸長5.34mの長方形プランである。西・北・東の3壁は直交・平行の関係にあるが、南壁は東に向いてやや開きぎみである。

面積　26.54m²　　**方位**　N 7°W

周壁・周溝　周壁は全体に良好に確認された。壁高は、最も残りのよい西壁で35cm、東に行くにつれて低くなり、東壁中央で20cmを測る。

周溝は一部を除いて明瞭に確認された。

埋没土　主として西側からの流れ込みによる自然の埋没過程を示している。

床面及び床下構造　中心寄りは黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、壁に沿って幅約80cmでほぼ全体に10cm前後掘り下げ、土を入れ替えて床面を造成していた。面は西から東に向けてかすかな傾斜を示しており、東西の両端で10cm近いレベル差がある。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。住居の対角線上に規則的に配されており、柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.52m、柱穴1～3で3.14mを測る。東西方向に長い住居平面形状に応じていることがよくわかる。

入口施設　南壁の中心から80cm内側に、上端で径18cm、深さ45cmのピットが認められた。入口施設に伴う可能性が強い。

貯蔵穴　住居の南東隅を利用して、整った貯蔵穴が設けられていた。壁の崩落等によりゆがんでいるが、上端で70×50cmの東西方向に長い長方形プランで、深さ70cmを有している。土壙部分の周囲には、幅約30cm、高さ3cmの高まりが円形にめぐらされている。

遺物の出土状態　出土遺物は極めて少なかった。実測図を掲げた3点の土器は、床面上あるいはそれに近い高さからの出土であったが、いずれも破片ないし欠損品である。住居の時期を推測する上では有効である。一方、住居の南西隅寄りの床面上からは、径1cmほどの緻密な緑色凝灰岩製の管玉が出土して

いる。全体の1/2ほどの破損品である。遺物収納等の不備で今回図示できなかったので、今後に期したい。

なお、住居の南北方向の中軸線上で、北壁から1.2m内側の床面上に据えられた状態で径30cmほどの板状を呈する台石が出土している。上面が使用により若干つぶれているのでこの位置で使用されていたものと推測される。

その他の遺構との重複関係　住居の南側で先行する弥生後期の22号住居、古墳前期の30号住居と重複していた。

時期　古墳中期

天引24号住居跡

図102・232　PL63・139　観察表85頁

位置　35—44　調査地南の平坦面とそこから北へのびる南北の舌状の高まりの接合部に位置する。後述する25号住居とともに古墳時代前期の住居分布の中心部にある。付近は南西から北東へ向けて下がるゆるやかな斜面上である。

形状　長軸を南北方向に取る長方形プラン。長軸長4.29m、短軸長3.76mで、両者の差はあまり大きくない。同時期の住居の中では最も小さい規模に属している。

面積　13.96m²　　**方位**　N 4°W

周壁・周溝　住居の北西隅を取り込むように上端で2.4×1.8mの東西に長い長方形プランで、深さ約1mの土壙が掘られているためこの部分の周壁を失っていた。それ以外は全体に良好に遺存していた。壁高は、最も残りの良い西側で50cmを測り、東壁ではこれより若干下がるものの40cm前後とよく残っていた。

周溝は確認されなかった。

埋没土　興味深いのは、床面直上に黄褐色ロームの純層に近いもの（第4層）が20cm前後の厚さで存在したことである。その分布範囲は、前述の北西隅の土壙の周囲である。この土壙が住居廃絶後、その竪穴がさほど埋没しない時点で掘削され、その土が周囲の住居床面上に盛り上げられた結果を物語っている。ちなみに、土壙内の覆土の埋没状態は自然埋没を示しており、土取り・墓壙等に使用された可能性は少なく、収蔵等のための施設であったことが推定される。

この黄褐色ロームの上をおおっている土は、暗褐色土、褐色土を主体としており、自然埋没によるものと推定された。

床面及び床下構造　住居の中心部分は黄褐色ロームの地山面がそのまま使用され、壁に沿っては幅70cm前後を深さ20cm近くまで掘り下げて土を入れ替えて造成していた。面は全体に平坦でよく踏み固められていた。

柱穴　床面検出時には確認できなかった。ただし、床下構造の調査に際して、東西方向の中軸線上に並ぶ2つの円形ピットが確認された。東西の両壁から約1.1mの等距離にあり、ピット間は約1.5mである。深さは80～90cmと十分であり、数及び位置関係は通例のものと異なるが、柱穴として使用された可能性が強い。

炉跡　住居の中心部に径1m前後の不定形な焼土面が認められた。顕著な窪みは認められていない。

貯蔵穴　住居の南西隅に位置している。上端で径約50cmの不整円形で、深さ70cmのしっかりしたものである。その周囲には幅40cmほどで高さ2cm前後のかすかな帯状の高まりがめぐらされていた。

遺物の出土状態　土器は、壺(1)を除くと覆土中から出土した小破片であった。壺は、貯蔵穴の上端縁部に接して出土しており、底部の一部を欠損しているものの、ほぼ完形で住居に伴うものと考えられる。

この他、住居の南壁寄りの床面上から台石に使用された可能性のある結晶片岩の自然石が出土している。

時期　古墳前期

天引25号住居跡

図109・110・232・250　PL64・139・149　観察表86・101頁

位置　35—46　前掲の24号住居の西側約3mに軸線を同じくして並列するように位置している。付近

は平坦面である。

形状　長軸を東西方向とし、長軸長5.61m、短軸長5.49mの極めて正方形に近い長方形プラン。向かい合う辺どうしは平行しているが、交わる辺は直角ではないため厳密に言えば、やや平行四辺形に近い形状である。

面積　27.66㎡　　**方位**　N 1°E

周壁・周溝　削平が深く及んでいたため遺存度合はよくないが、周壁は全体に確認された。壁高は、南側で20cmを測り、北側で8cmを有していた。

周溝は確認されなかった。

埋没土　壁寄りの床面上にのる黄褐色ロームを主体とする層（第3層）のあり方が注意された。厚さが8cmほどであり、均一な土質であり崩落等に起因するものであることが考えられる。その上をおおうのは褐色土を主体としており、自然の埋没過程を示している。なお、床面をおおう土層を中心に、焼土・炭化物の混入が認められたが、後述するように本住居が焼失住居の可能性があることと関係しているものと思われる。

床面及び床下構造　南壁寄りを中心に、壁に沿って幅約1mの範囲を深さ約10cmまで掘り下げて土を入れ替えていた。この部分を除けば、黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。住居の対角線上に位置しているが、変形の住居平面に応ずるように柱穴の位置もやや変則である。柱穴は深さ70～80cmを測り、しっかりしている。

貯蔵穴　住居の南東隅から約1m西に寄った南壁際に位置している。上端で60×50cmの東西方向に長い隅丸長方形で、深さ約65cmを有している。土壌の周囲には幅20～30cmほどのコの字形のテラス面をおいて幅70cm、高さ3cm前後のやはりコの字形を呈する帯状のわずかな高まりが南壁に取り付くようにめぐらされている。

炭化物及び焼土の出土　住居床面の北寄りを中心に焼土及び炭化物が確認された。焼土は4ケ所で確認された。相互に近接しており、炉の位置を示すものではない。この焼土の範囲に重なるように炭化物が出土している。これらは共に本住居が焼失住居であったことを物語るものと思われる。

遺物の出土状態　覆土中から出土した異形高坏(1)が、一部を欠くものの完形に近いものであるのを除くと他の出土土器はすべて大きく欠損するもの、ないし小破片であった。このことは焼失住居ではあるが、住居内で使用されていたものは別の場所へ持ち出されていることがわかる。

時期　古墳前期

天引28号住居跡

図111・233・248　PL64・140・149・150　観察表87・102頁

位置　36―44　前掲の24・25号住居の位置の南側に隣接している。24号住居と同様に南西から北東へ徐々に下がる斜面上である。

形状　軸線を四方からちょうど45°振っている。北西－東南方向で4.5m、南西－北東方向で4.5mの正方形の平面形態である。

面積　17.69㎡（復元推定）　　**方位**　N45°W

周壁・周溝　住居の北東半分で後出する平安期の27号住居と重複している。幸い、この住居の床面が本住居の床面までは及んでいなかったため、完全な消失は一部にとどまった。これを除けば、周壁の遺存状況は良好で、全体に壁高35cm前後を残していた。周溝は、周壁の検出できた部分では全体に確認できたので、当初は全周していたものと思われる。周溝は幅15cm前後で、深さ15cm前後である。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程が推測された。なお、多くの土層中に炭化物・焼土の混入が認められた。

床面及び床下構造　基本的に黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。その中で、北西壁に沿ってはほぼ全体に幅1m弱の範囲を約10cm掘り下げて土を入れ替えて造成していた。

面はほぼ平坦であった。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。柱穴の位置は、北西―東南の方向の中軸線上を基準にすると、住居

の対角線上より20cmほど内側に寄っている。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.18m、柱穴1～3で1.75mであり、住居平面に呼応しない配置であることがよくわかる。柱穴の深さは70cm前後と十分である。

炉跡　住居の中心と柱穴1との間に位置している。径約40cmの円形の範囲に焼土が認められ、その南東側の縁部には長さ30cmの棒状の結晶片岩が据えられていた。この時期の住居で、炉石を伴う明瞭な炉が認められたのはめずらしい。

貯蔵穴　住居の東隅に位置している。上端で径約45cmの円形で深さ45cmの規模を有している。

炭化材及び遺物の出土状態　住居内の覆土中から大量の土器が出土した。土器の実測図を掲げた16点はすべて覆土中からで、住居に直接伴うと推定されるものは1点も存在しない。土器はすべて欠損品であるが、かなりの部分を残すものである。出土地点を見ると住居の中心部から南西壁寄りに集中している。住居廃絶後の竪穴内に南西側から投棄されたものであることがわかる。これらの土器と一体をなすようにして、南西壁寄りの覆土中から炭化材が出土しており注意された。これらも住居に直接伴うものではなく、竪穴内に投棄されたものであろう。焼失住居に伴う炭化材ではない。

住居内の床面上からは、土器はほとんど出土していない。住居を廃棄する際に別の場所へ運び出されたものと思われる。なお、住居の南東壁の中心から東隅にかけての壁際の床面上から、ほぼ同形同大の棒状の結晶片岩の自然石が出土している（第3表）。端部に使用痕等は認められないが、一式で使用されていたものと推定される。いわゆる「こも編み石」と呼称されたりしているもので、全部で12点である。

その他の遺構との重複関係　既述のように、住居の北側で後出する平安期の27号住居と重複している。

時期　古墳前期

第3表　天引28号住居跡出土こも編み石一覧表

長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　材
21.5	4.8	3.5	495	黒色片岩
23.0	7.0	5.0	900	雲母石英片岩
20.0	6.5	4.0	690	雲母石英片岩
18.5	7.0	5.0	900	雲母石英片岩
21.0	5.8	3.0	470	雲母石英片岩
19.5	5.8	3.0	540	雲母石英片岩
21.7	6.0	4.0	745	黒色片岩
18.2	7.0	4.0	750	粗粒安山岩
21.0	6.0	5.0	980	雲母石英片岩
26.7	7.0	3.0	715	雲母石英片岩
24.5	6.0	5.5	1300	雲母石英片岩
21.0	6.8	3.8	900	雲母石英片岩

天引30号住居跡

図106・234・250　PL65・140・150　観察表88・102頁

位置　36—42　調査地南の平坦面とその北にのびる舌状の高まりとの接合部の東側に位置している。付近は西から東にかけて下がる斜面上である。

形状　後世の削平が深く及び、住居の北側を失っているため全体形状を直接的には把握できなかった。軸線はほぼ四方にあわせており、南壁と柱穴の位置を参考にすれば、一辺約5.8mの正方形プランに近いものであったと推測される。

面積　25.08㎡（復元推定）　**方位**　N16°E

周壁・周溝　周壁が明瞭に確認できたのは南壁のみである。東壁は、北へ向けて中途までかろうじて確認できたが、その先は削平が床面下まで及んでいるため消失してしまっていた。一方、西壁は、23号住居の覆土部分に位置が想定されるはずであったが、東壁の残りの悪さからすると確定は困難であった。壁高は、最も残りのよい南壁の西寄りで20cmで、北東に行くにつれて急激に浅くなってしまっていた。

ところで、本住居の場合、直前の時期にあたる弥生期の22号住居、直後にあたる古墳中期の23号住居と大きく重複していた。本住居を含めて3軒の住居が時期を追って建てられていく過程で、当時の地表面の高さが目立って変わるほどの変化はなかったと

してよいであろう。そこで、3住居の床面のレベルを比較してみると、22・23号住居の床面より本住居の床面の方が15cm高い位置にあることがわかる。壁高にも本来的にこれに近い差があったことが推測されよう。

周溝は確認されなかった。

埋没土　黒褐色土を主体としており、住居中心寄りの床面直上に黄褐色ロームが部分的に認められた。

床面　現在の地表面から床面までが浅かったため、耕作がここまで及んでしまっていたり、あるいは失っている部分も多かったため、当初の状況を把握しずらかった。

柱穴　2本の主柱穴が確認された。位置関係からすると4本の主柱穴のうちの東側の2本に該当することがわかる。西側の2本については、配されていたことは間違いないと思われるが、推定される位置の周辺からは明確なものは見つからなかった。柱穴間の距離は、3.45mを測る。柱穴に囲まれた空間をできるだけ広くとっていることがわかる。

炉跡　東側の主柱穴のほぼ中間の床面には、焼土が径70cmほどの範囲で認められた。この位置に炉跡が認められた例はないが、焼失住居でもないので炉の可能性が強いと言えよう。

遺物の出土状態　床面の遺存部分が少ないことや、削平が深く及んでいることもあり、出土した遺物の量は少なかった。出土した土器類は破片が中心で、完形に復せるものはなかった。

時期　古墳前期

天引31号住居跡

図114・234・249　PL65・139・150　観察表89・102頁

位置　36―41　前掲の30号住居の東側に隣接している。この周辺一帯に分布する古墳前期の住居群の中では最も東側に位置している。

形状　長軸を南北方向に取り、長軸長3.5m、短軸長3.39mの長方形プランを呈する。両者の長さにはわずかな差しかないので、正方形に非常に近い。同時期に属する住居の中では最も小型の部類に属している。

面積　9.41m²　**方位**　N10°W

周壁・周溝　周壁は遺存状態がよく、全体に確認された。壁高は、最も残りのよい西側で44cmで、東に行くにつれて浅くなり、東側で18cmを測る。

周溝は西側半分で確認された。幅20cm、深さ12cmを有している。

埋没土　暗褐色土及び暗茶褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、平坦な面をなしていた。

柱穴　明確に柱穴を推定させるものは認められなかった。住居中央のピットは上端で径20cm、深さ50cmを測るが、性格は不明である。

炉跡　住居の南北方向の中軸線上で、北壁から1.1m内側に位置している。炉床は径約50cmの不整円形で、中心寄りが10cm近く窪んでいたが、顕著な焼土面は認められなかった。この北側に接して焼土を含む黒褐色土が認められた。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置している。上端で径約40cmの不整円形で深さ42cmを測る。

遺物の出土状態　床面上から比較的まとまった量の遺物が出土している。土器類は1・5の場合も半分近くを欠損しており、完形に復せるものは1点も出土していない。

一方、石器類には注目すべきものがあった。流紋岩系の石材を使用した砥石(6・8)は、鉄製品の仕上げに近い段階で使用したものと思われ、シャープな弧状を描く面が何面も認められた。6は床面より若干上位からの出土であり、8は床面直上である。また、住居の中心からやや南東に寄った床面上に結晶片岩の板状の自然石(9)が据えられたような状態で出土している。何らかの作業に供された台石の可能性もある。

時期　古墳前期

天引34号住居跡

図110　PL66

位置　34—42　調査地南の平坦面とその北にのびる舌状の高まりとの接合部の東側斜面に位置する。周辺一帯に分布する古墳前期の住居群の中では、東端寄りに位置している。

形状　住居の東側を後出する33号住居との重複により失っていた。軸線をほぼ四方にあわせ、南北長3.78mを測る。東西長もほぼこれに近い正方形プランであったことが推測される。

方位　N 9°E

周壁・周溝　周壁は明瞭であり、東壁を除くとほぼ確認できた。壁高は、西側で30cmを測り、遺存状態のよい部類である。

周溝は、周壁の確認された部分についてはすべて伴っている。幅約18cmで深さ20cmを有している。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。面は平坦である。

柱穴　確認されなかった。

焼土の出土　住居の北壁寄りの床面上から焼土が確認されている。4ケ所に散在しているが、炉に伴うものであることが明らかなものはなかった。火災住居に伴うものとも考えられるが、炭化材がまったく認められていないので、可能性は弱いであろう。

遺物の出土状態　時期を推定できるような土器は1点も出土していない。弥生後期の35号住居を切り、古墳中期の33号住居に切られているので、古墳前期と推定した。

住居の南壁の中心に接するようにして、結晶片岩の板状の自然石が床面上に据えられるようにして出土している。

その他の遺構との重複関係　先行する弥生後期の35号住居を切り、後出する古墳中期の33号住居に切られている。

時期　古墳前期

天引35号住居跡

図101・235・236　PL66・141　観察表90頁

位置　35—41　調査地南の平坦面とその北側の舌状の高まりの接合部東側に位置している。相前後する時期の4軒の住居が重複していた。

形状　軸線をほぼ四方にあわせ、南北長4.11m、東西長4.18mの正方形プランである。

面積　15.23m²（復元推定）　**方位**　N19°W

周壁・周溝　住居北壁を後出する33号住居との重複によって消失している以外は全体に確認できた。壁高は、最も残りのよい南西側で45cmを測り、東に行くにつれて浅くなり、北東側で13cmである。

周溝は、周壁が遺存していた部分では、一部を除いて全体に確認された。幅約10cmで深さ5cm前後を測る。

埋没土　黒褐色土、暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。ただし、床面直上に認められた第3層は、黄褐色ロームを主体とするもので、流れ込みによる自然の埋没は考え難い。

床面　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。面は平坦であった。

柱穴　確認されなかった。床面を断ち割って精査したが認められなかったので、通有の主柱穴は掘られなかったとしてまちがいない。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置している。上端で70×58cmの南北方向に長い長円形であり、深さ45cmを有していた。形状には、直線や角張った部分も認められるので、本来的には長方形プランを呈していたものと推測される。土壙の周囲には、幅30～40cmで、高さ2cm前後の帯状のかすかな高まりがめぐらされている。なお、土壙の上端の北辺に沿って3石の自然礫が並んで出土している。その役割はわからないが、人為的に据えられた可能性もある。全体的にはよく整備された貯蔵穴と言える。

炉跡　明瞭な痕跡は認められなかった。

遺物の出土状態　住居内から大量の遺物が出土している。完形に復せるものは1点も存在しないが、

上半部あるいは下半部で全周するような欠損品が目立った。器種構成を見ると、高坏が圧倒的に多く、全体の7割近くを占めている。これに次いで坩・甕等が少量認められる。出土位置を見ると、住居全体で認められるが、特に北西寄り部分に集中する傾向がある。これら大量の土器のうち、明らかに住居に伴うようなものは認められなかった。もちろん住居の特定の場所に据えられたような状態のものはなかった。住居廃絶後、あまり埋没しない時点で、竪穴内に投棄されたものと推測される。その場合、日常器ではない高坏が大半である点を注意する必要があろう。

一方、これらの土器とともに多量の自然礫が出土している。不用の石が投棄されたものであろう。

その他の遺構との重複関係　西側で先行する弥生後期の97号住居・古墳前期の34号住居を切り、北側で後出する平安期の33号住居によって切られている。

時期　古墳中期

天引51号住居跡

図108・236・250　PL66・142・150　観察表91・102頁

位置　48—43　調査地南にある平坦面の南端東寄りに位置する。古墳前期の住居の中では最も南に位置するものである。住居の付近は平坦面から東下がりの斜面に移行する変換点の部分にあたっている。

形状　長軸方向をおおよそ南北に取り、長軸長3.22m、短軸長2.94mの正方形に近い長方形プラン。古墳前期の住居の中では最も小規模の部類に属している。

面積　7.84m²　　**方位**　N27°E

周壁・周溝　周壁の遺存状態はよく、全体に確認できた。壁高は、最もよく残る西側で30cm、東側では20cmを有していた。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、主として西側からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　基本的には黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、面はほぼ平坦でよく踏み固められていた。

炉跡　明確なものは認められなかった。ただし、住居の西壁から東へ90cmと50cmの2ケ所に焼土が認められた。前者は径30cmの円形の範囲で、後者は10×20cmの長円形の範囲である。いずれも面が明瞭に焼けているというものではない。

柱穴　認められなかった。床面を断ち割っての精査によっても認められなかったので、通有の主柱穴は掘られなかったとしてよい。

貯蔵穴　認められなかった。

遺物の出土状態　出土した遺物は極めてわずかである。注意されるのは、壺(1)であるが、覆土中からの出土であり、2/3を欠損している。住居廃絶後に投棄されたものと推測される。

時期　古墳前期

天引69号住居跡

図112・237・250　PL67・142・150・151　観察表91・103頁

位置　44—49　調査地南の平坦面の南寄りで、東西方向の中心にある。古墳前期の住居の中では、51号住居とともに最も南に位置するものである。

形状　長軸を東西方向に取り、長軸長4.47m、短軸長4.22mの正方形に近い長方形プランである。

面積　17.49m²（復元推定）　　**方位**　N9°E

周壁・周溝　平坦面上に位置しているため、住居の北東側を奈良期の68号住居との重複により消失しているのを除けば、遺存状態はよかった。壁高は、最も残りのよい南西側で63cmを測る。当初の住居の深さに近いものであったことが推測される。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土と暗茶褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面及び床下構造　大半は黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。北壁と東壁に沿っては不定形ではあるが、主柱穴と壁面に挟まれた範囲を床

面の高さから10cmほど掘り下げて土を入れ替えて造成していた。面はほぼ平坦であり、比較的よく踏み固められていた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。住居の対角線上にほぼ規則的に配置されており、柱穴間の距離は、柱穴1～2で1.78m、柱穴1～3で1.93mを測る。柱穴の深さが柱穴2・3・4がいずれも66～68cmを有しているのに、柱穴1が38cmの浅かったのは、探索の不十分さも考慮する必要がある。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置している。上端で径約70cmの不整円形で深さ70cmを有している。底面の位置は南に偏っており、斜めにえぐり込むような形状である。

遺物の出土状態　出土した遺物は極めてわずかであった。土器類は床面直上からの出土であるが、出土地点は散在しており、しかも完形に復せるものは認められなかった。

その他の遺構との重複関係　先行する弥生後期の100号住居の輪郭内にすっぽり入っており、また後出する奈良期の68号住居が北東側で重複している。

時期　古墳前期

天引77号住居跡

図113・114・237　PL67・142　観察表91頁

位置　33―41　調査地南の平坦面とそこから北へのびる舌状の高まりとの接合部の東側斜面に位置している。付近に集中する古墳前期の住居群の中では最も東寄りに位置している。

形状　住居の軸線をほぼ四方にあわせ、東西長4.76m(復元推定)、南北長4.55mのほぼ正方形に近い平面形態である。

面積　21.65㎡　　**方位**　N12°E

周壁・周溝　周壁が確認できたのは西壁と南・北両壁の西寄り部分であり、他は消失していた。東側で後出する平安期の93・94号住居、時期不明の17号住居が重複していることと、斜面部に位置しているため、東寄りが後世の崩落により削平されたことが主な原因である。

壁高は、最も残りのよい西壁で20cm、東へ行くにつれて徐々に浅くなっている。

周溝は確認されなかった。

埋没土　床面を直接埋めている土層（第2・3層）は暗褐色土を主体としており、西側からの流れ込みによる自然の埋没過程が推定されるが、その上にくる第1層はロームを主体とする黄褐色土であり、後世に周囲の遺構構築時の掘削土が運び込まれた可能性がある。

床面及び床下構造　床面の遺存している部分が少なかったため、全体の傾向はつかめない。西側半分に関して言えば、主柱穴と周壁に挟まれた部分を10cm前後掘り下げて土を入れ替えて造成しており、中心寄りは黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。住居の対角線上に規則的に配置されている。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.42m、柱穴1～3で2.46mを測り、各柱穴を等距離に配置したことがわかる。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置している。後出する17号土壙がこの周辺を床面下まで掘り下げているので、上半分を失っていた。確認時の上端で径57cmの円形で、推定される床面の位置から60cmの深さまで掘られている。

遺物の出土状態　出土した遺物は極めてわずかであった。土器類で形状をとどめているのは、器台脚部(1)の1点にすぎなかった。出土した位置は床面より若干高かったが、住居の時期を推定する手掛かりにはなろう。

その他の遺構との重複関係　住居の北東側を後出する平安期の93・94号住居により切られている。

時期　古墳前期

天引88号住居跡

図117・237・250　PL68・142・150　観察表92・103頁

位置　29―29　調査地南の平坦面から北にのびる舌状の高まりと浅い谷を挟んで東側に平行するやはり南北方向の舌状の高まりの西側斜面に位置してい

る。これまで見てきた大半の住居群と谷を挟んで対峙する位置関係にある。北側に位置する96号住居とともに集落域から離れて存在している感が強い。

形状　住居の軸線をほぼ四方にあわせている西下がりの斜面上に位置しているため、住居の西寄り1/3を欠いている。柱穴の位置関係を参考にすると、南北長4.43m、東西長4.44m（復元推定）の正方形プランが推定される。

面積　17.78m²（復元推定）　**方位**　N22°E

周壁・周溝　周壁は西壁を除いて確認された。壁高は、東壁で約50cmを測り、西へ行くにつれて急激に浅くなり、西壁にたどりつかないうちに消失してしまう。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、主として東側からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、比較的よく踏み固められていた。面は平坦である。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。その位置は、東西方向で住居の対角線上よりも両壁に若干寄っている。すなわち、南北両壁と柱穴の間の方が東西両壁と柱穴の間より広く取られている。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.08m、柱穴1～3で2.48mを測り、前述の状況が数値的にもよくわかる。柱穴の深さは、いずれも70cm近くを測り、しっかり掘られている。

炉跡　南北方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線上に位置している。本遺跡の古墳前期の住居の中では最も明瞭に確認された炉の部類である。炉床は径約50cmの円形を呈しており、面の窪みは認められない。その南端には棒状の結晶片岩が長軸を東西にして据えられている。また、その北側にはかすかではあるが炭化物の広がりが認められた。

貯蔵穴　住居の南西隅から若干西に寄った位置に確認された。上端で54×44cmの東西に長い長円形を呈しており、深さ55cmを測る。周囲には帯状に2cmほどの高まりがめぐらされていたことが推定されるが、あまり明瞭ではない。

遺物の出土状態　出土した遺物はわずかである。すべて住居の北壁寄りから出土している。実測図を掲げた土器類は、すべて床面上からの出土であるが、完形に復せるものは1点もなかった。一方、石器類では流紋岩系の自然石を利用した砥石(5)が注目された。北壁際の中心寄りから出土しており、原位置を保っていることが推定された。

時期　古墳前期

天引90号住居跡

図115・116・237・251　PL68・142・151　観察表92・103頁

位置　45—42　調査地南にある平坦面の東端に位置している。住居の東側は東下がりの斜面となっている。これより東側には同時期（古墳前期）の住居は認められない。

形状　長軸を東西方向に取り、長軸長6.41m、短軸長6.0mの正方形に近い長方形プランを呈する。古墳前期の住居の中では最大規模の住居に準ずる規模のものである。

面積　34.48m²（復元推定）　**方位**　N13°W

周壁・周溝　住居の南東寄りの一部を後出する51号土壙によって切られている以外は、全体によく残っていた。壁高は、最も残りのよい西壁の北寄りで70cmを測り、東へ行くにつれて徐々に浅くなり、東壁の中央で25cmを有している。前者は、本来的な壁高に近い数値と思われる。

周溝は、北壁及び東壁に沿っては全体に確認された。幅約15cmで深さ5～10cmを有している。

埋没土　基本的には、床面上から暗褐色土、暗茶褐色土、黒褐色土の順に堆積しており、不自然な土層状態は認められないので、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程が推測される。

床面及び床下構造　大半の部分は黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。ただし、住居の中心寄りで4本の主柱穴を結ぶように幅50～70cmで深さ10cmまで掘られ、土が入れ替えられていた。他の

住居には見られなかった構造である。

面は西から東に向けて徐々に低くなっており、東西の両端で約10cmの高低差がある。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。このうち北東側の該当箇所からは、ほぼ同形同大の2つのピットが東西に並んで確認されている。いずれも主柱穴としておかしくないので、新旧の関係で使用されたものと推定される。

一方、南東側の該当箇所からは、南北に2つのピットが確認されている。このうち南側のものは、形状が不定形であるためやや疑問点もあるが、深さ・位置的関係は合っている。ピットの上半分を後出する51号方形土壙によって切られているため不明確になっていることも、わかりにくくしているかもしれない。一方、北側のものは床面調査の時点では明瞭でなかったため確認できなかったものなので、はたして他の明瞭な主柱穴と同列に扱い得るのかが、まず問題である。柱穴の位置はややズレているが、深さは問題ない。一応、前者を主柱穴の第一候補として住居実測図は整理してある。

炉跡　南北方向の中軸線上で、北側の主柱穴を結んだ線上に位置している。据え付けられたと思われる炉石の北と南の両側に円形の窟みが認められたが、面に明瞭な焼けた痕跡は認められなかった。

貯蔵穴　当遺跡の古墳前期の住居跡に一般的に認められる該当箇所のうち、南西隅には認められなかった。一方、南東隅は後出する51号土壙が深く及んでいるので、もし設置されていたとしても、床面からの深さが40cm前後だと消滅してしまうことになる。少なくとも深さが50cm以上のものは設置されていないことになる。

ところで、住居の南壁の中心から80cm東で、90cm北へ寄った床面上（東壁からは2.4m西）に、上端で径55cmの円形で、深さ16cmの土壙が認められた。位置関係が通有のものとは異なることと、深さがやや浅すぎるので、これまで貯蔵穴としてきたものと同列には扱えないように思われる。なお、土壙内からは、赤色塗彩された二重口縁壺の口縁部(1)が、口縁端を上にして、そこに据えられたかのような状態で出土している。口縁部の高さは、床面の高さとほぼ一致しているので、これが器台的（置台）な用途に転用されていた可能性もある。

ベッド状遺構　北壁の西寄りに位置している。1.3×2.4mの東西に長い長方形で、高さ5cm前後を有している。同時期の住居ではこの一例のみであり、弥生後期の事例は隅部を利用して設けられているので同列に扱うことには躊躇するところである。

遺物の出土状態　土器類は、北壁際から出土した小型壺(1)を除くと完形に復せるものは認められなかった。ただし、二重口縁壺の口縁部(3)は、その部分については全周しており、出土状態も住居に伴うものであった可能性を示している。

石器類は、比較的多く出土している。このうち炉石(15)は多孔石の転用であった。この他、図示したもののうちでは砥石(12)を除くと、北側から流れ込むような状態で出土している。北側で弥生後期の91号住居を大きく切っているので、この住居に伴うものであった可能性もある。

なお、柱穴3の南東側の床面に25×30cmの偏平な自然石があり、台石の可能性もある。

その他の遺構との重複関係　住居の北西側で先行する弥生後期の91号住居を切っていた。

時期　古墳前期

天引94号住居跡

図123・237　PL67・142　観察表93頁

位置　33―40　調査地南の平坦面と北側の舌状の高まりとの接合部東側斜面に位置している。各時期の諸遺構が乱雑に重複するまっただ中にある。既述の古墳前期の77号住居を切り、奈良平安期の93号住居に切られるという重複関係にある。

遺構の概要　遺存している部分が極めてわずかであったため、住居の全体像を知るための要素の多くを欠いている。住居の軸線をほぼ四方にあわせていることを知るのみである。

確認されたのは、これを住居跡と認定するならば、

住居の南西隅を中心としたわずかな部分である。壁高は、35cmほどを残していたことになるが、不明瞭なため検出できたのは、10cmほどであった。

遺物の出土状態　出土したのは、二重口縁壺の破片1点(1)である。これをもって、遺構の時期を確定することには、ためらわざるを得ないところである。

時期　古墳前期　出土土器が1点のみであるので、可能性の域を出ない。

天引96号住居跡

図118・237　PL142　観察表93頁

位置　25—28　調査地の北側の中心を南北にのびる舌状の高まりと谷を挟んで東側に平行する舌状の高まりの西側斜面に位置している。88号住居と同じく、古墳前期の住居の密集部分から離れて単独で存在する。

形状　住居の西側半分が、後世の長期間にわたる崩落が床面下まで達し、消失している。長軸を南北方向に取り、長軸長5.67m、短軸長5.06m（復元推定）の正方形に近い長方形プランが推定される。

面積　27.36m²（復元推定）　**方位**　N 7°E

周壁・周溝　周壁は、東壁と南北両壁の東寄りで確認された。壁高は、東壁中央寄りで15cmを有し、西に行くにつれて徐々に浅くなっている。

周溝は東壁の中途から北壁にかけて確認された。幅10cm、深さ約5cmを測る。

埋没土　埋没土の遺存がわずかであるため、住居全体の埋没状況を推しはかるまでには至らなかった。

床面　床面が確認された部分では、黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。柱穴相互の位置関係を見ると、柱穴1の位置がややずれていることがわかる。柱穴間の距離は、柱穴1～2で3.04m、柱穴1～3で3.20mを測る。深さは柱穴2が35cmほどと浅いのを除けば、他は70～80cm（柱穴3・4は推定）を有しており十分である。

貯蔵穴　南壁の中心から東に約80cmの壁際に位置している。上端で径45cmの円形で、深さ約35cmを測る。　遺物の出土状態　壁高がわずかであることと、消失している部分が多かったこともあり、出土した遺物はわずかである。図示した2点の土器とも床面直上からの出土であり、しかも周囲に住居跡等の遺構がまったく認められないことから、完形品ではないが本住居の時期を推測する有力な手掛かりとできよう。

時期　古墳前期

天引106号住居跡

図119・120・238・252　PL69・143・151　観察表93・103頁

位置　34—49　調査地南の平坦面とその北にのびる舌状の高まりの接合部西側斜面に位置している。周辺に広がる古墳前期の住居密集部分の西端にあたっている。

形状　長軸を東西方向に取り、長軸長4.2m、短軸長3.7mの長方形プラン。ただし、正確な長方形ではなく、東壁が斜めに内側に入り込んだようになっており、その分、北壁より南壁が30cmほど短くなっている。同時期の住居の中では最も横長の傾向が目立つ。また、規模的には小型の部類に属するものである。

面積　13.45m²　**方位**　N26°W

周壁・周溝　周壁は全体に確認されており、最もよい遺存状態にあった。壁高は、最も残りのよい南西側で55cmを測り、最も悪い北壁で20cmであった。周溝は南壁から西壁にかけては全体に認められ、北壁から東壁にかけては途切れ途切れに認められた。幅は約10cmで、深さ5cm前後を有していた。

埋没土　暗褐色土、黒褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面及び床下構造　住居の中心寄りは、黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していたが、壁寄りは、北壁から東壁にかけてを中心に15～20cm前後掘り下げて土を入れ替えていた。ただし、他の住居でよく見られた帯状に掘り下げるものではなく、土壙状に乱雑に掘られていた。

面は全体にほぼ平坦であり、東壁に沿った幅1mの範囲を除いてはよく踏み固められていた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。その位置関係を見てみると、柱穴相互を結んだ距離が、北側（柱穴1～3で1.80m）より南側（柱穴2～4で1.62m）が短い台形状の配置を示している。柱穴1～2の距離は1.32mであった。住居平面のゆがみに応じた配置関係と思われる。加えて、柱穴に囲まれた空間が非常に狭くなっている点も特徴的である。なお、各柱穴ともその深さが20～30cmと浅い点が注意される。

炉跡　住居の南北方向の中軸線上から若干西にずれ、北側の主柱穴を結んだ線上に認められた。炉床面には、焼土及び炭化物のわずかな広がりが認められたが、あまり明瞭なものではなかった。その中央寄りはわずかに窪んでいた。

貯蔵穴　住居の南東隅から80cmほど東に寄った壁際に位置している。上端では75×65cmの東西に長いゆがんだ長方形であるが、下におりるにつれて角の明瞭な50cm四方の正方形に近い形状になる。深さは約75cmを測る。なお、上端の縁部に沿っては幅約10cmで、周囲の床面より5cmほど低くなる段がめぐっていた。

炭化材の出土　住居の床面上を中心に多量の炭化材が出土しており、その出土状態から住居の構成材が焼失により炭化したものに由来していると推定された。平面図に図示されている炭化材は、すべて床面上あるいはわずかな間層を おいて出土したものである。この他に1点、西壁寄りに外から倒れ込むように内側に向けて斜めに出土している小材があった。出土した炭化材の多くは、住居の中心に向くような走向を示しており、住居の対角線の方向を示しているものが北西・北東・南西側の各部分で認められた。屋根の構成材で、入母屋あるいは寄棟の構造であったことを窺わせている。

遺物の出土状態　比較的まとまった量の遺物が出土している。土器類では、炉の北西脇の床面上から完形に近い小型壺(4・5)が出土しており、ほぼ原位置を保っていることが推測された。その他のものは、すべて破片であった。

石製品では、3点の管玉が注目された。20は南東隅の覆土中であり、19は貯蔵穴の覆土上部からの出土であった。一方、18は貯蔵穴の東側の床面から5cmほど高い位置であった。出土状態は若干異なっているが、南東隅の限られた範囲から出土している点と、すべて覆土中からの出土である点は注意しておく必要があろう。

一方、貯蔵穴内の底面近くからは、棒状の結晶片岩の自然石12点がまとまって出土しており注目された。意図的にこの部分に置かれたものである可能性が強い。これらの石は一般に「こも編み石」と呼称されているものに該当するものである。「こも編み石」は、長さ8.0～24.0cm、幅2.0～6.0cmであった。

時期　古墳前期

天引107号住居跡

図123・238・252　PL70・142・151　観察表94・104頁

位置　33—49　前掲の106号住居跡の北側に隣接している。

形状　長軸を南北方向に取り、長軸長3.64m、短軸長3.48mの正方形に近い長方形プラン。

面積　10.64㎡　　**方位**　N 1°E

周壁・周溝　周壁は全体に確認されており、遺存状態はよい。壁高は、残りのよい南東壁で30cmを測り、北東壁の10cmが最も浅い。

周溝は確認されなかった。

埋没土　暗褐色土を主体としており、埋没過程の中途までは、周囲からの自然な流れ込みの状態を示しているが、竪穴の中心寄りが凹地になった時点で埋没した第1層は、黄褐色ロームのピュアなもので、周囲で何らかな遺構が構築された際に生じた掘削土が埋められたものであると推測される。

床面及び床下構造　大半の部分は黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。ただし、西壁に沿っては幅70cmの範囲を深さ10cmまで掘り下げ、土を入れ替えて造成していた。面は比較的平坦で、よく踏

み固められていた。

柱穴　確認されなかった。

炉跡　長軸方向の中軸線上で、北壁から内側へ90cmに位置していた。炉床は径50cmの円形で、中央が6cmほど窪んでいた。その中央には、棒状の結晶片岩が長軸を東西にして据えられていた。面は比較的よく焼けていた。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置していた。上端で径40cmを測り、深さ20cmを有していた。

遺物の出土状態　出土した遺物はわずかであった。その中で特に注意されたのは、日常器とは異なる手づくね風の完形の坏(2)である。住居の東壁際の中心から、やや北に寄った位置からの出土であり、床面に密着していた。原位置を保っているとしてよいであろう。これを除くと他はすべて全体の1/2以下の破片であった。

なお、東西方向の中軸線上で、東壁から90cm内側の床面上には、30×25cmの偏平な結晶片岩の自然石が、据えられたような状態で出土している。台石として使用されていた可能性がある。

時期　古墳前期

天引114号住居跡

図121・122・239・240・252　PL70・143・151　観察表95・104頁

位置　39—48　調査地南にある平坦面の北寄りに位置している。古墳前期の住居の密集地の南端にあたっている。付近は極めてゆるやかな北西下がりの斜面となっている。

形状　住居の対角線方向を四方にあわせている。長軸を南西—北東に取り、長軸長5.61m、短軸長5.2mの正方形に近い長方形プランを呈する。

面積　26.55m²　　**方位**　N36°W

周壁・周溝　周壁は、後出する115号住居との重複により北西壁が床面近くまで削平されていて不明瞭であったのを除くと全体に確認できた。壁高は、最も残りのよい南隅で45cmを測り、北に行くほど浅くなり、北隅で30cmである。

周溝は明瞭には確認されなかった。

埋没土　壁寄りの床面上に黄褐色土（第3層）が堆積した後に褐色土、暗褐色土が順に堆積している（第4層→第2層→第1層）。前者は、黄褐色ロームのピュアな土質であり、短期間の崩落に起因しているのに対し、後者は、周囲からの流れ込みによる自然の埋没に成因が求められよう。

床面及び床下構造　主柱穴に囲まれた部分の床面は、黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。これに対して、柱穴と四壁に挟まれた空間は、深さ10cmまで掘り下げられ、さらに北西壁に沿ってはもう一段約10cm掘り下げられて土を入れ替えて面を造成していた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。住居の対角線上に規則的に配置されており、柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.45m、柱穴1～3で2.82mを有していた。柱穴の深さは、いずれも90～93cmと十分の深さを有していた。

炉跡　住居の短軸方向の中軸線上で、北西側の主柱穴を結んだ線上の床面上に径35cmの円形の焼土面が認められた。また、その西側に隣接して前者より若干小規模の焼土面が認められた。前者の場合、位置的にも炉跡として矛盾ないのであるが、本住居が後述するように焼失住居であることや、焼土面の形状が明瞭なものでないことから、断定するまでにはいたらなかった。

貯蔵穴　住居の南隅に位置している。上端で一辺35cmの隅丸方形で、深さ80cmと深い。上端の縁部の周囲には、幅20～30cmで周囲の床面より約5cm低い段がめぐらされていた。この段上の2ケ所に白色粘土が密着して認められた。段の部分の構造上の役割を示唆するものかもしれない。貯蔵穴に蓋をして、隙間に白色粘土を充填したと考えることも一案である。

なお、南東壁の中心から北東へ0.8m寄った壁際に、上端で一辺65cmの不整方形で深さ20cmの土壙が確認されている。位置、形状的には貯蔵穴としておかしくないが、南隅のものと同時に使用されていたかどうかわからない。少なくとも、両者の形態が大きく異なっているので、機能的に同じ役割を果して

いた可能性は弱い。

炭化材の出土　住居内の床面上を中心に大量の炭化材が認められた。分布範囲は住居の南東側半分に限定されるという顕著な傾向が認められた。火災形態・焼失後の構成材の倒壊形態等の特徴の一端を示しているものと考えられる。

出土した炭化材のうち、北西側の南東寄りで確認された一群と南東側の中心寄りで確認された一群は、壁側から住居内に倒れ込むような状態で出土していた。炭化材のレベルは、壁側の端の方が住居内側の端より高いものが多かった。これに対して、柱穴2の位置を北西から南東に横切るように出土した長い材は、床面に密着していた。

遺物の出土状態　住居内からは土器類を中心に大量の遺物が出土した。量の多い割に完形に復せるものが1点も存在していない。それらの分布状況を見てみると住居の中心寄りに多くがごちゃごちゃという感じで集中し、壁寄りには散在的に出土するという顕著な傾向が認められた。住居廃絶後の竪穴が若干埋没し、窪地状になった時点で周囲から投棄されたものと思われる。出土した土器類を見ると古墳前期のものから古墳中期のものまである。投棄された期間を物語るものと考えられる。

一方、貯蔵穴に近い南西壁際の南寄りの床面上には30×35cmの偏平な結晶片岩の自然石が据えられるように出土している。作業台等に供されたものであろうか。

その他の遺構との重複関係　住居の北側で後出する奈良期の134号住居と東側で平安期の113号住居と重複していた。

時期　古墳前期

天引117号住居跡

図124・240・252　PL71・146・151・153　観察表96・104頁

位置　40―46　調査地南の平坦面の北端に位置している。周辺に密集する古墳前期の住居群に属しており、その南端を占めている。

形状　長軸を東西方向に取り、長軸長4.43m、短軸長3.52mを測り、同時期の住居の中では最も小規模の部類に属する。

面積　13.73m²（復元推定）　**方位**　N18°E

周壁・周溝　近年の耕作に伴う深い土壙が3基掘られていたため、北壁及び南壁の一部を失っていた。また、73号住居との重複により南西側の一部を失っていた。壁高は、南壁で25cmを測り、北壁で15cmと若干浅くなっていた。

埋没土　暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用しており、よく踏み固められていた。床面には平面図に図示したように、高低差が比較的明瞭に認められた。面は、南北方向の中心寄りが幅1mほどの帯状に高く、そこから東西の両側に向けて3～5cm低くなっている。ただし、明瞭な段をなすものではない。

柱穴　確認されなかった。床面下の精査を経ても確認されなかったので、本来的に掘られなかったものと思われる。

炉跡　南北方向の中心線上で、北壁から約1m内側に位置していた。炉床は55×70cmの南北方向に長い長円形で、5cm前後窪んでいた。その中心に、棒状の結晶片岩が長軸を東西方向にして据えられていた。

貯蔵穴　住居の南東隅から90cm西へ寄った壁際に位置している。上端で45×52cmの東西に長い隅丸長方形で、深さ21cmを有していた。

遺物の出土状態　遺物は非常に少なかった。ただし、土器類は2点とも一部を欠損するものの完形に近いものであった。小型壺(1)は南壁際中心の床面上に正立状態で出土し、甕(2)は炉の北側に隣接していた。両者とも原位置を保っている可能性が強い。

一方、蛇紋岩製の細身の管玉(3)も注目される。炉の北東側からの出土である。南壁際の中心寄りの床面上で確認された20×25cmの板状の結晶片岩(6)は据えられたような状態で出土しており、作業用に供された可能性がある。

その他の遺構との重複関係　住居の南西側で古墳

後期の73号住居と重複していた。

時期　古墳前期

天引122号住居跡

図120・240・254　PL71・151　**観察表**97・104頁

位置　41－41　調査地南の平坦面の北東側に位置している。付近は平坦面の縁を過ぎて南西から北東に下がる斜面部になっている。

形状　長軸を東西方向に取り、長軸長4.46m、短軸長3.58mの長方形プラン。

面積　13.95m²（復元推定）　**方位**　N13°W

周壁・周溝　住居の中心を北西から南東に近年の耕作溝が掘られているため、その重複部分の周壁を失っているのを除けば、全体に確認できた。壁高は、西壁で30cmを測り、東壁で16cmと浅くなっている。周溝は確認されなかった。

埋没土　黒褐色土、暗茶褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示していた。

床面　黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。面はほぼ平坦で、比較的よく踏み固められていた。

柱穴　確認されなかった。床面の断ち割りによる精査によっても確認されなかったので、本来的に掘られなかったものと思われる。

炉跡　住居の北東寄りに焼土面が認められた。近年の耕作溝により部分的に切り取られているが、0.3×1.3mの帯状の範囲に2ケ所のピークが認められたことから、2つの焼土面が結合しているものと思われる。明瞭に焼けており、焼土化した部分が床面から5cmほど下まで及んでいる。古墳前期のこれ以外の住居の炉跡の場合、これほど明瞭に焼けていたものはないので、かえって同一のものとすることに躊躇してしまうところである。

貯蔵穴　住居の南東隅に位置している。上端で径50cmの円形で、底面はその南東側に片寄っている。深さは、40cmを測る。

遺物の出土状態　出土した遺物は破片のみであり、量的にも少なかった。

なお、北壁寄りの2ケ所の床面上から炭化材が出土している。そのうち西寄りのものが大きい破片であった。本住居が焼失住居であった可能性も少し残している。

時期　古墳前期

天引131号住居跡

図124・241・242・243　PL72・144・145・148　観察表97頁

位置　41－52　調査地南の平坦面の西端に位置している。周辺は南東から北西にかけてゆるやかに傾斜している。

形状　住居の軸線を四方に合わせており、南北長3.64m、東西長3.74mの正方形プランである。古墳中期の住居の中では小型の部類に属している。

面積　13.42m²　**方位**　N 9°W

周壁・周溝　本住居は先行する弥生後期の132号住居の中にすっぽり収まるように重複していた。そのため、周壁は132号住居の埋没土を掘り込むことにより構築されたものである。両住居の床面の高さがほとんど同じであったため、明瞭な輪郭を面的に把えることはむずかしかった。住居平面図に示した輪郭は、断面図の土層観察と遺物の分布傾向をもとにして確定していったものである。

周溝は確認されなかった。

埋没土　床面を直接おおっていたのは、にぶい黄褐色土層（第2・3層）で、その上に黒味の強い黒褐色土層（第1層）が認められた。後述する大量の土器類は、主としてこの第1層からの出土である。

床面　床面のレベルは、先行する132号住居のそれとまったく変わらないものであった。むしろ、意図的に132号住居の床面レベルまでで竪穴掘削をとめて再利用しているといってもよい。

柱穴　確認されなかった。本来的に掘られなかった考えられる。

炉跡　明瞭な痕跡は確認されなかった。

貯蔵穴　住居の南西隅に確認された。上端で60×40cmの東西に長い長円形で、深さ25cmを有していた。

遺物の出土状態　遺物で注目されたことは、住居内から大量の土器が出土したことである。掲載図の遺物分布状態が繁雑すぎて、個体別の照合が困難になってしまったのを反省しているが、多量の遺物が集中している特徴に重点をおいて参考にしていただければと思う。

前述したように、土器の出土レベルは、住居がある程度埋まった後にくる第１層に集中している。また平面上の位置では、南壁寄りから中心部にかけてに集中する傾向が読み取れる。このことから、住居廃絶後、壓穴がある程度埋没した時点で、主として南側から投棄されたことが推定される。出土した土器は、1/2から2/3の欠損品が大半であり、完形品あるいは完形に復せたものは１点も存在しなかった。種類としては、坩・高坏・台付甕が主体をなしており、特に量的に突出する器種は認められない。単純に使用中に破損したものを投棄したもので、特別な意味を持った行為ではなかったと考えられる。

一方、住居の南東隅から鍬先状鉄製品の完形品が出土しており注目された。床面より若干高い位置からの出土であり、廃絶後の早い時点で投棄されたものと推測される。

その他の遺構との重複関係　先行する弥生後期の132号住居内に全体が収まる形で重複していた。

時期　古墳中期

天引142号住居跡

図125・244・253　PL73・146・151・152・153　観察表99・105頁

位置　47―48　調査地南の平坦面の南端に位置している。

形状　住居の対角線方向が四方に合っている。南西―北東方向に長軸を取る長方形プラン。長軸長4.18m、短軸長3.74mを有している。

面積　13.76㎡　　**方位**　N26°W

周壁・周溝　周壁は、ほぼ全体に確認できた。壁高は、最も残りのよい北西壁で30cmを測り、他は15～20cmである。

周溝は、南西・北東壁と南東壁の一部で確認された。

埋没土　黒褐色土、暗褐色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程が推測された。

床面　住居の大半は、先行する弥生後期の146号住居との重複部分であった。住居の床面レベルが146号住居の方が約20cm低いことから、146号住居の埋没土の中途を床面としている部分と、黄褐色ロームの地山面を使用している部分が存在した。床面検出時には、前者の床面が土圧で沈み込んでいた。本来的には平坦な面をなしていたと思われる。

柱穴　確認されなかった。

入口施設　南東壁際の中心寄りに壁に沿って並列する２つのピットが認められた。上端で径35cmの円形で15～20cmを有していた。形態的にも明瞭なものではないし、また同期のその他の住居に類例が少ないので、断定はむずかしい。

炉跡　住居の中心から約１m西方に寄って確認された。炉床は40×50cmの住居の短軸方向に長い長円形で、その南東側には、棒状の結晶片岩が据えられていた。その周囲には炭化物の面が認められた。

貯蔵穴　住居の南隅に位置している。上端で65×55cmの住居の長軸方向に長い長円形で、深さは60cmを有している。この北東側に接して幅15cm、高さ５cmの帯状の高まりが認められた。

炭化物の出土　住居内の床面上に点在するように炭化物が認められた。おそらく住居の構成材が炭化したものと思われる。本住居が焼失住居であったことを示すものであろう。ただし、いずれも断片的なものであり、構造的特徴を推測させるほどのものはなかった。

遺物の出土状態　比較的豊富な遺物が出土している。そこにはいくつかの興味深い出土状態が認められた。

土器類の中では、５個体の完形の坩の出土が注目される。出土したのは炉の周辺と貯蔵穴内である。2・3・4は炉の南西側から相互に50cmほどの距離をおいて出土している。これら３点は、いずれも床面と

の間に若干の間層をおいており、住居に直接伴うものではないことがわかる。と同時に、3・4などは、正立した状態で出土しており、覆土中に置かれたものである可能性がある。3点とも完形で、しかも近接した位置から出土していることは、単なる投棄・流れ込みではなかったことを物語っていると言えよう。貯蔵穴内からは、1・5の2点が出土した。やはり覆土の中途からの出土であり、住居に直接伴うものではない可能性が強い。もう一つの注目される遺物としては、滑石製模造品が挙げられる。全部で19点が出土している。このうち14・15・16・17の4点は、明らかに完形品である。16の勾玉は住居の東隅から単独で出土しており、覆土中からの出土である。17は24・25・26・27・28・29・31の未成品状のものと一括で住居の西隅寄りから出土している。これらもすべて覆土中からの出土である。この他、発掘調査後に行った埋没土の水洗いにより18～23の臼玉未成品と32が得られた。このうちの大半は、やはり住居の西隅寄りに存在した可能性が強い。この住居があたかも滑石製品の製作址であるかのごとき遺物内容である。しかし、床面上からは認められないこと、チップ・コア等がまったく出土していないことから、製作址を直接物語るものではないことが知られる。出土位置関係からは、前述した3個体の坩と一括で把えられる可能性もある。ところで、滑石製品は未成品ではあっても失敗品やチップ・剝片等ではないので、不要品を投棄したという理解はどうであろうか。むしろ、滑石製模造品の完成品に代用させる意図をもって坩とともに投げ入れている（そこへ置いた）可能性はないであろうか。

時期　古墳中期

天引143号住居跡

図126・243・254　PL74・146・152　観察表100・106頁

位置　36—51　調査地南にある平坦面の北西端に位置している。付近は南東から北西に向けてゆるやかに下がる斜面が始まる境目になっている。

形状　住居の軸線が四方から約45°振れている。長軸方向を南西—北東に取り、長軸長5.46m（復元推定）、短軸長5.15m（復元推定）の正方形に近い長方形プランが推定される。当遺跡における古墳の住居の中では中規模の部類に属している。

面積　26.85m²（復元推定）　**方位**　N46°W

周壁・周溝　住居の北側を中近世の溝状遺構が斜めに横切っていることや、北西側が斜面部にかかっていることから後世の崩落が進行していることにより、住居壁のうち北東・北西側の2壁を完全に失っていた。壁高は、南側の最も残りのよかった部分でも15cmを残しているに過ぎなかった。

周溝は、壁面の検出できた部分ではすべて確認できたので、本来的には全周していたものと推測される。幅は約15cmで、深さ約10cmを有していた。

埋没土　観察できた部分がわずかであったため、埋没状況の全体的な傾向を把握するまでにはいたらなかった。

床面　前述したように、住居の北東から北西側にかけて中近世の溝の重複と長期間の崩落が及んでいたため、床面が検出できたのは南半分に限られていた。この部分においても、後出する160号土壙や近年の耕作土壙が重複していたため、さらに床面の遺存部分を少なくしていた。

確認された範囲では、黄褐色ロームの地山面をそのまま使用していた。

柱穴　4本の主柱穴が確認された。柱穴の位置関係を見ると、やや統一性に欠けている。柱穴間の距離は、柱穴1～2で2.75m、柱穴1～3で3.13mを有していた。柱穴の深さは、柱穴1・2が98・90cmであるのに対し、柱穴3・4は83・70cmと差があり注意された。

炉跡　住居の短軸方向の中軸線上で、北西側の柱穴を結んだ線の内側70cmの位置の床面上に径約60cmの不整円形を呈する焼土面の広がりが認められた。位置関係・面の状況から炉跡として妥当であろう。

貯蔵穴　住居の南東壁際の東隅寄りに認められた。上端で一辺約1mの隅丸正方形で、底面近くなると長方形を呈している。深さは約40cmを測る。

遺物の出土状態　出土した土器類は極めてわずかであった。実測図を掲げた3点とも貯蔵穴周辺からの出土であったが、完形に復せるものは1点も存在しなかった。

滑石製品の出土　本住居の出土遺物で特に注目されたのは、滑石製品とその製作に伴う遺物である。全部で278点である。そのうちの大部分は、製品の製作途上で生み出されたチップ類であり264点を数えた。これに加えて、素材片2、製品4（紡錘車形1、臼玉3）、未成品2、失敗品6（不明3、臼玉3）があった。

それらの出土位置を見てみると、製品・未成品・失敗品は、南西壁際の南東寄りと南東壁際の中心寄りの2ケ所に分布域が認められた。前者の場合、量も少なく散在的であったが、後者は量も多く、一場所に集中する傾向が認められた。加えて、その分布範囲に重なるように大量のチップと素材片が出土していた。後者の地点については、その場所で実際に製品の製作が行われていたことを示していると推測される。

ところで、南東壁際の濃密な分布域の下の床面上には、短軸方向に40cmの距離をおいて2つのピットが確認されている。壁寄りのものが上端で径35cm、深さ30cm、内側のものが径25cm、深さ20cmを有していた。その周囲には幅30cm、高さ2～5cmの高まりがめぐっていた。入口施設に伴うピットの可能性も考えられるが、滑石製品、滑石片の分布と完全に重なっていることから、製作に伴う施設の可能性もあるかもしれない。

その他の遺構との重複関係　住居北側で中近世の溝状遺構（道路跡？）と、南寄りで後出する古墳中期の160号土壙と重複していた。

時期　古墳中期

(3)　方形周溝墓

図127.244.255　PL46.147.153　観察表106.107頁

位置　45—45

天引地区から古墳時代前期に属する方形周溝墓が1基発見された。その位置する場所は、同地区の最南端に近い地点で、台地のほぼ中央部の平坦面にあたっている。この地区で数多く確認されている前期の住居跡群と時期的に並行関係にあるわけであるが、その住居跡の分布域とは重複しないように位置関係がとられているものと思われる。すなわち、住居の分布域の南側に接するようにして周溝墓が築造されたものであり、両者が対の関係にあることが推定される。なお、この周溝墓の周囲（特に南側）には同時期の遺構の認められない一定の空白地帯があるにもかかわらず、これ以外の周溝墓はまったく認められなかったことから、周溝墓はこの1基のみ単独で築造され、群をなしていない可能性が強いと思われる。

また、住居跡との重複関係が2カ所で認められている。弥生後期に属する天引43号住居跡（後期第3段階）、天引56号住居跡（後期第2段階）を切っていた。

周溝墓の軸線は、北を向いたとき南北方向から27°東に振れている。周溝によって形造られる墳丘部の形状は正しい正方形ではない。これは、東・西・南の3辺が約7m前後と等しいのに対して、北辺のみが6mと短いために生じたゆがみである。しかし、意図的にこのような形状を指向したものではないと思われる。

周溝は、南辺の中央部を除いて全周している。この部分のみを掘り残すことにより、東西1.1m、南北0.9mのブリッジの施設を築いているものと思われる。そのブリッジの形状は直線的なものではなく、外側にむけて若干開くハの字形を呈している。特に東側の走向は明瞭である。

周溝の幅は、東・西・南の3辺が1.1m前後であるのに対し、北辺は0.66mと大幅に狭い。このことに呼応するように、溝の深さも北辺が12cmともっとも浅いのに対し、東辺は38cm、西辺は40m、南辺は50cmと大幅に深くなっている。その場合、辺の交点の部分に向かうにつれて浅くなっていくのはいずれも同様である。

周溝の確認された面は、黄褐色ローム質土であるから、築造当初の面からは大分削平が及んでいることが推測される。当時の地表面と考えられる黒色土面まではさらに上に50cm前後はあったであろう。このことを考慮したとしても、周溝の平面的規模が小さいので墳丘部の高さは1mまでは達していなかったものと推測される。

主体部あるいはその痕跡を示すものは一切確認できなかった。盛土のなされた後、墳丘の頂上部から掘り込んで主体部を築いたものと推測される。

出土した遺物は、いずれも周溝内の覆土中から得られたものである。土器類はいずれも破片であり、完形に復せるものあるいはそれに近いものは認められなかったので、これらが直接伴うものとは言い難い。しかし、周溝の覆土中から出土した土器の中には、これ以外の時期に属するものは一切認められなかったので、周溝墓の築造時期を推定する手掛かりとしてよいものと思われる。

(4)　土壙

古墳時代に属すると推定される土壙は、全部で10基存在している。各土壙の規模・形態的特徴を整理すれば、第4表のとおりである。

これらのうち、天引160号が中期に属することが推定されるのを除けば、他はすべて前期に属するものと思われる。その分布を見てみると、白倉B区から8基、天引地区から2基であり、白倉A・C区からは発見されていない。天引地区のものは、当該時期の住居跡が同地区に圧倒的に集中していることとの関連で考えられようが、白倉B区には前期の住居跡がまったく認められないので、別の背景から考えなければならないであろう。

白倉B区の土壙群　白倉B区で発見された156・256・258・265・266・292・294号の7基の土壙は、同

地区の南西側に集中して認められたものである。

相互の位置的関係を見てみると、その長軸を平行にして東西方向に近い一直線上に、西から順に268・256・156・266・265号の5基が適当な間隔をおいて認められた。さらにその北側に隣接して、294・292号土壙がやはり東西方向の直線上にみとめられている。ここまでくると、これらの土壙群が偶然にこのような分布傾向を示しているのではなく、意図的・規則的に配置されたことを物語るものではないかと推測されてきた。ところで、土壙群の分布の示す東西方向の直線をさらに西へたどっていくと、白倉B区とC区の間を南北方向に走る谷状地形の部分へと下り込んでいる。この部分の調査結果からすると、ここがちょうど湧水点に近い部分であったことがわかる。このことが偶然の結果であるのか、それとも意味を有しているのかは、土壙がいかなる性格を有するものであったのかと深く関わってこよう。

遺存状態のよい土壙についてその形態を見てみると、断面形状は、壁面の上端寄り3分の1が漏斗形に近いのに対し、下半は垂直に近い立ち上がりを示している。この垂直部分の壁面は極めて平坦であり、鋭利な道具を使用して掘り込まれたことを窺わせた。平面形状は下半部は整った長方形を呈しており、底面は平坦である。

その規模は、下端で長軸長160cm、短軸長70cm前後で、深さは110から190cmの間と相当に深い。規模的にはいずれの土壙もこれを大きく出るものではなく、比較的均一なものであるとしてよい。

主軸の方向は、北に向いて南北方向から東に20°ほど振れてほとんど同一方向をとっている。南北方向を意識して長軸方向が決められたと考えて間違いないであろう。

次に覆土の埋没状況を見てみると、いずれも暗褐色土・黒褐色土・黒色土を主体としており、周囲からの流れ込みによる自然の埋没過程を示しており、人為的にしかも急激に埋め戻したような痕跡をしめすものは一つも認められなかった。このことは、これらが、遺骸を埋葬した後に埋め戻す土壙墓の可能性が極めて少ないことを物語るものと言えよう。

出土した遺物は266号土壙からのS字口縁台付甕が唯一のものである。土壙内の底面近くからわずかに浮いて、脚台部を欠損しているものの、他は完存の状態で出土した。胴部にはすすが強く付着しており、生活具としてよく使い込まれたものが、脚台部の破損のため廃棄されたものと思われる。このことは、土器が土壙に直接伴うものではないとしても、

第30図 古墳土壙分布図

土壙の時期を知る有力な手掛かりとなるものである。遺物を伴わない他の土壙も、この266号土壙と有機的な関連を有していることは前述したとおりであるから、同じ古墳時代前期の所産と推定してよいであろう。

これらの土壙の性格についてはいかに考えられるであろうか。現在考えられる範囲では、墓・貯蔵穴・井戸・陥し穴等が挙げられよう。

墓については、前述したとおり、その可能性が少ない。しかも、258号に代表されるように、これほど深い例を知らない。また、成人の遺骸を伸展葬で納めるスペースとしては不十分である。

これらの中で、もっとも可能性が高いのは、陥し穴である。規模の割に深いことと、一定の間隔をおいて直線上に連なっている点が、この種の遺構のあり方にとって示唆的である。前述したように、土壙群の位置が集落域から離れている点、水場に向かって連なっている点もよさそうである。

この種の土壙の形状およびあり方を示すものは、縄文期に極めてよく似たものを多く見い出すことができる。問題は、古墳時代前期の時期に、この種の陥し穴で動物を生け捕りにする手法があったかどうかである。土壙自体が実際に陥し穴かどうかも検討課題であるので、有力な可能性の一つとするに停めておきたい。

その他の土壙　天引171号土壙は、222×69cmという長方形の平面規模が、成人の遺骸を伸展葬で納める土壙墓と考えた時、十分な大きさである。土壙内から出土した遺物は、古墳時代前期に属することを示している。完形品ではないことと、覆土中から出土しているので、直接伴うものではないであろう。これと並行する時期の住居跡からはある程度離れている点も、性格を考えていく上で示唆を与えよう。

第4表　古墳土壙一覧表

土壙番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ(cm)	覆土の主体	主な出土遺物 観察表頁	備考 図番号及びPL.番号
白倉B区 156号	隅丸長方形	長方形	230×120×166	雑多な土が層状に堆まる。	なし	壁面は平坦で垂直に近く立ち上がる 図128 PL.75
白倉B区 256号	長方形	長方形	(210)×143×140	黒褐色土を主体とする自然堆積	なし	南壁の上部が古墳後期の住居により切られている 図128
白倉B区 258号	隅丸長方形	長方形	207×158×188		なし	下半部の平面形はで壁面は垂長方形直に立ち上がる 図129
白倉B区 265号	隅丸長方形	逆台形	228×160×148	黒褐色。暗褐色土の自然堆積	なし	下半部の平面形は長方形 図130 PL.75
白倉B区 266号	長円形	逆台形	216×150×112	黒・黒褐色・暗褐色土の自然堆積	S字口縁台付甕 107頁	下半部の平面形は不整長方形 図129,245 PL.75,147
白倉B区 268号	円形	鍋底形	70×69×20			わずかな小破片の出土のため、時期決定の根拠に乏しい 図131
白倉B区 292号	長円形	逆台形	283×204×80		なし	図130
白倉B区 294号	長円形	長方形	216×125×84		なし	図131
天引 160号	長方形	長方形	223×134×64	にぶい黄褐色土人為的堆灰しか	壺、甕 107頁	先行する143号住居を切っている 図131,245 PL.76,147
天引 171号	長方形	逆台形	222×69×28	炭化物を含む暗褐色土	甕・小型器台 107頁	図131,222,245 PL.76,147,153

Ⅳ 遺　　物

1 はじめに

本報告で扱う白倉下原・天引向原遺跡の弥生時代から古墳時代中期にいたるまでの諸遺構からは、様々な種類の遺物が多量に出土している。個々の遺物の具体的な情報については、本編のⅢ章の各遺構の記述と別冊の『実測図・写真図版編』及び『遺物観察表編』に、詳細で正確なデータをできる限り盛り込むことを心掛けたので、これを参照してもらいたい。

そこで本章では、各種類の遺物のなかで、特に資料的に注目されるものを取り上げて、その概要を述べることにより、個別の記述では触れられなかった点を整理した。

2 弥生時代の遺物

(1) 土器

ここでは本遺跡で弥生時代後期に位置づけた諸遺構から出土した土器類について述べることにする。

本遺跡の弥生時代後期の土器は、杉原荘介が群馬県勢多郡赤城村の樽遺跡の資料に基づいて設定した「樽式土器」の範疇に属するものである。櫛描文の多用を特徴とするこの土器は、群馬県の西部地域一帯に広く認められるもので、長野県の千曲川流域に分布する吉田式・箱清水式土器と密接な同系統の関係を有していることが知られている。

近年の樽式土器の研究においては、中期末の栗林系土器群に継続して、後期のはじめから終わりまでの間存在したとすることで一致をみている。また、これを3期に細分する点においても、その分析を行った三宅敦気・相京建史（第Ⅰ期から第Ⅲ期）、飯島克巳・若狭徹（第1期から第3期）、佐藤明人（弥生後期第1期から第3期）の基礎作業の間に、区分内容も含めてほぼ共通認識が得られているとしてよいであろう。なお、三宅・相京が第Ⅲ期のあとに第Ⅳ期（土師器への移行期としての特色が現れる時期）を設定しているが、飯島・若狭は、この一群を「第3期の特色を残しながらも器種を欠落させ、古式土師器を受け入れていく」ことから、樽式土器の範疇に含めず、「樽式系土器」として一線を画している。

参考までに、飯島・若狭の樽式土器の時期区分と各期の特徴を掲げておく。

第1期　壺・甕・高坏を主体として構成され、他の器種は極めて少ない。組成的には栗林系土器の系譜を強く引くが、ヘラ描・縄文要素を消失させ、櫛描簾状文と波状文の組合せが定着する。

第2期　壺・甕・高坏のほか、台付甕が多量に含まれるようになる。また、片口・鉢・有孔鉢・蓋も多く出現し、器種が多様化する。壺・甕は長口縁化し、文様も定型化する。

第3期　2期の組成を引き継ぐが、壺・甕においては、複合口縁がかなり普遍化し、球胴化が進行する。文様帯が拡充し、櫛描文充塡が盛行する。各器種で外面ヘラ磨きが頻繁となり、片口など小型器種も磨きが一般的となる。

本遺跡で出土した土器群も、前述した3者による3段階の推移にほぼ符合している。そこで、これらの細分の基準を参考にして、各住居跡出土の土器群に照らして、段階設定したもの（「弥生後期第1段階」、「弥生後期第2段階」、「弥生後期第3段階」）を、各住居跡の遺構説明の最後に、付しておいた。本来ならば各段階の頭に「白倉下原・天引向原遺跡」が付されるはずであるが、省略してある。

以下、各段階ごとに順を追って、土器類の特徴を見てみよう。

弥生後期第１段階　白倉Ｃ区の30号住居を除く15軒の弥生住居の出土土器がこの段階に属する。

器種としては、壺・甕・高坏にほぼ限定されているのが特徴的である。これ以外のものでは、８号住居の台付甕(2)と35号住居の鉢(2)があるのみである。前者は台付甕の初出例であるが、第２段階以降にくらべると、器種として極めて客体的存在であったことがわかる。なお、90号住居からの1点ではあるが、土製紡錘車が出土している。その他の土製品・ミニチュアはまったく見られない。

一方、個々の器種内部において相互に比較してみると、一定の規則性は見られるものの、器形・整成形・文様等がバラエティーに富んでおり、定型化する以前の段階にあることをよく物語っている。

次に総体として注意される点は、土器の色調が、被熱・ススの付着等による変色の場合を除くと、黄褐色、黄橙色、にぶい（白味を帯びた）橙色等の明るい色調のものが大半を占める点は、次の第２、第３段階の土器群が橙色、褐色ないし赤褐色とやや暗く、深みのある色調が主体を占めているのと対照的である。これは急激なものではなく、漸移的であるが、変化の傾向として注意された。

器面の整形はハケ整形の後に、ヘラによる削り・なで・磨きが施されるが、ハケ目を残さないほどに丹念な最終整形はなされない。また、ハケ整形を最終整形としているものも、壺を中心に見られる。

器面への文様は、ヘラ描きによるくびれ部のＴ字文２例（34住－１、47住－４）と銅歯文１例（７住－15）を除くと、全て比較的目の粗い櫛描文である。

くびれ部に付される簾状文は２節（２連止）が1例（34住－４）と極めて客体的に認められるほかは、すべて単節（等間隔止）であり、画一的に近いありかたを示している。この段階、くびれ部には単節の簾状文が普遍的に近く付されると言える。

波状文は付されない場合も多い。波は振幅の弱いものが一般であり、横線とみまがう振幅のわずかなものや、震えるような小刻みなもの（55住－２）も見られる。施文される部位は、簾状文の下に１ないし２段（1段の場合の方が多い）と口縁部上端１段である。34住9･10のように口縁部に２段施される例は異質である。

櫛描文でもう一つ特徴的なのは、胴部に施された、斜走あるいは格子状の平行線文（天引４住－１や天引119住－１のような第２・第３段階の明瞭な羽状文とは明らかに異なるので、観察表で第１段階のこの種の文様に「羽状」と記したのは適切さを欠いたきらいがある）である。

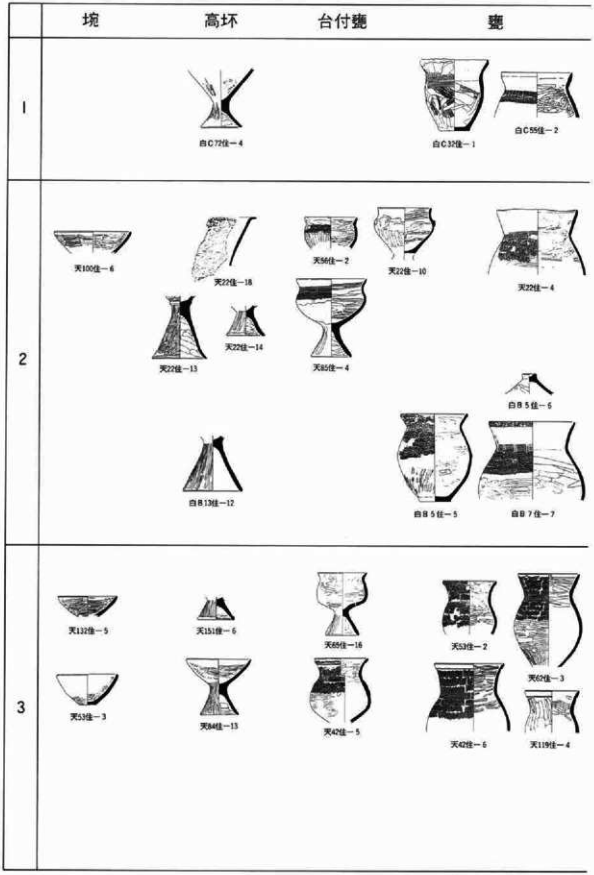
最後に口唇部の刻みが顕著である点について触れておく。その手法はバラエティーに富んでいる。大きくは、ヘラによる刻み、櫛による押圧、指によるつまみと思われるもの等に分けられる。

弥生後期第２段階　器種としては壺・甕・高坏を・基本とする点は第１段階と同様であるが、これに新たに台付甕が加わる点が特徴的である。台付甕は前段階にも極めて客体的に一部の住居でその存在が認められたが、この段階には壺・甕・高坏に匹敵する主要な器種となっている点が注意される。一方、ごく一部ではあるが、ミニチュア土器が認められるようになる点も注意される。この種類はむしろ次の第３段階になって、出土の頻度を増す種類であるので、その前触れとなるものであろう。

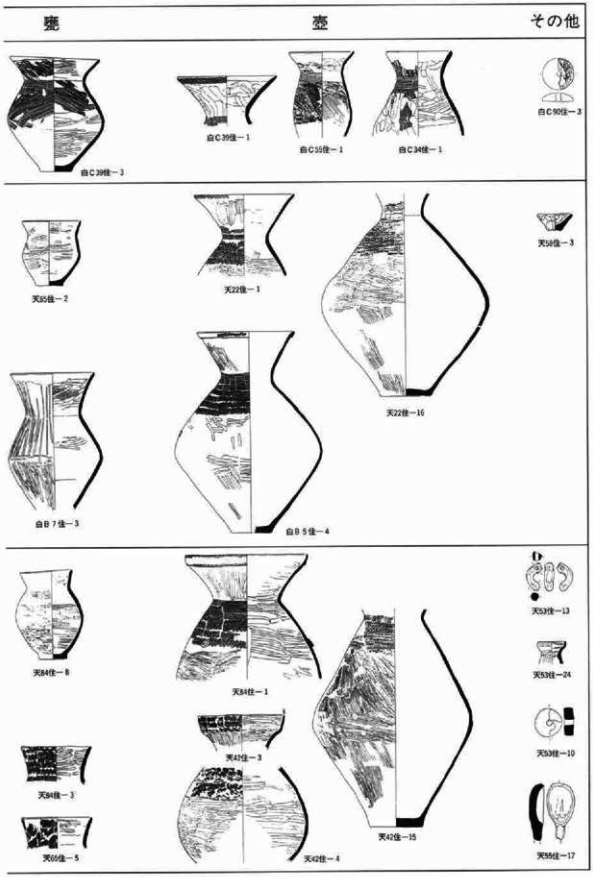
器形には、第１段階を受けて、壺・甕の口縁上端を強調した受口状のものや、上端を内傾気味につくるもの、上端を尖り気味に仕上げるものが目につく。この段階から、壺の中に折り返し口縁が先駆的に登場してくる。

文様を見てみると、簾状文と波状文から構成される櫛描文が定着する状況が顕著である。旋文部位は、壺・甕の場合とも、基本的にはくびれ部に簾状文を施した後に、その下側に接する胴上部に３段以上の波状文が施され、さらに場合によって口縁上端に波状文が１条施される。前段階とくらべて明らかに胴上部の波状文を中心に、旋文範囲の拡大傾向が認められる。

くびれ部に普遍的に近いかたちで施される簾状文では、単節から２節へと変わっていく状況が認めら


埦
高坏
台付甕
甕
1
2
3
白C72住－4
白C32住－1
白C55住－2
天100住－6
天22住－18
天56住－2
天22住－10
天22住－4
天22住－13
天22住－14
天85住－4
白B5住－6
白B13住－12
白B5住－5
白B7住－7
天132住－5
天151住－6
天65住－16
天53住－2
天67住－3
天53住－3
天84住－13
天42住－5
天42住－6
天119住－4

第31図　白倉下原・



天引向原遺跡弥生後期土器の変遷

れる。壺では16例中12例が2節である。残りの4例は単節ではあるが、すべて上下に2～3段重ねている点で、第1段階のものとは明らかに異なっていることがわかる。甕では、26例中20例が2節で、残りが単節であった。台付甕では8例中4例が2節、残り4例が単節であった。このことから壺・甕では第1段階から第2段階にかけて、簾状文の種類が単節から2節へと変わっていくのを明瞭に読み取ることができよう。その意味では、甕において単節が主体をなす天引56号住居や天引100号住居は、第2段階の中でも比較的古く位置づけられる可能性が強い。

壺・甕において、くびれ部に付される簾状文の下側に配される3段以上からなる波状文は普遍化に近い状態で存在するようになる。この段階の施文法が、くびれ部の簾状文とその下側の3段以上の波状文でほぼ定型化していることがわかる。なお、くびれ部と口縁上端の間の口頸部については、無文であるのが一般的となっている。

最後に、数量的にはわずかであるが、櫛描文による壺・甕・台付甕に混じって、無文のものが存在している点が特筆される。白倉B区7号住居の甕(3)や天引22号住居の台付甕(10)・(11)、天引85号住居の甕(2)、台付甕(3)である。

弥生後期第3段階　本遺跡においては、当該段階に属する住居が22軒と最も多い。集落形成のピークにあったことがわかる。

器種がバラエティーに富むようになる点が特徴的である。壺・甕・高坏・台付甕に加えて、鉢が酒有の器種として加わる。頻度は落ちるが、片口や甑も認められる。一方、一般的な土器とは同列に扱えないが、ミニチュア土器やスプーン形土製品の存在も注目されるところである。

この段階の最大の特徴は、櫛描文を特徴とする樽式土器の中に、縄文施文を特徴とする北武蔵地域の「吉ケ谷式土器」・赤城山南麓の「赤井戸式土器」、あるいは無文の壺・甕・台付甕等、異系統の土器が色濃く加わってくることである。

樽式土器においては、甕・台付甕に折り返し口縁が出現する。胴部の球形化も顕著な特徴である。

文様を見ると、施文部位が全段階に比べて一段と拡大する。とりわけ、それまで無文であった口頸部全体に波状文が及ぶことにより、口縁部から胴上部まで、全体の半分近くが施文範囲となる。

くびれ部に簾状文を配することにはあくまで固執している。その簾状文の種類を見ると、壺の場合、13例中の12例が3（あるいはそれ以上）節であり、2節から3（あるいはそれ以上）節へと変わるのを明確に読み取ることができる。これに対して甕は、18例中12例までが2節であり、3（あるいはそれ以上）節は6例であった。甕の場合、前段階に引き続いて2節が主流に踏みとどまった点で、壺とは異なる動きを示したことがわかる。台付甕では11例中5例が2節で、6例が3（あるいはそれ以上）節であり、明瞭な変化の傾向は認められなかった。

当遺跡の場合、壺に施される簾状文の種類が、単節（等間隔止）→2節（2連止）→3節（あるいはそれ以上、3連止）という時間的推移を明確にたどることが確認できた。

縄文施文系を中心とした異系統の土器のありかたは極めて複雑な様相を示している。そのありかたを住居を単位として、甕について見てみると、大きくは4つ分類される。第1は樽式の甕で、単口縁か折り返し口縁・球形胴を呈し、くびれ部に2～3節の簾状文を配し、口縁部から胴上部まで全体に波状文を施す典型的な「樽3式」に属するものである。

第2は「吉ケ谷・赤井戸式」の甕で、口縁から胴上部までの間にＬＲかＲＬの縄文を全体に施文するもので、器形的には樽式の甕に基本的に共通している。

第3は樽式と吉ケ谷・赤井戸式の折衷式と思われるものである。具体例を挙げれば、天引84号住居の甕(3)では、口縁部に輪積痕を明瞭に残す甕の器面を樽3式の施文形態であるくびれ部に簾状文を配し、口頸部に波状文を配している。また、天引153号住居の甕(4)は、くびれ部に簾状文を配し、胴上部にＬＲ縄文を施し、その下側に接して円形貼付文を適

当な間隔をおいて配し、口頸部に波状文を配するという、見事な折衷土器である。

第4は無文の甕である。器形的には樽式のそれとほとんど同一であるが、まったく文様を施さない。

この分類に基づいて第3段階に属する住居における甕のありかたを整理すると第5表のようになる。

樽式土器に対する異系統の土器のありかたを見ると、弥生後期第3段階に属する住居の土器群で、樽3式の土器のみから構成されるものは極めて少ない。このことは吉ケ谷・赤井戸式系の土器の共伴が樽3式の早い段階からであった可能性が極めて高いことを物語るものと言えよう。

ところで、整理した甕のありかたを見てみると、樽式土器を主体とする中に吉ケ谷・赤井戸式の土器が客体的に入ってきたという状況を想定することはできないほどに色濃く後者の土器が入っている。折衷型の甕の成立は、吉ケ谷・赤井戸系の土器が客体的な存在でなかったという理解をさらに補強するものであろう。器種を壺や台付甕にまでひろげて検討するならば、さらにこの状況を確実なものとすることができそうである。

しかし、かと言って次のような想定も当を得ていないと言える。それは、この段階の当遺跡に、樽式土器を圧倒するようなかたちで吉ケ谷・赤井戸式系の土器が流入してきたとする理解である。この理解は、次のような理由によって否定されよう。一つはこの段階の土器群が一方で典型的な樽3式の型式的特徴を持つ土器をしっかりと持っている点である。また、集落形成の過程を見た場合、第2段階から第3段階への過程が極めてスムースな点である。

天引12号住居のような無文土器のみから構成されるものは、古墳時代前期の集落形成の開始との間の時期的な橋渡しをするものとの位置づけもできよう。

第5表　第3段階住居跡出土の甕の組成（1ドットは1個体）

住居番号	1類（樽式）	2類（縄文系）	3類（折衷）	無　　文	備　　考
白倉A46号		●●			出土点数が少ない
白倉A52号		●●●●			出土点数が少ない
天引12号				●●●●	
天引42号	●●●				
天引55号	●●	●●			
天引53号	●●●	●●●●●			
天引62号	●●	●			
天引65号	●	●●			
天引84号	●	●●●	●	●	
天引110号	●●●●				
天引112号	●	●●●●			
天引119号	●	●		●	
天引132号	●●●●				
天引151号	●●●		●●		
天引153号	●●●	●●●●	●●	●	

(2) 打製石器

ここで取り上げる打製石器は、白倉下原・天引向原遺跡の弥生時代の遺構から出土したものである。古墳時代以降の遺構からも、当時期に属すると思われる石器は出土しているが、不確実になるため除いている。住居が中心であるが、土壙や方形周溝墓出土のものもある。打製石器には、石鏃・打製石斧・スクレイパー・石匙・二次加工ある剥片などがある。このうち、石匙はつまみ部が欠損する小型の横形のもので、わずかに一点の出土である。このことから、石匙については縄文時代遺物の混入と考えたい。従って、ここではそれ以外の石器について述べる。

石鏃は、合計18点が出土している。内訳は、住居出土のものが15点、方形周溝墓出土のものが2点、土壙出土1点である。これらは以下の三者に区分される（第32図）。

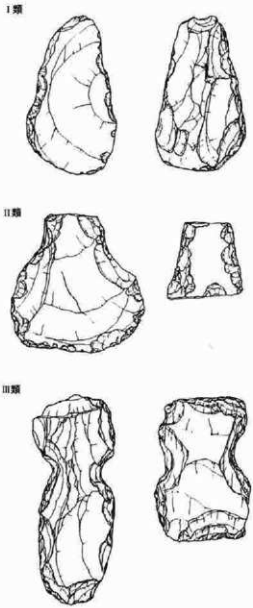
Ⅰ：基部に比べて刃部が広く、側辺が直線的なもの（図210 3、図213 11、図214 12・13、図215 26、図218 18・21）

Ⅱ：側辺が内側にえぐれ刃部が丸く広がるもの（図218 23、図222 B区16±21）

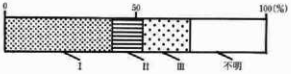
Ⅲ：全体に幅が同じで両側にえぐりの入るもの（図215 28、図216 26、図219 11）

各類型の点数は、Ⅰ類7点、Ⅱ類2点、Ⅲ類3点である（第33図）。この他に破損によって分類不可能なものが6点（図196 14、図205 41、図214 6、図220 22、図221 12、図222 11）ある。

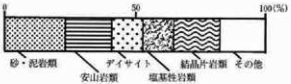
このうちⅠ類は、刃部がやや突出するもの（図210 3）とほぼ直線状を呈するもの（図213 11）がある。完形のものが少ないため確実なところはわからないが、この形態差が時期差や機能差等に由来する可能性は低い。本来的には丸く突出した刃部形態のものが、刃部再生を繰り返すうちに、直線状を呈するようになったものと考えられる。Ⅱ類に分類されたものはわずか2点であるが、どちらも破損しているため、全体形状を正確に把握することはできない。残存部の形状でみる限り、図222 1は両側がややえぐれる程度であるのに対し、図218 23は刃部が大きく



第32図　石鏃類型



第33図　石鏃類型組成



第34図　石鏃石材組成

扇状に張り出し、形態差が大きい。Ⅲ類は、幅が比較的細身で長いもの（図215 28、図216 26）と、幅広で短いもの（図219 11）とがある。

第　図に石材組成を示す。このうち、砂・泥岩類には硬質泥岩・珪質頁岩等、塩基性岩類には輝緑岩・変玄武岩等が含まれる。石鏃のうちⅠ・Ⅱ類は、硬質泥岩などの細粒の石材から、変質安山岩などの粗粒なものまで雑多な石材を用いている。石鏃の中には表面に自然面を残すものが多く、その様子から河原で通常見られる円礫を原石としていることがわかる。それらの原石から剥離された非常に大形の剥片を素材として、周辺両面に調整を加え整形している。調整が両面全面に及ぶものはない。また側辺の一部に敲打痕が見られるものもあり、整形技法に敲打が使われていたようである。Ⅲ類は板状の素材の周辺両面に調整を加え、両側の中央よりもやや上のほぼ対称する位置に抉りを入れている。抉り部の調整は、概して丁寧である。石材は全て結晶片岩類である。また、いずれの類型も、刃部に使用によると考えられる摩耗や破損の見られる例がある。

打製石斧は、合計44点出土している。方形周溝墓より1点出土している他は、全て住居からのものである。これらはその形状より以下に分類できる（第35図）。

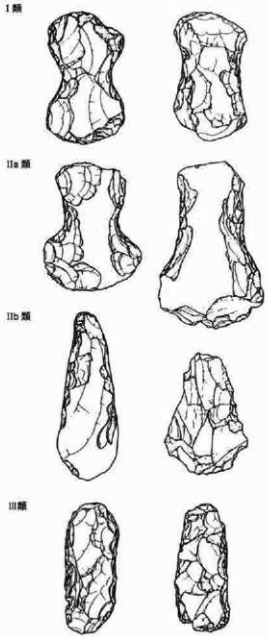
Ⅰ：器体のほぼ中央の両側にえぐりが入る（分銅形）。
（図206 49、図215 19、図219 21、図260 46）

Ⅱ：基部に比較して刃部が広がる（撥形）。側辺の状況から、以下に二分。

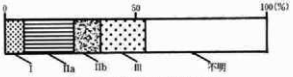
Ⅱa：両側辺が内側にえぐれる（図196 13、図198 14、図212 8、図219 12、図220 6）

Ⅱb：両側辺が直線的に広がる（図196 15、図202 18、図209 15、図212 22、図218 20）

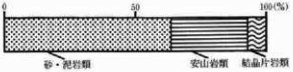
Ⅲ：基部から刃部にかけて幅がほとんど変わらないもの（短冊形）（図197 20、図205 40・46、図206 50・51、図212 20、図219 13、



第35図　打製石斧類型



第36図　打製石斧類型組成



第37図　打製石斧石材組成

図259 45・49、図260 48）

Ⅰ類が4点、Ⅱa類5点、Ⅱb類5点、Ⅲ類10点、形状不明20点である（第36図）。

打製石斧は主に剝片を素材とし、周辺両面に加工を加えて整形するものが多く、調整が全面に及ぶものはほとんど無い。石材は硬質泥岩・珪質頁岩・細粒安山岩などが主で、概して細粒均質な石材を利用しているが、結晶片岩類も若干ながら使用されている（第37図）。

打製石斧の刃部には、明瞭な使用による摩耗が見られるものがある反面、刃部付近の剝離面が摩耗面を切っているような例も見受けられる。刃部再生を繰り返して使用していた様子がうかがえよう。またⅠ類については、抉りの部分にも摩耗がみられ、着柄との関連が想定される。

スクレイパーは、合計10点出土しており、すべて住居からの出土である。その多くが横長剝片を素材とし、形状も木葉形や横長の長方形を呈する。調整加工が施される部位の違いから、以下の三者に区分される（第38図）。

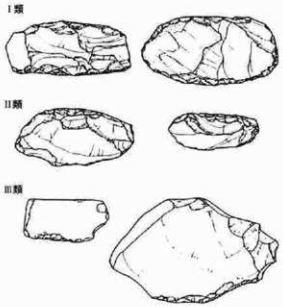
Ⅰ：横長剝片の打面・先端側の両側に調整加えたもの（図205 48、図207 7、図219 22、図260 47）

Ⅱ：横長剝片の打面側に調整加えたもの（図212 19、図214 14）

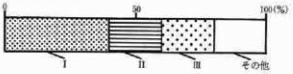
Ⅲ：横長剝片の先端側に調整加えたもの。（図199 39、図216 5）

いずれの部位においても、調整は表裏両面に加えられる。Ⅰ類4点、Ⅱ類2点、Ⅲ類2点である（第39図）。この他に、剝片の周辺に加工を加えた不定形なものが2点（図213 9、図220 23）出土している。

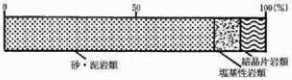
このうちⅠ類は、平面形状が長方形になるものが多く、他の類型に比べて加工の頻度が高い。刃部はやや外側に張り出すものもあるが、ほぼ直線状である。縦断面は薄い凸レンズ状である。下縁には、使用によると思われる摩耗がみられる例が多い。Ⅱ類は、素材となった剝片の形状をほとんど変化させない。縦断面は幅の狭い楔状を呈する。また、他の類型と比較してやや小振りである。剝片の先端部は薄い縁辺が未加工のまま残され、使用によると考えられる微細な剝離痕が見られる。Ⅲ類に含まれるものは2点のみであるが、大きさ・平面形ともにかなり異なり、個体ごとの差が大きい。



第38図　スクレイパー類型



第39図　スクレイパー類型組成



第40図　スクレイパー石材組成

石材は、結晶片岩類のものが1点ある他は、硬質泥岩・珪質頁岩など、細粒で均質な石材が利用されている（第40図）。

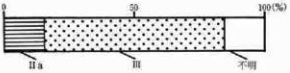
この他に剝片に不規則な調整剝離を施したものが少数がある。

以上、当遺跡の弥生時代遺構出土の打製石器について、器種ごとに類型組成・石材組成などについて概要を述べてきたが、次に各器種の特徴について考

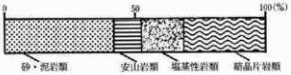
えてみたい。

ここで取り上げた石器のうち、打製石斧は、出土状態からは住居に伴う他の遺物と分離することはできない。しかし、形態や製作技法・使用石材などの点で、縄文時代の打製石斧との差異はみられない。本遺跡には縄文時代前期から後期にかけての住居や土壙などが多数存在し、当然それらの遺物が混入した可能性が考えられる。事実、弥生時代の住居からも、覆土中より多数の縄文土器破片が出土している。そこで、縄文時代の遺構出土の打製石斧と比較を行う。ここでは、本遺跡で最も軒数の多い勝坂終末期の住居出土のものと比較した。両者の類型組成をみると（第36・41図）、勝坂終末期の類型組成ではⅢ類が最も多く全体の８割を占め、逆にⅠ・Ⅱa類は１点もなく、各類型の比率にかなりの違いがみられる。ただし、本遺跡では、縄文前期の黒浜式期から後期堀之内２式期にわたる住居・土壙などが存在し、他の時期の遺構出土の打製石斧にはⅠ・Ⅱa類も含まれている。また、形状や製作技法、使用石材などの点についても、両者に差はみられない。出土状態や類型組成の違いなどから、弥生時代後期の石器組成に打製石斧が含まれる可能性は考えられるが、今回取り上げた資料中には縄文時代遺物も多数含まれており、それらを識別して弥生時代の打製石斧のみを抽出することは、現時点では不可能である。今後、発掘調査時における厳密な帰属性の確定や、調整剥片の出土状況や接合状況、弥生時代の単独集落での打製石斧の出土状況などを考慮した上で検討したい。

石鏃については、県内でも数多く検出されており、当該期の石器として従来より知られていたものである。中期前半の安中市注連引原Ⅱ・藤岡市沖Ⅱ、中期後半の前橋市清里庚申塚・富岡市小塚、後期の高崎市新保・渋川市有馬・沼田市石墨遺跡など、弥生時代の各期にわたって出土している。本遺跡では、これらを形態的な特徴から Ⅰ～Ⅲ類の三つに分類した。一方、大工原豊氏は、注連引原Ⅱ遺跡の報告の中で、石鏃を四つの形態に分類している（大工原1988）。両者を照らしあわせてみると、直接一対一の対応を考えることは難しい。大勢では注連引原ⅡのⅠ・Ⅱ形態が本遺跡のⅡ類に、Ⅲ・Ⅳ形態がⅠ類にそれぞれ該当するであろう。ただし、本遺跡の資料の方が形態上の変異が大きく、特にⅠ類において著しい。また、本遺跡のⅢ類は、注連引原Ⅱにはみられない。注連引原Ⅱでは、石鏃の形態が明確に分化し、各形態ごとの規格化が顕著であるという。そのような観点からみれば、本遺跡では形態の分化が曖昧で、規格化が低いと言えるかもしれない。しかし、Ⅲ類の細身の一群にみられる斉一性や、わずか一点ではあるが、Ⅱ類のうち刃部が大きく広がる形態を独立した類型と捉える得る可能性を考えれば、一概には言い切れない。むしろⅠ類にみられる形態の変異は、使用とそれにともなう刃部再生の進行の度合いなどによって生じたものと考えたい。



第41図　勝坂終末期住居出土打製石斧類型組成



第42図　勝坂終末期住居出土打製石斧石材組成

また、注連引原では、石鏃が遺跡内では製作されず、他集団から移入している可能性が高いという。本遺跡でも、石鏃の素材や製作に係わる調整剥片がみられないことから、遺跡内での製作は行われていなかったようである。しかし、石鏃に利用されている石材は、遺跡付近を流れる鏑川でごく普通に採取できるものであり、特定の石材への片寄りも見られない。また、注連引原ほど執拗に刃部再生を繰り返している状況もみられないことから、遺跡内では製作されなかったものの、比較的近い場所で集団内の人間によって製作されていたものと推測される。ここで問題となるのはⅢ類の細身のものにみられる形

また、注連引原では、石鏃が遺跡内では製作されず、他集団から移入している可能性が高いという。本遺跡でも、石鏃の素材や製作に係わる調整剥片がみられないことから、遺跡内での製作は行われていなかったようである。しかし、石鏃に利用されている石材は、遺跡付近を流れる鏑川でごく普通に採取できるものであり、特定の石材への片寄りも見られない。また、注連引原ほど執拗に刃部再生を繰り返している状況もみられないことから、遺跡内では製作されなかったものの、比較的近い場所で集団内の人間によって製作されていたものと推測される。ここで問題となるのはⅢ類の細身のものにみられる形

態・石材の規格化である。この規格化が、「範型の存在を暗示」(大工原1988)するものだとすれば、Ⅲ類については他集団からの移入の可能性も考えられる。ただし、石材である結晶片岩は遺跡周辺の河川や礫層の中から容易に採取でき、特に他地域からの搬入を想定する必要はないものと思われる。以上のことから、本遺跡の石鏃は、いずれも集落内の人間によって、遺跡近くで製作されたものと考えたい。

また石鏃は、形態及び推測される機能から、縄文時代の打製石斧との関連が考えられる。そこで、縄文時代住居出土の打製石斧と、今回取り上げた石鏃との比較を行ってみた。ここでも先述の勝坂終末期の住居出土のものを抽出した。

まずそれぞれ完形の資料について、各種の定量的な属性の比較を行った(第6表)。これによると、平均値で全ての属性について石鏃が上回っており、特に重量では3倍以上の値となっている。また、重量についてそれぞれの分布範囲をみると、石鏃は最大495g・最小440gにたいし、打製石斧は最大171g・最小70gであり完全に分離している。このことから、本遺跡では、石鏃と打製石斧との区分は漸移的なものではなく、大きさにおいてはっきりと分離・独立したものであるといえる。この大きさにおける両者の違いは、おそらくその機能もしくは使用方法の差によってもたらされたものであろう。

また使用石材については、勝坂終末期の打製石斧は、硬質泥岩や珪質頁岩などの比較的細粒均質な石材が全体の四割にのぼり、また結晶片岩類も三割を占める。種類も少なく、石材の片寄りが大きい。それに対して、石鏃は細粒のものから粗粒のものまで多くの種類の石材を利用しており、特定のものに集中する傾向は低い(第34・42図)。このような石鏃の石材における選択性の低下は、どのような要因によるものであろうか。先述したように、石鏃は打製石斧に比べるとかなり大きく、必然的に大きな素材が必要となる。しかも剥片を素材としているため、十分な大きさの剥片を取るためには非常に大きな原石が必要である。そのために雑多な石材を使用せざるをえなかったのであろうか。ただし、石鏃の石材における硬質泥岩・珪質頁岩の使用頻度は、周辺河川での出現率に比べれば高い水準を維持しており、引き続き選択的に利用されている。この他の要因として、石鏃と打製石斧との機能の違いからそれぞれに適する石材が異なるため、または石器製作技術の違いから使用できる石材の幅が広がったことなどが考えられよう。おそらくこれらの要因が相互に作用していたものと推測されるが、中でも二つの石器の機能差は、縄文・弥生時代の生活形態にもかかわる問題であるため、今後検討しなければならない。

第6表　石鏃・打製石斧の平均値

器種	石鏃	打製石斧
長さ(cm)	16.2	4.3
幅(cm)	9.5	1.7
厚さ(cm)	2.4	79.9
重量(g)	477.5	0.0
個数	4	9

また当遺跡では横形のスクレイパーの存在が注目される。従来弥生時代の収穫具としては、大陸系の磨製石器である石包丁が広く認識されている。その一方、特に東海から中部地方南西部では、一群の打製石器が注目されていた。打製石包丁とも横刃形刃器とも呼ばれるこの石器は、やはり収穫具として利用されたと推測される。当遺跡のスクレイパーのうち、Ⅰ類としたものがこれに該当する。

このスクレイパーのⅠ類は、これまでの所県内では類例は少ない。わずかに富岡市七日市観音前遺跡で、形態・技術的に類似したスクレイパーが出土している。七日市観音前遺跡では、弥生時代の住居から、横長の剥片を素材としたスクレイパーが3点出土している。これらはいずれも薄手の横長剥片の先端部両面に調整を加えたもので、一部打面側にも調整が見られる。これらのスクレイパーは、共伴する土器より、いずれも中期前半に位置付けられる。この住居からは、磨製の石包丁や太形蛤刃石斧も出土している。この他に類例はみられないが、スクレイ

パーⅠ類が縄文時代のものと類似しているため、縄文時代遺物の混入と判断され、弥生時代遺物として報告されていない可能性は高い。

これ以外の弥生時代のスクレイパーとしては、幅広の剥片の端部に調整を加えたもの、ほとんど調整を加えず、端部に使用によると考えられる微細な剥離痕の見られるものがある。スクレイパーのⅢ類は前者に含まれ、Ⅱ類は後者に含まれよう。このようなスクレイパーは、県内でも多数の遺跡で出土している。

弥生時代前期末～中期初頭の安中市注連引原Ⅱ遺跡では、剥片の一端に調整を施した小型のスクレイパーが出土している。幅広の剥片の縁辺部に浅い調整を加え薄い刃部を作出したもので、他の部分は未加工のまま残される。同様なスクレイパーは、藤岡市沖Ⅱ、柏川村西迎(中期後半)、前橋市清里庚申塚(中期後半)、沼田市下川田平井（後期）、渋川市有馬（後期～古墳前期）、下東西（後期後半）など各期にわたる多数の遺跡で出土しており、石鏃とともに当該期の一般的な石器組成に含まれるものであろう。

このスクレイパーの製作工程については、大工原氏が先述の注連引原Ⅱ遺跡の報告の中で言及している（大工原1988）。それによると、スクレイパーの素材には、石鏃の刃部再生の際に出た剥片を利用しているものもあるが、大半は拳状の石核から求心状に剥離された剥片が使われているという。剥片剥離の結果残された石核も、多数出土している。西迎・清里庚申塚・下川田平井・有馬などでも同様の石核が出土しており、同じような製作工程の存在が推測される。ただし、それらの遺跡でも、スクレイパーの中には、石鏃の調整剥片を素材とすると思われるものも含まれている。

それでは、本遺跡のスクレイパーの製作工程はどのようなものであろうか。ここでは、まずスクレイパーのⅠ類について検討を行う。

Ⅰ類は全部で４点出土している。このうち完形のもの３点については、平均で長さ4.0cm・幅9.1cm・厚さ1.1cm・重量53.3ｇである。形状は、横長の長方形もしくは半月形・楕円形状を呈する。石材は、緑色片岩製のものが一点ある以外は、硬質泥岩や珪質頁岩に限られる。横長の剥片を素材とするものが多いが、縦長剥片素材のものもある。一部に原石の自然面を残すものもあるが、多くはある程度剥離が進んだ段階で剥出されたものである。

スクレイパーの素材に関しては、生産に係わるような石核や、素材と思われる剥片類はみられなかった。また、石鏃の中には、スクレイパーの石材である硬質泥岩や珪質頁岩製のものが含まれている。これらの石鏃の整形の初期段階では、かなり大形の横長剥片が剥離されている。従って、Ⅰ類のスクレイパーの素材としては、この石鏃の調整剥片が利用されている可能性が高い。先に述べたように、本遺跡では、石鏃は集団内の人間によって遺跡周辺で製作されたものと推測される。その石鏃製作時に剥離された調整剥片の中から、適当な大きさ・石材のものを選んで、スクレイパーの素材として利用していたのであろう。遺跡内では素材となるような剥片がみられないことから、このスクレイパーも、石鏃と同様に完成品として遺跡内に持ち込まれたと考えられる。またスクレイパーのⅡ類も、やや小振りである点を除けば素材剥片の特徴はⅠ類と似ており、同じような製作工程が考えられる。Ⅲ類に関しては、個体ごとの差が大きく、統一した製作工程は想定できない。

以上のことから、本遺跡では、石鏃の調整剥片をスクレイパーの素材として利用していたと推測され、特に個別の剥片剥離工程は行われていなかったようである。

また、注連引原Ⅱ遺跡では、石器組成中にかなりの割合で打製の石鏃が含まれているが、本遺跡では住居に伴うようなかたちで出土したものはほとんどなかった。白倉下原では多量の磨製石鏃が出土し、その素材や未製品・砥石などを伴う住居が発見されている。このことから、弥生時代後期にあたる本遺跡では、磨製石鏃の集中的な生産が行われ、打製の

石鏃は、主な器種としての位置付けはすでに失っていた可能性が高い。

以上のことから、本遺跡の打製石器を特徴付けるものとして、石鏃と横型のスクレイパーの存在と、両者が一連の石器製作工程の中に位置付けられる点があげられる。すなわち、石鏃の製作とその調整剥片を利用したスクレイパーの製作である。

本遺跡にみられる石鏃とスクレイパーの製作システムは、現在のところ他の遺跡ではみられない。先述の注連引原Ⅱ遺跡のような石器製作システムが一般的である。二つの遺跡は時期が異なり、両者におけるスクレイパーの形態と製作工程の違いは、時間差と考えるのが妥当であろう。ただし、注連引原Ⅱとほぼ同時期の七日市観音前遺跡では横型のスクレイパーが石器組成に含まれており、地域的な特徴である可能性も否定できない。七日市観音前では、素材を剥離したと思われる石核や、調整剥片を利用したような石鏃も出土しておらず、スクレイパーの製作工程はわからない。従って、七日市観音前の段階で本遺跡のようなスクレイパーの製作システムが確立していたかは不明である。いずれにせよ、横型のスクレイパーについては、必ずしも全てが報告されていない可能性が高いため、その初現や製作工程の確立の時期を確定するのは、現在のところ困難であり、今後の類例を待って検討したい。加えて、本遺跡の石器組成や製作工程の様相を形成した要因として、遺跡の立地や機能の問題も含めて考える必要があろう。

本稿では、弥生時代遺跡出土の打製石器について述べてきた。弥生時代の石器としては、従来石包丁などの磨製石器が注目されてきた。しかし、群馬県内では、それら大陸系磨製石器の出土は少なく、むしろ石鏃やスクレイパーなどの打製石器が主要な石器となっている。石器群の様相から生業などの問題を考えるとき、打製石器を正しく位置付けて評価することが不可欠である。これらの打製石器は、ともすると縄文時代遺物として報告される例がみられるが、少なくとも弥生時代遺構出土のものについては、出土位置や共伴する石器（特に製作や再調整に係わる剥片など）との関連から、遺構に伴うものであるか否かの十分な検討が必要であろう。

(3) 磨製石鏃及びその製作に伴う遺物

白倉C区にある14軒の弥生後期に属する住居跡から磨製石鏃及びその製作に伴う遺物が多量に出土した。その種類としては、磨製石鏃の想定される製作工程の各段階で出現する遺物である完成品、未成品、失敗品、素材片、剥片、チップがあり、またその製作に使用したと思われる工具類（主として砥石）がある。

住居ごとに種類別の出土点数を列挙すれば第７表の通りである。

遺物の出土状態　この表を見ていく場合、まず前提条件として断っておかねばならない点は、確認された数量のうちチップについてはこの数値を大きく上回る可能性があることである。なにしろ非常に細かいものであるので、かなり注意を凝らして探索をしているはずではあるが、漏れてしまい確認に至らなかった点数も多いものと思われる。それでも、一定の傾向を示していることは間違いないであろう。

その上でこの表を見て注意されるのは、これらの遺物類が、広い調査地の中でも白倉C区に集中している点である。他の地区からもわずかに出土しているが比較にならない微量なものである。

次に白倉C区内におけるありかたを見てみると、この地区で確認された弥生後期の住居跡16軒のうちの15軒から出土している。15軒は弥生後期第１段階に属しており、のこりの１軒は弥生後期第３段階に属している。弥生後期第１段階に属するのは白倉C区のこの15軒のみであるから、この段階に属する全ての住居跡から出土していることになる（以下、文中での個々の住居番号については「白倉C区」を省略する）。本遺跡の弥生後期第１段階の集落を構成する全ての住居から磨製石鏃の製作に関わる遺物が出土していると言い換えることもできよう。

出土する遺物の種類及び量には、住居によってず

第７表　磨製石鏃及びその製作に伴う遺物の住居別出土点数

住居番号	完成品	未成品	失敗品	素材片	剥片	チップ	砥石	備考
白倉Ｃ区1号		3						後期第１段階
白倉Ｃ区7号		14	3	2	12	43	9	後期第１段階
白倉Ｃ区8号	1	1			1	1	4	後期第１段階
白倉Ｃ区9号	2		1	4	2	1	4	後期第１段階
白倉Ｃ区14号	1	2	4		3	14	3	後期第１段階
白倉Ｃ区32号			1			15	3	後期第１段階
白倉Ｃ区34号		2	2		2	14	3	後期第１段階
白倉Ｃ区35号	2	10	7	3	47	1,046	13	後期第１段階
白倉Ｃ区39号	1	4	5	1	6	46		後期第１段階
白倉Ｃ区47号			1			1		後期第１段階、南1/3の調査
白倉Ｃ区53号	1	2				80	1	後期第１段階
白倉Ｃ区55号		4			5	51	1	後期第２段階、南1/2の調査
白倉Ｃ区72号		2	2		1	6	2	後期第１段階、北1/2の調査
白倉Ｃ区90号					2	1	2	後期第１段階、南1/2の調査
白倉Ｃ区91号		4	4		12	98	2	後期第１段階、南2/3の調査
白倉Ａ区	1							遺構外からの出土
白倉Ｂ区	1							遺構外からの出土
白倉Ｃ区	1	14	20	4	35	75	1	遺構外からの出土
天引地区	1			1		3		遺構外からの出土

いぶん差があることがわかる。その差は、基本的には、個々の住居（もちろんそこに住んでいた人ということ）と磨製石鏃の製作との関わり方の差を反映しているものと考えられよう。

遺物の大半は住居の床面上から出土している。製作が屋内で行われたことを示していると言えよう。このことをより端的に示しているのは、35号住居の床面上から既述の遺物類に加えて、石鏃の研磨工程において生じたと思われる石材の粉末が顕著に認められていることである。

15軒の住居のうち、出土点数が極端に少ない１・８・47・90号住居の場合、これらの住居において製作が行われていた可能性は極めて少ないであろう。９・72号住居は微妙なところにある。住居全体の６割以上において製作が行われていたことになる。住居の規模からすると、８・72号は比較的小型の部類に属し、１・９・47・90号は中型の部類に属している。しかし、小型の部類に属する32・34・53号においても製作の可能性が認められるので、住居の規模の大小とは直接関係していないものと言えよう。一方、２軒の比較的大型の部類に属する７・35号住居のいずれからも顕著にその痕跡が認められたことは注意されよう。７号住居の場合、床面ギリギリまで後世の削平が及んでしまっていたことを考慮すると、本来はさらに多い遺物が存在していたものと思われる。

住居内における遺物の出土状態を見てみると、全体に散在するものではなく、特定の範囲に集中していることを明確に読み取ることができる。その顕著なものは35号住居であり、遺物の大半が住居の南側の２本の主柱穴と南壁との間に集中していた。同様の状況を７・39・55・91号住居で認めることができ

た。また、量的に少ないためこれらほど顕著ではないが、14・34号住居においても同様の傾向を認めることができる。一方、53号住居の場合、東側の2本の主柱穴と東壁に囲まれた部分に集中箇所を認めることができた。他の住居の場合と異なって、この住居の主軸方向が東西方向であることに関係しているものと思われる。これらの集中箇所は実際に磨製石鏃の製作が行われた場所であると思われる。製作が住居内の特定の場所で行われていたことと、その場所が住居の南側（ごくまれに東側）の入口寄りの空間という点で全体に共通していたことがわかる。

磨製石鏃の石材　磨製石鏃に使用された石材は、飯島静男の鑑定によれば、いずれも珪質凝灰岩といわれるものである。この石材は、青灰色を呈するきめの細かい質のもので、薄い板状の摂理を有している。

本遺跡の南方を東西に帯状に走る多野山地の基盤は、北側から三波川帯の結晶片岩及び緑色片岩類、秩父中・古生層の凝灰岩類、チャート、砂岩、粘板岩、シャールスタイン、および石灰岩などとなっているという。それゆえ、この山地部分を開析して北流し、鏑川に流れ込む河川を遡れば、手近で容易に得られる石材と言えよう。実際、本遺跡の西方3.5kmを南流している雄川を約4kmさかのぼった甘楽町秋畑付近では、現在でもこの石材が採集できる。

この石材は、本遺跡においては磨製石鏃以外にはまったく認められない石材であるので、特に選ばれて採集されてきたものであることは明らかである。群馬県内でこの石材が容易に得られる地域となると、この多野山地の北側に面する地域にほぼ限られている。県内の他遺跡で出土する磨製石鏃の大半にも、この地の石材が使用されているとして間違いないところである。本遺跡が、石材入手の観点からは極めて有利な地域に位置していたことがわかる。

磨製石鏃の製作工程と形態的特徴　女屋和志雄は群馬県高崎市の熊野堂遺跡の弥生後期の住居跡から出土した磨製石鏃の製作に伴う遺物の分析の中で、その製作工程を「分割→研磨→穿孔・仕上げ」の大きく3つの工程に復元し、そらぞれの工程について検討している。

本遺跡で出土した遺物を観察したところ、女屋の想定した復元に近いものであることが確認された。ただし、熊野堂遺跡の場合、出土した遺物の総点数が40点とわずかであったのに対して、本遺跡ではこれを大きく上回る点数が発見されたので、より具体的な検討を可能にしているということができよう。

そこで以下、女屋による分析を参考に、推定される製作工程の順を追って遺物の特徴を見ていくことにしたい。

①石材の入手　磨製石鏃の製作のために珪質凝灰岩という単一の石材が特別に使用されているわけであるから、突き詰めていけば、石材の入手の行為が、まず製作工程の最初に位置づけられることになるであろう。本遺跡で確認されている「素材片」のうちで最大の大きさのものは、35号住居から出土しており、11.3×7.6×1.3（№37、たて・よこ・厚さ：cm）を測る。ちょうど手のひらくらいの大きさである。これに匹敵する大きさのものは他に見られず、次の大きさのものが、39号住居№24の6.1×6.9×2.0cm、あるいは35号住居№36の4.3×8.1×1.2cmであるから、次のものとの間の開きは大きい。これらの素材片のように、ある程度の厚みを持ったものが、製作工程の最初期の段階のものである可能性が強いので、石核（コア）と言うのがむしろふさわしいかもしれない。石材の産出地から搬入してきた石材の大きさが、この最大のものを上回るとしても、大きくでるものではなかったと言えよう。

この種の石核ともいうべき素材片は、全体的に見ても極めて量が少ない。入手してくると、必ず次の工程に移る運命にあるのであるから、当然のことではある。と同時に、保管しておくほどにまとめて持ってきていなかったことを推定することができよう。このことは、磨製石鏃の生産のありかたとも関係して注意しなければならない点である。

②分割　入手された素材片（石核）は、まず摂理に沿って剝がされ、薄い素材片に分割（「剝離分割」）

していくのが最初の工程である。おそらく、長理のすきまにクサビ状に工具を差し込んでおこすようにはがしたのであろう。

この工程によって剝がした直後にあたると思われる素材片を特定することは困難である。というのは、34号住居の№19は、5.6×3.0×0.5の大きさで、剝離分割された素材片としては、全体的にも最も大きい部類に属する。しかし、その長軸方向の一片は、先端の尖った棒状の工具で溝を縦方向に付けることによってより大きな素材片から分割する方法(「施溝折断技法」)によって分割されたことを示している。それでも、この資料が、剝離分割される剝片の大きさを知る一応の目安になると言えよう。

剝離分割された剝片は、前述した施溝折断技法とハンマー状の工具により端部を打ちかく手法(「折断技法」)を適宜駆使して、具体的に1点の磨製石鏃の祖形を成形していったものと考えられる。ただし、施溝折断技法は必ずしも用いられず、折断技法のみで成形を行っている事例も多い。むしろ、この方が数量的には勝っている。この製作途中で破損し、製作を断念したと思われる失敗品も存在すると思われるが、剝離分割がうまくいかなかった剝片や剝離分割片から折断技法により掻き取った目的外片との区別がむずかしい。

この折断技法による分割の途中で、鏃の祖形を損なうような分割をしてしまった失敗品と思われる事例も多い。

③研磨　前段階の工程までで作成される形状はかなり粗い形であり、次の研磨の工程の中で本格的な整形がなされたことがわかる。ただし、細部の研磨の過程は、個々の製品によってかなりばらつきが大きい。7号住居№27や55号住居№7・9などは、かなり粗い形状から研磨整形が開始されているのに対し、7号住居№25や35号住居№29などは、前工程で先端部を尖らせる成形まで終えている。細部の製作工程では、定型的な手法が取られていなかったことがわかる。

基本的には、表裏面の研磨がなされた後に、端部の研磨が行われたことがわかる。後者の工程は極めて丹念なものであり、この工程に研磨の重点が置かれたことは明らかである。鏃の尖端部を上にした場合の、両側部がまず研磨され、最後に下端部の研磨が行われて整形が終了している。

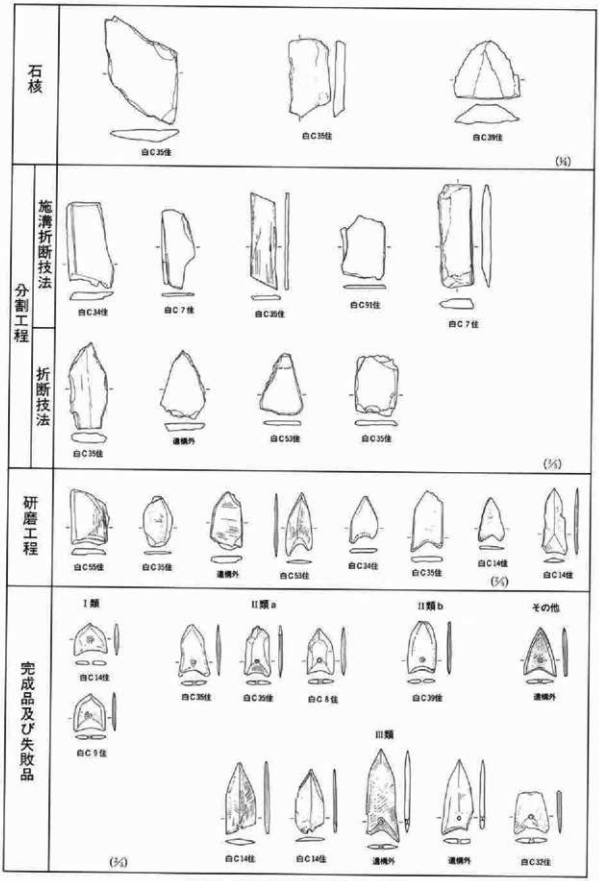
この研磨の工程の途上で破損してしまったと思われる失敗品も多く見られる。

⑤穿孔　研磨の工程を経てすべての整成形が終わった後に、最後に下端寄りの中心に小孔が穿たれて完成する。未穿孔のもののなかに、あたかも完成品ではないかと思われるような14号住居№15・17、34号住居№14、53号住居№3のような例もある。しかし、明らかに完成品と思われるものはすべて小孔を有しており、穿孔途中での破損による失敗品が極めて多いことから、前述の完成品ではないかと思われる未穿孔のものは、製作途中のもので、最終的な完成段階には至っていないと考えられる。

穿孔はすべて両面穿孔である。この穿孔の作業中に破損してしまったと思われる失敗品の量の多さが目立つことから、製作工程全体の中では、この工程がもっとも技術力を必要としていたことがわかる。

9号住居№9は、6.7×2.0×0.4cmの長方形を呈するもので、表裏面の研磨後、鏃に穿たれるのと同一の小孔が縦横の方向に多数あけられており、その性格理解に苦しむものであった。穿孔の練習品ではないかという、やや憶測の過ぎる解釈もあながち否定できないような代物である。

石鏃の形態的特徴　製作に関わると推測された住居跡において、完成品と思われる磨製石鏃の出土は非常に少ない。わずかに一部が欠けているものも含めても白倉C区で6点に過ぎない。完成するとさほど時を経ずして使用者の手に渡ったと考えれば当然のことであろう。と同時に、本遺跡で得られた完形の石鏃が製作工程の最終段階としての完成時の形態をとどめるものと考えて間違いないであろう。なぜ、このようなことにこだわるかといえば、製作跡以外の遺跡から出土した磨製石鏃の場合、部分的な破損後の再調整によって製作当初の形態と異なっている



第43図　磨製石鏃の製作工程とその資料

可能性も考えられるからである。

このような前提を踏まえた上で考えると、本遺跡における磨製石鏃は形態的に極めてバラエティーに富むものであったことがわかる。言い換えれば、厳密な意味での定型的な形態とはなっていなかったことがわかる。

形態をある程度類推できる製作途中のものも含めて、その特徴を検討してみると、まず、すべて無茎式で、下端部が内側にえぐり込み、中央に小孔が穿たれている点で共通している。

石鏃の長さを基準にすると、2㎝、3～3.5㎝、4～6㎝の大きくは3つに分類（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類）することができる。

Ⅰ類（長さ2㎝前後のもの）　長さと幅がほぼ同じで、五角形に近い。先端部から両肩にかけては丸みをもっており、下端は浅い弧状にえぐれている。

Ⅱ類（長さが3～3.5㎝のもの）　幅は2㎝足らずで、先端部から両側にかけて明瞭な肩を有するもの（a）と有さないもの（b）に分けられる。いずれも下端のえぐれ込みは浅い。

Ⅲ類（長さ4～6㎝のもの）　幅は2㎝前後を有し、鋭利な先端部に仕上げられているのが特徴的である。この類のみ比較的明瞭な鎬を持つ例が多い点が目につく。

住居を単位にしてみると35号住居で同じⅡ類aに属する2点が製作されている。これに対して、14号住居では同じⅢ類に属する2点とともに、Ⅰ類1点や完成品ではないが、これらとも異なる2点（15、17）が認められることから、同一住居内においてもバラエティーに富む製品が作られていたことがわかる。

製作工具について　磨製石鏃の製作が行われたと推測される白倉C区の竪穴式住居跡からは、製作工具と思われる石器類が出土している。中でも、「牛伏砂岩」と呼称されている凝灰岩質砂岩を使用した砥石は、製作工程の中で中心的な位置を占める研磨工程に使用された工具として注目された。逆に、このような石器の存在が、この場で実際に製作が行われたことを決定づけるものとすることができよう。

牛伏砂岩を使用した砥石は表にも示したように比較的多くの量が認められる。ただし、ここで注意を要するのは、これらの住居群の下には縄文中期の住居群が重複している点である。これらの住居跡からも牛伏砂岩を使用したすり石・くぼみ石・砥石等が認められるので、この種の石器の弥生住居跡への紛れ込みも考慮しなければならないであろう。実際、弥生住居跡の出土遺物として例示した石器類のなかには、縄文期の所産である可能性が強い砥石以外の石斧・スクレイパー等も含まれている。

そのような中で、磨製石鏃製作の住居跡のみから出土する定型的な砥石が認められる。全部で11点で、8軒の住居跡から出土している。その大きさは、縦7～9㎝で、横3～5㎝、厚さ1～1.5㎝の長方形を呈しており、ちょうどマッチ箱のような形状である。全体が四角く丁寧に整形されており、使用前にすでにこの形になっていたことがわかる。使用痕を見てみると、全体的に使用されてはいるが、最もよく使用されているのは、表裏面の長軸方向に沿った縁部分である。この砥石がハンディタイプであったことは明らかであり、主として石鏃の側縁部を仕上げるのに使用したものであろう。

(4) そ の 他

その他の遺物で注意されたものとしては、白倉C区1号方形周溝墓から出土したやや不定形なヒスイ製の勾玉である。この時期のものとするならば、形の整っていない点が気になるが、縄文期の資料に詳しい人たちにたずねても、当該期のものとは考えられないとの見解であった。非常にきれいな緑色を呈しており、両面穿孔である。

白倉C区7号住居から7点、47・53・72号住居跡から各1点のガラス小玉が出土している。大きさはいずれも直径約3㎜で、孔径約1㎜、厚さ3～4㎜を有している。色調はいずれも水色に近い明るいブルーである。

3 古墳時代の遺物

(1) 土　　器

最初に述べたように、本報告で扱う古墳時代は、古墳前期から中期にかけてである。

前期に属することが推定される住居跡で、土器資料に比較的めぐまれていたのは13軒に上るが、いずれもＳ字状口縁台付甕を有していた。これらは、基本的には田口一郎による当地域の当該甕の編年のⅣ期、Ⅴ期に属するものである。前期の中でもその後半期に属していることがわかる。これより若干遡上る可能性を有しているのは、天引６号住居で、№５、７の壺の折り返し口縁に、弥生後期第３段階からの遺制をうかがわせる。また、台付甕の脚台部(9、10)はハケ目を施さず、下端部を内側に折り返さないものであり、古相を物語るものと言えよう。ただし、この種の土器群を有する住居は希少例であり、弥生後期第３段階と古墳前期のピーク期との間に空白期間を想定せざるを得ない。

なお、これら前期の土器群の中に、弥生後期第３段階の系譜に直接連なる樽式土器あるいは吉ケ谷・赤井戸式系の土器をまったく含まない点は特徴的である。この点も、当遺跡における弥生後期第３段階と古墳時代前期との間に断絶に近い空白期間を想定することを首肯させるものである。

前期後半に引き続いて登場する中期の土器群は、大勢は中期の中でもその前半期に属するものと考えられる。この段階の土器群の特徴は、主として台付甕と高坏、小型壺（坩）に見られる。

台付甕は単口縁で粗いヘラ削りとヘラなでにより器面調整をおこなっている。全体に肉厚で、胎土には砂礫の混入が目立ち、器面はざらざらしている。脚台部の下端を内側に折り返していないことも併せて、前段階のＳ字甕とは系譜を異にしていることは明らかである。天引１号住居では、この単口縁の台付甕を主体とする中に客体的にＳ字甕１点が共伴していた。このＳ字甕は、口縁にかろうじてＳ字形態をとどめ、体部のハケ目も喪失している退化的な様相を示すものである。

高坏は坏部が折れ曲がって外反するものと湾曲して開くものの２種類があるが、前者のほうが大勢を占める。坏部は内外面とも放射状の粗いヘラ磨きを施すものが一般的である。

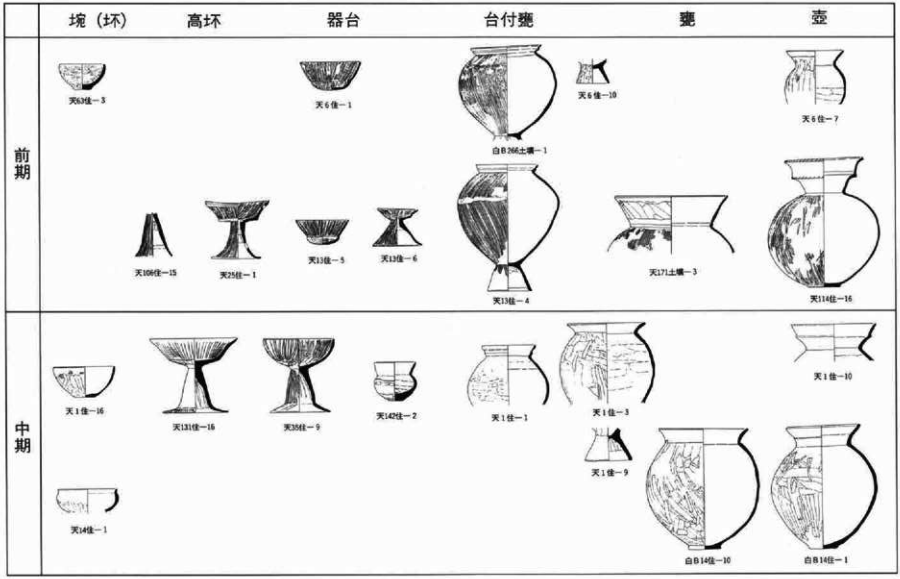
小型壺（坩）は肉厚で、体部下半を横ヘラ削りしているものが特徴的である。

大型壺の中には、天引１号住居№10や天引131号住居№３、あるいは白倉Ｂ区14号住居№11のように前段階に連なる二重口縁形態のものが認められる。

これらのことから、当遺跡における古墳前期から中期にかけては、土器相を大きく変質させるものの、大きく空白期間を想定する必要はないものと思われる。

(2) 石　　器

砥石　本遺跡における弥生後期第３段階までの砥石は、主として牛伏砂岩を使用した比較的目の粗いものであった。ところが、古墳時代前期になると、これとはまったく異なる質の砥石が見られるようになり、注目された。それらは、天引６号住居（１点）、天引31号住居（２点）、天引88号住居（１点）の合わせて４点である。このうち３点は流紋岩で、あとの１点はデイサイトと言われる質的に流紋岩に近いものである。これらの石材は非常にきめ細かく緻密なもので、古墳時代後期以降の群馬県内で広く流通するようになる「砥沢石」（鏑川の上流の下仁田町から南へのぼった地点で産出し、最近まで盛んに採掘されていた）に質的に近いものである。この石材は、付近の鏑川に下り立てば、河川礫として採集は可能であるという。実際、４点のうち３点の砥石では一部に礫面が残っていた。弥生後期段階までは砥石をはじめとする石器石材としてまったく利用されなかったことから、古墳時代になって新たに意図的に選定されるようになったものであることは間違いない。ところで、これらの砥石の形態を見てみると、仕様面がえぐれるように摩耗している。これは明らかに鉄製品の刃部を研ぐことによってできた使用痕



第44図　白倉下原・天引向原遺跡出土古墳前・中期土器の変遷

である。大きさから考えて、6号住居№11は手持ち用であるのに対して、その他の3点は置いて使用するタイプであろう。

この種の砥石が、遺跡内ではじめて登場した意義は、極めて大きいと言えよう。当地域における鉄製の農工具類の普及と密接に関わるものと考えられるからである。今後、当地域の他遺跡における当該時期の砥石の存在形態を具体的に追求していく必要があると考えている。

(3) 石　製　品

石製管玉　天引地区の古墳前期の住居跡4軒（13・23・106・117号）から合計7点の石製管玉が出土している。このうち5点は蛇紋岩製で、長さ約2cm、直径約0.5cmの大きさを有している。この種の蛇紋岩製の小型管玉は、高崎市下佐野遺跡の古墳前期の製作に関わる住居跡群から良好な状態で出土している。かって吉井町の神保下條遺跡の古墳前期の1号住居跡においても確認されおり、また、前橋市の南部静島川端遺跡の古墳前期の住居跡からも確認されている。今後群馬県の中・西毛地域の前期後半に属する遺跡から広範に確認される可能性があり、古墳時代前期の展開過程を検討していく上でも注意しておく遺物と思われる。

ところで、この蛇紋岩製の管玉については、こののち中期初頭から登場する滑石製模造品（本書の遺物観察表の石材のところでは、「蛇紋岩」と区別して「滑石質蛇紋岩」と記されているが、いわゆる「滑石」である）とは区別して考えるべきであると思われるので、この蛇紋岩製の管玉の出現をもって、滑石製模造品の出現と理解するのは正しくないと思われる。後述する本遺跡における中期前半の滑石製品（剣・臼玉・勾玉・紡錘車等）に出現の画期を求めるべきであろう。

滑石製品　倒々の住居跡の報告の項でも述べたように、古墳中期前半に属する天引10号・142号・143号住居跡から滑石製品の製作に関わる遺物が出土した。このうち、10号・143号住居跡からは滑石の完成品とともに多量のチップと素材片、未成品、失敗品等が床面からまとまって出土しており、明らかに住居内で製作が行われたことを示していた。

これに対して、142号住居からは勾玉・剣とともに臼玉・有孔円板・種類不明の未成品が数多く出土したが、この場での製作を物語るチップ・素材片がまったく出土していないことから前記の2軒の住居とは同一に扱えないと考えられた。その出土状態を検討してみると、住居廃絶後に祭祀的色彩の強い高坏・坩等の土器群とともに置かれた可能性が高いことから、この場合、未成品も一種の完成品の代用として一定の儀礼行為の中で使用された可能性を述べておいた。このような未成品を完成品の代用として使用するということは、一般的な遺跡ではほとんどあり得ないことであろう。未成品が完成品と同様に流通ルートにのることは到底考えられないからである。142号住居のような使用例は、滑石製品の製作に関わる集落内にあってはじめて成立するケースと言えよう。当遺跡の場合、極めて小規模な生産であったことがわかる。

次に滑石製品の特徴について見てみることにする。製作工程がある程度類推できるのは、臼玉である。10号住居の未成品（34～41）や142号住居のそれ（18～23）は、不定形ではあるが、目的の大きさに近いところまで粗く割り取った段階である。この時すでに表裏面は研磨されていることから、適当な板状の剥片の表裏面を研磨した後に割り取ったものであることがわかる。142号住居№24から32の表裏面を研磨したのみの不定形な剥片は、臼玉の大きさに分割するための素材片である可能性が強い。古墳時代後期に属する白倉地区の臼玉工房跡では、ノミ状の工具により連続的に方形に割り取っていることが知られるが、本例の場合、このような手慣れた手法にはよっていない。これに引き続いて穿孔がなされることは、143号住居の№8・9・11からわかる。穿孔が完了すると側面の研磨による最終的な仕上げに入るわけであるが、完成品である143号住居の№6を見ると、その仕上げが非常に念入りであることがわかる。

このことは、ここでの他の種類の製品についても共通する点であり、5世紀後半以降に属する滑石製品の製作基調との間での大きな相違点である。

142号住居の剣形模造品や勾玉の完成品を見ると、この集落にいた製作者がその当初から熟練した技術を有し、定型的な製品を製作していたことがわかる。中期前半に製作されたこれらの滑石製品は、上野地域においては、先駆的な生産に属するものであったと思われる。当地域において、この5世紀初頭から前半にかけての時期に属する製作跡の発見例はわずかである。多くは5世紀後半から6世紀にかけての時期に属するものである。製作跡以外から出土する滑石製品の時期ごとの量的傾向と密接に関わっていることは言うまでもない。

本遺跡の北方に近接する一段下位の面には、甘楽条里遺跡と呼称されている5世紀後半から6世紀前半にかけての時期にピークを有する大規模集落跡が確認されており、ここでは極めて組織化された大規模な滑石製品の生産が行われていたことが明らかにされている。ただし、その場合、中期前半にまで遡上る事例は認められなかった。本遺跡における中期前半の操業開始は、甘楽条里遺跡における5世紀後半以降の本格的な生産の母体の一端を担ったものと言えよう。

(4)　小型仿製鏡

古墳前期に属する天引20号住居跡の壁際の床面上から小型仿製鏡が出土している。住居の北側1/3を失うほどに削平をうけていることから、共伴遺物はわずかであったが、この鏡が直接住居に伴うものとして間違いないであろう。

鏡は直径5.8cm、厚さ0.15cmの小型品であり、紐は縦1.0cm、横0.7cm、高さ0.4cmである。断面形状を見ると、極めてわずかではあるが凸面状の反りが認められる。銅の質が悪いのか、表面には細かいひびが全体に及んでいる。

背面の文様は比較的明瞭に遺存しているがシャープなものではない。紐の周りには2条の細い隆起線に囲まれた珠文帯があり、22個の点が打たれている。その外側に幅2mmの無文帯を挟んで幅4mmの櫛歯文帯が配され、さらにその外側を歯を内側に向けた幅4mmの鋸歯文帯が配されている。鋸歯の形状は一様でなく規格性に欠けるものである。いちばん外側には幅7mmの無文帯が配されている。

同じ年に発掘調査が行われた隣の吉井町の神保下條遺跡1号住居跡からも直径6.1cmを測る小型仿製鏡が出土している。この住居跡も古墳前期後半に位置付けられるものであり、ここでは鉄斧1・鎌1・管玉12（蛇紋岩製11、凝灰質泥岩製1）・ガラス小玉2が共伴している。この鏡は、紐がやや大きく、その外側を3重に同心円文をめぐらせた外側に順に櫛歯文帯、鋸歯文帯、無文帯が配される構成で、天引10号例とよく似た構成になっている。

両者とも集落内の住居跡からの出土であり、集落全体の遺物のありかたから見れば、管玉・ガラス小玉等の遺物組成も共通しており、何らかの近縁関係を想定できる可能性もあろう。今後、周辺地域の前期古墳とも併せて検討していく必要がある。

第45図　神保下條遺跡1号住居出土小型仿製鏡

おわりに

本遺跡の調査を開始したのが平成元年4月1日であったから、本書の完成にたどりつくまでには、ずいぶん多くの時間を費やしたことになる。ただし、遺跡の蔵している極めて豊富な内容・価値からすれば、そのうちのどれほどを提示できたか心配である。編者の心掛けた点は上言えば、少なくとも遺跡の基礎的理解に必要な調査データと遺物の基本データだけは、なんとか余すところなく盛り込みたいという点であった。その意図が十分果たせたかどうかは心もとないが、その意図をくみ取ってもらえればと願う次第である。

本遺跡の場合、上信越自動車道の「甘楽パーキング」の予定地であり、その敷地が予想される遺跡の分布域の主要部分をカバーしていたため、広大な面積を調査することになったわけである。現地での調査に多くの時間を要したことは言うまでもない。群馬県に関わる上信越自動車道の埋蔵文化財調査は、大勢としては平成3年3月31日をもって終了したわけであったが、本遺跡の場合、調査期間が工事工程ギリギリの同年8月まで延長された。このほぼ2カ年半の調査の過程で、基本的には平成元・2年度が2班（調査担当者各班3名）体制、平成3年度が1班体制で望んだ。そのような中で、平成2年6月には多比良追辺野遺跡班が、同年7月から8月にかけては多胡蛇黒遺跡班が応援に加わり、最後の平成3年2・3月には、他遺跡で調査が収束してきた班（内匠日向周地遺跡、南蛇井増光寺遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ班等）がぞくぞくと応援に駆けつけてくれた。その数があまりにも多いため、巻頭の調査担当者・作業員の項には、個々の方々の氏名を盛り込めなかったことを記しておきたい。

本報告書の中で扱った弥生時代から古墳時代前期にかけての諸遺構については、事実報告を中心とした記述となっており、その報文中で簡単な考察や問題点の指摘をするにとどまってしまった。遺跡の重要性からみて、他遺跡の資料との比較検討を推し進めて、それぞれの時代・時期について考察を及ぼす責が課題として残ってしまったことになる。その意味では、今回の上信越自動車道の建設に伴う調査遺跡が、鏑川流域という地域的まとまりをもち、とりわけ地域的特性を色濃く残している地域全体を東西に通過していることは、今後の検討に極めて良好な調査資料を集積したということができよう。是非とも今後に期したい。

《参考文献》

杉原荘介「上野樽遺跡調査概報」『考古学』10-9　1939
群馬県立博物館『笹遺跡』1964
梅沢重昭「北関東西部筒形土器の新例について」『考古学雑誌』50-4　1965
井上唯雄・柿沼恵介「弥生土器－北関東」『考古学ジャーナル』143　1977
『群馬県史』資料編3　1981
高崎市教育委員会『元島名将軍塚古墳』1981
三宅敦気・相京建史「樽式土器の分類」『弥生終末期の土器』第3回3県シンポジウム資料　1982
柿沼幹夫「吉ケ谷式土器について」『土曜考古』5　1982
群馬県埋蔵文化財調査事業団『清里庚申塚遺跡』1982
小島純一「赤井戸式土器について」『人間・遺物・遺跡』1983
沼田市教育委員会『石墨遺跡』1985
『群馬県史』資料編2　1986
群馬県埋蔵文化財調査事業団『下佐野遺跡　Ⅱ地区』1986
藤岡市教育委員会『神Ⅱ遺跡』1986

『富岡市史』原始・古代資料編　1987
青木和明・飯島克巳・若狭徹「箱清水式土器と樽式土器」『弥生文化の研究』4　1987
富岡市教育委員会『小塚・六反田・久保田遺跡』1987
群馬県埋蔵文化財調査事業団『下東西遺跡』1987
群馬県埋蔵文化財調査事業団『大島上城・北山茶臼山西古墳』1988
飯島克巳・若狭徹「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9　1988
群馬県埋蔵文化財調査事業団『新保遺跡Ⅱ』1988
佐藤明人「樽式土器の様式推移と地域色」『群馬県の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
友廣哲也「古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石」『群馬県の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
女鹿和志雄「群馬県における古墳時代の玉作」『群馬県の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
安中市教育委員会『注連引原Ⅱ遺跡』1988
大工原豊「弥生時代の石器群について」『注連引原Ⅱ遺跡』1988
甘楽町教育委員会『甘楽条里遺跡』1989
若狭徹「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古手帳』1　1990
群馬県埋蔵文化財調査事業団『熊野堂遺跡(2)』1990
群馬県埋蔵文化財調査事業団『有馬遺跡Ⅱ』1990
粕川村教育委員会『西迎遺跡』1990
友廣哲也「群馬県における古墳時代前期の土器相」『群馬考古学手帳』2　1991
群馬県埋蔵文化財調査事業団『神保下條遺跡』1992
群馬県埋蔵文化財調査事業団『内匠諏訪前・日影周地遺跡』1992
群馬県埋蔵文化財調査事業団『南蛇井増光寺遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』1992・93・94
群馬県埋蔵文化財調査事業団『神保富士塚遺跡』1993
群馬県埋蔵文化財調査事業団『内匠上之宿遺跡』1993
群馬県埋蔵文化財調査事業団『下川田下原・下川田平井遺跡』1993
櫻井美枝・井上昌美・関口博幸「群馬県における石器石材の研究」(1)『研究紀要』11
群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993
群馬県埋蔵文化財調査事業団『白倉下原・天引向原遺跡Ⅰ』1994
群馬県埋蔵文化財調査事業団『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ』1994
群馬県埋蔵文化財調査事業団『下高瀬上之原遺跡』1994
富岡市教育委員会『七日市櫻音前遺跡』1994

報告書抄録

フリガナ	シラクラシモハラ・アマビキムカイハライセキ
書名	白倉下原・天引向原遺跡III
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第26集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第173集
編集者名	右島和夫
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784－2
発行年月日	西暦1994年3月25日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
シラクラシモハラ 白倉下原 アマビキムカイハラ 天引向原	ガンナグン 甘楽郡 カンラマチ 甘楽町	103845	10005－ 00294	36°14′14″ ～ 36°14′21″	138°56′23″ ～ 138°56′35″	19890401－ 19910820	白倉下原 26,978 天引向原 38,465 計65,443	道路建設
	オオアザシラクラ 大字白倉 オオアザアマビキ 大字天引	103845	10005－ 00293		138°56′36″ ～ 138°56′55″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白倉下原 ・ 天引向原	集落遺跡	弥生時代	住居址　57軒 土壙　33基 方形周溝墓2基	当該期の土器と石器 磨製石鏃	中期から後期
		古墳時代	住居址　31軒 方形周溝墓1基 土壙　9基	当該期の土器 小型仿製鏡 滑石製品	前期から中期

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
調 査 報 告 第 172 集

白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ

《弥生・古墳時代本文編》

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第26集

平成6年3月20日　印刷
平成6年3月25日　発行

編集／㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784－2
電話 (0279) 52－2511(代表)

発行／群 馬 県 考 古 資 料 普 及 会
勢多郡北橘村大字下箱田784－2
電話 (0279) 52－2511(代表)

印刷／朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社